

---

# けいおん! ~ 例えば、俺が全てを忘れても ~

388859

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！〜例えば、俺が全てを忘れても〜

### 【Nコード】

N2418X

### 【作者名】

388859

### 【あらすじ】

大人一歩手前の男子、私こと中都藤馬は記憶喪失である。  
わたくし

第一楽章 ……俺は、気が付いたら記憶が無かった。

あったのはヴァイオリンと、皆を護れる力だけ。

俺は桜ヶ丘高校に特待生として通い始める……軽音部という日常と、怪人との戦いの日々。

それでは第一楽章 をお楽しみください！

第二楽章 …… 俺も何やかんやで三年生になり、部活も戦いも苛烈さを増していく。

俺は軽音部の皆を護るため、さらに戦いを続けていく。  
自分がどうなるうとも、後悔だけはしたくないから……。

それでは、第二楽章 をお楽しみください！！

この物語は運命に抗い続ける、中都藤馬の笑いと恋愛の学園バトルストーリー！！

## 第一楽章 第一幕 プロローグ!!（前書き）

どうも、初めまして388859です。これから、よろしく願  
いします。  
ではプロローグどうぞ。

## 第一楽章 第一幕 プロローグ！

――声が聴こえる。

ここは、とある病院の一室。

その一室のベッドの上で、青年はゆっくりと目を開けた。

「……う、うーん……」

久しぶりに目を開けたせい、太陽の光が眩しく感じるようだ。

青年は身体を起こそうと力を入れるが、

「……っ痛!？」

どうやら、身体中に痛みが走ったみたいだが何とか起きれたようだ。

(……それにしてもここはどこだろう、どっかの病院みたいだけど)と、思い記憶をあさってみる。しかし、

「……あれ？」

青年は必死に思いだそうと何度も試みるが、

「……なんでだ、なんで、なんで、なんで!?!」

そう青年は、

「なんで、何も思い出せないんだよ!?!」

記憶（大切なもの）が思い出せなかった。

「そんなに大きな声を出してどうしたんだ、ここは病院だぞ」

ふと、聞こえた声の方を見ると、青年は口をあんぐりと開けて固まってしまった。

それも仕方ないだろう、何故なら

「どうしたお前の顔、面白い事になってるぞ」

その声を出していたのが、手のひら大の赤と黒の二色のコウモリだったからだ。

「……………ハア！？ちよつ、おま、ええええ！？」

コウモリみたいなやつがしゃべってるうう！！つか、顔が面白いってなんだよ！！」と、怪我してるにもかかわらず、ツツコミをいれた。

すると、コウモリは急に雰囲気を悲しいものに変え、

「そういえば、

奴によるとお前は記憶を全て失ったんだっただな」

と、コウモリは青年に言った。

「おい、コウモリモドキ、誰がモドキだ！！」取り敢えず、なんでも俺が記憶喪失だって知ってるんだ？」

「それはだな「俺が説明しよう」おい……………」

コウモリの声を遮ったのは、若い男だった。

四十歳に入っただくらいだろうか、年のわりにガツシリしている、いわば細マッチョだ。

服装は全身をすっぽりとおおったローブ、髪の色は灰色で瞳は青色だ。

「って、いつの間に部屋に入っただよ」

もう、青年は何が何だかわからなかった。

「まずは自己紹介からだ、俺はーだ」

しかし、ローブの男の名前の部分だけ聞き取れなかった。

「あゝ、ちゃんといってくれない」 青年は言う。

「そうだぞ、ちゃんと言え」コウモリも合わせて言った。

「はあじゃあねえなあ、一回しか言わねえから」「心底めんどくさいに、

「俺は、この世界の神様だ」

.....

「ハアアアアア!？」

青年の叫びが病院中に響いた。

――運命はいつだってわがままで

――理不尽な選択を迫り

――それが現実として続いていく

この物語は、そんな運命に死んでもなお、抗い続けた馬鹿な男の話である。

## **第一楽章 第一幕 プロローグ!!（後書き）**

どうでしたか、出来れば感想などもらえると有難い  
では。

**第一楽章 第二幕 自己紹介!!（前書き）**

どうも、私こと388859です。

というわけで第一楽章 第二幕をお楽しみ下さい。

## 第一章 第二幕 自己紹介！！

――青年 side

あのクソ神の爆弾発言の後、俺は看護師さんに思いっきり叱られ、クソ神とコウモリモドキに、良い笑顔で、

「ドンマイ」といわれた。俺の怒りは天元突破だ！！

つか、

「おいコウモリモドキ、お前の名前は何だよ」  
と、俺は言った。

そしたら、

「そういえば、忘れていたな。私は、誇り高きキバット族の、キバットバットIEEE世だ」  
とコウモリ、キバットは自信満々に宣言した。

「え」と、その説明じゃ全く理解出来ないんですが  
と、ジト目でキバットをみる。

「まあそう言われても分からんよ、普通」と、クソ神がカラカラ笑いながら言う。

「仕方ない、特別にお前の頭の中に知識として、ぶちこんでやるうか」

と、笑いながらこちらに手を向ける。

って、そんなことして大丈夫なのか？

「ああ大丈夫、大丈夫、脳の神経が焼き切れるだけだ」

「チェンジでー!!」 というわけで、コントの後、教えてもらった。簡単に言っとこんな感じ。

―――NOW LOADING―――

キバット族は魔族の一種であり、魔皇力と呼ばれる魔族の潜在能力を引き出すコントロールに長けているようだ。

ファンガイア（最強の魔族）の鎧という、戦闘鎧のコントロールが出来るため、ファンガイアとは同盟関係らしい。って話がちょっとそれたな。

話を元に戻すとこのキバットバットコウモリモトキエエ世は、そのファンガイアの鎧の中でも、強力なキバの鎧を二つも持っているらしい。

ちなみに、俺はそのキバの鎧を二つとも使えるらしい。って、

「いや、何で俺が使えるの？ファンガイアの鎧なんていう名前だから、人間には使えないんじゃないかねえ？」

という、俺の正直な疑問にコウモリモドキが答える。

「ちよつと勘違いしてるな、確かに普通の人間がキバの鎧を使えば、最悪の場合死ぬ」

と言って少し間を空ける。

「しかし、生憎とお前は普通の人間じゃあない」

と言って、コウモリモドキは悲しいオーラを漂わせる。

「結局、どういうこつたい。じゃあ、なんだってんだよ」

ハッキリしない奴キバットに聞く。

「お前は馬鹿だから、あれを使える」

と憎たらしい笑顔で言ってきた。

え、何で笑顔なのか分かるのかって、それはあれだ大人の都合だ。

って！！

「ふ・ぎ・け・ん・なあああ！！」

全っ然理由になってねえだろうが！！

何だよ馬鹿だから使えるって、あれか、俺は痛い人って事かこのコウモリモドキ！！」

俺は力の限り突っ込んだ。

――NOW LOADING――

――三人称side

「それで、何か思い出したか、クソガキ」と神は言う。

「ああ、二つ思い出したわ。」と言って、病室を見回して何かが入っているケースを見た。

「コウモリモドキ、そのケースとってくんね」と言って青年はケースを指差す。

「仕方ないな、今回だけだ」と、言ってケースを青年の方に持ってきた。

「……さてと」キバットが持ってきたケースを開ける。

ケースの中にはヴァイオリンが入っていた。

「ブラッディ・ローズ。」

確か、コウモリモドキの力を生身で使った男が作った、最高傑作のヴァイオリンだったな、そしてヴァイオリンの弾きかたと、ヴァイオリンを弾き始めた。

そのときの、青年の顔はとても寂しそうな感じだった。

そして、弾き終わった後に、

「……他に思い出した事は何だ!!」  
キバットは声をあらげて聞いた。

「まあ、そう焦るなキバット」  
そう言って、神はキバットはおちつかせようとする。

しかし、

「落ち着いていられるか!!」  
貴様にも話しただろう、この馬鹿は、人間のくせに……」  
キバットは声を詰まらせる。

「まあ、あとひとつ思い出した事は名前だ」  
と、青年は言って

「俺の名前は、中都藤馬<sup>なかつとつま</sup>だ。

改めて、よろしく!!」

そう青年、中都藤馬は自己紹介した。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一章 第二幕 自己紹介!!（後書き）

いかがでしたか？

藤馬「つか、原作メンバー誰も居ねーじゃん」

それは、言わないお約束ってやつだ。

キバット「そうだぞ、作者はギリギリ働いてさっさとメンバーを出せ」

わかつとるわい！

藤馬「こんなダメ作者ですが、これからも」

全員「よろしく願いします!!」

**第一楽章 第二幕 覚悟!!（前書き）**

どうも、みなさん388859です。

それでは、第一楽章 第二幕どうぞ!!

## 第一楽章 第三幕 覚悟！！

――藤馬 side

あれ、なんか変な空気になっている気がする。

あ、どうも私こと中都藤馬です。

「なん…だと…この私に野宿で過ごせと言つのか！！」

「だ…から、しゃあないだろうが。」

てめえがここで見つかりと、めんどくさいことになるだろ」

「だったら、貴様が泊めてくれればいいだろう！！」

「え…だって、人が出した食事にケチつけたりするから、めんどくさいわ、ぶっちゃけお前」

「それは、貴様がケチってパンと、私の嫌いな牛乳しか出さなかっただからだ！！私はトマトジュースが大好きなんだ！！」

「だ…うるせえ！！てめえら、人の病室で騒ぐな！！」

怒られるのは俺なんだぞ！！

つか、コウモリなのにトマトジュース好きって、やっぱりモドキじゃねえか！！

それにクソ神は神なのにケチりすぎだろ！！」

「馬鹿は黙ってる!!」  
何で、てめえら息ぴったりなんだよ。

俺はハア、とため息をつく。

全く、まだ聞きたい事が山ほどあるのに、どうしてこうなった。

――NOW LOADING――

あの自己紹介をした後、質問を一つしたときの事だった。

「そうだ、俺ってどこに住んでんの。」  
という、素朴な質問をした。

すると、

「はあ、何いってんだ、お前の家なんかねえぞ」  
という、仰天発言をスパッと言いやがった。

「……はい？」当然、俺は固まった。

「それだけじゃない、お前には親、兄弟、友達これら全てがこの世界には居ない」

「イヤイヤイヤ、意味がわかんないんだけど。まるで、世界が別にあるみたいな言い方だな」

笑いながら、俺は言う。

「馬鹿のくせに勘は良いな。

お前の言う通り世界は無数に存在している。

そして、お前は二回も死んでいる珍しい転生者だ」

もう、訳が分からないです、安西先生。

「他の神による、肉体年齢の改変、能力譲渡の痕跡がお前の魂に残っていた。

それに随分雑な魂の修復の跡もあった。

……全くどんだけ無茶苦茶な野郎なんだ、お前は」呆れながら、クソ神が言う。

って、

「俺が二回死んだ……それに転生者って何だよ？」

俺は心底信じられなかった。だってそうだと、いきなりアナタは死んでますとか言われて、信じられるか。

「そのまんまの意味だ。お前は二回も死んでいて、それでもって転生者つつうのは、死んでから他の世界に文字通り転生する奴の総称だ」

長ったらしい説明ありがとう。

つか、

「つまるところ、俺って本当に普通の人間？」

俺は恐る恐る聞いた。

すると、

「私が言っただろう、貴様は馬鹿な人間だと」

と、コウモリモドキが何言ってるんのお前みたいな感じで答えた。

「いや、全然説明になってないから」

まあいいか、全然良くないけど。

「じゃあ、家が無いんだよね？」

と、クソ神に聞く。

「ああ、それなら大丈夫だ。

ついでに日用品も用意するから、体を治しとけよ」

「すまねえな、何から何まで」

意外に良い奴なんだなこの人、いや人じゃなかったわ。

「じゃあ、私は此処に今日は泊まろう」 と、コウモリモドキが  
言ってる俺の頭に乗った。

「「いやいや、ダメだろ」」

お、初めてクソ神とタイミングがあつたな。

「なん…だと…この私に野宿で過ごせと言つのか!」

というわけで、冒頭に戻る。

―――NOW LOADING―――

だいたい、分かった（キリッ）。

回想している間にどうやら決着は着いたらしい。

「よし、じゃあトマトジュース—リットルでどうだ！」  
と、クソ神。

それに対して、

「よし、取り引き成立だ！」

と、コウモリモドキ。

どんだけ、トマトジュース好きなんだよ。

って、

「おいコウモリモドキ、取り引きってなんだよ」

「ああ、お前にも関係あることだ。」

と、言っただけの右手の方へ小さい羽で飛んでいくと、右手を

「ガブリ！」

——噛んだ。

「っ痛アアアアあああああああ！」

右手の甲が焼ける様に痛い。

「大丈夫だ契約をしたただけだ、すぐに治まる」  
キバットが言う。

そんなこと言われても、痛いものは痛い。  
ふと右手の甲を見ると、コウモリの紋章みたいなモノが浮き出てきた。

「何……っだよ、これ……!!」

「キバの紋章だ」

と、キバットが冷静に言う。

痛みが急にひいたかと思うと、体が急に軽くなった。

「どうやら、契約完了のようだな」

と、カラカラ笑いながらクソ神が言う。

「何か体が軽いし、体の痛みが消えてる……」

一体どうなってるんだ？

「人間の身でキバの鎧を契約したのだ。しかも二つもな。痛みも強いが、その分身体能力も上がったと思うぞ。……死ななくて良かったな（ボソツ）」

何か、今恐ろしい事を口にしたようだが、気にしたら負けだ、うん。そういえば、

「取り引きって、何なんだ」  
と言うと、

「ああ実はな、この世界にはテレビ等の空想上でしか存在しない、別世界の怪物が現れてな。」

この世界の人間達を襲い始めた。

しかしこの世界の武器じゃあ、怪物達を倒すのは無理だ。

ソコで、お前にその怪物達全て倒してもらおう

……はい？

「えっと、何、つまりこの世界での衣食住は用意するから、代わりに怪物ぶっ倒せつつう事？」

「Oh-Yes!!」

サムズアップを、しながら言うバカ共、誰かこいつら殴ってくれ。

まあ、良いか。

「いいぜ、その取り引き受けてやる」と、

「……本当に良いのか？」

と、コウモリモドキが心配してくれたのか聞いてくる。  
はあ、

「な、言っただよお前。言い出しっぺだろうが」

「しかしだな……」

と、納得がいかないのか聞いてくる。

「確かにさ、俺なんかが戦って、全ての人達を守るなんて主人公み  
たいな事は出来ないし、命が惜しくない訳じゃないから、スゲー怖  
えよ」

と、言っ言葉切る。

けどな、

「だからといって力を持っているのに戦わないっていうサイテーな野郎には成りたくねえ」

だから、俺は……

「助けを求めている人達に全力で手をのばすよ。

だって、のばせる時にのばさないと絶対に後悔する。そんな気がするから」

だから、

「力を貸せ、コウモリモドキ」

「その言葉忘れるなよ、藤馬」

ここに馬鹿な男とコウモリモドキという、奇妙なタッグが生まれた。

I i t o b e c o n t i n u e d

**第一章 第三幕 覚悟！！（後書き）**

どうでしたか？

藤馬「なあ、俺っていつになったら、仮面ライダーになれるの？」

大丈夫だ、次話で解決だ。

藤馬「まじで！！」

というわけで、

全員「次回をお楽しみに！！」

**第一楽章 第四幕 変身！！（前書き）**

どうも、私こと388859です。

というわけで第一楽章 第四幕をお楽しみ下さい。

## 第一楽章 第四幕 変身！！

――神 side

「どうやら、覚悟は出来たようだな」と俺が笑いながら言う。

それにしても、このガキは何者なのだろうか。

いくら、転生者とはいえ二回も死んでいる奴は初めてみるしな。

それに、コイツは只の馬鹿な（・・・）人間じゃない。

ま、キバットが言わないなら言わないで良いか。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

あ、皆さんどうも、私こと中都藤馬です。今は、クソ神、コウモリ

モドキの一人と、一匹に質問タイムです。

「でもさあ、その怪物ってどんなの何だ？」

と俺がクソ神に聞くと、

「そうかお前は知らなかったな、まあ、教えるより見た方がぶつちやけ早い」

とめんどくさそうに答えた。

「まあ、そこらへんの事はあとで分かる」

そうクソ神が言った直ぐに、

「グ〜〜」と、

ええそうです、ご想像通りお腹が鳴るという、ベタな展開ですよ。

「えゝ、何かすみせん」

すると、

「マイペースだなやっぱりお前は」

キバットが呆れている。

「あ、言い忘れてたが、明日で退院だから」と、このクソ神が言ってきた。

言つとくが、もう何言われても驚かねえぞ。

「面白くないな全く、でも次言う事は、絶対にビックリするぞ」

ニヤニヤするな、この野郎。

「まあ、そう言うな、

では、ダララララ……dっげほ、ゲホっ、」

(……うわぁ、)

コウモリモドキと、初めて心の声と同じになったな。

「ゲホッ、げほ、ダラララ……!!」

君には、来週から桜が丘女子高等学校に通ってもらい、軽音楽部に入ってもらおう!!」

クールだ、coolになるんだ中都藤馬！

いくら、あのクソ神でもそんな馬鹿な事を……

「おゝいしっかりしろ藤馬、おゝい」

そつだよ、これは夢オチだよ、きつとそつだよH A H A H A！……。

「……ガブリ！！」「っ痛ああ！？」

何すんだ、このコウモリモドキ！！

「やっと、正気に戻ったか。」

何か、疲れてんなどうしたんだ？

「貴様のせいだ、貴様の……！」

と、牙をちらつかせながら言う。手が食い千切られるかと思った……。

つて！

「おい、どういふつもりだこのクソ神、俺は男だぞ……！」

何考えてんだよ！

「はっはっはっはっ、やっぱり最高だわお前！」「ガブリ！……」  
とりあえず、一から説明してやろう」  
クソ神さまあ。

――NOW LOADING――

クソ神によると、世界には主要人物なる人物がいるらしい。

その主要人物たちの運命は決まっており、抗う事は出来ないらしい。  
そこに何らかのイレギュラーが入れば話は別らしいが、この話はまた別の機会に。

話を元に戻すと、別世界から侵入してきた怪物達が、その主要人物達を殺すと、その主要人物達がいた世界は消滅するらしい。

そして、その主要人物達は俺が転入する女子高にほばいるらしい。

つつことは、

「つまり、俺は用心棒も兼ねるわけか」  
でも、

「何で、軽音楽部に入らないといけないんだよ」

話を読めないんだが。

「本当に馬鹿だな、その軽音楽部に主要人物達が集まってるからにきまつてるだろ」  
なるへそねえ。

「でも、女子高にどうやって転入するんだ」女装なんて絶対いやなんすけど、俺。

「そんなわけないだろ、そこところは心配するな、俺を誰だと思ってる？」

神様（笑）でしたね。

「そいじゃ、頼んだぞクソガキ」

あいよーっと。

そう言ってクソ神は、コウモリモドキと一緒に姿を消した。

――NOW LOADING――

――翌日の夕方

というわけで、退院 and 俺の新しい家に向かって、歩いていきます。

ちなみに、コウモリモドキはヴァイオリンケースの中にいますよ。

「何を言ってるんだ、お前は」

コウモリモドキが呆れながら言った。

そんなこと言わんといて！

「さてと、クソ神が用意してくれた家はどんなのだろうな」

仮にも、神だしそれなりに良い家だとおもうけど。

「しかし、あの神はかなりケチだぞ」

と、コウモリモドキが言う。

大丈夫、だって神様だし。

うんうん、そうだよ、そのはず大丈夫だって…。

…

……

……………超心配になってきた。

「お前が、余計な事言うから心配になってきただろうが!!」

全く!

「なっ、私のせいではないぞ! だいたい……!」

この時点で、気付くべきだった。

だって、他の人から見ると、

ーヴァイオリンに話しかける痛い人ー

という変人にしか見えない。

気付いた時には、色んな人にみられてましたorz

こんなときはあれです、せーのっ、

「あゝもうっ、不幸だー!!」

あの絶対零度空間から、自分の新しい家まで走ってきました。

「はあ、っはあ、はあ……!」

何か疲れたな、ハァ。

って、着いたな俺の家。

「……思ったより普通だな」

ええ、普通の一階建ての家です。

「……とりあえず、家の中に入ろうか」

中に入ってみることにした。ついでにコウモリモドキをヴァイオリンケースから出しておいた。

普通に全部の、日用品が揃っていたのでびっくりした。

そういえば、

「あの野郎、日用品用意してくれたのは良いんだが、金とかどうし  
よう……」

とか思ってた時期がありました。

真ん中にあったテーブルの上に封筒があるのでみると、

「よつす、これを読んでるつつつことは、どうやら家に着いたみた  
いだな

金の心配ならするな。神の特権を使わせてもらったから」

中を改めてみると、預金通帳があった。  
開くと、

「……WA〱O……」

と、思わず言ってしまうぐらいの金額が入ってた

って、まだ続きがあるし。

「ついでに学校のついてだが、お前には共学予定の桜高に試験的に入学するつつ設定だ。」

くれぐれも、問題を起こすなよ。」

ハア、何だか知らない内にドンドン決められるなあ。

「彼奴には感謝しなければな」  
そうだな、コウモリモドキ。

「夕飯でも買いに行くかな……」

そう思った直後、

「「っ！」「」

何だ、この嫌な感じの気配……。

「ファンガイアが出たようだな、行くぞ藤馬！！」

と、言ってコウモリモドキが、家を出る。

って！

「ま、待てよ!!」

この嫌な感じな気配がファンガイアなのかよ!!」と、質問をしつつ家を飛び出す。

「ああそつだ、ファンガイア以外の怪物もこのように感じる事が出来る……近いぞ!!」

俺とコウモリモドキは、徐々に暗くなり始めた道を必死に走った。

――NOW LOADING――

――少女side

どうも、皆さん私の名前は、平沢 憂です。

今は夕飯に、お姉ちゃんの好きなハンバーグを作ろうと思って、買い物をした帰りなんですけど……、

「待て、貴様のライフエナジーを貰うぞ　!!」

今、ステンドグラスの模様入りの、馬みたいな怪人から追われています。

最初は何かの撮影かなあと、のんきに思ってたんですが、私のすぐ近くにいた人が、何か牙みたいなモノに刺されたかと思うと、

「あ、ああああー!!」

その人の体が透明になって、

パリイイイイン!!

身体がガラスの様に砕けて、なくなっちゃいました。

ーえ？

思わず、立ち尽くしてしまい頭の中が真っ白になりました。

私もこのままだと、ああなっちゃう、そう考えていたら怪人がこっちを向いて、

「お前の分も、いただくのか」

と、言ってきました。

とりあえず必死に逃げています。

「っはあっ、はあ、はあ……!!」

どうやら、何処かの公園に着いたようです。

どうしよう、必死に逃げてたから、逃げる場所を間違えちゃった！  
そう思っていたら、

「やっと、大人しくなったか。さあ、貴様のライフエナジーをいただきますぞ!!」

どうしよう、こんなところで死にたくない!!

誰か、助けて!

そう思って、目をつぶりました。

ここで死ぬなんて、運命なのかな、そんなことを思っていたときでした。

「女の子を襲うなんて何考えてんだ、キーツクウウウウ!!」

場違いなテンションで、男の人が現れたのは。

――NOW LOADING――

――三人称side

「全く、大丈夫か?危ねえから下がってろ」と、藤馬が言う。

「……あ、はい、大丈夫です」

少し遅れて憂が返事する。

どうやら、混乱しているようだ。

「貴様、いきなり現れて何者だ!!」

そう怪人、ホースファンガイアが聞く。

「てめえを倒す男だよ、コウモリモドキ!!」

そう言った直後にキバットが現れ、

「ああ、ガブリ!!」

藤馬がキバットを掴み、紋章がある右手の甲を噛ませる。

「っ!!」

キバットから右手の甲、全身と《魔皇力》が流れる。

痛みがあつたのか、藤馬は少し表情を固くする。

すると、藤馬の顔にステンドグラスのような模様が現れ、腰には紅黒いベルトがまかれる。

そして、キバットを持っている左手を前に出し、

「《変身!!》」その瞬間、中都藤馬は姿を異形へと変えた。

全体のカラーは紅にヴァンパイアのような外見、頭部はコウモリのような装飾、黄色の複眼、手足には鎖状の拘束具カテナと呼ばれるモノ

が巻き付いている。

その名も仮面ライダーキバ

「……仮面……ライダー……？」

憂が呟く。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

吸血の戦士が、今宵舞い降りた。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一章 第四幕 変身！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「ヤッホーい！！」

やっと変身したぜい、どうも、主人公の藤馬です！！  
あ、そうだ」

何か？

「何で、キバットエエ世なのに黄金のキバなんだ」

ふっ、小さい事は気にするな。あとでわかる。

藤馬「次回は戦闘だな！！」

ああ、では、

全員「次回をお楽しみに！！」

**第一楽章 第五幕 初戦闘！！（前書き）**

どうも、皆さん388859です。

それでは、第一楽章 第五幕です。

戦闘描写ってムズいですね。

## 第一章 第五幕 初戦闘！！

――三人称 side

「バカな、黄金のキバだと！？」

確か、キバはこの世界には居ないはずだ！！」

と、ホースファンガイアがうるたえる。

「ガタガタうつせえ、早くかかってこいよ、怖いのか！！」

と、キバが挑発した。

「貴様、調子に乗りおつて、人間がファンガイアを侮辱するなあ！！」

そう言つて、ホースファンガイアは、キバに向かい、拳を放つ。

しかし、

「動きが単調過ぎんだよ」

キバはファンガイアの拳を受け止め、お返しにと拳を放つ。

「さて、クイズだ

お前の拳と、俺の拳、どっちが強いでしょうか？」

クイズを出しながら、拳をファンガイアの身体にドンドン叩き込んでいくキバ。

そして、最後に蹴りを入れてファンガイアを公園の遊具までぶっ飛ばした。

「つぐ、ふう、っふう……クソっ、人間ごときに」

ホースファンガイアは倒れたまま、悔しそうに言う。

「早く、クイズに答えろやこの野郎、じゃねえと倒しちまうぞ」

キバがゆっくりと、ファンガイアへ向かう。

「今、答えてやる、正解は」

そう言って、ファンガイアの手には剣が作り出され、

「俺の剣だ！」

その剣を、目の前にいるキバのベルトに向かって突いた。

しかし、

ガキッ！！

「なっ！！」

その剣は、

「残念だったな」

キバットによって、防がれていた。

「おらっ！！」

そう言ってキバは思いっきり、ファンガイアを公園の真ん中へ投げた。

「正解は、俺の必殺技だ」

キバは、腰にある紅いフェッスルを、一本キバットに吹かせる。

「《ウェイクアップ!!》」

すると、周りが夜の筈なのにもっと暗くなり、三日月が出てきた。

「はああああ……!」

精神を統一した後、右足の拘束具<sup>カテナ</sup>を解放し、蝙蝠の翼を象った扉<sup>ヘルズゲート</sup>が出てくる。

そして、片足だけで一気に頭上へ飛び上がり、そのまま、蹴りを放つ!!

「だりやああああ!!」《ダークネスムーンブレイク!!》

ドスッ!! バゴオオオオ!!

キバはファンガイアの身体を、地面にめり込ませた。

地面には、ファンガイアの身体を中心にキバの紋章が刻まれた。

そして、

ミシ、ミシミシ、パリイイイイン!!

ファンガイアの体がステンドグラスになってから、粉々に砕け散り、光の玉みたいなものが浮いた。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

倒した瞬間、キバの右足に拘束具カテナが巻き付き、  
「オオオオオオン!!」

頭上に、巨大な竜が現れた。その竜は城から頭、尾、四肢が伸びたような外見をしている。

って、

「何じゃ、ありや!!」

そう言いつつ、変身を解除する俺。

「記憶喪失でも流石だな、藤馬」

コウモリモドキが、褒める。

「ありがとよって、そうじゃなくて!!何だよあれ!？」  
俺が質問する。

「あれは、ファンガイアのライフエナジーを補食するドラン族の中でも、最強のグレート・ワイバーンを改造したモンスター、キャツスルドランだ」

と、コウモリモドキは説明する。

「成る程な、それで何でそのキャツスルドランが出てきたんだ？」  
よく、分からんな。

「一回しか言わないからな。」

簡単に言えばファンガイアは寿命以外で死ぬと、  
ライフエナジーのみがエネルギー球となって浮かび上がる、それが  
あれだ」

あの、光の玉がそうなのか？

「そうだ、

そしてあのエネルギー球は、放っておくと大変なことになるから  
な、ああやって、」

バクツ！！

「キャッスルドランが食べているんだ」

しょうゆことね。

つか、

「あの女の子は、何処に行ったんだ？」

もしかして、帰っちったかなあ？

「さあな、取りあえず探したらどうだ」

そうだな。

「あの〜……」

うん？

――NOW LOADING――

――三人称side

「あの……」

と、憂が気まずそうに口を開く。

「おおゝ大丈夫、怪我とかしてない？」  
と、藤馬が聞く。

「あ、はい大丈夫ですけど……」  
と、憂は視線を後ろに向ける。

パタパタ……。

「……なんだ、小娘？私に何か、付いてるか」

藤馬は、キバットを

ゴンッ！

思いつきり、殴った。

「がふっ!!」

キバットの頭にデカイたんこぶが出来る。

「あの、大丈夫ですか、その子？」

と、憂が質問する。

「あ、気にしないで良いよ、結構丈夫に出来てるから、え」と、先ずは自己紹介だな」

藤馬はそう言って、

「俺の名前は中都藤馬。

そして、相棒のキバットバットII世だ。

コウモリモドキ、お前は何時まで寝てんだ」

そう藤馬は、キバットに言った。

「あとで、私にトマトジュース寄越せよ、藤馬。

私は、誇り高きキバット族の、キバットバットII世だ」  
キバットは自信満々に言う。

「藤馬さんに、キバット君ですね。

私は、平沢 憂です。よろしく願いしますね」

と、笑顔で紹介した。

I  
I  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第一章 第五幕 初戦闘！！（後書き）

どうも、みなさん388859です。

藤馬「どうも、ファンガイアを倒した、中都藤馬です」

やっと、原作メンバーが出てきたな。

藤馬「遅すぎじゃね、展開」

そう、言わんといて！

藤馬「えっと、作者は感想があると、やる気が上がるので、そろそろ  
へんよろしくお願いします」

全員「それでは、次回をお楽しみに」

**第一章 第六幕 邂逅！！（前書き）**

どうも、皆さんっ88859です。

先に言っておきますが、ここから段々グダって来ます。

それでは、どうぞ。

## 第一章 第六幕 邂逅！！

――藤馬 side

あ、どうも皆さん、私こと中都 藤馬です。

あれから憂ちゃんには怪人の事、キバの事を話した。

すると、

「か、仮面ライダーってホントにいたんですねー！」

と、やや興奮気味に言った。

憂ちゃんによると、さっき変身したキバはテレビなどに出ているらしい。

……なんてこつたい。

そして今、俺たちは憂ちゃんの家に向かっています。

ちなみにコウモリモドキは、予め持ってきておいたバッグに、ぶちこんでおきました。

「憂ちゃんって、何処に住んでるの？」

「ここら辺って、俺の家のすぐ近くなんだけど。

「もうすぐ、……あ、此処です」

いやいや、

俺ん家の隣って、それ何てご都合主義……。

頭を抱えながら、そう思っていると、

「どうしたんですか、藤馬さん？」

そんな純粋な目で、聞かないでよ、憂さんや。

「俺たちの家は、隣なんだよね」

と、俺は笑顔で言う。

さあ、何て言って来るのかな。

「そうなんですか、すごい偶然ですね」

と、笑顔でおっしゃってきました。

なん……だと……！

「……そ、そうですか……」

何なんだ、この子は！

笑顔が眩しすぎる。

「それじゃあ、中に入りましょうか」

そう言つて、憂ちゃん、ズハウスのドアを開けた瞬間、

ヒュバツ!!

「うゝいゝ」

憂ちゃんと、双子かと思間違ふ程、似ている女の子がいきなり抱き着いてきました、はい。

つて、どういうこと!!

「もうゝ、帰ってきたらいつもご飯作ってる、ういが居ないからビツクリしたんだよゝもう!」

だ、誰なんだこの子!!

「そそそ、そんなこと言われても、ああ、あなた様の事を全く知らない、な、中都さんは困るだけで御座いますよ!!」  
そして俺よ、何が言いたいんだ。

「ちょっと、お姉ちゃん!

何で藤馬さんに、抱き着いてるの!

うらやm、じゃなくつて、失礼だよ!」

憂ちゃんも、何をおっしゃってるの!!

「って、あれ〜ういじゃないや、キミ誰？」

やっと気付いたのか、って!!

「とりあえず、離れて下さい」

と、主に俺の理性の為に言つと、

「ごうごう、ごめんなさい!!そんなつもりじゃ、なくて、ごうごうによう  
よ」

何、この子顔が赤くなってる、超可愛いんですけど。

お持ち帰る「言わせんぞ!!」「チッ、コウモリモドキが。

この状況下で、

「あれ〜、どうしたんだ唯〜」

何だアノ、カチューシャ娘。

って、あれ待てよ、

――女の子が俺に抱き着いている――

まさか……、

「うわっ!!唯に抱き着いてんじゃないよ、この変態!!」

と、カチューシャ娘に言われ、ぶん殴られた。

って、ちょ、逆だっつうん「問答無用!!」

「あべし!!」

これは、いつものあれです。

「……不幸だ」

「りっちゃん、お見事!!」

「と、藤馬さん!? 大丈夫ですか?」

「どうしたんだ律、何か凄い音がしたけど、って男の人が倒れてる!!……きゆう」

「漣ちゃん、しっかりして!! 誰か救急車、救急車をお願いします!!」

もう、疲れたよパトラッシュ……、そう思ってたら、めのまえがまっくらになった。

――NOW LOADING――

――三人称side

あの事件の後、憂がその場の説明をした。

その時に、カチューシャ娘と、気絶した子、そして助けを呼んだ子の三人は帰ったようだ。

今は藤馬に抱き着いてきた子と、憂が必死に謝っている。

「本当にすみませんでした！」

でも、皆さん良い人なんです！」

と、憂が謝りながらフォローを入れる。

良く出来た子である。

「うん、そうだよ、皆本当に大事な友達だよ！」

と、抱き着いてきた子が笑顔で言う。

「とりあえず、もうさっきの事は良いから」

と、藤馬は一回言葉を切る。

「まずは自己紹介だな、俺の名前は中都藤馬だ」

と、自己紹介をした。

「あ、えっと、

私の名前は平沢 唯です。 ちなみに、憂のお姉ちゃんです。 えへ」

と、抱き着いてきた子、唯が自己紹介をする。  
その直後、

「……ぐ」

と、三人と一匹のお腹が鳴った。

「……とりあえず、ご飯にしましょうか」

憂が、顔を赤くさせながら言う。

ちなみに、今現在の時刻八時でございます。

――NOW LOADING――

――藤馬side

憂ちゃんお手製のメチャクチャ美味しい晩御飯を、  
いただきますNOW。

え、何で食べてるのかって？

だって、

「お礼になるかわかりませんが、食べていって下さい」

て、天使のような笑顔で言うんですよ。

いただかないと、失礼でしょ。

「さつきから黙ったままですけど、もしかして、……美味しくないですか？」

そんな、泣きそうな顔せんというて！

「うわあ、泣つかした、泣つかした」

「違うんだよ、ちよっち考え事をしてて、そして唯は何で、ああってんねん！」

この姉妹何で、こんな性格が違うの！？

「良いツツコミだよ、なっちゃん！」

「なっちゃんって、俺はオレンジジュースじゃねえよー！」  
君は、もうお口にチャックをしてください。

「あれ、なっちゃんの右手になんか付いてる、……イレズミかな、何これ？」

しまった、キバの紋章見られた！

何て言って回避しよう？

そんなことを考えてたら、

「カッコイイね、なっちゃんのエレズミ!!」へっ？

「そうだよね、お姉ちゃん、やっぱりこの刺青かっこいいよね!」

憂さんや、顔が少しひきつってるよ。

「そ、そうかな？」

何とか、誤魔化せたみたいだ。

「それにしても、明日からまた一週間が始まるね」

この子、コロコロ話題変わりすぎだろ。

って、うん？

「……明日から？」

「うん、そうだよ。何言ってるの、なっちゃん？」

まさか……、

ギギ、ギと、首だけ憂ちゃんの方に向ける。

「つかぬことを聞きますが、今日は何曜日でしょうか？」

「日曜日ですけど。」

それがどうかしたんですか？」

ハ、ハメられたアアア!!

女子校だから、イロイロ心の準備をしたかったのに！

と、俺が固まってる、クソ神が笑ってサムズアップをしている顔が見えた。

「あの野郎オオオオオオオオオオ！！」  
俺の魂の叫びが平沢家に響き渡った。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一章 第六幕 邂逅！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「なあ、作者、展開グダリすぎじゃないか」

ああ、こつから、もっとグタグダになっていくな。

藤馬「お前、文才なさすぎじゃね？」

orz

藤馬「ダメ作者は、放っておいて、次回をお楽しみに！！」  
もうダメだ、死のう。

藤馬「ゴメン、言いすぎたわ！！」

**第一章 第七幕 学校！！（前書き）**

どうも、皆さん388859です。

今回は、ちょっと暴走しちゃいました。

グダグダに注意して読んでください。

## 第一楽章 第七幕 学校！！

――藤馬 side

「おい、起きろ！！」

誰かの声が聞こえる。

眠いんだから静かにしてくれ。

「……ガブリ！！」

「っ痛ああああ！！」

眠気が一気にぶっ飛んだ。

つか、

「頭を噛むな、コウモリモドキ！！」

お前のは甘噛みってレベルじゃないんだから！

「ほら、早く準備せんか」

「ハア、何の準備だよ？」

全く！

「学校の事だ、ヴァイオリンも忘れるなよ」

学校って何言って……。

バツ！！

俺は時計がある場所を見る。

現在時刻八時三十分

鳴り響く電話の音

これは、あれだ。

「はっはっは……」

不幸だ——！！」

——NOW LOADING——

どうも、おはようございます皆さん、担任からモーニングコールを貰った、私こと中都藤馬です。

私は今、新しい桜高の男子用の制服を、右手には包帯を巻いて、学

校までフルスロットルで走っています。

ちなみに俺の持ち物は、学校指定のカバン（コウモリモドキ入り）を肩にかけ、ヴァイオリンケースを手にとって、全力疾走です。

（急げば間に合うぞ、走れほら）

これはコウモリモドキとの契約の影響によって、出来るようになった意志疎通のようなものです。

何それ、怖い。

「呑気で良いなあ、テメエはよオ!!」  
頑張るのは、俺なんだぞ!!

（ほくら、着いたぞ）

バカなやり取りをしてたら着いたようだ。

よし、後は職員室に行けば……「ガシッ!!」……つぐえ!!

誰かが俺の制服の首を掴んだようだ。

って!!

「誰だよ、危ねえだろ が!!」

俺は、ガチで切れる。

すると、ゴリラみたいなガタイの男の人が、

「ほう、遅刻したのに先生にそんな態度を取るとはのお？」

え……。

先…生……だと。

俺の体から、冷や汗が滝のように出てきた。

やべえよ！

どんぐらいやばいかというと、スマブラで、ダメージが二百パーセント越えるくらいやべえ！！

「さてと、どんな感じに体罰もとい、叱ってやろうか」

ちょっと、誰かこの人止めて！！

「ちょ、引きずっちゃ禿げるって、このゴリ、あああああああああああ  
あああ……………」

さようなら、俺の毛根……。

――NOW LOADING――

――唯side

こんにちは、平沢 唯です。

今は休み時間です。

今日は転校生が来るって聞いてたのに……。

「来ないねえ、転校生」

私がそう呟くと、

「確かに、朝に先生が言ってたのに可笑しいよなあ」

と、カチューシャをつけた元気な女の子、田井中 律、通称りつちやんが、そう返してきました。

「どんな子かしらねえ」

と、ポワワンとした感じのお嬢様は、琴吹 紬、通称ムギちゃんです。

「あ、そろそろ休み時間が終わるね」

そう私が言つと、

「じゃあ、席に戻るか」

と、りっちゃんが席に戻りました。

「私も」

と、ムギちゃんも席に戻っていきました。

えっと、次の授業は……。

ーガラッ

「皆さん、席に付いてくださーい、転校生を紹介しまーす」と、先生が言いながら、教壇に立つ。

「センサー、転校生ってどんな子ですか？」

言わば、お約束の質問をりっちゃんが言います。

「それを言つと、面白くないでしょ、じゃあ、入ってきて」そう言つて、出てきたのは……。

ーガラッ

「ええっと、俺の名前は中都藤馬です。趣味はヴァイオリンです。男子ですが、よろしくお願いしやーす」

真新しい筈なのに、ボロボロな制服に身を包んだなっちゃんでした。

――NOW LOADING――

――藤馬side

はあ、酷い目に逢ったわ、制服がボロボロだよ全く。

何で、江戸時代の拷問器具が女子校にあるんだよ。

死ぬかと思ったわ。

（お前が、寝坊するからだ）

だったらもうちょい、早く起こしてください。

「着いたわよ、中都君」

ういっす。

「じゃあ、私が合図したら入ってきてね」――ガラッ

何か緊張してきたな。

（大丈夫だ、心配するな変態）

てめえは、人を励ますつつう行為ができねえのか。

「じゃあ、入ってきて」

よし、行きますか!!

ーガラッ

「ええっと、俺の名前は中都藤馬です。趣味はヴァイオリンです。男子ですが、よろしくお願いしやーす」

どうだ、この完璧な自己紹介!!

(普通すぎるな)

やかましいわ!!

って、反応が全く無いんすけど「あゝ、お前は昨日、唯に抱きついてた奴じゃん!!」

って!!

「お前はあの時の、バイオレンスカチューシャ娘じゃねえか!!」

あのパンチ、結構痛かったんだぞ!

「誰が、バイオレンスカチューシャ娘だ!!」

アンタが唯に抱き着いてたから、私は唯の代わりに殴っただけだ!!」

「だから、違うって言ってんだろ!

確かに良い匂いがしたし、柔らかい感じがしたけどさ、  
……いや、違うからな、皆さんそんな目で見ないで、お願いだから  
「！」

（今は自業自得だ、バカめ）

敵陣と真ん中、四面楚歌だよコンチキショー！！

これは、あれです。 今日二回目の、

「あゝもうつ、不幸だー！！」

その後、休み時間に唯と、お嬢様みたいな子、ムギと意外にもバイ  
オレンスカチューシャ娘、律が来て、

「昨日と今日は、ゴメンな」  
と、謝ってきた。

律って、意外に良い奴かも。

――NOW LOADING――

というわけで、昼休み。

ご飯を出そうと思っていたら、

「あちゃー、そういえば寝坊したから無いんだっけ」

カバンをゴソゴソしながら言う。

トマトジュースを幸せそうに、鞆の中で飲んでいる、コウモリモドキを潰してやりたいわ。

「売店でパンでも買うか。」

そう言っつて、席を立つが、

「……………売店って何処だっけ？」

俺って、この学校の地理全然知らないんだよな。

「……………どうしようか」

と、俺があーでもない、こーでもないと言表情を変えながら考えていると、

「なっちゃん、何してるの、顔が面白いよ」

と、唯がこつちに来ながら言った。

ちなみに、律とムギも一緒だ。

唯さんや、あなたの天然って心へのダメージが、いつもの三割増し高いんだけど。

「ああ、ちょっと売店って、どこにあるのかなあと思ってな、どこなのか案内してくれないか」

と、俺が聞く。

すると、

「じゃあ、私が案内してやろう！！  
唯とムギも、いっしょに行こうぜ！」

意気揚々と律が言う。

その瞬間、俺は律の手を取り、

「律さん、やっぱりアンタええ人や！！  
ワタクシ、中都藤馬、感服いたしました！！」

と、涙を流しながら言った。

「そうだろ、もっと、もっと私を誉めろ、誉めろ！！」  
そう言ったので、ヨイショしまくって、騒いでたら、

ーガラッ

「ほう、遅刻した奴が何騒いでんだ、ああ？」

と、ゴリ先生がおっしゃってきました。

あれ何これ、死亡フラグじゃね？

「……………ええっと、律さん、唯さん、ムギさんどうします」

そう言っつて、後ろを向いたら、

三人の姿がなく、教室の外から、

「ーただいま、留守にしておりますー」

そんな、三人の声が聞こえた。

ハ、ハメられたアア！！

「それじゃ、指導を受けてもらおうかのお」

何で、指をパキパキ鳴らすの！？

「ご飯食べてからじゃあ駄目ですかね、先生」

と、一応聞いてみると、

「……………無理じゃ」

ですよね。

――バツ!!

「逃げるな、ゴラァァァ！」

「先生、顔が鬼にランクアップしてます!!」

何、この人、ファンガイアより怖いんですけど!!

「待たんかい、ボウフラァァァ!!」

とりあえず逃げないと、殺される、確実に!!

――NOW LOADING――

チクショー、何処だ此処!

「退いて、退いて、退いてえええ!!」

ハッ、あ、あれは……!!

売……店の……女の子の……行列……だと……!?

チクショー、女の子の行列で道が塞がれてやがるっ!!

まさか、買い食い派がこんなにいるとはっ!!

どうする……!!

「年貢の納め時じゃい、ボウフラアア!!」

やべえ、ゴリさんキタアア!!

その瞬間、俺の頭の中には、尊敬する先生の顔が浮かんた。

——諦めたら、そこで試合終了ですよ——

安西……先生っ!!

俺っ、やります!!

何かを起こしそうな雰囲気ですが、何も起こりません。

「どうおりゃあアア!!」

某二番目のチルドレンのような声を出しながら、行列に突っ込む。

（このまま、紛れてやり過ごせば俺の勝ちだ、残念だったなゴリさん！！）

そんな事を思つてると、

ードサッ

誰かが、倒れる音がした。

「だ、大丈夫……」

俺は固まってしまった。

何故なら、

「あ、すいません、

て、藤馬さんじゃないですか！どうして、この学校に？」

憂ちゃんの縞パ が、丸見えだったからだ。

「どうしたんですか？

何か私の顔に付いてます？」

言えない、思春期の子にこんなこと言えない！！

そう思い、後ろを向いたら、

ーガシッ！！

ゴリさんにつかまっちった、テヘッ。

「全く、逃げ足が早い奴じゃの」

ーミシ、ミシ、……

「そ、そうかな、あはは、あはははは」

マジ痛いっす、ゴリさん！

「とりあえず、生徒指導室へ連行するからのお」

そう言つて、俺の制服の首を持って、引きずりだした。

その直後、

キーン、コーン、カーン

「ちょっと、鐘なってますよ、掃除しないと先生」

解放してくれるだろ、飯にも先生だし。

「な、飯を食べとらんのに、お前のせいじゃいー！」

え、地雷踏んだんじゃね、これ。

って、

「憂ちゃん、見てないで助けて！って、あり……」

良く見ると、人一人っ子居なかった。

「アハハ、やべえええ、誰か助けてー！！」

I I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 第七幕 学校！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「……ゴリさん、マジパネエ」

ああ、これからも出るからな。

藤馬「マジかよ……」

それでは

全員「次回をお楽しみに！！」

## 小休止 設定！！

名前 なかつ  
中都 藤馬 とうま

### 詳細

身長173cm、体重は65kg、ふたご座の5月30日生まれ、O型。

名前の由来は、日本の地名、中津と、『とある魔術の禁書目録』の上条当麻の漢字を変えただけ。

趣味は、ヴァイオリンと読書、料理。

尊敬する人は、安西先生。

桜高軽音部に所属し、転生者であり、仮面ライダー。この物語の主人公。

外出する時はいつもヴァイオリン、ブラッディ・ローズを持ち運ぶ。気付いた時には記憶が無く、名前とヴァイオリンの弾き方しか覚えていなかった。

なので、何故人間の自分がキバになれるのか、以前どんな所にいて、何をしていたのかわからない。（キバットと、アームズモンスターは知っているようだが、教えていない）

キバットと契約の証として、右手の甲にキバの紋章がある。  
キバに変身出来るが、負荷がそれなりにある。

しかし、怪人と戦えるのが、藤馬しかいないため、負荷もいとわず戦う。

この世界での、衣食住を神に保証される替わりに、イロイロな怪人  
たちと戦うはめになった。

だが、前の世界でも戦っていたのか、その強さはなかなかのもの。

軽音部での立ち場は、ツツコミ兼、ヴァイオリン兼、唯一の男子。

律と澪によく暴力を振るわれる。

ヴァイオリンの弾き方はわかるものの、専用用語がまるでわからない。

性格は、某上条さんのように、正義感は強いが、メンタル面が弱い。

そのうえ、かなりのお調子者。

女子に無意識にフラグを立てている、天然フラグメーカー。

容姿は、紅音也を黒髪にして、バカっぽい感じ。

ちなみに、不幸スキルもあるが、ラッキースケベがあつた後は、必ず何かしらの不幸が起こる。

ゴリさんとは、毎日追いかけあう仲。

キバの正体は、極力ばらさないようにしている。

しかし、憂だけは知っている。

キバとして戦っているため、勉強がかなりやばい。  
イメージCV 水島 高宙

『瀬戸の花嫁』 満潮 永澄役

『べるぜバブ』 古市 貴之役

名前

キバットバットII世

詳細

藤馬と契約している、キバット族。

前の世界でも、藤馬と一緒に行動していた。

藤馬の行動には、毎回苦労しているらしい。

本来なら、闇のキバの鎧しか持っていないが、本作では、黄金のキバの鎧を持っている。

藤馬の過去を知っているが、教えていない。

容姿は、基本的に原典のII世と同じだが、羽の色だけII世のものになっている。

性格は、II世とII世を合わせた感じで、ややII世に近い。

牛乳が嫌いで、トマトジュースが大好き。

イメージCV 杉田 智和

『銀魂』 坂田 銀時役

『魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s』 クロノ・ハラオウ  
ン役

名前

けいおん！の世界の神

詳細

藤馬とキバットを助けてくれた神。

藤馬が目覚めるまで、キバットの世話をしていたようだが、かなりのケチ（キバットによると、牛乳とパンしか出さなかったらしい）。

その性格は、DSで、かなりいい加減。

容姿は、『交響詩篇エウレカセブン』のホランドそのまま。  
全身をローブで覆っている。

イメージCV 藤原 啓治

『クレヨンしんちゃん』 野原 ひろし役

『交響詩編エウレカセブン』 ホランド・ノヴァク役

**第一楽章 第八幕 演奏！！（前書き）**

今回、かなり急展開です。

それでは、第一楽章 第八幕をお楽しみください。

## 第一章 第八幕 演奏！！

――藤馬 side

あ、どうも、今絶賛ゴリさんのありがたい説教を正座で受けてる、私こと中都藤馬です。

「おい、聞いているのか、ボウフラ！！」

「は、はいいいい！！」

俺の心に入ってこないでえええ！！

――ゴンッ！！

「ガタガタ、騒ぐな、だいたいお前はな……………」

――暫く、お待ちください――

四時間後……

「わかったか、明日から遅刻するな、気を付けて帰れ、ボウフラ！！」

「うぶっ…………はい、了解です」

魂が出てきそうです、先生。

俺は、ゴリ先生の言葉を聞き流しながら、フラフラと生徒指導室を

出た。

とりあえず、教室に行こう。

――NOW LOADING――

はっはっは、誰もいない……。

「ゴリさんの、説教長すぎじゃね？」

呆れながら、ヴァイオリンケースと、学生カバンを持つ。

「帰るか、今日のご飯どうすっかな？」

何か、忘れてるような……、まっ、良いか

（軽音部だ、軽音部……！）

カバンの中で、ゴソゴソとコウモリモドキが暴れる。

「てめえ、いきなり声をだすなよ……！」

びっくりした」

すっかり忘れてたな、恨むぞゴリさん。

「誰かに、軽音部の活動場所を聞いてみるか」

そう言って、少し校内を散策する。

――

――

――

――

「結局、職員室までできてしまった……」

なんてこったい

＼（＾ー＾）／

（これは、もう一種の奇跡だな、他人とはいえ、同情するしかない）

コウモリモドキに言われると、めっちゃ落ち込むんだけど……。

かなり凹みながら、

「すみませーん、軽音部の顧問って、いらっしゃいますか？」

と、先生方に質問する。

すると、

「はーい、ちょっと待ってね」

と、赤い眼鏡をかけた、おとしやかで綺麗な女性がこっちに向かってきた。

「あら、噂の男子転校生じゃない！」

え、有名なの、俺？

「転校初日から、郷田先生と追いかけてこしたのは、貴方が初めてだからね」

ゴリさんって、名字、郷田って言うんだ……。  
て、

「声に出てました？」

「ええ、出てたわよ」

マジすか……。

「まずは、自己紹介ね。

私の名前は山中さわ子です」

この人、弄ると面白そうだな。

「えっと、俺の名前は中都藤馬です。  
よろしく願います、さわっち先生」  
さあ、何て言うかな。

「また、変なアダ名付けられた……orz」

予想通り（ニヤリッ

「それで、どうしたの、軽音部の顧問である私を呼んだって事は、  
入部希望かしら」

と、さわっちが笑顔で言う。

「ええ、まあ、そんなところです」

と、俺が言うと、

「またまた、冗談でしょ？」

イヤイヤ！

「入部希望ですけど？」

何言ってんのみたいに俺が言うと、

「……ホントに？」

俺ってそんな信用出来ないかな？

「ええ、マジです」

そう俺が言つと、

「やったわ、待望の男子部員よ!!」

と、さわっちが俺の手を掴んでブンブンとまわす。

何か、俺の中でのさわっちのイメージが、ドンドン崩れていくんすけど？

「先生、喜ぶのは良いんですけど、いい加減、軽音部の活動場所を、教えてください」

さわっち、喜びすぎ!!

「それも、そうね!!  
ええっと、軽音部はね……」

と言つて、さわっちは場所を教えてくれた。

「先に行つて、挨拶の一つでもしておいてね、私はもう少し後で行くから」

「わかりました、先生」

そう言つて、俺は職員室を出た。

――NOW LOADING――

――梓 side

どうもみなさん、中野 梓です。

最近自分が、何で軽音部の先輩方の新歓ライブに、何であんなに感動したのか、それがわからなくてずっと考えていました。

でも、漣先輩が言った、

「私は、このメンバーでバンドするのが楽しいから、だから、こんなに良い曲になるんだと思う」

この言葉を聞いて、私はこの先輩達とバンドをしたい！

そう思って、軽音部に居続けようと決めたんですが……、

「あずにゃくん、猫ミミ着けて」

そしたら、頑張れるから！」

この場違いな事を言ったのは、唯先輩です。

本当にがんばってくれるかな？

「だったら、着けます」

と言って、私は猫ミミを着ける。

ううゝ、やっぱり恥ずかしいなあゝ。

「やっぱり、あずにゃんは猫ミミが似合っねえ、にゃんって言うてにゃん！」

また、言わないといけないんですか！

ーガチャ

「ううゝ……にゃ、にゃん」

今、誰かドアを開けたような？

――NOW LOADING――

ー藤馬side

ここか、軽音部。

どんな奴らだろうな、コウモリモドキ。

（ま、お前の予測を超える奴等だ）

え、何か知ってんの お前？

(っ！、いや、何でもない)

……変な奴。

そう思いながら、準備室のドアを開けた。

ーガチャ

俺の視界に飛び込んできたのは、

「……ううゝ、にゃ、にゃん」

と、猫ミミを着けた女の子が言う姿だった。

ーガチャン！！

俺は光より速く、ドアを閉めた。

「今のは……あれだ、ドアの開け方が雑過ぎて、違う部室の扉を開けたんだ」

(……苦しいぞ、藤馬)

だまらっしゃいー！！

と、とりあえず、ノックからすれば大丈夫だ。

ーコンコン、ガチャ

「あの……、入部希望なんすけど」

そう言った俺の視界に再び入ってきた光景は、

猫ミミを着けた女の子

それをてなづける唯

空腹+ゴリさんの説教でかなりキテいた俺は、

「なんでやつ!!」

ースパアアアン!!

今日一番のツツコミを唯に決めた。

つか!

「あんたら、ここなに部かわかってんの!!  
はい、そこでリラックスしている律!!」

「ええっと、軽音部だけど」

「そうだよ、軽音部だよ!!」

なのに、何で猫ミミ少女がいるんだ!!

ここは、コスプレ会場か!!

それと、何で残りのムギと、黒髪少女は吞気にブレイクタイムを

してんだ!!

カオス過ぎるわ!!」

と、暴走機関車のようにツッコミをいれると、

「はい藤馬君、ケーキ」

と、ムギがケーキを差し出してきた。

「おいムギ、ケーキで怒りが収まるわけ……」

と、黒髪少女が言いながら、俺を見る。

しかし、

「ほえええ、このケーキ美味しいです、ムギさんや」

俺の怒りは収まった。

「「収まるんかい!!」」

律と黒髪少女が同時に突っ込んだ。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

というわけで、正座をしながら、軽音部の皆さんに状況説明中です。

「つまり、入部希望者なんだよな？」

と、律が聞く。

「まあな、で……、」

俺は、出されたお茶を飲みつつ、部屋をみる。

「どうかしたの、藤馬君？」

いや、ムギさん……

「ここって、喫茶店じゃないよね、  
何でこんなケーキとか、ティーカップとかがあんの？」

と、至極当然の質問をする。

すると、

「ここにあるものは、ぜんぶ、ムギちゃんが持ってきてくれたんだ」

さいですか、唯。

それで、

「そこにいる、二人はどうしたの」

と、指差した先には、

「男の人に、猫ミミをみられた……」

「は、恥ずかしい……」

さっきの黒髪少女と、猫ミミ娘が体育座りでブツブツ何か言っている。

「はぁ……おい、漣ー、梓ー、新入部員だぞ」

すると、

「「本当か（ですか）……」」

うおっ！！

「えっと、さっきの人ですよね？」

と、猫ミミ娘が聞く。

「まあな、今日からこの学校に転入してきた、二年の中都藤馬だ、よろしくな、ええっと……」

「梓です、一年の中野梓です。宜しく申し上げます、藤馬先輩！」

と、元気一杯に自己紹介する梓。

「わ、私は、に、二年の秋山澪だ、よろしくき中都君……」

と、顔を赤らめながら紹介する、澪。

ゴハアツ！！ 吐血

「だ、大丈夫、なっちゃん！？」

く、くそう、何という奴だ、俺を萌え死させるつもりか！！

「ねえ、藤馬君、あなたは楽器は何が出来るの？」

と、ムギが聞いてくる。

「ああ、一応√「ヴァイオリンよね、藤馬君」いつ入ってきたんだ、さわっち」

神出鬼没過ぎるわ。

「私、ミルクティーね」

そう言っつて、席に着くさわっち。

あんたも飲むのね。

「へえ、ヴァイオリンかあ、すげえなあ、藤馬！」  
と言っ、律。

「弾いてみてよ、なっちゃん!」

やや興奮しつつ、いう唯。

「じゃあ、弾いてみるわ」

そう言って、準備をする。

「……いくぞ」

皆が、うなずく。

――演奏 仮面ライダーキバOST音也――

「うまいわね」

「……凄い」

「……音が綺麗ですね」

「……でも、なんだか」

「……凄く悲しくてそれでいて、」

「懐かしい感じがする」

よし、終わり。

って、何か皆、さわっち以外固まってるし、どうしたんだ？

「えっと、次はみんなの演奏を聴きたいな」  
「これでどうだ？」

「……あ、ああ、じゃあホッチキスにするか？」

「う、うん、それが良いよ」

「じゃあ、準備をしましょうか」

「そ、そうだな」

「じゃあ、藤馬先輩はコッチに来てください」

何か、歯切れ悪いな。

そう思いつつ、梓に言われた所に座る。

「準備は良いか」

律が他の三人に聞く。

それに三人もうなずく。

「……1 2 3 4 ! !」

——演奏　私の恋はホッチキス——

この曲……、聞いたことがある気がする。

そう思った瞬間、頭の中に映像が流れてきた。

「っ！！」

――声が聞こえる

――今日の学園祭のライブ良かったな！

――私も、そう思います！！

――うん、うん

――来年はどんな感じにする？

――その前に、まずお前は風邪を治せ。

――それを言うなら、なっちゃんもだよ！

誰かが俺に言う。

その瞬間、全員の身体が、

パリイイイイイン！！

跡形もなく碎けた。

――へっ？

何が起きているのか、俺には分からない。

ヒトだった欠片が俺に降りかかる。

そして、俺は

――あは、は、は、はははは、ああアアああアアあああ……！  
壊れた。

I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 第八幕 演奏！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「いや、何あれ」

かなり重要なんだぞ、あれ。

藤馬「けいおん！じゃないよね、これ」

だまらっしゃい！！

藤馬「それでは

全員「次回をお楽しみに！！」

**第一楽章 第九幕 すれ違い！！（前書き）**

どうも、皆さん388859です。

やっぱり、携帯で投稿するのは、大変ですね。

それでは、第一楽章 第九幕をお楽しみください。

第一楽章 第九幕 すれ違い!!

――律side

よつす、容姿端麗、みんなのアイドル田井中 律だ!!

今は、藤馬が私たちの演奏を聴きたいっていうから、演奏したところ  
なんだけど……。

「先輩、藤馬先輩、どうしました!?!」

藤馬が、泣きながら、頭をおさえている。

どうしたんだ、あいつ!?!

「なっちゃん、しっかりして、なっちゃん!!」

「大丈夫、藤馬君!?!」

唯とムギが藤馬に呼び掛ける。

すると、

「あ、あ、あはは、あはははは、ああああアアああ!!!!」

急に、笑いながら、獣のような大声を出した。

「っひい!!!!」

漣、怯えている場合じゃないぞ!!

「さわちゃん、どうしよう?」  
そうさわちゃんに聞くと、

「とりあえず、落ち着かせましょう、その後の……っ!!」

さわちゃんが、視線を藤馬に向けている。

見てみると、

藤馬の包帯が巻かれた、右手の甲から、赤黒い怪しい光が漏れていた。

私は、藤馬の居るところまで行き、右手の包帯を千切りとろうとする。

しかし、

――ガシッ!!

千切ろうとした手は、藤馬につかまれた。

「……ハア、っはぁ、もう、大丈夫……だから……」

大丈夫なら……、

「みんなも……ごめんな……ふう、俺の為に演奏してくれたのに」

何で……何で!!

「帰りになんか、おこるよ」

そんな悲しい顔をするんだよ!!

何故かわからないけど、凄く、くやしかった。

「……ふざけんな!」

気付いた時には、藤馬の胸ぐらをつかんでいた。

「ちょっと、りっちゃん!!」

「どうしたの、ケンカは駄目よ!!」

「律先輩、おさえてください!!」

唯、ムギ、梓の三人に、身体をおさえられる。

「大丈夫か、藤馬?」

「保健室に、言った方が良いんじゃない?」

漣とさわちゃんが、藤馬の心配をする。  
すると、

「やっと、名前で呼んだな、ありがとう、漣、さわっち」

と、酷く疲れた顔をしていた。

「ま、まあ、これから同じ軽音部の仲間になるわけだしな」

と、漣が顔を赤らめる。

どうして、皆そんなに冷静でいられるんだ!!

「……ごめん、ちょっと今日は帰るわ」

私はそう言いつつ、荷物を持って準備室から出た。

――NOW LOADING――

――藤馬side

何だったんだろう、あの映像、でもすごく懐かしい感じがしたな。

つか、俺のせいで空気を悪くしちゃったな。

「ごめん、俺があんなことになっちゃったから……」

「そんなことないよ、なっちゃん」

「そうよ、私たちにも原因が有るのだから」

「そうですよ、気にしないでください」

おまえら……。

「大丈夫だ、あれは律なりに、心配した結果なんだから」

「りっちゃんって、意外にツンデレなのね」

さわっち、空気をよめ。

「みんな、本当にごめんな」

本当にこいつら、人が良すぎるわ。

そして、さわっち以外の全員に何かお礼でもしようか、そう思った時だった。

「「っ！！」」

この感じ、ファンガイアだ！！

「ゴメン、用事が出来たから！

また、明日！」

皆がキョトンとしているが、急がないと!!

荷物を持って、準備室から出る。

(コウモリモドキ、近いか、遠いか?)

(それぐらい、わからないのか?)

(だいたいの方角はわかるけど、距離は分かんないんだよ!!)

コウモリモドキを外に出しながら、毒づく。

(そうだな少し遠いぞ、だいたい二キロぐらいだな)

右手の包帯を外しながら、脇目もふらず走る。

――

――

――

――

(その森林の近くだ!!)

ちきしょう、何処だ!

そう思い、周りを見渡す俺。

その時、

「くそ、コッチに来るな!!」

その視線の先には、

「……っ、律!？」

さっき、帰ったはずの律だった。

――NOW LOADING――

――律side

はあ、気分最悪だ。

明日、藤馬になんて顔すりゃ良いんだよ。

そんなことを思いながら、商店街を歩く私。

「はあ、ジュースでも飲むか」

そう思い、近くの公園にある自販機で、ジュースを買い、ベンチに

座る。

罪悪感で、押し潰されそうになっていた時だった。

「こんな時間に一人でいるなんてね」

三十歳ぐらいの女性が、私に話しかけてきた。

「なんですか、今、一人になりたい気分なんですけど」

今思えば、このときに逃げればよかったと思う。

――スパッ

ベンチが真つ二つに切れた、そして、

「なぐに、キミを殺すだけ」

あの女との、鬼ごっこが始まった。

――

――

――

――

「はあ、はあ、……」

あの女の蛾みたいな怪人から逃げるために、森林に飛び込んだのは良いけど……。

「こんなところに、逃げても無駄、無駄」

そう言つて、鱗粉を飛ばす怪人。

すると、鱗粉が当たった場所から火花が出る。

絶対当たったら、やばい！

「くそ、コツチに来るな！！」ーガッ

やばっ！こけちゃった。

「やっと、落ち着いたわね、それじゃ」

そう言つて、頭上に牙みたいなものが出てきて、

「いただきます」

コツチに向かつてきた。

その刹那、

「セイヤアアア！！」

今、一番会いたくない奴が飛び蹴りをしながら現れた。

その瞬間、私は意識を失った。

――NOW LOADING――

――三人称side

「おい、律、律!!」  
意識が無い律に問いかける藤馬。

「全く、何してくれるの、気分最悪なんだけど」

そう言いながら、立ち上がる怪人、モスファンガイア。

「てめえ、律に何しやがった!!」

激昂する、藤馬。

「別に何もしてないわ、ま、その子の代わりに、アナタのライフエナジーをもらおうかしらね」

モスファンガイアが藤馬の方に向かう。

「それは、ごめんこうむるな、コウモリモドキ!!」

藤馬がキバットを呼ぶ。

「落ち着いてやれよ、藤馬」

注意するキバット。

「わかっている、いくぞ!!」

そう言っで、キバットを左手で掴む藤馬。

「ああ、ガブリ!!」

「っ!!」

キバットを右手に噛ませる、すると、右手から全身へと《魔皇力》が流れ、藤馬の顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は、キバットを腰のベルトに逆さにしてはめる。

その瞬間、中都藤馬は仮面ライダーキバへ姿を変えた。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」

そう言っで、キバはファンガイアに立ち向かう。

「あなたが、キバね」

モスファンガイアはキバの拳を受け流しつつ、蹴りを放つ。それをバックステップで避けるキバ。

しかし、

「離れて良かったのかな？」

そう言いつつ、モスファンガイアは身の軽さを活かして、周りの木々を足場に使い、死角から攻撃してくる。

キバは、何とか避けていたが、

ーードガッ！！

一発もらってから、ドンドンダメージを負わされる。

「ちっ、くそつたれ！！」

思わず、悪態をつくキバは、そのまま一旦近くの木に隠れる。

「威勢だけね、良いのは」

そう言つて、鱗粉を飛ばすモスファンガイア。

鱗粉は、木の後ろに隠れているキバにかかり、

「……………っ、ぐっ！！」

キバの身体から火花が散り、そのまま倒れそうになる。

普段のキバなら、この程度の敵は倒せるのだが、あの見たことの無い映像を見た影響か、反応が遅くなっているようだ。

「……つぐ、はあ、はあ」

キバが肩で息をしている。

「大丈夫か、藤馬？」

キバットが声をかける。

「大丈夫に見えるか、ボケ、コウモリモドキ、ちょっと賭けに出るぞ」

そう言つて、木の後ろから出るキバ。

「おい、何をしてるんだ藤馬、死ぬ気か!？」

キバットが怒りながら言う。

「まあ、見てろつて」

笑いながら、肩で息をするキバ。

「あれ、諦めたのかな？」

と、キバに聞く、モスファンガイア。

「……やべえ、身体に力が入んねえ」

そう言つて、キバは地面に手をつく。

「それじゃあ、」

そして、モスファンガイアがキバの真っ正面から、

「――さようなら」

拳を放った。

しかし、

「――ガシッ――！」

「っ――！」

モスファンガイアの拳は、

「――残念ながら、今は演技です」

キバの身体に拳が食い込みながらも、受け止めていた。

「――オラオラオラオラ――！」

モスファンガイアの身体に拳のラッシュを叩き込む。

「なっ、がっ、ごはっ――！」

「……ラストオオオオ――！」

そして、最後にキバは、モスファンガイアに蹴りをぶちこみ、森林から公園までぶっ飛ばした。

「……つく、このつ……！」

モスファンガイアのダメージはかなり大きいようで、上手く立てない。

「……これで、おわりだ……！」

そう言つて、キバは右腰にある紅い笛、ウェイクアップフエッスルをキバットに吹かせる。

「《ウェイクアップ……！》」

その瞬間、周りが夜になり、三日月が出てくる。

「ふん、はああああ……っ……！」

精神を統一させた後、右足を振り上げ、右足の拘束具カタナを解放し、蝙蝠を象った扉が飛び出す。

右足をあげたまま、片足で跳躍し、そのままモスファンガイアめがけ、必殺の蹴りを放つ……！！

「セイヤアアア……！」

《ダークネスムーンブレイク……！》

本来なら、これで決まるはずだった。

しかし、

ドスッ、バキイイン!!

キバの《ダークネスムーンブレイク》は、白い真珠のようなものに、跳ね返された。

「なっ、がはっ!!」

突然の事に呆然とするキバ。

すると、

「へえ貴方が、キバなんだ」

そんな、場違いなのんきな声が聞こえた。

キバがその声がしたほうをみると、

「あれ、どうしたの、そこにいるファンガイアさん、逃げないの?」

ピンク色の真珠をモチーフにしたファンガイア、パールシエルファンガイアがいた。

「ありがとうございます、クイーン。では」

そう言って、モスファンガイアが逃げる。

「おい、待てよ!!」

キバが、追いかけようとするが、

「っ、待て、藤馬!!」

キバットに呼び掛けられる。

「何だよ、早くあいつを追わないと!!」

「少しは、落ち着け!!」

その貴様、さっきのファンガイアにクイーンと呼ばれていたな」

クイーンにキバットが質問する。

「ええ、私がファンガイアのクイーン、そして」

「あなたの過去を知るものだよ」

クイーンは、そう嬉しそうに言った。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一章 第九幕 すれ違い!!（後書き）

どうでしたか？

藤馬「なあ、伏線ばらまきすぎじゃないの？」

ああ、自分でも改めてそう思った。

藤馬「なら減らせよ、イロイロ大変だろうけどさ」

いや、最近最後の学園祭の、オリジナル曲の歌詞を気分転換に考えたんだけど……。

藤馬「何だよ？」

歌詞作りつて、めっちゃムズいじゃん!!

藤馬「今ごろかよ!!」

というわけで、

全員「次回をお楽しみに!!」

**第一樂章 第十幕 狼の戦士!! (前書き)**

どうも、みなさん私こと388859です。

やばい、

駄文すぎる W W

すいません、それでは第一樂章 第十幕をどうぞ。

## 第一章 第十幕 狼の戦士!!

――三人称 side

「俺の……過去……?」

キバが警戒しながら、聞く。

「うん、そうだよ。上、じゃなくて、中都藤馬くん」  
クイーンが何かを言いかけたが、すぐにやめた。

「貴様、何が目的だ?」

キバットが、クイーンに質問する。

「私の目的は……あれ、何だったわけ?」  
と、クイーンが逆に質問する。

「何で、コッチに聞くんだよ!!」  
余りの天然っぷりに、思わず突っ込むキバ。

「やっぱり、キミのツツコミは良いね」。

って、あ、思い出した、思い出した」  
クイーンはこつちを指差すと、

「中都藤馬くん、あなたには私達の仲間になってもらいます」

そう、断言した。

「嫌だと言ったら？」

キバが質問する。

「なぐに、その時は力づくで、仲間にするだけだよ」  
そう言つて、睨み合うキバとクイーン。

「でもまあ、今の君は弱っちいから、興味は無いかな」  
クイーンを笑いながら言う。

「何だと、てめえ！！」

そう言つて、キバはクイーンに殴りかかる。

「バカ、安い挑発に乗るんじゃない！！」  
キバットが注意するも、

「バカな所も、変わらないね」

クイーンは黒い真珠を出し、それを、

「じゃあ……」

試してみる？」

キバへ放った。

ドゴオオオオン!!!!

すさまじい音と、土煙が出る。そして、土煙が晴れた後には、

「……ぐっ、っはぁ、はぁ、くそっ……たれ……」

極度のダメージで、変身解除したボロボロの藤馬がいた。

「それじゃ、また今度会うときまで、バイバイ」

そう言っつて、クイーンは去った。

――NOW LOADING――

――藤馬side

「……くそ、あのクイーンとか言っ奴、メチャクチャ強えじゃねえか……」

あんな、安い挑発乗らなきゃ良かったな……。

そう思っていたら、

「……全くお前は、仕方の無い奴だ」

と、コウモリモドキが右手を噛む。

すると、傷が少しずつ治っていく。

おおー！

「スゲーな、コウモリモドキ、傷がちょっとずつ治っていくぞ」

そしてあらかた治してもらったと、

「……ここまでで、大丈夫だろう」

そう言って、コウモリモドキが右手から離れる。

「……すまねえな」

「全く、無茶すぎだ、今のままのお前じゃ、クイーンどころか、ビショップにも勝てんというのに」

と、コウモリモドキが言う。

「そのクイーンとか、ビショップって何なの」

なんか、強いっつうのはわかるけど。

「ファンガイアの中での、トップクラスの実力を持つ集団、お前は、  
チエックメイトフォー

その一人のケンカを買ったんだ」

WA～O……。

「命知らずだな、俺」

さてと、

そういえば、律を探さないとな。

俺は、右手に包帯を巻きつつ、森林に向かって歩く。

――

――

――

――

確か、ここら辺だよな……。

あ、あつた――！

ヴァイオリンケースと、学生カバンにコウモリモドキを入れる。

律の野郎、何処に居るんだ？

「おーい、律――！」



「…………不幸だ」

――NOW LOADING――

――律side

うわっ、藤馬を殴っちゃったよ！

「だ、大丈夫か？」

「……そう言うなら、何で殴ったんすか？」

不服そうに、藤馬が言う。

だ、だって、

「起きたら、目の前に男の人の顔があつたら、そりゃくなあ？」

「……そんなに、俺って信用無いかな」  
藤馬がorzポーズをとっている。

「い、いやいや、そんなことないと思うぞ、私は！」

何で私が、こんなにフォローしなきゃいけないんだよ！

「……つく、くふつ、アハハハ！」

へっ？

「な、何で笑うんだよ？」

「だって、律はあの怪人の事は、何も言わないんだなあって」

怪人って、何の事……。

「……あつ、そういえば、何で私を助けてくれたんだ？」

「助けてやったんだから、お礼ぐらいないのか？」

頭を抑える藤馬。

「そ、その、なんだ、ありがとな」

私は顔を赤らめながら言う。

「……か、可愛い」

ーードゴッ……！

私は藤馬に左フックを腹にブチこんだ。

「ゴハッ!」

な、な、可愛いつて今言われた……。

「……ちょ、おまつ……褒めたのに……それは……ないでしょうよ」

藤馬が悶絶しながら言う。

「ご、ごめんな、つい手が出ちまった」

「あなたは、つい、で、左フックを出すんですか!？」

そ、それより、

「どうして、私を助けたんだ？」

藤馬は、頬をかきながら、

「いや、律と一緒にバンドしてみたいし、それに」

それに？

「今日は律に悪い事しちゃったしな、ごめんな、ホントに」  
藤馬が私の頭を撫でてきた。

あ、何か気持ち良い。

「一人で、あんな奴からよく逃げてたな、恐かったろ」

藤馬の声が、私の心に響く。

――ポツッ

あれ、私なんで泣いてるんだ、身体も震えてるし？

すると、藤馬は私を抱きしめ、

「怖いときは、我慢しなくて良いんだよ、確かに、それは弱さだけ  
ど、」

「……うう…っあ……」

「……生きてる証拠なんだから」

こいつは、ズルイ。

こんなこと言われたら、

――泣くしかないじゃないか。

その後、私は泣いて、泣いて、泣いた。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

あの後、律を家まで送り、家に帰った。

そして、翌日。

「はあ、よく寝たわ」

そう言って、起きる俺。

昨日の戦いで、ボロボロになった制服を真新しい物に変え、家から出る。

今日も、晴れてんな。

「あ、なっちゃん、おはよー!」

「おはようございます、藤馬さん」

「おはよう、憂ちゃん、唯」

通学路を歩きながら、二人と他愛ない会話をする。

「そういえば、昨日はどうしたの、なっちゃん。  
急に帰っちゃったけど」

そう、唯が俺に質問する。

(藤馬さん、もしかして……)

（ああ、ご想像通りだ、初めて負けちつたよ）

そんな感じに、憂ちゃんと小さい声で会話する、俺。  
すると、心配してくれたのか、

「怪我とか、大丈夫ですか!？」

もう、危ないことはしないでくださいよ、だいたい……」

と、憂ちゃんがいきなり声のトーンをあげてきた。

何か、お母さんみたいだな。

「あの、憂ちゃん……?」

「何ですか!?!」

「……周りの人が見てるから、そんな大きな声出さんという」

「……へっ!？」

そう言っつて、周りを見渡し、顔を赤くさせる憂ちゃん。

あえて言おう。

めっさ、可愛い。

「どっしたの、うい、なっちゃん?」

唯さんや、あなた天然すぎ。

―

――

――

――

というわけで、学校に着きました。

憂ちゃんとは、ここで分かれ、教室に向かう。その途中、

「あ、りっちゃんだ〜!!」

律を見つけた。

「お〜、唯、おはよう」

「俺をスルーすんな、バイオレンスカチューシャ娘」

「誰が、バイオレンスカチューシャ娘だ!!」

「だって、お前、昨n「ふんっ!!」ひでぶっ!!」

―ドガッ!!

律の回し蹴りが、頭に炸裂する。

ふっ、白か。

「昨日、どうしたのりっちゃん？」

「い、いや、何でもない、何でもない!!  
さあ、今日も頑張るかな!!」

うう、く、苦しいぞ、律。

「……っ!!」

まあ、朝から食欲旺盛な奴だな。

「唯、律、ちよつと授業遅れるわ!!」

そう言つて、走る俺。

「ちょ、ちよつと、藤馬!」

あ、そうだ!

そう思つて、振り返る。

「律、先生への言い訳頼んだぞ!!」

「何で私なんだよ!」

「唯じゃ、無理だろ!!」

「ああ、なるほど」

「それ、どういう事、りっちゃん、なつちゃん!？」

「「そのまんまの意味だよ!!」」

そうつつこんで、階段をかけ降りた。

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは人の少ない通り。

そこで、あり得ないことが起こる。

「く、来るな、来るなよ!!」

そう言つて、逃げる会社員。

会社員を追いかけているのは、

「もう我慢出来ない、あなたのライフエナジーいただくわ」  
昨日律を襲った、モスファンガイアだった。

しかし、

「ちょっと、待った!!」

それに、待ったをかけた人物がいた。

それは、

「また、あなたなの？」

と、モスファンガイアが呆れながら、藤馬に聞く。

藤馬は、右手の包帯を外しながら、

「まあな、こっちは学校なんだ、すぐに終わらせる。

コウモリモドキ!!」

キバットを呼び、掴む。

「ああ、ガブリ!!」

「っ!!」

紋章がある右手を、キバットに噛ませ、《魔皇力》を身体に流す。

その瞬間、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

そう言って、キバットをベルトにつるす。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

そして、藤馬は仮面ライダーキバへ変身した。  
すると、モスファンガイアが、

「最初から、本気で行かせてもらっわ！！」

得意のスピードを活かして、突っ込む。

しかし、

「残念ながら、お前のスピードはもう効かないよ」

一回勝てた相手に、負けるキバではない。

相手の攻撃を避けながら、蹴り、拳を放つ。

「ちっ、なら……」

そう言つて、モスファンガイアは手に剣を出現させる。

「ほう、じゃあ……」

その瞬間、腰のベルトの横が光り、青いフェッスルが追加される。

キバはそのフェッスルをとり、

「《ガルルセイバー！！》」

キバットに吹かせた。

↓

――

同時刻、キャッスルドラン内

その大広間には、

優雅に、コーヒーを飲む男。そしてチェスをする少年と、青年がいた。

すると、

「……」

何処からともなく、音楽がキャッスルドランに響く。

「ちがう、僕じゃない！」

と、少年、ラモンが言う。

「……俺……違う」

青年、力が拙い言葉遣いをする

「……久しぶりに、シャバの空気でも吸いに行くか」

コーヒーを飲んでいた男、次狼がコーヒーを置いて、席を立つ。

そして、地面を引っ掻くと、

ー ジジジジジッ！！

青い火花を出し、次狼は元の姿、ウルフェン族、最後の生き残り、ガルルへと姿を変える。

ー アオオオオオオン！！

そう雄叫びをあげた直後、ガルルは彫像へと姿を変え、

ー ドンッ！！

主人の元へと向かった。

ー

ー

ー

ー

睨みあつ、キバとモスファンガイア。

その時、

「……っ！！」

何かを感じたか、モスファンガイアが横へ転がる。

その何かは、キバの左手に吸い込まれるように、握られた。

すると、なにかは形を変え、ひとつの剣になる。

魔獣剣ガルルセイバー。

その刹那、ガルルセイバーのエレメントの影響で、握った左腕が拘<sup>カ</sup>束<sup>テ</sup>具に包まれ、弾けとぶ。

そして、左腕はガルルの腕のように変わっていた。

同じように、胴体も蒼く変質する。

すると、キバットの目も同じ青になり、キバの顔に、ガルルの幻影が吸い込まれ、複眼が蒼に変わった。

そうして、狼の戦士、仮面ライダーキバ・ガルルフォーム（以降、Gキバ）へと、変わった。

「……ウウウ、ウオオオオオアアア!!」

雄叫びをあげ、野獣のように構えるGキバ。

「こ、こけおどしよ!?!」

そう言いつつ、剣を振るうモスファンガイア。

Gキバは冷静に、振り下ろされた剣を受け流し、横薙ぎにガルルセイバーを振るう。

そのまま、蹴りをファンガイアの身体へ何発も打ち込む。

「くそ、ハッ！！」苦し紛れに鱗粉を放つモスファンガイア。

しかし、Gキバはその攻撃をバックステップで避け、

「……ふんっ！！」

ガルルセイバーの持ち柄の狼の口から、衝撃波を発射する。

ーバヒュッ！！

「……ぐあああ！！」

その衝撃波の威力に、思わず声をあげる、モスファンガイア。

「今だ、一気に決める！！」

キバットがGキバに言う。

Gキバはガルルセイバーの刃を、キバットに噛ませる。

「《ガルルバイト！！》」

その瞬間、ガルルセイバーには《魔皇力》が流れ、切れ味が倍増し、周りが満月の夜へと変わる。

「ふうううう……！！」

精神を統一、ガルルセイバーを口にくわえて、モスファンガイアへ

走り出す。

「……来ないで、来ないでよ!!」

逃げようとするモスファンガイア。

その二人の姿はまさに捕食者と、獲物。

Gキバは、走った勢いで天高く飛び、後ろの満月と重なる。

そして、そのまま、ファンガイアを剣ごと切り裂く!!

《ガルルハウリングスラッシュ!!》

ザシュッ!!

狼の幻影と共に、モスファンガイアは、

ーミシ、ミシミシ、パリィィィン!!

消え去った。

――NOW LOADING――

――藤馬side

ふう、何とか倒せたか。

そう思いながら、変身を解除する藤馬。

――オオオオオン！！

どうやら、キャッスルドランは、ライフエナジーを食べれたようだ。

「ながさ、いや藤馬」

声が聞こえた方を見ると、

「お前は、本当に全てを忘れたんだな」

確か、次狼だっけ。

「ああ、その、ごめんな、お前達の事を忘れて」

一緒に戦ってくれるのにな。

「ふっ、俺の知るお前は、そんな男じゃないぞ」

それはそれで、問題だともうけど。

「とりあえず、記憶は後で良い、力を貸してやる」

次狼は悲しそうに言う。

「……記憶は絶対取り戻してやるさ、絶対にな……」

そう言っつて、次狼と拳を合わせた。

「おい、藤馬？」

何だよ、コウモリモドキ？

「学校は良いのか？」

はい？……あつ！？

――バツ！！

腕時計をみる。

現在時刻九時三十分

この感じ、デジャブじゃね？

これは、あれです。

「ふ、不幸だ――！！」

その後、ゴリさんにコブラツイストをかけられちった

そして、律の先生への言い訳は、

――あれ、中都君は？

田井中さん、何か知らない？

――センサー、藤馬君は天下一武会に出るために修行しに、どこかに行きました

律、

それは、無理だろ。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一章 第十幕 狼の戦士!!（後書き）

どうでしょうか？

藤馬・キバット「いや、ダメだろ」

藤馬「何で、律に殴られまくってるの、俺!？」

キバット「良いぞ、もっとこいつを苦しめろ」

藤馬「お前のトマトジュースを捨てるぞ!!」

キバット「やゝめゝろゝ!」

それにしても、歌詞作リムズすぎる。

どうしても長いポエムになってしまう。

藤馬「確かに、他のけいおん!作品のオリジナル曲見たら、スゲーよな」

キバット「作者と大違いだな…」

……………それでは!

藤馬・キバット「ごまかした!？」

全員「次回をお楽しみに!!」

**第一楽章 第十一幕 期末試験そして追試 前編！！（前書き）**

どうも、みなさん私こと388859です。

今、ちょっと行き詰まっていますが、頑張って更新します。

それでは、第一楽章 第十一幕をどうぞ。

第一章 第十一幕 期末試験そして追試 前編！！

――藤馬side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

あれから、数週間が過ぎ、俺は学校と軽音部にも慣れてきた。

最初は、軽音部って楽しいのかって思ってたけど、毎日しゃべって、食って、お茶して、演奏してめっちゃ楽しいです。

そして、現在の季節、もうすぐ夏に入るか、入らないかというところ。

これが何を意味するか。

そう、

「明日から、期末試験だ！！」

「何を言ってるんだ、藤馬、痛いぞ」

遷にジト目で言われる。

今は、二年生の皆で学校から帰っています。

「まあまあ、藤馬君だって、男の子なんだから」

ムギが笑いながら言う。

「ムギさんや、男の子は関係ないです」

「そうだよ、なっちゃんが『ちゅーにびょー』なだけだよー  
ーバシッ！

俺は、唯の頭を叩きながら、

「お前、それは俺が痛い人って言うことになるぞ  
ツッコミを入れる。

「えっ、そうなの！」

ハアと、ため息をつく。

「なあ、藤馬？」

お前、授業を抜け出したりするけど、勉強大丈夫なのか？  
律が、珍しく心配してくれる。

「珍しくは余計だ！」

すると、唯の横に居た眼鏡をかけた優等生、真鍋和が、

「そういえば、中都君はいつも授業を抜け出して、何してるの？」

えっ？

「ああ、確かに気になるな、それ！

よし、部長命令だ、話せ藤馬」

「りっちゃん、何だかつこいいー！」

「私も、気になる、気になるー」

律に唯、ムギまでもが聞いてくる。

ちなみに、ファンガイアはあれから三日に一回の割合で、出てくる。

いくらなんでも、こいつらに危険な目にあわせることは出来ないな。

「零、和たすけてくれない？」

わずかな希望にすがるが、

「私も、気になる」「

くそつ、味方がいねえ！

その瞬間、

「……っ！！」「

ナイスタイミング

「ごめんな、ちょっち用事が出来たから、また明日！」

そう言つて、その場から逃げる。

「……えゝ、またゝ！！」「」

あゝ、聞こえない、聞こえない。

（今回はかなり近いぞ、一キロだ）

全然近くねえよ、コウモリモドキ。

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは裏通り、人の目が届かない場所。

「ふうう、今日はどんな奴をいただこうか？」

その刹那、そう言った男は姿を怪人、シープファンガイアへと変えた。

すると、

「ちくしょう、何処なんだよって……！！」

一人の青年、藤馬が走って来た。

「ふっ、お前のライフエナジーをいただくぞ」

そう言って、牙のようなものを出す、シープファンガイア。  
「って、やばっ！」

「コウモリモドキ!!」

藤馬は牙を避けながら、キバットを呼ぶ。

そして、キバットを掴み、

「ああ、ガブリ!!」

「っ!!」

藤馬の右手から、全身へと《魔皇力》が流れる。

顔にはステンドグラスの模様が浮かび上がり、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

そして、キバットをベルトにつるす。

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」

そう言って、シープファンガイアへと向かうキバ。

「ちっ、キバか!!」

シープファンガイアは、瞬時に銃を作り出し、タイミングを見計らって、

――バキュン――！

キバへ撃つ。

「……うお！？」

キバは、当たりそうになるが、何とか避ける。

「はっはっはっ、さっさと死ね――！」

そう言って銃を乱発する、シープファンガイア。

キバは直ぐに、物影へと隠れる。

「くそっ――！こうなったら……」

そう言っ、腰にあるガルルフエッスルを取り、

「《ガルルセイバー――！》」

キバットに吹かせた。

――

――

同時刻内、キャッスルドラン大広間

ポーカ―をしているリキ、ラモン、次狼。

すると、

「~~~~」

ガルルを呼ぶ音楽が、鳴り響く。

「また、次狼だ〜」

少し、頬を膨らませながら言っラモン。

「……いい加減……俺も……呼ばれたい」

リキが、少しイラつきながら言う。

「ふっ、行くか」

そう言って、次狼は地面を引っ掻き、元の姿、ガルルへとかわり、キバの元へと向かった。

「

――

「……よし、来た!!」

キバの元へと来たガルルの彫像を掴む。すると左手、胴体に拘束具カタナが巻かれ、弾けとぶ。

キバは、ガルルフォームへとフォームチェンジした。

「ウウウ、ウオオオアア!!」

キバは、咆哮したあと野獣のように、物凄い速さでシープファンガイアへ飛びかかる。

しかし、

「なかなかのスピードだ、だが……!!」

シープファンガイアがそう言って、消えた。

そして、

「……ウアッ!？」

キバの身体から火花が散る。

周りを見渡すが、何かが動いていることしかわからず、攻撃を受け続けるキバ。

「おいおい、姿が変わっただけか!!」

シープファンガイアがそう言いつつ、攻撃の手を緩めない。

「これで終わりだ、キバ」

そう言って、シープファンガイアはキバを、自分の銃で吹っ飛ばす。

「……っぐあああ!!」

強制的に変身解除され、表通りへ藤馬は吹き飛ばされた。

「ちっ、表に吹き飛ばしたか、ここまでだな」

そう言っつて、シープファンガイアは姿を消した。

――NOW LOADING――

――藤馬side

「……くそ……やろう……大丈夫か…コウモリモドキ……」  
コウモリモドキを呼びつつ、ヨロヨロと立ち上がる俺。

（ああ、私は問題ない、しかし、奴は追ってこないな）

「確かに追ってこねえな、どうやら静かな所で食事はしたいらしい  
……っ痛――!」

やっぱし、怪我がひでえな。

（荷物を回収しておこう、私は先に戻る、治療はその後だ）  
この薄情ものめ。

そこへ、

「あれ、藤馬先輩じゃないですか!」

「あつ、ホントだ。奇遇ですり、って、凄い怪我ですよ、大丈夫ですか!？」

ちょうど、憂ちゃんと梓の二人が歩いてきた。

憂ちゃんは良いけど、梓はやべえな。

「……ああ、ちょっと……な」

憂ちゃん、アイコンタクトわかってくれよ。

「ど、どうしよう、救急車呼ばないと、梓ちゃん!!」

「うん、あつ、藤馬先輩は、座ってなきゃ駄目ですよ!」

うん、全然、聞いてないよ、この子達……。

「あ、あの大丈夫なんですけど……」

「ダメです!!!」

さいですか。

!

――

というわけで、マイハウス、ではなく何故か憂ちゃん・ズハウス。

憂ちゃん曰く、

「私がしないと、気が済まないんです!!」

らしい。ホントにお母さんだな、こりゃ。

「梓ちゃん、帰らなくて良かったの?」

と、憂ちゃんが聞く。

すると、

「私だって、藤馬先輩が心配だもん!」  
と返す、梓。

「ありがとな、二人とも、心配してくれて」

俺は笑顔でそう言う。

「いえいえ、そんなことないです。

私に出来ることはこれぐらいしかありませんから……」

と、憂ちゃんが段々声を小さくする。

はぁ、全くこの子は。

「良いんだよ、これだけで充分だよ」

「…………?？」

梓が、意味がわからないという顔をしている。

「そういえば、藤馬先輩はどうしてこんな怪我をしたんですか？」

ギクッ！

「そ、それはだな、不良とケンカしました、はい」  
「どうだ、この完璧な嘘！」

「…………声に出てますよ」

え、マジで？

「はい、思いつき」梓に、ジト目で見られながら、言われる。

そんな目で見ないで、罪悪感はないっす！！

「それで、何してたんですか？」

ずずいっと、梓が寄る。

「ええと、それはですね、えーあーはい」

ちよっとドキマガシつつ、言い訳を考える。

その直後、

ーガチャ

「たっだいま」

どうやら、唯が帰ってきたようだ。

「あ、お姉ちゃん、お帰りなさい」

憂ちゃんはホントによく出来てるよな。

それに比べて……。

「あずにゃん」

唯が梓に抱きつく。

「ちょっと唯先輩、抱きつかないでくださいよ！」  
こっちはどうしてこうなった。

それに梓、顔がにやけているぞ。

「あれ、なっちゃんは家で家にいるの？」

梓から離れながら、唯が質問する。

「ああ、ちょっと用事の帰りに、な」

すると、

「そろそろ、ご飯の準備をしないといけないですね。」

あ、藤馬さんも一緒にどうぞ」

はい？

「

――

というわけで、晩御飯NOW。

あ、梓は帰りましたよ。

「誰に話してるの、なっちゃん？」

いや、何でもないです。

つか、

「憂ちゃんの料理って、出来るの速すぎじゃない？」

俺だったら、二時間かけてする料理を、一時間で終わるってどういう事？

「でも、早く晩御飯が食べれるから、気にしたことはないよ」

あなたは、もっと気にしなさい、唯さん。

「味も美味しいし、レベル的に、お嫁にすぐ行けるよな」

万能すぎ、何なのこの子。

「お嫁って、そんな／＼／＼」

なして、赤くなるの？

「ういは、嫁にはやらん！」

「お前はお父さんか！」

それにいつからそんな話になったんだ！？」

シスコンも、大概にしろや。

「お姉ちゃん。そういえば、ちゃんとテスト勉強してる？」

「大丈夫、赤点はないから！」

そついう問題じゃ……って、うん？

俺は、ファンガイアと戦っているため、授業中に出ることもある。

その時は、授業をサボって戦い、その後、ゴリさんとの第二ラウンドとなるが、それは今は関係ない話。

話を元に戻すと、キバに変身して戦うのはかなり疲れる。

なので、疲れをとるため、苦手な教科の授業は寝ているのだが、その教科は……。

テスト前なのに全然勉強してねえ

W  
W

「じ、しまったああああ!!」

――

一週間後

―― 零 side

放課後 音楽準備室

どうも、秋山零です。

さて、今日も部活頑張るかな。

――バンッ!!

「ひっ!!」

な、何だ……。

ドアを見ると、

「はははははは……」

この世の終わりのような顔をする、藤馬。

「よつす漑、ムギ、お茶の準備」

「ムギちゃん、ムギちゃん、今日はどんなお菓子を、持ってきてくれたの？」

「ちょっと待っててね、すぐ準備するから」

律、唯、ムギがいつも通りに来る。

なんだ藤馬達か、若干一名怖いけど。

「どうしたんだ、そんな顔して、藤馬？」

「ヒヤッホー、聞いてくれますか、漑さん？」

藤馬が壊れてる……。

「おい、律、藤馬の奴どうしたんだ？」

今の藤馬に、聞くのなんか怖い。

「それは、本人から聞いてくれ」  
笑いながら言う律。

「漑さん、私こと中都藤馬、物理で赤点とっちゃった、てへっ」

……はい？

「……今、何て？」

「いや、もっかい聞きます、普通？  
結構、恥ずかしいんですけど」

ー ドゴッ！！

「アオッ！！」

「だったら、ちゃんと勉強しろおお！！」

ー ガチャ

「みなさん、こんにちり、って、藤馬先輩大丈夫ですか！？」

あ、梓。

ー ー NOW LOADING ー ー

ー ー 藤馬 side

というわけで、全員で恒例のブレイクタイム中。

漣の一撃、強すぎ。

たんこぶが、マジパネエ大きさになってるんですけど。

「状況がやっとなかりました、来たら藤馬先輩が倒れているので、びつくりしましたよ」

梓、そのままの君でいてね。

「それで、追試は何時なんだ？」

漣が聞いてくる。

「ああ、三日後」

「「「ふん、って三日後!?!?!」」」

おお、見事なシンクロだな。

「三日って、全然時間無いじゃないですか!」

梓がつっこんでくる。

「そうかねえ、三日あれば、このカス小説の本編が三話ぐらい書けるけど」

実際、そうだし。

「藤馬、例えがわかりにくいし、メタい!」

律、メタ発言は必要な事なんだ。

「大丈夫なの、勉強？」

ムギが、心配そうに聞く。

「ああ、実際めっちゃヤバイ」

「なっちゃんって、開き直ったよね、りっちゃん？」

「ああ、ああいう奴にはなりたくないよな、唯」

俺の近くでそう言う二人。

「そう言うこと言わないで、君たち」

ヤバイ、泣きそう。

そう思いながら、部室の隅で体育ずわりをする俺。

「ご、ごめん、なっちゃん、でも、なっちゃんは他の事で頑張れば良いんだよ」

「そうだ、そうだ！他の事を頑張れば良いんだ！」

おまえら……！！

「ああ、俺は勉強以外の事を頑張れば良いんだ、やってやるぞ！！」

「何で、最初から諦めてるだ。  
せめてやってから、そういうことは言え」

はい。

というわけで、勉強やるZ!!

I I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 第十一幕 期末試験そして追試 前編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「どうも、追試を受ける事になっちゃった、てへりんこ、中都藤馬です」

ーードゴッ！！

藤馬「アパス！！」

いい加減にせんかい！！

藤馬「でも、お前ストック後二話しかないじゃん」

うつ！！だから、今執筆してんだろ。

藤馬「へえ、そうかい」

それでは、

全員「次回をお楽しみに！！」

**第一樂章 第十二幕 期末試験そして追試 後編！！（前書き）**

どうも、皆さん388859です。

今回は、リキとラモンの扱いが、かなり酷いです。

それに注意して、読んでください。

それでは、第一樂章 第十二幕をお楽しみください。

第一章 第十二幕 期末試験そして追試 後編！！

――藤馬 side

「前回のあらすじ」

そっだ、勉強しよう！

「いやいや、まとめすぎだろ、確かにあってるけど！」

おい作者、ちゃんとやれよ。

「藤馬君、話を聞いている？」

「聞いてます、ムギ先生！」

すると湊先生が、

「だったら、何て今言ったか、言ってみろ」

「俺に質問するな！！」

――ドガッ！！

「勉強を続けるぞ」

はい。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、見ての通り、俺の家で、ムギ先生と澪先生に家庭教師をしてもらってます。

なぜこうなったのか、今から説明します。

――NOW LOADING――

く追試まで、後三日く

というわけで家で追試の勉強だ、やってやるぞ！

「大丈夫なのか、バカ？」

と、コウモリモドキが聞いてくる。

もうちょっと、オブラートに包んで。

そういえば、

「お前って、頭良いんだよね？」

と、コウモリモドキに聞く。

「ああそつだ。なにせ、お前の倍以上生きてるからな」

こいつ、ジジ「ガブリ!!」なんでもないです。

「だったら、わからないところを教えてくれよ」

「ああ、良いだろう」

よっしゃ、じゃあ、まずここ!!

「早いな!？」

ええと、なにに、この時の摩擦力を答えなさい……??」  
え、まさか、わかんないとかいうんじゃねえだろうな。

「そ、そんなわけないだろ、私は誇り高きキバット族だぞ!」

ふん。

俺はジト目で、コウモリモドキを見る。

「な、なんだ、その目は!？」

だいたいこいつのは自分でやるべきだ!」

上手く逃げるな、コウモリモドキ。

「うるさい、ほら次の問題に行くぞ」

こんな感じで全然進まず、三日前終了。

く追試まで、後二日く

「「っ!」」

ファンガイア……じゃねえな、何この感じ？

「これはイマジンだな、急ぐぞ!」

「いやいや、イマジンって何?」

「簡単に言えば、時の怪人だ!」

「意味がわかんないから!」

「

――

――三人称side

「うひょひょ、この時間も消してやる」

と、モグラのような怪人、モルイマジンが言う。  
しかし、

「どうおりゃあああ!」

「あフツ!」

そんな藤馬の声と共にモルイマジンが、蹴り飛ばされる。  
「で、電王か?」

ヨロヨロと立ち上がるモールイマジン。

「電王？違うな、俺は」

藤馬はそう言って、

「キバだ、コウモリモドキ！！」

キバットを呼び、掴む。

そして、

「ああ、ガブリー！！」

右手の甲を、キバットに噛ませる。

「っ！！」

藤馬の全身へ、《魔皇力》が流れる。

すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身！！》」

藤馬は仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

「うひょ、仮面ライダーだよ、兄貴！」

「はぁ？誰が兄貴だ！！」

すると、キバの後ろから、

「そうだな、弟よ!」

もう一体、モールイマジンが現れた。

「二体同時とか、セコいぞ、お前ら!」

そう言つて、二体を見るキバ。

「一気に決めるぞ、弟よ」

「うん、兄貴!」

そう言つて、二体のイマジンは身体をドリルのように回転させ、キバへ突つ込む。

「ーギャリイイン!!」

コンクリートの道が、ドンドン削れていく。

「くそ、あんなの当たつたらやべえな!」

キバは、何とか避けつつ、対策を練る。

「一気にぶつ飛ばす事が出来れば……!!」

キバがそう呟くと、突然、ベルトにひとつの紫のフェッスルが追加される。

そして、そのフェッスルを、

「《ドツガハンマー！！》」

キバットに吹かせた。

「

――

同時刻キャッスルドラン内大広間

今は、次狼とリキがチェス、ラモンがそれを見ている。

すると、

「~~~~」

リキを呼ぶ音楽がキャッスルドランに鳴り響く。

「……ちっ、違うか」

次狼が悔しそうに言う。

「……違う」

ラモンは、ふてくされているようだ。

「……ふん」

リキは、チェスの駒を潰し、腕を組む。

その瞬間、リキはフランケン族、最後の生き残り、ドッガへと姿を変え、

ー ドンッ！！

主人の元へと向かった。

ー

ー

「アヒヤヒヤ、どうしたどうした？」

「次で決めるぞ、弟よ！」

そう言っつて、攻撃の態勢をとる、イマジン兄弟。

「…………ぐっ、ハア、ハア…………」

イマジンの攻撃を受けて、かなりボロボロになっているキバ。

すると、

ー バキッ！！

「ぐほっ！！」

なにかにブッ飛ばされる、イマジン兄弟。

すると、そのなにかはキバの目の前で形を変え、ひとつのハンマー

になる。

魔鉄槌ドツガハンマー。

キバがドツガハンマーを握ると、その直後、エレメントの影響で両手と胴体カタテに拘束具が巻かれ、弾けとぶ。

両手と胴体は、どんな攻撃もものともしない、ドツガの身体のようにかわっていた。

すると、キバットの目も同じ紫になり、キバの顔に、ドツガの幻影が吸い込まれ、複眼が紫に変わった。

そうして、豪腕戦士、キバ・ドツガフォーム（以降、Dキバ）へと姿を変えた。

「うん、姿が変わったぞ？」

「電王みたいだな、兄貴！」

イマジン兄弟は、そういいながら、Dキバヘドリル攻撃をしかける。

しかし、

ーードゴッ、ギャルルルル、ガシッ！！

キバはイマジン兄を、ドツガハンマーをフルスイングさせてぶっ飛ばし、イマジン弟を片手で掴んだ。

そしてそのまま、

「むううううん!!」

「嘘おおおん!?!」

兄の方へと、放り投げた。

「今だ、決めるぞ!!」

キバットがそう言った後、キバはドツガハンマーをキバットに噛ませた。

《ドツガバイト!!》

ドツガハンマーに《魔皇力》が伝達していく。

その瞬間、世界が夜に包まれ、朧月が出る。

キバは、ドツガハンマーの柄の先を地面に立てる。

すると、拳の握り目がドンドン開いていき、トゥルーアイ真実の目が見えてくる。

「な、何だか、ヤバイよ、兄貴!」

「そ、そうだな、逃げるぞ、弟よ!!」

そう言っ、イメージ兄弟が逃げようとするが、

「う、動かないよ、兄貴!」

「く、くそ、このままじゃ、ヤバイ!」

《トゥルーアイ》の効果で、その場から逃げられない。

キバは、ドツガハンマーを持ち上げると、落雷エネルギーを得た。

そのまま横に振ると、オーラの纏った巨大な拳が頭上に現れ、そのままイマジン兄弟目掛けて、全力で降り下ろす！！

「フンガアアア！！」

《ドツガサンダースラップ！！》

ドゴオオオオオン！！

イマジン兄弟は消えた。

――NOW LOADING――

――藤馬side

たっはぁ、つかれたぁ。

「……藤馬……久しぶり……」

うん、リキだっけか。

「ああ、久し振りだな、ごめんな本当に忘れて」

俺は頭を下げた。

「……別に……また……いつしょ……嬉しい……から」

リキ……。

「ああ、これからもよろしくな」

そう言っつて、リキと握手した。

「おい、藤馬。

テスト勉強をしないと、やばいと思うぞ」

と、コウモリモドキが言っつてきた。

あ、忘れてた。

↓

――翌日、部室

「というわけで、助けて、漣先生！」

俺は漣に頼み込む。

「自業自得だ、自分で何とかしろ」

呆れながら、漣が言う。

「そつだよ、なっちゃん、前もって計画立ててやらないと」

「いや、お前も一年の時とつたる」「やっぱり、唯先輩は唯先輩ですな」

「あゝ、それどういう事、あずにゃん!？」

唯、律、梓の三人が華麗な漫才をする。  
お前ら、もう吉本いけるよ。

「じゃあムギ先生、お願いしやす!」

俺はムギ先生の方を見て、お願いする。

「……ムギ先生、良い響き……。私、やります!」

なして、目がそんな輝いているのかわからないけど、よっしゃ!!

「はあ、仕方無い。私も手伝うからな」

漣先生ありがとうございます。

「それで何処でするの、藤馬君？」

ああ、それなら。

「マイハウスでやろうか」と、藤馬の家!？」……何か問題でも？」

漣先生は、恥ずかしがり屋だからな。

「……私達を襲うのか?」「違うわ!」

何でそうなるの!?

「だって、男の人は皆そうだって、パパじゃない、お父さんが」

今、スゴく可愛いこと言った気がする。  
とりあえず、

「確かにこの軽音部の皆可愛いよ、だからといって襲ったり、」  
「「可愛い!?!」「」「」」  
何で、漫才トリオまで聞いてんだ!?

冒頭に戻る。

――NOW LOADING――

現在、ブレイクタイム中。

ちなみに梓、律は居ないよ。

唯？ 唯は……。

「あ、なっちゃんのせんべいも〜らい」今、俺の醤油味のせんべいを取りました。

って、

「ああっ!？」

俺の、醤油せんべいが……orz

と、まあこんな感じです。

「勉強を再開するぞ、藤馬」

はいよ〜。

↓

――

そういえば、

「なあ、ムギさんや？」

「うん、何かしら？」

「ムギって、何でお嬢様なのに、桜高に入ったの？」

「あら、お嬢様が入ったらダメですか？」

そんなことはないですが……。

「ムギの学力なら、もっと上に行けるんじゃないかな？って、思ってたさ」

すると漑も、

「確かにそうだよな、ムギは将来会社を継ぐんだろ？」

「そうなんですけど、その前に愉快な人達と一緒に、学園生活を送るのが夢だったの」

ふうん。俺にも、そんな人達が居たのかな、会ってみたいな。

でも、その人達との記憶は無いし、会ってどうする……。

ちょっと、憂鬱になっていたら、

「だから、藤馬君達は、私にとってかけがえのない人達なんですよ」

ムギが幸せそうに微笑んだ。

「……ありがとう、俺の中で、ムギはかけがえのない人達に入っているよ」

って、

「どうしたんだ、漑先生、さっきからだんまりだけど？」

具合でも、悪いのかな？

「いやいや、良い雰囲気になってるなあって、なあムギ？」  
ムギ先生を見ると、

「大切な人……／＼／＼／＼／  
えっ？

「ムギ先生、大丈夫？」  
そう聞くと、

「え、ただ大丈夫よ！／＼／＼／」

「いや、顔赤いけど……」

「べ、勉強しましょう、勉強！！／＼／」

んじゃ、頑張るかな！！

！

――

――翌日 放課後 部室

「ほわたああああ！！」

――ドゴツ！！

俺は、準備室のドアを蹴破った。  
その直後、

「うるさあああい!!」

「ーバゴツ!!」

「ナイスキック!?」

さわっちの回し蹴りが、俺の腹にジャストミートし、準備室の外へ砲弾のように飛んだ。

「「「おお、お見事!!」」」

他人だから言える言葉を吐く、唯、律、ムギ。

「「さわ子先生、自重してください!」」

まじめな遷、梓。

「……俺の……心配……なしすか……」

腹を押さえて、千鳥足で準備室に入る。

「はい、ケーキ」

ムギが天使のような笑顔で、ケーキを差し出してきた。

「うう、ケーキの美味しさが身に染みます……」

涙目で言う、俺。

「それで、追試はどうだったんだ?」

漣が、ソワソワしながら聞く。

「ああ、これを見るオオオ!!」

俺は、追試の解答用紙を叩きつけた。

ちなみに、合格は八十点以上。

そして、俺の点数は……。

「……………めっちゃ、ギリギリ……………」

八十一点でした、やったZ!

「ある意味、藤馬らしいよな」

と、呆れながら言う、律。

「スゴいね、なっちゃん!」

目を輝かせながら、言う唯。

「本当に、一瞬ダメかと思いましたよ……………」

と、少しげっそりして言う、梓。

何か、すいませんでした。

「また家庭教師したいわ」

ムギが、何だか怖いことを言っている。勘弁してください。

「とりあえず、これで解決だな」

漣、弄ることがないな、省略。

「さてと、お茶でも飲もうかn……っ！……はあ」

ファンガイア、もうちょい空気読もうか。

「すまん、用事が出来たから、また明日！」  
この感じ、この前やられた奴だな。

（ああ、今回は勝つぞ！）

もちのろんだ！！

――NOW LOADING――

――三人称side

「……見つけた、コウモリモドキ！」

藤馬は、キバットを呼び、掴む。

「ああ、ガブリー!!」

「っ!!」

キバットを右手に噛ませ全身に《魔皇力》を流す。

顔には、ステンドグラスの模様、赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」

そう言つて、シープファンガイアへ、飛び蹴りを放つ。

「……っ、キバか、くっ!!」

吹き飛ばされながら、銃を作るシープファンガイア。

「銃なら、銃しかねえだろ!!」

キバがそう言つと、腰が光り、緑のフェッスルが追加されている。  
それを掴み、

「《バッシャーマグナム!!》」

キバットへ吹かせた。

↓

——同時刻 キャッスルドラゴン内 大広間

次狼とリキ、ラモンは優雅なティータイム中のようなのだ。

「」

バsshャーを呼ぶ、音楽が鳴り響く。

「あつ、やっとよばれた」

すると、ラモンは鼻歌を歌いながら、マーマン族最後の生き残り、バsshャーへと姿を変え、

ードンッ！！

主人の元へと向かった。

ー

ー

キバが、物影に隠れてシープファンガイアの様子を伺う。

すると、キバの目の前へ何かが来る。

キバがそれを右手で掴むと、それは形を変え、銃になった。

魔海銃バsshャーマグナム。

バsshャーマグナムのエレメントの影響で、右手が拘束具カタナに巻かれ、弾けとぶ。

右手はマーマン族のように変質した。

そして胴体も同じようになる。

すると、キバットの目も同じ緑になり、キバの顔に、バツシャアの幻影が吸い込まれ、複眼が緑に変わった。

キバは、銃戦士、バツシャーフォーム（以降、Bキバ）へと姿を変えた。

「どこだ、キバ……」

キバを探す、シープファンガイア。  
すると、

ーードドンッ、バシッ……！

「……っ痛……！」

銃を水の弾丸に弾かれた。

弾丸が来た方向を見ると、Bキバが銃を構えていた。

「だが、銃では俺に勝てないぞ」

シープファンガイアがそう宣言した。

しかし、

「ふん、ならば一気に決めるぞ、藤馬……！」

その宣言は直ぐに覆る事になる。

キバは、バツシャーマグナムをキバットに噛ませる。

「《バツシャーバイト！！》」

バツシャーマグナムの《魔皇力》が最大になる。

その瞬間、周りの景色が半月の夜へと変わる。

すると、キバの足元から水が溢れ出す。Bキバの特殊能力、疑似水<sup>アクアフィールド</sup>中環境だ。

そして、バツシャーマグナムのトルネードフィンを高速回転させ、《アクアフィールド》から竜巻を作り出す。

「ふっ、逃げさせてもらう！」

シープファンガイアが逃げる。

しかし、もう時に既に遅し。

Bキバは竜巻の中で、シープファンガイアをロックオンし、巨大な緑の弾丸を放つ！！

「《バツシャーアクアトルネード！！》」

シープファンガイアは当たらないよう、得意のスピードで逃げるが、

ードキュウン!!

それ以上のスピードで、《バッシャーアクアトルネード》が撃ち抜いた。

そして、Bキバはシープファンガイアに近づき、

「……えい!」

手で突いた。

パライイイイン!!

――NOW LOADING――

――藤馬side

よっしゃ、リベンジ達成!!

ガッツポーズをとっていると、

「……久し振り、お兄ちゃん」

笑顔のラモンが居た。

「よっす、確か、ラモンだったよな、ごめんな、お前達の事を忘れて」

リキと次狼が、止めてくれと言ったが、謝らないと俺の気が済まない。

「全く、そんなことじゃなくて、なんで僕をいつまでも呼んでくれなかったの？」

はい？

「いや、なんと言いますか、あなた様の力を借りなくても、どうにかなる場合が多いので……」

「そう言う問題じゃない、前だって、次狼じゃなくて、僕を呼べば良かったのに、もう!..!」

俺は、この後ラモンにむっちゃ叱られ、お詫びとして俺の家に一日泊まった。

I t o b e c o n t i n u e d

第一章 第十二幕 期末試験そして追試 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「何だよこれ、ハチャメチャな展開だなあ」

次話の合宿は、シリアスとコメディの振り幅がすごいぞ。

藤馬「もっと、ちゃんとやれよ」

仕方無いだろ、一日更新するには時間が無いんですよ。

藤馬「はあ、んじゃしめるぞ、それでは！」

全員「次回をお楽しみに！！」

第一章 第十三幕 合宿 前編!! (前書き)

やべえ、シリアスとコメディの差がパネエ、どうしてこうなった。

藤馬「だから、プロット立てれば良いのに」

だまらっしやい!

藤馬「それでは、第一章 第十三幕をどうぞ!」

あ、俺のセリフ……。

第一樂章 第十三幕 合宿 前編！！

――藤馬 side

現在、夏休みでございます。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、部活が終わって皆で帰るところです。

「はあ、暑い」

セミもうるさいわ、ガスバーナーで焼いてやるうか、この野郎。

「よし、久し振りにみんなそろった事だし、合宿の買い物に行くか――！」

と、律が無駄に元気一杯に言った。

合宿ねえ。

「確か海だっけか」

「そうだよ、ムギちゃんの別荘にいくんだ」

唯さん、遊びに行くわけじゃないんだから。

「あ、藤馬も来いよ、お前には大事な役目があるんだから！」  
律がこついうことを言うときは、大抵不幸な事しか起きないんだよな。

！

――商店街

というわけで、軽音部の皆＋俺というハーレム状態で、商店街でシヨッピングです。

「ところで、何を買うんですか、新しい機材とか！」

梓が期待の眼差しを漑に向けている。

すると漑は、

「ええっと……「水着だよ！」はあゝ」

唯は遊ぶ気満々じゃねえか……。

「どうせ、こんな事だろうと思いました……」

梓がやっぱり、という顔しながら言う。

すると律が、

「別に、ずっと遊ぶわけじゃないよ」

心外だなあみたいに言うが、

「そんなの信用出来ません！」

「何で!?!」

梓は直ぐに否定した。

まあ、こいつらの普段の態度を見れば、そうだよな。

それに見かねて、漑が、

「まあ、息抜きも大切だから、な」と笑顔で言う。

「……そっか、そうですよね!」

そう言うと、漑が梓の頭を撫で出した。

何か、本当の姉妹みたいだな。

って、あれ?

何か律の奴、ぼけと漑たちを見てるな。

「どうしたんだ、律?」

「へっ?べ、別に何でもない!」

もしかして……。

「……やきもち?」

「チエイサアアア!!」

「ーゴスッ!!」

「おぶっ!?!」

律のハイキックが俺の後頭部にめり込んだ。

「そ、そんなわけないだろ、ほら、買い物行くぞ!!」

律の蹴り、怪人に効くと思う。

その直後、

「「っ！！」」

こんな時に……。

「ゴメン、用事だ、またな！」

そう言っつて、俺は走り出した。

――

――

――

（ここらへんだ、藤馬！）

「ああ、わかった！」

くそ、何処だよ！

「アハハハハ、君のライフエナジー、もらっつよ」

そんな声が後ろで聞こえた。

まさか……。

後ろを向きながら、嫌な予感がした。

ードスッ！

「やめろ、くるな、あ、ああああ！！！」

そこには、牙のようなものにライフエナジーを吸われている、若い年だと思われる青年がいた。

冷や汗が吹き出し、身体が震える。

「やめろ、この野郎！！！」

俺はファンガイアに体当たりをし、身体がガラスのようになった、青年の元へと言った。

「おい、しっかりしろ、大丈夫か！！！」

お願いだから、死ぬなよ！

「……キ……ミ……は……？」

青年は息も絶え絶えに喋る。

「しゃべるな、お前を助けるから！！！」

「ぼ……く……は……し……ぬ……の……？」

「っ……！」

ハッキリ言っ、こいつはもう助からない。  
俺はどう答えるべきか迷っていた。

しかし、

「……そっ……か……ぼ……く……は……し……ぬ……ん……だ……」  
「っ、そんなわけないだろ……！」

「自分……の事……ぐら……いわ……かる……よ……」

「お前はまだ生きたいだろ、だから――」

「い……い……か……ら……に……げ……て……」

青年は目を閉じた。

「……おい起しろ、死ぬぞ――」

俺は青年の顔を触ろうとした。

しかし、

パライイイイン――

青年だったものは、跡形もなく消え去った。

その瞬間、

「っ――」

――声が聞こえる。

――皆待つてろ、今助ける！

俺は、見たことの無いキバになり、皆を助けた。

そのはずなのに

後少しという所で

――パライイイイン――

「あ、アアあああ!!」

――NOW LOADING――

――三人称side

「おい、藤馬!!」  
キバットが、藤馬に呼びかける。

「ああアアあ…ハア…はあ…はあ」  
どうやら、藤馬は落ち着いたようだ。

「……大丈夫か？」  
「……おい、コウモリモドキ？」

藤馬がキバットに聞く。

「どうした、奴なら居なくなつたぞ」

「まただ、また誰かが死ぬ映像を見た、……俺は皆を救えないのか？」

「それは……」

藤馬は、夏休みに入ってから誰かが死ぬ映像を、見ることが多くなっていた。

「前にも言っただろう、お前はバカな男だと」

キバットがやれやれ、という感じで言った。

「……それじゃあ、全然答えになんねえよ」

そう言っつて、藤馬は家に帰った。

――NOW LOADING――

――藤馬side

今日から、三泊四日の合宿で、ムギの別荘に向かっているところなんだが……。

「……………はあ」

「どうしたんですか、藤馬先輩？」

「いや、ちよつと嫌な夢見てな」

「へえ、藤馬つて意外に怖がりなのか？」

ニヤニヤしながら言うな、バイオレンスカチューシャ娘。

「藤馬君、元気だして」

ムギさん、あなたが女神に見えます。

そうだな、せつかくの合宿だもんな、元気ですか！

！

――

別荘に到着！

「ムギ、此処なのか？」

と、零が半信半疑で聞く。

そりゃ、疑うよね。

だって、ホテルみたいだもん。

「おゝ、こりゃまた一段とスゲーなあ！」

と、律が言う。

「これが去年言ってた、借りれなかった別荘だね！」

「ごめんなさい、その別荘はまた駄目だったの、多少狭いと思うけど、我慢してね」

（まだ上があるのか！！）

数分後

「よし、遊ぶぞ！」

「おお！」

律と唯が、水着に着替えて、別荘から飛び出した。

先に、遊ぶのかよ……。

「うおーい！」

遊ぶのは練習してから!!」

流石、真面目キヤラシだな。

「えー、遊びたい！」

改めて思うけど、うちの軽音部って、美人が集まるよな、水着がめちやくちや似合ってるもん。

そう思いながら、唯と律を見てると、

「なあ藤馬、私たちの水着、どうだ？」

「可愛いかな、なっちゃん？」

「うん、二人ともよく似合っていると思う」二人の問いに答えると、

「「いや、それほどでも」／／／／／」

お前らは、クレヨンしんちゃんか。

「それじゃあ、多数決で決めよう」

そして、多数決の結果……。

「結局こうなるのね……」  
遊びになりました

「それじゃあ、遊ぶか！」

その後は、バレーやら、スイカ割りをして、俺は軽音部の皆と夏を満喫した。

ちなみに右手は、きっちり包帯しているから大丈夫。

――

――別荘内      スタジオ

「「「お腹すいた」」」

と、俺と唯、律の三人が悲鳴を上げるも、

「練習してからな」

漣のケチ。

「ーゴンッ!」

「お前ら、もっと、熱くなれよ!」

「藤馬、暑苦しいからそのテンションやめろ」「うっ!?! 律に言われるとは。」

「それじゃ、行くよ、」

「1、2、3、4!」

「

」

「…もうだめざます…」

マジで無理っす。

もう、お腹が空いて力がでない……。

「それじゃあ、ご飯にするか」

この鬼軍曹め……、やっと、ご飯がたべれる……。すると漣は、

「準備は、藤馬にお願いするよ」

……へっ?

「え、マジで、ありがとう藤馬!」

「藤馬君、頑張つてね」

「なっちゃん、全部するなんて、男前」

「わ、私は手伝いますよ!」

くそう、梓しか味方が居ないよ!

「わかった、殺つてやらああ!」

「先輩、字が違います」おだまりっ!

その時の俺は、チェックメイトフォーを倒せるぐらいの気迫があったとか。

↓

――三十分後

「スゴいな、三十分で準備したぞ」

「なっちゃん、料理上手いんだね!」

返事がない、まるで燃え尽きた火のようだ。

「藤馬先輩、燃え尽きたら駄目ですよ!」

大丈夫だ、問題ない。

俺は、最後の気力を振り絞り、バーベキューを開始した。

↓その時の一部始終↓

「あゝ、それ、私が焼いた肉だよ、なっちゃん!？」

「食事にルールもくそも無いだろう、小娘？」

「藤馬が遂に、壊れたー!!」

「ほう、ならこれを……いただくぞ！」

「律先輩も!？」

「会いたかった、会いたかったぞ、鶏肉!!」

「なんだか、いつもより賑やかな」

「食事ぐらいまともにしろおお!!」

「

――

「肝試しをしよう！」

「お」

まあ、よく出るよな、そんなポンポンとしたいことが。

「やっぱり、夏で合宿といえば、肝試しだね！」

律が、そう力説する。

「私はやらないぞ」

「あはゝ、そっか、澪は怖いのが苦手だもんね」

律のそんな挑発に、

「ぜんっぜんよ、やってやろうじゃない！」

漣って、怖いのが苦手なんだな。

ここで、言っておこう。私こと中都藤馬、怖いのが苦手なんです、辞退しようと思ったのですが、

漣が、

「なあ、藤馬……一緒に肝試ししてくれないか？」

と、涙目で言ってきました。

――

――森の中

というわけで、漣と手を繋いで歩いていきます。

それにしても、

「こ、高校生にもなって、肝試しはないよな……あはは」

――ギリギリリ、ギリ――

「あのさ、手が万力に掛けられているんですけど？」

漣さん、勘弁して。

――ガサツガサガサ――

「ビクッ――」

「な、何だ今の!?」

「き、き、きつと、り、り、り、律の仕業だよ」

そう言つて、懐中電灯で後ろを照らす。  
すると、帽子を被つた女性が、

――ああ、あああ、漑ちゃん!!

「イヤアアアア!!」

「うおおお!!?」

漑の顔の方が怖いわ!

つて、うん?

「……さわつちじゃん!」

その正体は、ボロボロのさわつちだった。

「うう、ようやく会えた……」

「あれ、さわちゃん先生!

どうしたの、ていうか何で居るの?」

と、後ろから来た、唯、ムギの二人。

すると、さわつちが

「後から、合流しようとして、皆を驚かそうと思つただけど、道に迷つて……」

驚かせようというのは、成功したみたいだけど……。

漣が屍みたいになっているし。

「あれ、梓は居ないのか？」

と二人に質問すると、

「そういえば居ないね、あずにゃん」「確かに、最初は居たのにね」

もしかして……。

「遭難し……っ!!」

この感じ、この前のファンガイアだ!!

「ちょっと、梓を探してくる!!」

「え、私達も探すよ!」

ファンガイアの事に皆を巻き込めねえ!

「一人で探した方が、良いから皆は先に戻つて!」

そう言って、ファンガイアがいる方角へ向かって走った。

――

――

(コウモリモドキ、早く来いよ!)

そう思った直後、

「藤馬先輩、藤馬先輩ですか!？」

目が赤くなっている梓が居た。

「梓、大丈夫か!？」

「大丈夫で……す……う、う、うわああん、怖かったよおお!」  
そう言って、梓は抱きついてきた。

怖いよな、そりゃ一人で森のなかにいたら……。

「取りあえず、梓が無事で良かった、本当に良かった……」  
すると梓が、

「とう……ま……せんぱい……ぐすっ……、もう少し……このままで……いて  
ください」

はあ、断れる訳ないよな。

「……了解」

そう考えていたら、

（おい藤馬、ファンガイアの反応が消えたぞ!）

と、コウモリモドキがあり得ないことを言ってきた。

（……本当だな。

どういうことだ、コウモリモドキ？）

（わからん、私達以外に倒されたのか、ライフエナジーをもう吸いとったか、取りあえず別荘に戻るぞ）

「あの…藤馬先輩、そろそろ大丈夫です／＼／＼／」梓が顔を真っ赤にさせながら言う。

「あ、ゴメン、ゴメン」

そう言っ、離れると梓は残念そうな顔をした。

どっちなの、この子。

「それじゃあ、帰るか」

「あ、あの……」

梓が、さっきより顔を赤くさせながら、

「……手を繋いで下さい／＼／」

なんか、手のかかる妹みたいだな。

「はいよ、しっかり握っとけ」

梓と手を繋いで、一緒に森から出た。

！

――森の中

藤馬達が、いなくなった直後、それに合わせたように、フードを着た女が現れた。

「全く、あずにゃんが此処に迷い込んでくるとは思わなかったなあ」  
歩きながら、フードの女は、そう呟く。

すると後ろから、ヒトデを彷彿とさせたファンガイア、シースターファンガイアが現れた。

「貴様、どういっつもりだ、人間を襲うなと言ったが？」

「そのままの意味だよ、あずにゃんには死んでほしくないんだよね。なっちゃんも私が好きだから、かな」

フードの女は、嬉しそうに言った。

「なっ、ファンガイアが人間に恋をするなんて、タブーだぞ、わかっているのか!？」

シースターファンガイアが、驚く。

「うん、そんなのわかっているよ」

「なら、どうしてだ!」

「そりゃ、私が」

クイーンだからね」

「なっ、ク、クイーンだと!!」

「さてと、君にはこの後、なっちゃんを襲ってもらいたいんだ」

「……あの男を?」

「うん、それじゃよろしくね」

シースターファンガイアは、そのまま姿を消した。

すると、

「ふう、今頃なにしてるかな」

そう言ったクイーンは、悲しそうな顔をしていた。

「キミの声が、聞きたいよ、なっちゃん……」

I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 第十三幕 合宿 前編！！（後書き）

どうでしたか？

「最後の奴の正体、バレバレじゃね？」

それは、気にするな！

「ていうか、プロット作った方が、やっぱり良いんじゃないの？」

代々のあらすじは、頭の中にあるから  
大丈夫だよ。

藤馬「んじゃ、しめるぞ」

全員「次回をお楽しみに！！」

第一樂章 第十四幕 合宿 後編！！

――藤馬side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、梓と手を繋いだまま、一緒に肝試しから帰ってきたところです。

「アイツら、今、何してるかな」

「私達の事、待っててくれてるんでしょうか？」

「待つてるだろ、皆お前の事を心配してたからな」

すると、梓は嬉しそうに、はにかんだ。

「ただいま、梓を連れて帰ったぞー！」

玄関のドアを開けながら、俺は言った。

「お、帰ってきたk……何やってんだ、お前ら？」  
と、明らかに不機嫌そうに律が言う。

「あらあら、藤馬君？」

梓ちゃんと何で手を繋いでるの？」

ムギさん、何だか怖いんです。

梓と手を繋いだままだった！

「う、ごめんな、梓」

「い、いや、別に大丈夫です、私が頼んだ事ですし／＼／」

梓が、顔を赤らめながら言う。

「むう、あずにゃん、なつちゃんのこと好きなの？」

唯が、不満気に顔を膨らませながら、言う。

「い、いや、そ、そう言うわけじゃないんですけど……ゴニョゴニョ」

何か梓が言ってるけど、まあいいか……。

って、零も顔赤いな、おい。

「おい、漣どうしたんだ？」

「へっ？い、いや別に、何でもにゃん！」

ぐはっ！！  
(吐血)

「ネコ……喋り……だと、梓の特権だと思っていたぜ……ゴハッ……！」

「別に、私の特権じゃないんですけど」

「なっちゃん、しっかりしてよ、なっちゃん!」  
唯が、ノリに乗ってくる。

「ぐっ、…な、なんじゃこりやあ!」  
手に付いた血を見ながら叫んだ。

「うるさいわ、この変態が!」

「ードグオツ!」

「おぶっ!」

律が、俺の顔に久しぶりに、黄金の左フックをぶちこんだ。

「さてと、何で梓と手を繋いだのか、教えてもらっぜ、藤馬?」

「いや、律さんや、別に深い事情があるわけど」  
「あらあら」  
「……へっ?」

ムギの方を見ると、

「藤馬君、私も知りたいわ」  
顔に手を当てて、負のオーラを身に纏う、ムギさんがいました。

あれ、死亡フラグの匂いが、プンプンするぜい?

「ちよっ、律さん、人の話を聞いて、ムギさん、右手はそっちに曲がらないでs……痛ったアアア!」  
唯さん、何で左手も曲げyoア  
オツ!」

――バキッ、ボキボキボキ！！

――

――

一時間後

ま、まさか、ゴリさんより強い奴らが居るとはな……。

今現在、女性陣は風呂でございます。

俺は、一人でぼうつとしています。

「誰に言ってるんだ、お前は？」

あ、すまん、コウモリモドキの事忘れてたわ。

「はあ、お前、やはり元気がいつもより無いな」

「そりゃ、あんな事が有ったんだ、元気も出ねえよ」

あいつを救えなかった時から、俺は、誰も救えないんじゃないか、  
思っていた。

たった一人。

そのたった一人を、救えなかった自分が最低野郎なんだ、と。

「おい、藤馬、アンポンタンだなお前は」

コウモリモドキが、やれやれといった感じで言う。

「……何だと？」

「誰かを救えなかった、だからといってお前は立ち止まるのか？」

……。

「……私の知っているお前は、出来る限りの人間全てを、救おうと戦い続けた。

どんなに身体がボロボロになっても、救えなかった人達が居た。

でも、救えなかった人達の為にも、残りの皆すべてを救おうと、涙をいつも堪えて、戦い続けた。それがお前、バカな男、中都藤馬だ」

「……俺は、そんな大層な人間じゃねえよ……」

只の最低野郎だ……。

——きゃああああああああああ！！！！

な、何だ今の！？

「大浴場の方からだったな」

もしかしたら、ファンガイアか！

「ちょっと、行ってくる！！」

「あ、おい藤馬！」

俺はそう言っ、リビングから出る。

えつと、大浴場は……確か此処だ！

そして、大浴場のドアを開けた。

ーガラッ！！

「どうしたんだ、皆！？」

「……へっ？」

あれ、ちよつと待てよ、今の状況は…。

ー女子が入っている風呂に、男が入ってくるー

「なななな、み、みるな！」

律が桶を投げてくる、それと同時に皆から桶が、俺へと投げ込まれる。

「うおっ、危なっ！」

俺はなんとかして、投げられてくる桶達を避けながら逃げる。

これは、久し振りの……。

「あゝもつつ、不幸dっきやふっ！」

せめて、最後まで言わせてください……。

ちなみに、さっきの悲鳴は、梓が日焼けした所を、湯船につけたか

らしい。

はっはっはっ、なんたる不幸……。

↓

――

今は、外で寝られる場所を探している。  
え、何でかと言うと律が、

「信用出来ないから、外で寝ろよ、藤馬」  
という感じに言われまして、うなずいちゃった、てへっ。

今日はここで、寝るかな。

その前に、一曲弾いて、心を落ち着かせるか。

「よし、ここで弾こう」

俺はヴァイオリンを取り出し、ゆっくりと弾きだした。

↓演奏      ふわふわ時間      ヴァイオリンver↓

俺は、何をやっているんだろうな。

もしかして怖いのかな、目の前で誰かが死ぬのが。

そして、目の前で死ぬのが、軽音部の皆になるのが、何より怖いん

だろうな。

軽音部の皆は、記憶の無い俺にとって、なによりも大事な居場所なんだ……。

俺は、悩みをかき消すようにヴァイオリンを弾き続けた。

↓

――

――ザッザッザッ

どうやら、だれかコッチに来たようだ。  
俺が後ろをみると、

「……唯と梓か、どうしたんだ、こんな時間に？」唯と梓の二人だった。

すると唯が、

「なっちゃん、何かあったの？」

こいつ、エスパーかよ。

「何でそう思うんだ？」

「それは、藤馬先輩の音楽を聞くと、悲しい感じがしたので」

と梓が答えた。

スゴいな、この二人は。

「まあな、実はさー」

俺は、二人にキバと怪人の事は、伏せて話した。

一人で抱え込む、なんていう主人公みたいな事は、俺には出来なかった。

早く誰かに話して、楽になりたかった。

「ーていう事があつたんだ。俺って、最低な野郎だよな」と、自嘲気味に笑って話し終えた。

すると唯と梓が、

「ーとない」

ボロボロと泣きながら、

「「そんなことないよ（です）！！」」

否定した。

――NOW LOADING――

――唯side

「そんなことないよ!!」

私はなつちゃんの最後の言葉を否定した。  
涙を、ボロボロと出しながら。

なつちゃんに、こんな顔見られたくないし、何でこんなに自分が、  
泣いているのかわからないけど、

「なつちゃんは、その人を助けようとしたんでしょ。」

それに、なつちゃんは優しいから、最低野郎なんかじゃないよ!」

すると、あずにゃんも泣きながら、

「そうですよ、藤馬先輩は今日、私を助けてくれました!」

お願いだから……。

「もう、そんな顔しないでよ……、なつちゃん」

「唯、梓……」

なつちゃんが呟く。

「それに、今日風呂場に来たのだって、助けようと思ったからだよね?」

「え、あ、うん、そうだぜい!？」と、なっちゃんは誤魔化した。

あれ、何か怪しいなあ。

「本当に、助けに来たんですよね？」

あずにゃんも怪しく思ったらしく、なっちゃんに聞く。

「あ、当たり前だろ、何言っただ、それと……」  
なっちゃんがそう言っ、私とあずにゃんの頭を撫でてくれた。

「ありがとう、本当に、凄く楽になったよ……」  
と、笑顔で言ってくれた。

良かった、なっちゃんが元気になって……。

「じゃあ、私達は戻ろうか、あずにゃん」

「あ、そうですね」

その後、二人で別荘に戻りました。

――NOW LOADING――

――三人称 side

「さて、そろそろ出てきたらどうだ、ファンガイア？」

別荘とは、逆方向を向いて言う藤馬。

その直後、

「ふん、バレていたか」

シースターファンガイアが現れた。

「気配が丸出しだからな、コウモリモドキ!!」

そう言って、キバットを呼び、掴む藤馬。

「ああ、ガブリ!!」

「っ!!」

キバットを右手の甲に噛ませ、全身に《魔皇力》を流す。

そして、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」

そう言つて、シースターファンガイアへと向かい、拳を放つキバ。

シースターファンガイアは、それをガードしつつ、流れるように電気を放った。

キバはそれを避けて一旦距離をとる。

「ちっ！

こちらら、明日も朝が早いんだ。

一気にいかせてもらう！」

そう言つて、フエッスルを三本抜き取る。

「おい、藤馬！

今のお前じゃ、三本は無理だ、二分しか持たないぞ！」  
キバットが忠告する。

「はっ、じゃあ二分で片付けりゃいい話だ！」

キバは、攻撃を避けながら、そう言つ。

「ふっ、なら片付けてみせろ！」

キバは、まずガルルフエッスルを、

「《ガルルセイバー！！》」

そして、バツシャーフエッスル、

「《バツシャーマグナム！！》」

最後にドツガフェッスルを、

「《ドツガハンマー！！》」

キバットに吹かせた。

すると、三体の彫像はキバの元へいき、身体に吸い込まれる。

ガルルは左手に。

バツシャーは右手に。

ドツガは胴体に。

その瞬間、拘束具<sup>カタナ</sup>が巻かれ、弾けとぶ。

胸はドツガブレスト、左手はガルルアーム、右手はバツシャーアームへと変質する。

キバは、ドガバキフォーム（以降、DGBキバ）へと姿を変えた。

「はあっ！！」

DGBキバは、ガルルのスピードで近づき、  
バツシャーの疑似水中環境<sup>アクアフィールド</sup>で身動きを取れなくして、

「ふんっ！！」

ーズバツ、ズバツ！！

「ぐっ!!」

ドッガのパワーで、左手のガルルセイバーでまず斬りかかり、  
右手のドッガハンマーで、

ードゴンッ!!

「ゴフッ!」

思いつきり、シースターファンガイアをブツ飛ばした。

「ぐっ、…く…そ…人間…が」

息も絶え絶えなシースターファンガイア。

「これで終わりだ!」

そう言つて、DGBキバはウェイクアップフェッスルを、キバット  
に吹かせた。

「《ウェイクアップ!!》」

「はあああ……!!」

精神を統一させ、右足を振り上げる。

すると、右足の拘束具が解放され、蝙蝠を象った扉が飛び出す。  
そして、片足だけで飛んで、そのままファンガイア目掛けて蹴りを  
放つ!!

「だりやああああ!!」

《ダークネスムーンブレイク!!》

ドスッ!!バゴオオオオン!!!

シースターファンガイアを中心に、キバの紋章が砂浜に刻まれ、

パリイイイイイン!!

シースターファンガイアは、消え去った。

――NOW LOADING――

――藤馬side

あの怪人を倒した後、コウモリモドキと空をみていた。

「……藤馬」

何だよ、急にしおらしくなって、気持ち悪いな。

「だまれ、……迷いは無くなったか？」

そうだな……。

「まだあるさ。」

俺はこんなとき、どんな風にすれば良いかわからない。

でも、前に進むぐらいの事はしないといけないんだよ。

そうじゃないと、また被害が出ちゃうんし、唯達には泣いてほしくないしな。

だから、力を貸せよコウモリモドキ」

すると、コウモリモドキは、

「ああ、やはりお前はこうでなくてはな、藤馬」  
ははっ、改めてよろしくな、相棒。

その時、みた夜空は俺の心のように、すみわたっていた。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 第十四幕 合宿 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「おい作者、さっさとストック増やせ、あと一つしかねえぞ」

わぁってるわい！

それでは、

全員「次回をお楽しみに！！」

## 小休止 ラスボス（宿題）！！

――藤馬 side

あ、どうも私こと中都藤馬です。

今日は、夏休み最後の日で、現在午前九時三十分です。

そして、俺は……。

「こんな量の宿題、終わるかああアア！！」

「叫んでいる暇があったらやれ、…全く」

「はあ、チャチャッとやるぞ……」

「お兄ちゃん、早く終わらせようよ……」

夏休みの宿題、というラスボスと戦っている所です。

皆さんの予想通り、私こと中都藤馬、宿題を全くと言っていいほど、やっておりません。

というわけでラモン、次狼、コウモリモドキに手伝って貰っています。

あ、リキは宿題出来ないの……。

「後、何があるんだっけ、コウモリモドキ？」

すると、コウモリモドキは、課題の内容が書いてあるプリントを読み始めた。

「英数国の問題集一冊ずつ、読書感想文四枚半、一言日記一ヶ月分、後は、」「ごめんなさい、俺が悪かった」……はあ」

「もう終わんねえだろ、これ」

そう言つて、ソファーに座る俺。

「おい藤馬、何をだらけてるんだ、さつさとやるぞ」  
と、次狼が数学の問題集を片手にそう言つた。

よくやれるな、次狼さんよ。

「ふつ、前の時と比べればな……」

「そうだね、あのときは桁違いだったもん」

何か、悟りを開いてるな……ラモンと次狼。

「コウモリモドキ、何があつたんだ、前に？」  
と、俺が聞く。

「ああ、それはな、お前が記憶を失う前の話なんだが、今の倍ほどの宿題をやったよ……ブルブル」  
と、コウモリモドキは震えながら言つた。

お前らスペシャリストだったんだな……。

「……俺も頑張ろう」

それから、国語の問題集を解き始めた。

↓

――

――三時間後　午後十二時三十分

「あ、後は、な、何が残ってるんだ？」

国語の問題集を解きながら、次狼達に聞く。

「そうだな、後は読書感想文と一言日記、そして今、お前の解いている国語の問題集だ」

へっ？

「早すぎだろ、終わるの!？」

「お兄ちゃんが遅いだけだよ。それに、そろそろご飯にしようよ……」

ラモン君、ひどくね？

すると、次狼が

「おい藤馬、お前が作れよ、昼飯」

何ですと、飯にも俺が主人なんですけど!？

「お兄ちゃん、国語の問題集も終わって無いじゃん、本当に遅すぎだよ……」

「ラモンたちのスピードが異常なだけだろ！」

って、あれ？

「コウモリモドキは？」

いつもだったら、真っ先に弄ってくるのに、どうしたんだ？

「ああ、キバットなら……」

と言って、次狼が冷蔵庫を指差す。

オイオイ、マジかよ……。

俺はキッチンまで歩き、

ーガラッ

冷蔵庫を開けた。

すると、俺の目に飛び込んできたのは、

「ふう、やはりトマトジュースは、ドロドロしたものが高だな」  
満足そうな顔をして、トマトジュースを飲む、コウモリモドキだった。

「おい、クソコウモリモドキ？」

俺は、かなりイライラしながら聞く。

「うん、何だ藤馬、今忙しいんだが？」

「幸せそうに言うな、この野郎。潰すぞ？」

次狼とラモンが、頑張ってくれてるのに、こいつはなんなんだよ！

「まあ良いや、ご飯作るか。リクエストあるか、お前ら？」

そう次狼達に聞くと、

「「「別に何でもいい」」」

こ・い・つ・らアアアアア！！

「てめえら、今、全国のお母さんを敵にまわしたぞ、何でも良いつつのが一番困るんだからな！！」

俺は思いつきり、そうシャウトした。

毎日毎日、メニューを考える、俺の身にもなってください。

そう思いながら、昼飯の調理に取りかかった。

↓

――二時間後      ↓午後二時三十分

「「「おお、お見事！」」」

どうだ、今回の昼飯はそうめん、天ぷらだ、この野郎！

というわけで、皆でしっかりと頂きました。

「ふう、食ったな」

そうだな、次狼。

「じゃあ、僕達はそろそろキャッスルドランに戻るね」

「へっ、何で？」

もうちょい居れば良いのに、片付けながらそう思っていた。

「後の宿題は自分でやれよ、それじゃあな」  
そう言って、次狼達は俺の家から出た。

「アイツらには、今度お礼しなきゃな」

さて、後は……って、あれ？

ふと見た、次狼達がやってくれたはずの問題集。

だが、見てみると空白がかなり多く、結果的に半分も終わっていない。

ここで、思い返してみよう。

残りの宿題は、読書感想文、一言日記と次狼は言っていた。

でも、英語と数学の問題集は、半分も終わっていない。

つまり、本当に居なくなつた理由は、

「わからなくて逃げだしやがつた、アイツらああああ!!」

すると、コウモリモドキが、

「それはアイツら、勉強は全くしてないからな」と、言ってきました。

「それを早く言えよ、コウモリモドキ!!」

ああもう、後少しだと思つたのに……。

――NOW LOADING――

――

――

――翌日 学校

「お、おはようございます……」

俺は、この世の終わりのような顔をして教室に入った。

「おつ、おはよう藤馬、って、どうした宿題が終わんなかったとか？」

律がニヤニヤしながら聞いてくる。

「はは、そうだよ、そうです、そうですよー!!」

「なんで、三段活用？」

ははは、最高にハイって奴だ!!

周りの皆が心配そうな目で見てくる。

そりゃもう、こんな朝から、ハイテンションな奴が居たらひくよね。

「だったら、今やれば良いじゃん」

「なっちゃん、大丈夫？」

「藤馬君、朝からハイテンションね」

約三名は違うようだ。

お前ら、最高です。

「そうだよな、今やれば良いじゃん、よし、やってやるぜ！」

「よし、その意気だ藤馬！」

「頑張つて、なっちゃん！」

「わからないところが有ったら、聞いてね」

じゃあ、まず何からでしょうか、読書感想文からやってみますか！

――ガラッ！！

――

――

「「「「へっ？」「」「」

「はい、みなさん席について〜！

あれ、中都君はどうしたの、ぼうつとして？」

先生、空気を読もうぜい……。

その後、ゴリさんの今学期初めての、鬼ごっこになったのは言うまでもない。

It to be continued?

小休止 ラスボス（宿題）！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「し、宿題が終わらない……」

ざまあ

藤馬「くそう。

そつえば、次から二話ぐらいシリアスなんだよな？」

ああ、新しいライダー登場だ、直ぐに消えるけど……。

藤馬「……（「。。」）」

それでは、次回をお楽しみに！！

**第一楽章 第十五幕 蜘蛛のライダー？ 前編！！（前書き）**

どうも388859です。

今、初めてのスランプ中です。

それを、考慮して第一楽章 第十五幕をお楽しみください！

第一楽章 第十五幕 蜘蛛のライダー？ 前編！！

――藤馬 side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

二学期に入り、文化祭まで残り一ヶ月とちょいなので、練習には気合いが入っている！……わけもなく、毎日お茶してるが、皆、学園祭を成功させるというのは同じだ。

それで今は、

（コウモリモドキ、後、どれぐらいだ？）

（そのの……ただ、またファンガイアと、何かが消えたぞ）

ファンガイアを倒そうと思ったんだが、居なくなったみたいだ。

「最近、いきなりいなくなるのが、多くねえか？」

と思わず声を出す。

二学期に入ってから、ファンガイア等の怪人と、それとは違う何か  
が、急に消える事が多くなった。

原因がわからなくて、かなりイライラする。

（何が起きてるんだ……？）

とりあえず、家に帰ることにした。

┆

┆┆

┆┆┆翌日 放課後 部室

「なあ、藤馬はあの噂、知っているか？」  
律が、チョコケーキを食べながら聞く。

「噂って、最近何かあったっけ？」  
漣に恋人が出来たとか、かな？

「ーゴツンッ！！」

「……そんなのあるわけないだろ！」  
漣さん、顔赤いな、もしかして「もう一発いるか、藤馬」すいませ  
んでした。

「それで、噂って何なんだ、律？」

紅茶を口に含み、某ハードボイルドのように聞く。  
しかし、その噂は俺の予想をかなり越えていた。

「それがさ、

仮面ライダーだよ、仮面ライダー！！」

「ぼふっ!!」

俺は、口に含んでいた紅茶を、思いっきり吹き出した。

「ちょ、ちよつと先輩、紅茶を吐かないでくださいよ!」  
す、すまん、梓。

「ごほつ、ごほつ、……それで、続きは?」

「藤馬も見た怪人達を、倒してまわってる奴がいるらしくてさ。  
それが、テレビに出ている仮面ライダーの姿をしているって、最近、噂になっているぜ」

やべえよな、それって……。

「ふ、ふーん、その仮面ライダーってどんな姿なんだ?」

「確か、蜘蛛みたいな奴で、名前はレンゲルだったはず」

……へっ、キバじゃないの?

俺がそんな風に思っていると、

「ええ、りつちゃんそれは違うよ!私は、クワガタみたいな格好の、  
ギャレンって聞いたよ!」

唯が私こそ正しい、みたいに言う。

情報が交錯してるな。

「ムギ達は、何か聞いてない?」  
と、聞いてみる。

すると、

「私はそういうのは、あまり聞かないの。……ごめんなさい」  
ムギさん、何かこちらがすいません。

「私は律の言った事しか、知らないけど」

「私は唯先輩と同じです」

俺以外にライダーがいるってことだよな……。

「なあ、藤馬は何か知らないか？」  
と、律が質問する。

「へっ？……俺は何も知らないけど」

考え事してたから、全く聞いてなかったな。

「って、そんなことより、練習しましょうよ！」  
梓が、握りこぶしを作り言う。

「そうだな、練習するか！」  
漣が嬉しそうに言う。

「ええ、もうちょいお茶しようよ」「」

律と唯は、いつもお茶してるよな。

まあ、そんなこと言いつつも、準備をする二人。

俺も、ヴァイオリンを取り出し、いざ練習！

「それじゃ行くよ、  
1・2・3・4!!」

1

11

|||

――ジャーン！！！！

「今の、かなり良かったな！」

「うんうん」

「！！！！」

この感じ、今までの怪人とは違う……！

とりあえず、行かなきゃ！

「ゴメン、用事だから、また明日！」

荷物を持っていて、桜高から出る。

（コウモリモドキ、今回は何だ？）

(ふむ、今回は……不味いな、アンデッドだ)

（アンデッド？それって何の怪人なんだよ）

（生物の始祖で不死の生命体だ、ハッキリ言って、お前じゃ倒せない）

（はぁ！？じゃあ、どうするんだよ！）

（さっきの、小娘の話が本当ならば、勝てるのだが……）

（何だかわかんねえけど、足止めだけでもしないと！）

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは商店街、様々な人で賑わっている。

しかしそこに、

「ウウウ……」

と、怪人、ライオンアンデッドが姿を現した。

そして、ライオンアンデッドは近くにいた人を襲い始めた。

「うわっ、誰か助けてくれ！」

襲われた男が、助けを求めるものの、人が誰もいない。

その時、

「だりやあああ！」

藤馬が、飛び蹴りをして現れた。

「……グアッ！」

飛び蹴りで、ライオンアンデッドから、男を離す事が出来た。

「き、君は「逃げてください、早く！」……は、ハイッ！」

男が一目散に逃げるのを見て、ライオンアンデッドが、男を追いかけようとする。

しかし、藤馬がライオンアンデッドを羽交い締めにするが、逆に投げ飛ばされた。

藤馬は、地面を転がりつつ、キバットを呼ぶ。

「ちっ、コウモリモドキ！」

「あくまで、足止めにしておけよ」

「わぁってる！」

「行くぞ、ガブリ!!」

「っ!!」

藤馬は右手をキバットに噛ませ、《魔皇力》を全身に流す。

その瞬間、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」

そう言っつて、キバはライオンアンデッドへ拳を放つ。

それに、ライオンアンデッドは、手にはめてあるメリケンサックで対抗する。

拳と拳がぶつかり合い、勝ったのは、

「くっ、思ったより力強いな、けど!!」

「ードゴッ!!」

「ワウッ!!」

キバだった。

この数ヶ月間、色々な怪人を相手したキバに、ただ腕力が強いライ

オンアンデッドが勝てる道理はない。

そのまま、ライオンアンデッドに蹴りを放ち、投げ飛ばす。

「あれ、何だかあっさりだけど……」

そう言っつて、ウェイクアップフェッスルをキバットに吹かせた。

「《ウェイクアップ!!》」

すると、周りの景色が夜へと変わり、三日月が出てくる。

「はあああああ!!」

右足の拘束具<sup>カタナ</sup>を解放し、蝙蝠を象った扉<sup>ヘルズゲート</sup>が飛び出す。

そして、片足で一気に頭上へ飛び上がり、ライオンアンデッドへ蹴りを放つ!!

「どうおりやあああ!!」

《ダークネスムーンブレイク!!》

ドスッ!! バゴオオオオオン!!!

ライオンアンデッドの身体を中心に、キバの紋章が道に刻まれる。  
そして、

ーードゴオオオオオン!!

ライオンアンデッドは爆発した。

「何か、拍子抜けだったな……」

キバは、思わずそう漏らし、変身を解いた。

その瞬間、

ーバキッ！！

「ごはっ！！」

藤馬が何かに、顔を殴られる。

「藤馬、油断するなといつも言っているだろう！」  
キバットが怒りながら言う。

「ちくしょう、一体何に殴られたんだ……！？」

藤馬は自分を殴った正体を見て、絶句した。

なぜなら、さっき倒したはずのライオンアンデッドが、ピンピンしているからだ。

「な、何で……？」

藤馬がそう呟いた瞬間、ライオンアンデッドは藤馬の間合いに入り、メリケンサックを腹に食い込ませた。

「かつ……はっ……！」

五メートルほどぶつとばされ、地面を転がる藤馬。

生身の人間に、怪人の全力の拳がめり込んだということもあって、立ち上がれない。

「おい、しつかりしろ！」

キバットが藤馬を鼓舞するが、それでも立ち上がれない。

ライオンアンデッドが、藤馬へゆっくりと近づく。

「ぐ、くそ……」

そして、ライオンアンデッドが、藤馬に拳を振りおろす……

「ガキッ！！」

されず、ロッドのようなものに防がれた。

ロッドの持ち主は、そのままライオンアンデッドをロッドで殴り、投げ飛ばす。

「ふんっ！！」

藤馬が、よくロッドの持ち主を見ると、基本カラーは緑、外見は蜘蛛のようになっていて、複眼は紫、それはまるで……。

「まさか、俺以外の仮面ライダー……？」

と、仮面ライダー？に聞く。

すると、

「そう、俺は仮面ライダーレンゲル。

全ての怪人を倒し、

お前を倒す男だ!!」

と、レンゲルは藤馬に宣言した。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 第十六幕 蜘蛛のライダー？ 後編！！

ー三人称side

「……はい？」

と、藤馬は間抜けな声を出す。

それも仕方無いだろう、味方だと思った仮面ライダーに倒すと言われたのだから。

レンゲルは、ラウズカードを二枚取りだし、杖、レンゲルラウザーにスラッシュする。

「《BLIZZARD・SCREW》」

スラッシュしたカードの絵柄が、レンゲルの体へと吸い込まれ、そしてライオンアンデッドへと、冷気を纏ったコークスクリューを放つ！！

《BLIZZARDGAYLE！！》

ドゴツ、パキイイン！！

ライオンアンデッドの身体が凍りつき、腰のベルトが展開する。

レンゲルはラウズカードを、ライオンアンデッドへと投げる。すると、

ーシュウウウウ……

ライオンアンデッドの身体がラウズカードに吸い込まれ、ラウズカードはレンゲルの手へと戻った。

「スピードスートのラウズカード……か」

レンゲルがそう呟く。

「てめえ……何しやがった？」

藤馬が立ち上がりながら、レンゲルに聞く。

「ああん？封印に決まってるだろ」

「封印ってそのカードにか？」

「はあ？今更なに言ってるんだ、お前もライダーだろうが、中都藤馬よお」

その瞬間、藤馬の顔が曇る。

「何で、俺を知ってるんだ……？」

藤馬はライダーである事以外は只の学生だ。つまり、ほぼ一般人。よって知っている人間は少ないはずなのだが……。

「お前は転生者だろ」

「っ！、そんなことまで知ってるのか……」

「もしかしてお前、自分の置かれている状況さえわかってねえのか？」

「何か知っているか、コウモリモドキ？」

「いや、私も知らないな」

藤馬とキバットが答える。

「はあ、一から説明しといてやる、事情も知らない野郎を、攻撃する趣味は無いんでね……」

――NOW LOADING――

――藤馬side

あのレンゲルつつつ野郎の話を簡単にすると、こういう感じ。

レンゲルは元々普通の人間で、神を名乗る男から俺を殺せば、元の世界へ帰してもらえるらしい。

そして、レンゲルが一度でも倒されればレンゲルは消滅し、代わりに新しいライダーが送られるらしい。

「それで、俺を殺すって言ったわけか」

成る程な……。

「それじゃあ三日後、ここに来て俺と戦え」

「ま、待てって、アンタと戦う気はないんだ！」

藤馬がそう言った直後、

――ジャキツ！

「残念ながら、コッチにはあるんでな」

首元にレンゲルラウザーが押し当てられる。

くそっ！どうすりゃ良いんだよ……。

「……それじゃあな」

そう言って、レンゲルは去っていた。

――

――三日後      部室

「はあゝ」

お茶を飲み、ため息をつく。

どうすっかな、本当に。

人を守るためにライダーになった、ほぼ成り行きで。

でも、なって良かったと思う。俺の手が届くことが出来たから。

「……い、……馬！」

レンゲルは俺のせいで、ライダーになった。俺が居なけりゃ元の世界で幸せになってただろうに……。

「……馬、藤馬……！」

「おわっ……！」

目の前に澪さんの顔がありました。

び、びつくりした。

「な、何、澪？」

「練習するぞ、練習！」

「へっ？」

周りを見ると、皆が心配そうに俺をみていた。

「藤馬君何があつたの、最近ぼうつとしてないかしら？」

「そうだぞ、お前最近変だぞ？」

と、律とムギが言ってくる。

「そ、そんなことあるわけ無いぜい！」と、笑いながら言うが、

「なっちゃん、顔ひきつつてるよ……」

「先輩って、嘘つくのヘタですよね」

ぐっ！！てめえら、俺が気にしている事を……。

「気にしないで良い！

……それで何が有ったんだ？」

「うん。鬼軍曹（ボソツ」

ーゴソツ！！

「サーセンしたああ！！」

「全く……私達は仲間だろ」

「っ！！」

「そうそう。

部長のあたしに、なんでも相談したいこと言ってみろよ」

「りっちゃん、部長は関係ないと思う」

「そうですよ、真面目に考えてください！」

お前ら……。

「藤馬君、あなたの悩みが何なのかわからないけど、話を聞くぐらいだったら出来ると思うの……」

ムギが、俺の手を握って天使のような笑みで言う。

全く幸せものだな、俺。

「みんなあー」だから……」へっ？」

ムギがちよつと顔を赤らめながら、

「その、

……R指定のもので、ドンと来てね!!」

部室の空気が、氷河期に突入した。

――ガシッ、グリッ!!

律のヘッドロックが、俺に炸裂した。

「オウッ!!」

俺よ、ついに（社会的にも、肉体的にも）死ぬときが来たな。

――ガッンッ!!

「タヒチッ!!」

そして、次に唯と梓のダブルゲンコツが頭に炸裂した。

ちなみに、澪は顔を真っ赤にして気絶してます。

「最低だな、藤馬……」

「なっちゃんのエッチ……」

「先輩、ドン引きです……」

澪とムギ以外の視線が、ゴキブリを見るような冷たさだ……。俺が、床に伏したままそう思っていた時、

「藤馬君、大丈夫？」

ムギさんや、貴方が原因なんですけど？

でも……。何か気持ちが楽になったな。

「本当にありがとうな、皆！」

「な、なっちゃんがM！」

「ち、違うわ！」

今のは気持ちが楽になったって意味だよ……」

「藤馬先輩、今のは誤解しますよ……」

梓まで、そう言うこと言わないで！

でも、コイツらがいなかったら、俺は何も出来ないんだろうな……よし！

「全く、いつも馬鹿な奴が馬鹿じゃないと、調子狂うよな」

「へえ、いつも藤馬を心配してたのは、誰だっけ？」

「零だって心配してたじゃん！」

「ふふふ、いつもの藤馬君に戻って良かった」

「っ！！」

丁度良い、行きますか！

「みんなー！」

「「「「え、何？」「」「」」

「本当にみんなありがとう、それと……」

「みんなの事、絶対に守るからー！」

「「「「っ！！／／／／」「」「」」

「それじゃあ、また明日な！」

俺は、直ぐに桜高を飛び出した。

（コウモリモドキ、アンデッドをぶっ潰すぞ！）

（ふっ、気合いが入ってるな、小娘共の事を大切に思ってるのだな……）

（はっ？何言ってるんだ、仲間なんだから当たり前だろ？）

（はぁ、あの小娘達も相変わらず大変だな……）

――NOW LOADING――

――三人称side

「これで終わりだ！」

レンゲルが、レンゲルラウザーにラウズカードをスラッシュする。

「《BLIZZARD・BYTE》」

レンゲルへ、カードが吸い込まれる。

そのまま、アンデッドへ冷気を吹き付け、足で蹴り碎く！！

「おりゃああああ！！」

《BLIZZARD CRASH！！》

バキヤアアアン！！

レンゲルは、アンデッドにラウズカードを投げ、封印した。

「ふうっ！」

レンゲルが変身を解き、二十代ぐらいの男になる。

「……見つけたー！」

そこに、アンデッドを倒しに来た、藤馬が現れた。

「へえ、お前は……わざわざ倒されに来たのか？」  
レンゲルが藤馬に聞く。

「違うな、俺は……コウモリモドキー！」  
そう言ってキバットを呼び、掴む。

「アンタを助ける！」

「はあ！？……ふざけるな！」

「行くぞ、ガブリー！」

「っー！」

藤馬は、右手をキバットに噛ませ、全身に《魔皇力》が流れる。

すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

レンゲルも、レンゲルバックルを装着し、ミスリルゲートを開く。

「《変身!!》」

「《Open Up》」

藤馬はキバ、レンゲルはもう一度変身した。

「行くぞ!」

まずレンゲルが突っ込み、拳を放つ。

その拳をキバは防御し、お返しに左フックをぶちこむ。

レンゲルは一回下がる

「俺はお前を殺すと言った!なのに、その俺を助ける……」  
そう言っつて、レンゲルラウザーを呼び出す。

「なぜだ!?!……俺には理解できない!」

そして、レンゲルラウザーをキバの腕、胴体、足、に振り回す。

「ーバシ、バシッ、……ドゴッ!!」

「……がっ!」あまりの連撃に地面を転がり、フラフラと立ち上がるキバ。

「げほっ、げほっ……俺は人を守るためにライダーになった、だから助けるんだ!」

キバは、自分を奮い立たせるように言う。

「お前に、俺の何がわかる！」

たった一回負けたら、俺は消えるんだぞ……」

たったの一回も負けは許されず、ただ戦い続ける。

「自分なら耐えられないだろうな。

キバは心の中で、そう思っていた。

レンゲルは、レンゲルラウザーからラウズカードを三枚取り出し、スラッシュする。

「《RUSH・BLIZZARD・POISON》」

ラウズカードの絵柄が吸い込まれ、レンゲルの最強の技が発動する！

「だから勝ち抜いて、皆の居る元の世界へ帰るんだ……！」

レンゲルはキバへ跳びながら、レンゲルラウザーから冷氣と猛毒が吹き出す……！

《BLIZZARD VENOM……！》

「あああああああ……！」

それに対してキバは……。

「……けんなよ」

キバ、いや藤馬は、

「ふざけんな、この馬鹿野郎オオオオ！！！！」

かなりキテいた。

「《ウェイクアップ！！》」

キバはフエツスルをキバットに吹かせ、拘束具<sup>カタナ</sup>を解放する。

「てめえが殺しなんかして、元の世界に帰ってから、幸せになんてなれるわけねえだろうが！！」

そんな事を、絶対にさせるわけには……」

キバは、ギリギリでレンゲルの攻撃を避ける。  
しかし脇腹に毒が擦り、動きが一瞬鈍くなる。

――だからどうした？

「っあああ！！！！」

身体を奮い立たせ、力を解放した右足でレンゲルラウザーに回し蹴りをぶちこむ！！

「俺が許さねえんだよおお！！！！」

《ダークネスムーンブレイク！！》

バキヤツ!!

必殺技を放ち、地面に着地する二人。

勝ったのは……。

ミシ、ミシミシミシ、カシャン!

そんな音と共に、レンゲルラウザーが壊れる。

キバだった。

「ははっ、やべえなこりゃ……」

思わずそう漏らし、変身解除しながら、地面に倒れ込む藤馬。

毒の効果が、後からきたようだ。

「おい藤馬、今回はきわどすぎるぞ!」  
キバットが治療しながら注意する。

「……おい、なぜだ?」

レンゲルも変身解除して、藤馬に質問する。

「うん、何が?」

「何がじゃない!……何故俺にとどめをささない!?」

レンゲルにしてみれば、止めを武器にされたのだ。  
疑問が出るのも無理はない。

「そんなの消えて欲しくないからに、決まってるだろ？」

「っー！」

「俺はもう、誰にも死んで欲しくない。そう思ったただけだよ……それに」

「お前を助けるって言ったしな！」

藤馬は笑顔でそう言った。

するとレンゲルは、

「はあ、何か俺が馬鹿みたいだな……」

「同情するぞ、レンゲル」

キバットと、レンゲルの間に絆が生まれたようだ。

「なんか、お前ら仲良くなってるない？」

「いや、そんなことないぞ」

「ウソつけ、息ぴったりじゃねえか！」

という感じで、コントをしていた時だった。

「っ、どうやら結局、消えるらしいな」

レンゲルがそう言った瞬間、身体が下半身から消えていく。

「おい、お前の身体……」

突然の事に、藤馬が少し混乱しながら言う。

レンゲルは、まだ誰にも負けていないのだから、消えないはず。

だが、

「どうやら、誰かが監視してたらしいな。大方、レンゲルバツクルに、カメラでも付けていたんだろ？」  
と、キバットが解説する。

「そんな……助けられる方法は？」  
藤馬がキバットに聞くも、目を伏せる。

「くそっ、ふざけるな！！コイツは絶対に「藤馬！！」……レンゲル？」

レンゲルは悔しそうな顔をしながら、藤馬を制する。

レンゲルも悔しいのだろっ。

生きたいと、心の底から思っているだろっ。

――しかし、

「良いんだ、ありがとよ」

「何で笑ってるんだ、生きたいんだろ！」  
藤馬はレンゲルの胸ぐらを掴む。

「まあ、落ち着け」

レンゲルはそう言って、藤馬を落ち着かせる。

「俺さあ、藤馬に助けてもらって良かったよ。

殺しなんかしたら幸せになれねえよな、そりゃ」

レンゲルは満ち足りた表情で、消えていく身体を見ながら言う。

「だから、本当に……」

――助けてくれて、ありがとうな。

「っ!!」

そしてレンゲルは消えた。

「あの野郎、何があったんだよ……」  
そう言って藤馬は、空を見る。

――こちらこそ、本当にありがとう。すごく救われたよ……。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 第十六幕 蜘蛛のライダー？ 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「何で、レングルをレギュラーにしなかったんだ？」

いやあ、一応けいおん！の二次創作だからね。  
敵として、出るのは良いけど、味方だとちょっとな。

藤馬「本心は？」

捌ききれません。

藤馬「やっぱり……というわけで、次回から学園祭編だな」  
ああ、お前一回フルボッコされるから。

藤馬「また、負けるの！？  
最近負けすぎじゃねえか？」

大丈夫だ、後少ししたら、パワーアップ！

藤馬「何かキモいぞ、  
それでは

全員「次回をお楽しみに！！」

第一楽章 第十七幕 学園祭 前編!!（前書き）

どうも、388859です。

最近、一万五千PVを越しました!!

何かやる気ですよね、行き詰まったけど（え

というわけで、これからよろしくお願いします。

第一樂章 第十七幕 学園祭 前編！！

――藤馬 side

――声が聞こえる。

――なっちゃん、私達を守ってくれるんだよね……。

――ああ、皆を守るよ！だから……。

――でも、もう良いんだ、藤馬が苦しむのは見てられない……。

――守るからキミを。お願いだから……。

――さようなら……。

皆が、俺を置いていく、真っ暗な暗闇に……。

――待つて、お願いだから！！

――ガバツ！！

「待つて！！」

あれ、何か明るいような？

周りを見渡してみると、クラスメートの皆が俺を見てくる。  
あつ、授業中でした！

「ほう、ボウフラはワシの授業を寝るんじゃない？」  
「ーガシッ、グリグリ……！！」

しかもゴリさんの……。

つか、頭を捻り潰す勢いじゃね？

「いやいや、そんなわけ無いじゃないスか、ゴリさん！」

「ほう、おんどれはまだワシの事を、ゴリさんとよぶんじゃのお？」

あ、やべ、つい本音が！

く鬼ごっこスタートく

ーバツ、ガラッ！！

「待たんかい、ボウフラアアア！！」  
「待てるか、捕まったらフルボッコ確定ですよ！」

「すいません、保健室行きたいんです、先生！！」

「そんな走ってる時点で、元気一杯じゃろう！！」

くっ、バレたか！

――NOW LOADING――

――梓side

あ、どうも、中野梓です。

今は、友達の憂と昼ごはんです。

「じゃあ、まだ唯先輩治らないんだ……」

「うん、あの調子だと多分また明日も……」

文化祭まであと少し。そんな時に、唯先輩は風邪をこじらせた。  
……全く、困った人だなあ。

「残り、後二日か……」

「私が代わってあげられたらな」

代わるって、どうやって？

「それは……口移しとか!!」

大胆な子……。

と思っていたら、

「ほわたああああ!!」

ー ドゴツ!!

『ビクッ!!』

な、何か聞いたことがある声、ドアを蹴破る、こんなことをするのはあの人しかない。

「あ、藤馬さん!  
どうしたんですか」

「ていうか、蹴破っちゃダメですよ、先輩!」  
なんか、ボロボロだけど……もしかして!

「また、郷田先生に追いかけてるんですか?」  
「Oh yes!  
だから、匿ってください!」

「別に土下座しなくても……」

藤馬先輩の好感度がドンドン下がっていく。

ー ガシッ!!

「ボウフラア、おんどれはまーた、ドアを蹴破ったのお、ええ?」

郷田先生が、藤馬先輩の肩に手を置く。  
何かミシミシって聞こえるけど、き、気のせいだよね！

「せ、先生。弁当が食べたーはーはい、説教の後でじゃないーちよ、頭が床で擦れてる、ゴリさん禿げるっあああああああああああ  
……」

先輩って、よく命が持つな……。

――NOW LOADING――

二時間後

――藤馬side

「や、やっと説教が終わった……」

最近、死の危険を感じるようになってきたな。

そう思った瞬間、

「「っ！――！」」

ファンガイアの気配が出た。

しかし、

……何だよこれ！？

恐怖で、身体の震えが止まらない……。

くそっ、止まれ、止まれ、止まれ、止まれよ！

足を何回か殴り付ける。

ーガッツ、ガッツ！

はぁ、はぁはぁ……。

止まった……よし！

俺は教室へと、全速力で走る。

ファンガイアのはずなのに、威圧感が段違いだ！

嫌な予感がするな……！

そう思いながら、階段を一気に登ったとき、

（藤馬、急いでこい！

今回はかなりマズイ、《チェックメイトフォー》だ！）

やっぱり、不味い奴かよ！

よし、教室だ！

――ガラッ！！

「あら、中都君。席につきなさい」「すいません！今日は早退します  
んでー！」

あ、ちよつと待ちなさい、中都君ー！」

荷物を持って、学校からフルスロットルで出る。

――

――

――三人称side

「……ゲームスタートだ！」

筋骨隆々の男がそう言って、裏通りを歩き出す。

実はこの男が、《チェックメイトフォー》の一人、ルークである。

「そこまでだ、《チェックメイトフォー》！」

走ってきた藤馬が、それに待ったをかけた。

「うん？……何だ貴様？」

ルークが藤馬に聞く。

「お前を倒しに来た！」

ちよつと間が空いて、

「ふふ、あっはっはっ！

人間のお前が、俺を倒すだと！」  
ルークが笑い出し、藤馬を見下す。

「……ナメるなよ、人間風情がアアア！！」

そう言っつて、ライオンをモチーフにしたファンガイア、ライオンファンガイアへと姿を変えた。

「コウモリモドキ！」

藤馬もキバットを呼び、掴む。

「ほう、成る程な……貴様が噂のキバか」  
ライオンファンガイアが構える。

「気を抜くなよ、ガブリ！！」  
「っ、わぁってる！！」右手をキバットに噛ませ、《魔皇力》が全身に流れる。

すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身！！！！》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

キバはそう言っつて、ライオンファンガイアとの距離を詰める。

対し、ライオンファンガイアは重戦車のようにゆっくりと進む。

「オラア！！」

先手は、キバ。

胴体に拳の連撃を放ち、一気に攻める。

しかし、ライオンファンガイアは受け続けるものの、

ーガシッ！！

「その程度か……」

その拳は全然効いておらず、逆に腕を捕まれ、

「手間を掛けさせるな、雑魚が」  
投げ飛ばされた。

「くっ、パワー不足か、なら！」

空中で受け身を取り、ドッガフェッスルを抜き取る。

そして、フェッスルをキバットに吹かせる。

「《ドッガハンマー！！》」

キバの元へ飛んできた、ドッガの彫像を掴み、Dキバへとフォームチェンジした。

Dキバはライオンファンガイアへ、ゆっくりと進む。

そして、ドッガハンマーをライオンファンガイアに叩きつける。

しかし、相手は《チェックメイトフォー》の一人。

Dキバのパワーをもともせず、逆にドツガハンマーを捕まれ、奪い取られた。

「ふっ……！」

そしてライオンファンガイアは、奪ったドツガハンマーで、Dキバを地面に叩きつける。その後、足で何回も踏みつけ、近くの壁まで蹴り飛ばした。

「ぐっ、くそっ……がっ……強い……！」

「弱いな、キバ？」

Dキバは、ヨロヨロと立ち上がり、ライオンファンガイアへと突っ込む。

すると、ライオンファンガイアは距離を一気に詰め、Dキバの胴体に蹴り込む。

Dキバは片手で防ごうとするが、そのスピードとパワーに防ぎきれず体制を崩してしまい、蹴りをもろに五発以上食らう。

そして、ライオンファンガイアは、指先からロケットクローをDキバへ放つ。

ーードガガガガッ！！

「ぐああああ……！」

Dキバは強制的に変身解除され、藤馬は地面をゴロゴロと転がり、動かなくなる。

どうやら、気を失ったようだ。

「おい藤馬、藤馬!!」

キバットが呼び掛けるものの、気を失ったままだ。

ライオンファンガイアは、人間体、ルークへと戻る。

「興ざめたな……」

藤馬にそう言っただけでルークは去った。

――NOW LOADING――

――憂side

どうも、平沢 憂です！

今は学校から下校中です。

早く帰って、お姉ちゃんの看病をしないと！

「うん、あれって……?」

私の目線の先にいたのは……。

「藤馬、しっかりしろ、おい藤馬!!」慌てているキバット君と、

血だらけで道に倒れている、藤馬さんでした。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 第十八幕 学園祭 中編！！

――藤馬 side

俺はゆつくりと、目を開ける。

あれ、ここは唯の家だ……。

身体中が……痛えな……。

俺は……何やってたんだっけ……。

確か、ルークに……負けて……。

「そっだー!!」

俺は身体を起こそうとする。

「あ、痛えー!!」

身体中に鋭い痛みが走る。

よく見ると、身体のあらゆる所に包帯が巻かれている。

ボロボロだな、俺。

「むっ、起きたか、バカ藤馬」

「良かった、目が覚めたんですね!!」

俺の声を聞いて、コウモリモドキと憂ちゃんが来た。

憂ちゃんには、感謝しないとな。

「憂ちゃん、ありがとな。助けてくれて」

「いいえ、良いんです。

困った時は、お互い様ですし」

本当にスゲエな、包帯もちちゃんと巻かれているし。

それにしても、強かったな。

《チェックメイトフォー》の名は、伊達じゃないか……。

「藤馬さん、大丈夫ですか？」

へっ、何が？

「すごく、気難しい顔をしてましたよ？」

そりゃ、

「まさか、ここまでボロボロにされるなんて、思いもしなかったかな……」

死ぬかと思ったわ、マジで。

ーブルブル……。

はは、体が震えてやがる……。

「藤馬さん……」

――

――

――

あの後、憂ちゃんにはお礼を言って、家に帰った。

今は、ソファ―に寝転がってる。

「ふう……」

アイツにどうすれば勝てる……。

やっぱりてんこ盛り（ドガバキフォーム）とか。

でも、あれは制限時間があるからな……。

「……おい藤馬？」

ん、何だよ？

「いや、何でもない……」

変な奴だな。

あつ、もうこんな時間だ。

最後にヴァイオリンを弾いて、心を落ち着かせるか……。

そう思ってヴァイオリンを準備して、弾き始める。

――演奏 ふでペン〜ボールペン〜ヴァイオリンverr――

――NOW LOADING――

――

――翌日 放課後

ああ、傷が痛えな。

ていうか、起きたら午後になってたんだもんな。

今は部室へと向かう途中。やっと着いたけど、音が全然聞こえないな……。よし、行きますか！

――ガチャ

「ちーす、三河屋です」

どうよ、この空気をぶっ壊すような入り方！

（いや、バカだろ……）

アンタはだまらっしゃい！

「うお、激しくデジャブ！」  
へっ？

「藤馬、何で昨日は直ぐに帰った……どうしたんだ!？」

「大変、早く治さないと!」

「藤馬先輩、ボロボロじゃないですか!」

「藤馬さん、まだ怪我してるんですから、座ってください!」

「全く、面倒事を増やさないでよね」

「あれ、なっちゃんだ」

皆の反応がさっきのボケより、怪我の方に反応しとる。

何か、寂しいのう……。

「どうしたんだ、藤馬?何か泣きそうだけど」

「いや、良いんだ。うん……別に寂しくないもん」

「何か、キモいぞお前」

うう、心が折れそうです。

というわけで状況説明。

怪我については、不良をフルボッコした時に出来た、と言っておい  
た。

「へえ、藤馬って強いんだな!」

「かつこいいわ、藤馬君」

「ま、まあな」

本当は、逆にボコボコにされたんだけどね……。

そして、梓。そんな睨まんという！

そう思っていたら、梓が涙目で、

「藤馬先輩は、危ないことしないでください！  
心配したじゃないですか……」

梓って、本当に妹みたいだな。

俺は梓の頭を撫でながら、

「……大丈夫。  
そこらへんの不良には負けねえよ！」  
と、安心させるように言った。

「いや、その怪我だから心配なんですけど……」

あ、それもそうですな。

「そ、それじゃあ練習しようぜ！」

「……誤魔化した……」

「ていうか、藤馬はその腕でヴァイオリンは弾けるのか？  
と、零が聞いてくる。

「あ、うん、大丈夫だぜい、こんな感じ……痛え！」  
手をブンブン振り回してたら、パネエよ（痛み的な意味で）！

「そんなに振り回すからだろ」

「右に同じだ」

くそ、暴力コンビ（律と漣）め！

ーメリッ！！

「オオウツ！！」

だからって、アイアンクローニ発は無いでしょうよ。

！

――

――

というわけで部活も終わり、家に帰ってるんだけど……。

「何で俺が、唯を背負ってるんだ？」

「えへへ、なっちゃんの中であつたかいな」

「「むっ」」

そして憂ちゃんと、梓はなんで睨んでいるの？

「「なんでもないです！」」

さいですか。

ちなみに、何でもこうなったかというと、  
唯が風邪でダウン 誰か家まで担いで！ 藤馬がやれば？（by  
漣） 何でや！！ なっちゃん、ゴメンね（涙目） ……了解  
という感じ。

それにしても唯は軽いな。

一体、何キ口何だろう……聞いたら死ぬな、多分。

そんな感じに考えていると、

「あ、私こっちなので、それでは」

と言って梓が帰っていった。

「おう、じゃあな！」

「梓ちゃん、また明日！」

「あずにゃん、まったね〜」

俺たちも家に向かって、歩き出す。

――

――

――三人称side

三人は梓と別れ、少し歩いたら平沢家に到着した。

「あの、今日は本当にありがとうございました。  
怪我也全然治ってないのに……」

憂が申し訳なさそうに言う。

「いやいや良いんだ、じゃあまた明日ね」

「はい、また明日！」

そう言って、唯と憂は家の中に入っていった。

「さて、何のようだ、ずっと俺をつけてきて？」

藤馬は、後ろの方を見る。

そこには……。

「え、私はキミに、会いたかったただだよ？」  
相変わらずフードを被った、クイーンがいた。

「まあ。

随分と感動的な事だな、それは。嬉しくないけど」

一回フルボッコにされた相手に会えて、嬉しい奴はMだ」作者……  
潰すぞ」ハイ、スイマセンデシタ。

「それで用件はなんだ。  
まさか、ただ会いに来てただけじゃないだろう？」  
藤馬がクイーンに聞く。

「まあね、キミが持つべき物を渡そうと思ったんだ」  
クイーンは円盤上の何かを取り出し、開ける。

「……メダルか、それ？」  
中には、恐竜の模様入りの丸いメダルが九枚入っていた。

「違うよ、これは欲望の結晶<sup>オーメダル</sup>、その中でも強力な《コアメダル》を  
破壊できる《コアメダル》」

すると九枚のうち、七枚のコアメダルがひとりでに動きはじめ、

「ギルのコアだよ」

ーバシユン！

藤馬の体に吸い込まれた。

「ぐつ、ううう……あつー！」

藤馬が地面にのたうちまわる。

「大丈夫、直ぐに収まるよ、それとこれも……はい」  
そう言つて、長方形の石みたいなものを取り出し、藤馬に渡す。

「はあ……はあ……な、何だよ、これ？」  
藤馬は、クイーンから渡されたモノを見て呟く。

「これからの戦いで、いずれ必要になるもの……」クイーンは悲しそうに言って、言葉を切る。

「まあ、ルークぐらいには勝ってもらわないと!」  
その声色はどこか無理をしていた。

「何で、そんな悲しそうな顔をするんだ、クイーン?」  
藤馬は質問する。

「そ、そんなことないよ!」  
「ウソ言つな、そんな悲しそうな声して信じられるか!」  
藤馬が激昂する。

「……また、会えるといいね」  
そう言つて、姿を消す。

「ちょ、ちょっと待てよ!……何なんだよ、アイツ」  
藤馬はクイーンが消えた場所を、しばらく見ていた。

――

――別世界      教会

ここは教会。  
その中でクイーンが廊下を歩く。

ーコッ、コッ、コッ

「ふう、なっちゃんはやっぱり鋭いなあ」

クイーンは歩きながら、そう呟く。

すると、

「おいクイーン、ズルいぞ。お前ばかり、アイツに会って！」

「久し振り〜」

前方から、クイーンと同じようなフードを被った女が二人あらわれる。

「ん……メズールちゃん、タブーちゃん！」

何か、久しぶりだね！」

「誤魔化すなよ、クイーン！」

それで、アイツにはあれを渡したか？」

メズールがクイーンに確認する。

「うん。でも、やっぱりなっちゃんにメダルを渡すのは、嫌だったなあ……」

クイーンが悲しそうに言う。

「でも、仕方無いわ。彼を助けるためですもの……」

タブーは、決心するように言って、

「それじゃお茶にしましょうか、久し振りに」

「……そうだな」

「さんせい！」

近くにある部屋に入り、三人はティータイムを始めた。

I t o b e c o n t i n u e d

第一章 第十九幕 学園祭 後編!! (前書き)

挿入歌 ふでペン〜ボールペン〜

第一楽章 第十九幕 学園祭 後編！！

――藤馬 side

「くそっ、何だったんだよ！」

クイーンの奴、何をしゃがったんだ？

コアメダルとか言うものが、俺の身体に入ってたし……。

俺は、石で出来た何かを見る。

「これって何なんだよ……？」

これから必要になるものって言ってたけど。

「コウモリモドキに聞いてみるかな……」

（おい、コウモリモドキ！）

（……（・・） z z z）

この野郎、潰してやろうか……。

俺はヴァイオリンケースに入っている、コウモリモドキにアイアン  
クローをぶちこむ。

――メリッ！！

（うう…（「。。」）

「……何してんだ、てめえは？」

「こ、これは違う！コウモリは夜行性だ」「だまらっしゃい！」「……ぶべっ！」

コウモリモドキに、右ストレートをプレゼントしてやりました。

というわけで、家の中でコウモリモドキに状況説明。

「紫のコアメダルがお前の身体に入ったと！？」

コウモリモドキが声を荒げる。

「ああ……やっぱり、マズイ代物なのか？」

何も、変化はないけど。

「メダルの力は絶対に使わないよ、人に戻れなくなるからな……」

「そんなにやべえのかよ！？」

あの野郎、そんなやばすぎるモノを俺に入れたのか！？

「あとは……これも使わないよ！」

そう言っつて、コウモリモドキが指差したのは、さっきの石みたいなもの。

「そういえば、これは何なんだ？」

「これは欲望の王、オーズに変身するためのドライバーだ」  
変身ベルトってことか？

「ああそうだ。」

今は封印されてこうなっているが、力はキバと同じぐらいだからな」

は、こんなガラクタみたいなものがね。

そう思いながら、ドライバーを見る。

「それより食事にしないか、腹が空いているんだ」

「そうだな、何にしようかな」

ドライバーをテーブルに置き、俺はメニューを考え始めた……。

――

――

――二日後　学園祭当日！

ついにこの日が、

「キター――！！」

「うるさい（です）！！」

三人とも、そんなにピリピリしなくても……。  
今現在の時刻、十二時三十分。

もうすぐライブですよ、つつう時に唯はまだ来ない。

でも、多分……。

「そんなに心配しなくても、アイツは来るだろ？」  
俺の言葉にみんながうなづく。

その後は、和が来たり、次狼達が冷やかに来たり（来た瞬間に、窓から投げ飛ばした）、さわっちが来たりしたが、唯はまだ来ない。

ふと、時計を見ると、時計の針は十三時を指していた。

「そろそろ、講堂に入らないとね」

「ちょっと、待ってy」……「P i P i P i」ああ、もう何だよ、こんなときに……」

そう言つて、携帯のディスプレイを見ると……。

「つて、唯じゃん!」

「……えっ、本当に!」……」

そう言つて、皆が寄ってくる。  
いや、狭いんですけど……。  
とりあえず、電話に出るか。

「もしもし、今どこにいるんだよ、唯?」

「えっと、後、学校まで一キロぐらいだよ!  
ゴメンね、寝坊しちゃて……」

よし、それならギリギリで間に合うかな。

「良いってこと。今度、埋め合わせはしてもらつからな」

「うん、わかつてるよ！」

あ、すいません！」

「おいおい、大丈夫か唯の奴？」

「これでライブにみんな、出られるわね」

「ふう、心配で、寿命が縮まるかと思った……」

「もう最低です、こんな日に寝坊なんて……」

「あ、ギー太を講堂に運んどいてね、それじゃ！」

――Pi！

というわけで、ライブの準備なのだが……。

「ああ、えっと唯のギー太は……あれ？」

俺が、部室を探してみるものがない。

律に聞いてみるかな。

「なあ、律、唯のギターって何処だ？」

「ああ、それなら憂ちゃんが持って帰ったぞ」  
律が、機材を運びながら答える。

ーードゴッ！！

「何で、頭を床にぶつけてるんだ、お前！？」

クールだ、COOLになれ、中都藤馬！

唯が今から取りに行っても、体力ねえから時間が足りない。  
なら、俺が取りに行くしかないっしょ！

「ゴメン、律！

さわっちにギターお願いしといて！！」

「あ、ちよつと藤馬！？どこに行くんだよ！」

俺は、部室から飛び出し、階段を飛び降りる。

すると、

「はあ、はあ、うわっ、なっちゃん！……どうしたの？」  
走ってきた唯に、鉢合わせた。

ナイスタイミング！！

俺は両手で、唯の両肩を掴む。

「なあ、唯！」

「え、な、なに？」

何か唯の顔が赤いな、もしかして風邪が治ってないのか？

まあ、それより……。

「お前の家の鍵、貸してくんない！」

「??」

「お前ん家に、ギー太があるからだよ！」

「えっ、そうなの!? ……取りに行かなきゃ！」

唯は、また帰ろうとする。

「はい、ストップ」

俺は唯の首元を掴む。

「お前が今から帰っても、間に合わないだろう？  
だから、俺が行くよ」

「そんなあ、なっちゃんに頼めないよ！」

はあ、このバカチンは……。

俺は唯にデコピンを入れた。

「……ていつ！」

「いたっ、何するの、なっちゃん!?」

何か、デコを抑える唯、カワユス……。

って、そうじゃなくて、

「俺を、ちよっとは信じんしゃい！」

ぜってえ間に合わせるよ……それじゃ！」

そう言っつて、俺は走り出す。

すると、

「なっちゃん、カギ、カギ！」

唯がカギを投げてくる。

「あんがとつ、そんじゃあ、行ってくる！」

ライブ終了まで〳〵残り三十分

――

――

――

「はあ、はあ、これだな……」

今は唯の家に着いて、ギターを見つけたところ。

もうライブ、始まっちゃってるな。

ギターを背中に担ぎ、時間を確認する。

「残り時間は……十五分ぐらいか、急ごう！」

そして、俺は走り出す。

走りながら、俺はいろんな事を考えていた。

最初は記憶が無くて。

兄弟も、親も、友達さえ居なくて、普通の人間とは何かが違う。

怖かった、どうしようもなく。

怖かった、一人でいることが。

そんな俺が、桜高の軽音部に入って、毎日、毎日が楽しかった。

毎日しゃべって、お茶して、戦って。

誰かを見殺しにしたことがあった。

助ける、と約束したのに助けられなかった奴がいた。

そついう時に落ち込んだ俺を、いつも元気付けてくれた、軽音部の皆。

嬉しかった、誰かといることが。

嬉しかった、思い出がいくつも出来たことが。

だから、皆は俺が守り抜く。

何もなかった俺に、ありきたりな幸せをくれたアイツらを。

だから、皆のために頑張る。

アイツらに幸せになって欲しいから。

だから……、

「ほわたああああ！！！！」  
「ガチャッ！！」

俺は講堂のドアを蹴破る。

俺はまだ、頑張れる。

「ハア、ハア、ハア……着いた、よいしょ」

俺はステージへと上がる。

「みんなお待たせ！」

俺は、笑いながらそう言う。

「全く、遅すぎだぞ、藤馬！」

「私も律と同じだな、心配かけさせるなよ」

「信じてたわー藤馬君ならやるって」

「全く、先輩もムチャクチャしないでくださいよ!」

「いきなりだから、ビックリしたわ〜中都君」

ハッハッハ、めんご、めんご!

後は……。

「ほい、持ってきたぞ、ギー太!」  
そう言つて、唯に渡そうとした。

唯は泣きながら、

「うう……グズッ……ありがとう〜なっちゃん!!」  
抱きついてきた。

つて、チヨイチヨイチヨイ!

「あの……唯さん、抱きつくのは嬉しいけど……いろんな人が観てる  
んですよね……」

「へっ?……っ／＼／＼／＼」

唯が観客の皆さんを見た瞬間、フリーズした。

そして、

「」「」「むう〜ん」「」「」

チミ達は、何でそんなに悔しそうなの?

「とりあえず、ライブの続きといきましょうや」

抱きついてきた唯を剥がして、準備を始める。

その時、

「なあ、藤馬がMCをしるよ!」  
と律が言ってくる。

「…………へっ?」  
何で、俺?

「ああ、良いかもしれないな!」

「私、藤馬君のMC聞いてみたいわ」

「私も聞いてみたいです!」

「なっちゃん、がんばっ!」

何か決まってるし……。

「わあったよ、やりやあ良いんでしょ、やりやあ」

俺はそう言つて、マイクに近づき、スイッチを入れる。

「ええ、どうも。

軽音部もとい、放課後ティータイムです」

ちなみに、放課後ティータイムっていうのは、さわっちが勝手に考えたバンド名。

俺がそう言つと、観客から拍手と、歓声が出る。

あ、何か、ライブっぽい。

「今日は、そこでギターを忘れた天然娘の代わりに、ギターを取ってきたので遅れました。

講堂のドアを蹴破つてすみません、ゴリさん」

ー　ボウフラアアア、後で覚えとれよ!!

やべ、地雷踏んだ。

「俺は、二年生から軽音部に入りました。

最初は、お茶ばっか飲んで、大丈夫かなゝって思っていました。でも、コイツらと一緒にいると、毎日、毎日が充実してて、いつの間にか軽音部が大好きになってました。

実は、俺の家族って誰一人いなくて。

今も、一人でいることが怖いのかもしれません。

まだ、数ヶ月しか一緒に過ごしてないコイツらだけど！

でも、コイツらとだったら!!

怖いことなんて、スグに楽しい事に変えられるはずです!!!!」

ー　ワアアアア!!

観客から声援が聞こえる。

「それじゃあ、最後の曲聞いてください。」

ふわふわ時間!!」

「1・2・3・4・1・2・3!!」

唯から、順番に音を奏で、やがて曲になる。

ハア、最高だなっ、おい!

これがライブか。俺は、一つ、一つの音を最っ高に楽しく弾いた。

~~~~~

ージャーン!!

やりきった感がばねえな、おい。

そう思っていたら、

~~~~~

ムギが笑いながら、ふわふわ時間のイントロを弾き始める。

そういうことかいな。

それに合わせ、律、漣、梓、俺が弾き、最後に……。

「けいおん、だいすき!」

Itobe continued

第一楽章 第十九幕 学園祭 後編!!（後書き）

どうでしたか？

藤馬「ふにゅ〜（　　）」

おい、後書きでだらけるなボケツ！

藤馬「……ちよつとぐらい、休ませてくれよ作者」

はぁ〜、まあ次の話で痛い目見るから良いか…（ニヤッ

藤馬「（。。。）」

それでは次回をお楽しみに!!

**第一楽章 第二十幕 メダルの力!! (前書き)**

はい、どうも皆さん388859です。

今回は独自設定が入っています。

その点を踏まえて、第一楽章 第二十幕をお楽しみください。

P・S・あ、二万PV越しました、ありがとうございます！

第一楽章 第二十幕 メダルの力!!

――藤馬 side

「うーん……」

そう言つて、俺は背伸びしてから、まただらける。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

あのライブから、三日ぐらい経っていますが、

「はあ、何か燃え尽きたな」

「ホント、そうだね」

「むこう一週間は、演奏したくないな」

「お茶が入ったわよ」

「「「はい……ほげえ」」」

こんな風に、いつも以上にだらけています。何かあのライブがウソみたいだな。

お茶を飲みながら、そんなことを思っていると……。

「あつ、そついえばなっちゃんにお礼しないとね!」  
と唯が言ってきた。

お礼?……ああ、ライブの時に埋め合わせしろよつて言つたっけ。  
うーん……。

「別に良いよ、あんときはノリで言っただけだし……」

と言ってお茶を口に含む。  
すると、

「なっちゃんなら、

R指定のモノ以外は何でも良いよ！」

「ぶほっ!!」

当然、俺は紅茶を口から吹き出す。

年頃の女の子が何を言ってるの！

「げほっ、げほっ、あのさあ、俺って変態じゃないんだけど!？」

「「「えっ、そうなの!？」」」

うう、別にエロい事してる訳じゃないのに……。  
俺は、部室の隅で体育座りをしていじける。

「そ、そんなにいじけるなよ、藤馬！」

藤馬は、なんだかんだ言っただけは、やるしな／／／／／

「そうだよ、なっちゃん！それになっちゃんは、や、優しいし／／／／／」

「そうね、藤馬君はカッコいいもの!／／／／／」

何か、話の方向性が斜め45度ぐらい違ってきてない？

ーガチャ！

「皆さん、こんにちは……今回は、どうしたんですか？」  
そんな嫌そうな顔しないで、梓！

というわけで状況説明中……。

「成る程……。

結局、藤馬先輩は何がしたいんですか？」

いや、そう言われると逆に困るんですけど……。

うーん、したいことな〜。

しばらく考えてみるが、中々思い付かない。

「じゃあ、二人でご飯食べに行こうよ！」

それは、キミがしたいことでしょう、唯

「じゃあ、海外旅行とか？」

そんなお金ないです、ムギさん。

「映画を見に行けば良いんじゃない、の惑星とか？」

お前が観たいだけだろ、律！

ふむ、したいことな〜。

考えてみると、怪人と戦ったり、戦ったり、ストリートファイトしたり。

あれ、俺の休みって何してたっけ？

そんな感じで、自分を見失いそうになってたら、

「そういえば、藤馬先輩の家って、入ったこと無いです、私」と、梓が言ってきた。

ありゃ、そうだったか？

「あつ！

なっちゃんの家泊まり込む、っていうのはどうかな？」

「それ、良いな！」

「私、男の子の家に泊まるの夢だったの」

「私も良いと思います！」

何か、勝手に決められてる&断りにくい雰囲気になってる、俺のしたいことなのに……。

って、いつものツッコミ担当の漑がいないな。

「漑、漑はどうしたんだ？」

「漑なら、用事があるって言って帰ったぞ」

ふん、珍しいな……。

「「っ！」「」

新しい怪人。

しかも、ちょっと遠いな……急ぐか！

「ちょっと用事出来たから、後の事はまた明日な！」

「『『『え、また！』』』」

そんなこと言わないの、駄々っ子か！

俺はそう言っで、部室を飛び出す。

（なあコウモリモドキ、今回の怪人は何だよ？）

（今回は……人類の進化形、オルフェノクだな）

とりあえず、現場に行くか……。

――

――

――十分後　河川敷

ここら辺のはずけど……。

「えつ　「いやぁ……こないでよぉ……」　おいおい、デジャブ……」

そう思いながら、振り返ると……灰色の怪人に追われている澪が居た。

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは、河川敷。

普通なら子供などの遊び場だが、

「いやぁ……こないでよぉ……」

今は一方的な殺し（遊び）が行われていた。

澪は意味がわからなかった。

用事の帰り、いきなり目の前に居た人が、灰色の怪人、トードスツ  
ールオルフェノクに変わり、襲い掛かってきた。

死に物狂いで逃げだしたが、河川敷に追い詰められてしまい今に至る。

（もう嫌だよぉ、律、唯、ムギ、梓、藤馬。  
誰でも良いから助けて！）

「もう終わりだ、ゲヘヘヘヘ！」

そう言つて、トードスツールオルフェノクが使徒再生をしようとした時に、

「はい、ドーン！」

「ん？……ぶべっ！」

ーゴスッー！

藤馬が飛び蹴りをして、漑から突き放す。

「漑、生きてるかー！」

と、藤馬が漑に聞く。

しかし、漑から返事が全く来ないので、見てみると……。

「まあ、器用な奴だな……」

屍状態になっている漑が居た。

「ちつ、貴様、邪魔するな！」

そう言つて、トードスツールオルフェノクが藤馬に襲いかかる。

それを藤馬は避けつつ、トードスツールオルフェノクへと蹴りを入れる。

「コウモリモドキー！」

「ああ、ガブリー！」

「っー！」

そして、右手をキバットに噛ませ、全身に《魔皇力》を流す。  
すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻か

れる。

「《変身！！》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「ちっ、仮面ライダーか！」

「《光栄に思え、絶滅タイムだ！！》」

そう言って、トードスツールオルフェノクへと一気に距離を詰める、キバ。

それに対し、トードスツールオルフェノクは、ただ拳を放つだけ。

そもそも、スペックから経験まで、キバがすべて勝っているので、トードスツールオルフェノクは、スグに追い詰められてしまった。

「ぐっ、はあ……ハア…ハア…」

「んじゃ、決めますか！」

そう言って、キバットにウェイクアップフェッスルを吹かせる。

「《ウェイクアップ！！》」

その瞬間、周りの景色が三日月の夜へと姿を変えた。

キバは、右足を振り上げ、右足の拘束具カタナを解放する。

そして、片足だけで一気に頭上へ上がり、トードスツールオルフェノク目掛けて、一気に蹴り込む！！

「だりやああああ!!」

《ダークネスムーンブレイク!!》

ドゴツ!! バゴオオオオ!!

トードスツールオルフェノクを中心にキバの紋章が刻まれる。

そして、トードスツールオルフェノクは、灰に変わった。

「……はあ、終わったかな？」

キバがそう漏らし、変身を解除しようとすると、

ーードガガガッ!!

「……ぐああああ!!」

どこからともなく、何かがキバに直撃した。

キバが何かが飛んできた方向を見ると、

「ふん、こんなところでお前に会うとはな、キバ？」

キバに手を向けている、ライオンファンガイア、ルークがいた。

キバは立ち上がりながら、

「俺はアンタに会いたくなかったよ、ルーク……」

ドッガ、ガルル、バツシャーのフェッスルを抜く。

「ほう、なら……死ねっ!!」

ライオンファンガイアはキバへと物凄いスピードで襲いかかる。

キバは一旦退きながら、キバットに三本のフェッスルを吹かせる。

「《ガルルセイバー・バツシャーマグナム・ドッガハンマー!!》」

三体の彫像が吸い込まれキバは、DGBキバへとフォームチェンジした。

「良いか藤馬、一気に決めろ！  
時間もあまり無いぞ！」

キバットがそう注意し、キバは右手のバツシャーマグナムを連射する。

しかし、ライオンファンガイアはそれをロケットクローで相殺し、キバの身体を爪で引っ掻く。

キバは、右手をドッガハンマーに持ちかえ、左手のガルルセイバーで爪で受け流し、

「らあっ！」

持ちかえたドッガハンマーで殴り付け、そこから流れるように連撃を放つ。

一見、キバがかなり押しているように見える。  
しかし時間制限、負荷などを考えると……。

「ぐっ、調子に乗るなアア!!」

そう言つて、ライオンファンガイアは怒濤の反撃に出る。

ーードゴツ、ドゴツ、ドゴツ、バキッ！！

「ぐあっ！！……は……っア……」

キバが圧倒的に不利だった。

「藤馬！

あと三十秒が限界だぞ！！」

キバットが藤馬を急かす。

「ちっ、やるしかねえよな！

賭けに出るぞ、コウモリモドキ！！」

キバは右手を胸に当てる。

ーメダル力は絶対に使うなよ！人に戻れなくなるからな……。

（俺一人が無茶して、誰かを救えるなら……）

「俺の中にあるクソメダル、お前の主人がピンチなんだ……」

その刹那、キバの複眼が紫に光り、

（それで十分だ！！！）

「家賃として、お前の力を貸しやがれ！！！！」

その刹那、キバの体からメダルが三枚飛び出し、右足に吸い込まれる。

すると、拘束具がメダルの力で解放された。

そして、本来なら紅いヘルズゲートが紫に変わっていた。

「うウツ……ッガアアアアア……！」

キバは獣のような声を出しながら、そのまま飛び上がり、右足に冷気を伴いながら、ライオンファンガイアへ蹴り込む！！

「ウオオオオオアアアア……！」

《ワイルドアイスマーンブレイク！！》

ドゴツ！！！！パキパキパキ……！！！！！！

ライオンファンガイアを蹴った箇所は凍っており、地面にはキバの紋章が刻まれる。

キバはバク転して、ライオンファンガイアから離れる。

「うう……ぐっあ……くっ！……！」

蹴られた箇所を抑えながら、ルークは去っていった。

「ウウ……フウ……うつ……！」

キバの変身が解け、藤馬が地面に倒れる。

「藤馬、このバカ！何でメダルの力を使った！？」

キバットが藤馬に聞く。

「はは……やった……ぜ……！」

藤馬はそのまま気を失った。

「おい藤馬！……藤馬……藤馬、しっかりしろ、おい、藤馬アアア……！」

キバットの声が河川敷に響いた。

I I t o b e c o n t i n u e d

**第一楽章 第二十一幕 入院！！（前書き）**

どうも、388859です。

それでは第一楽章 第二十一幕をお楽しみください。

## 第一章 第二十一幕 入院！！

――藤馬 side

――声が聞こえる。

――のギターって、何か私と違うよね？

アコースティックだからな、俺の。

―― ってヴァイオリンも弾けるから、スゲエな。

いやあ、それほどでもないです／＼／／

――お茶が入ったわよ

あいあい……旨し！

平和な日々、ずっと続くのだと思っていた。

そんな中で、俺は戦い続けた。

誰かを救えなくても、涙を堪えて。

自分の身体がボロボロになっても、皆を救うために。  
そして戦い抜いて――

「っあ！！……はあ……はあ……はあ……はあ……」

何だよ、今の……。

何か、最近はあるのなかったのに。

俺は起きて、部屋を見回す。

「……何かデジャブってない？」  
だって一話と同じ病室なんだぜ。

このままいけば、

「……むっ、起きたか藤馬？」

コウモリモドキが羽をパタパタと動かして俺の頭に乗る。

やっぱりお前か、コウモリモドキ……。

「やっぱりは無いだろう、半日もぐっすり寝て？」  
ああすまん、すまん……って、

「俺、半日も寝てたの!？」  
やっぱり、てんこ盛りにメダルの上乗せは無理すぎたかな……。  
道理で身体の節々が痛いはずだよな。

と、俺がうんうんと納得していたら……。

「それで、なぜメダルの力を使った？  
人に戻れなくなると言っただろう！」  
コウモリモドキが俺の頭の上で激昂する。

そんなこと言われてもなあ。

「だって、あのままだと絶対に負けてたしなあ」

だから使ったんだけど……ダメすか？

「ダメに決まってるだろう！」

「既にお前は、人を辞めたことになるんだぞ！」

そんなに言わなくても……。

何か俺って、コウモリモドキに心配かけてばっかなんだな……。

「すまねえな、お前には迷惑かけてばっかだから……お詫びに最高のトマトジュースやるよ」

と、俺が謝罪の言葉を言うと……。

「ほ、本当か!!」

今、言ったからな、絶対に飲ましてもらうぞ……！」  
「ただ好きなんだよ、トマトジュース……」。

頭の上で、柄にもなくはしゃぐコウモリモドキをジト目で見る。

ん？……何かを忘れてるような気がするけど、まあ良いか！

そう思い、身体を横にして寝ようとしたら……。

「そういえば、学校に連絡していないが、大丈夫か？」

あつ！

「忘れてたああああ！」

――ガラッ！！

「中都さん、病院では静かにしてくださいって言いましたよね……」  
と、看護師さんが阿修羅を超える勢いのオーラを放ってくる。

ゴ、ゴリさんと同じレベルのオーラ……だと……！？

ちくしょう、ここの看護師は化け物か！

ーガシツ、グググ！！

「……返事は？」

はい、ワカリマシタ。

ー

ー

ー……夕方

あの後、看護師さんに学校に連絡してるか聞いたら、してたらしい。  
無駄に命をすり減らしたような気がする。

それにしても……。

「なあコウモリモドキ、ルークにどうすれば勝てる？」

ルークには二回も負けている。

だから、次こそはアイツを絶対に倒すという思いから聞いたのだが……。

「そうだな……黄金のキバの力を解放すれば余裕で倒せるだろうな」

黄金のキバ？

キバにも色んな種類があんのか？

「ああ、最初にも言ったが、私が持っているのは黄金と闇。お前がいつも使っているのは、黄金のキバの力を制御したものだな」  
成る程……。

じゃあ、力を解放すれば良いじゃん！

「はあ……それが出来たらしている！  
それが出来るのは、タツロットだけだ」

じゃあ、そのタツロットを探せば良いんだよね？

「いや、タツロット自体はキャッスルドランに封印されているんだが……」  
何だよ？

「封印の解き方が、全くわからん」

はあ、何なんそれ！？

「わからないものは、わからないんだ！  
後、奴に勝つ方法は、闇のキバになるしかない」

闇って嫌な感じしかないんだけど？

「ああ、お前の予想通りだ。」

今のお前がなれば、寿命が大幅に減るか、もしくは死ぬだろうな」

つまり、八方塞がりってわけか……。

やっぱりそう簡単に強くはなれないよな。

そんな感じに考えていると、

「藤馬、皆でお見舞いに来たぞ」

と、病室のドアのむこうで律の声が聞こえた。

とりあえず、コウモリモドキにはヴァイオリンケースに入ってもらいました。

「あいあい、どうぞーりっちゃん隊長」

と俺が言つと、皆が病室に入ってきた。

そして俺に近づいてきて……。

ーゴツンッ！……！

「ゴフッ！？」

四人が俺に拳骨をぶちこむ。

つて、ちよつと待て！

「貴女達は、何しに来たんですか！？」

怪我人を普通殴らないですね、読者の皆さん！

すると、皆ちよつと涙目になりながら、

「うう……バカ藤馬、心配しただろ……グズッ」

「なっちゃんが生きてる、良かった、本当に良かったよぉ〜!」

「藤馬君、藤馬君だ、うわああああん!」

「良かったです、本当に良かったです!」

そう言って、皆が俺に抱きついてくる。

えっ、何で、どういうこと、what's、誰か説明してよ!?

(はぁ……。どう考えても昨日普通に帰った奴が、今日入院してたら心配するだろう、バカ藤馬)

ああ、成る程なコウモリモドキ……。コイツらにも心配かけたんだな。

「みんなありがとうな、心配してくれて……」

何か泣きそうだけど、泣かないよ。

だって男の子だもの!

って、澪が居ないような……。

「なあ、澪はどこにいるんだ?」

「グズッ…ヒック…ああ、澪なら……」

律が病室の外を指差す。

俺は皆をはがして、病室の外に出てみると……。

「……何であなたは外にいますか?」

そこには、小さく縮こまっている漣が居た。

「だ、だって、藤馬が大怪我をしたのは、私のせいなんだから……！  
藤馬が……私を……助けなけ……れば……わた……し……が……うう……グズッ  
……」

と、漣は泣き出してしまった。

これを周りに見られたら、俺が泣かしたみたいになっちゃってしまう！

「と、とりあえず、漣も病室に入って話そうぜ！

廊下じゃ話もできないし、周りの人の迷惑になっちゃうだろ？」

というより、看護師さん達の視線が痛いから病室に戻りたい……。

「……グズッ……うん、分かった、中に入る」

漣が涙目で答える。

何この可愛い小動物、俺のガルルセイバーがウェイクアツ（言わせんぞー！）、わあってるよ、コウモリモドキ。

そんなバカなやり取りをしつつ、漣（小動物）を病室に入れ、椅子に座らせ、他の皆を外に出させる。

「ちったあ落ち着いたか、漣？」

すると漣は、昨日からずっと悩んでいたのだろう、ポツポツと話し出す。

「藤馬が助けてくれて、凄く嬉しかった……でも、藤馬が血塗れで倒れてた時に、何で私じゃなくて……藤馬なんだろう……って思ってた……グズッ……そう思うと……凄く辛くて……逃げたくて……嫌だ

った……だから「……もういい」…藤馬？」

漣がビクビクしながら、俺の顔色を伺う。

そりゃそうだよな、途中で止められたんだからな。

「俺が勝手に助けたんだから、お前が気にすることは何もないんだよ」

すると漣が反論してくる。

「で、でも、私は藤馬を…グズツ…！」

はあ、いじっぱりだな、漣は……。

俺は漣を優しく抱きしめる。

「ひゃ、ひゃうつ！……ととと藤馬？」

「大丈夫、俺は全然大丈夫だから……」

お願いだから……。

「そんな悲しい顔して、泣かないでくれ……」

「うつ…うあああ！……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

漣が泣きながら謝ってくる。

「謝らないでくれ……お礼で良いんだよ、こつこつ時は」

「うつ…うつ、ありがとつ、本当にありがとつ！」

↓

――

――三十分後

「大丈夫、もう落ち着いたから……」  
そう言つて、漣が離れる。

「はあ、なんか疲れたなあ」  
と、俺は肩を叩きながら呟く。

すると、

――ゴンツ、ゴンツ、バガラツ！――

あれ、ドアが開いてる音じゃないよね、これ？

「お二人さーん

仲睦まじいのは良いんですけど、ちょっと仲良すぎ！」  
律は腕を組み、

「むう、なつちゃんは漣ちゃんみたいな子が良いのかなあ？」  
唯は首を横にして、

「あらあら、藤馬君

何で、漣ちゃんとそんなにくっついてるのかしら？」

ムギは手を顔に当てながら、

「むう、藤馬先輩は、漣先輩が いい んですか？」

梓は、手をぶんぶん振りつつ、

「……とりあえず、離れて（ください）、二人とも……」

おい、ゆいあずの二人！

ほぼ同じ事言ってるし、萌え殺す気か！

後の二人は、笑顔がひきつってて怖いです。

俺はその後、定番の O H A N A S I されました。

……不幸だ。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 第二十一幕 入院！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「怪我が増えたんですけど？」

良かったじゃん。

この天然フラグメーカー（男の敵）。

藤馬「……事実だから言えない」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

**第一楽章 第二十二幕 お出かけ 前編！！（前書き）**

はいどうも、私こと388859です。

それでは、第一楽章 第二十二幕をお楽しみください！

第一楽章 第二十二幕 お出かけ 前編！！

三日後

藤馬  
Side

よっしやあああ、退院じゃーい！！

はい、月×日土曜日、天気は晴れ。  
どうも、私こと中都藤馬です！

「なっちゃん、退院おめでとう！」

「藤馬君って怪我が治るの速いわね。」

あはは、コウモリモドキに治してもらったからね……。

「よし、じゃあ遊びに行くか！」

「おー!」

「それでどこにいくんだ、律？」

「そんなもの、行ってから決めればいいだろ！」

「りっちゃん、何かカツコイイ！」

「ただ、無計画なだけじゃないですか……」

はは、やっぱり楽しいな、このメンツだと。

ちなみに、何でこうなったのか。

簡単に説明しよう。

――NOW LOADING――

〱 一日前

ふう、明日で入院生活とも、おさらばか。

備え付けのテレビの、チャンネルを弄くりながら、そんなことを思っていた。

やっぱり今の時間だと、なにもないな。

テレビの電源を消して、身体を横にする。

すると、コウモリモドキがらしくないことを言い始める。

「藤馬、軽音部の小娘共に、何かお礼をした方が良いと思うぞ?」

……どうした?

気持ち悪いぞ、お前らしくもない。

「気持ち悪いは余計だ！……とにかく、お礼に何かしてやったらどうだ？」

うーん、そう言われてみれば確かに、アイツらには迷惑かけてばっかだな。

よし、皆にメールで聞いてみるか。

俺は携帯を取り出し、メールで聞いてみることにした。

数分後

――

「お、来た来た。えーとムギからだな……」

――私は、映画とか観に行きたいわー

何と言うか、ムギさんらしいです。

「あい、分かった、了解です……っと」

次は……零だな。

――遊園地とかどうだろう？

久しぶりに、メリーゴーランドとかの白馬に乗りたいたいやな。

さすが、メルヘン女王。

期待を裏切らない、メルヘンっぷり……。

「ごめん、背中が痒くなってきました……っと」

次は、律か……嫌な予感しかない……。

――あたしは、藤馬の家に皆で泊まりたいです！

どうでしょうか、大家さん？

誰が大家だ、誰が！

つか、野郎の家に女子五人が泊まるってどうなんだよ？

いや嬉しいけどね！

「駄目だろ…っ」と

次は…天然娘、唯か。

――わたしは、皆でケーキバイキングに行きたい！…なっちゃんのおごりで（o^ ^o）

いや、食べ物から離れるよ…。

つか、全部俺が払うの！？

「他にないのか…っ」と

次は梓か…真面目だから、練習しましょうとか言いそうだな…。

――皆で新しく出来た、楽器店に行きたいです！

そういえば、俺もちょっと、気になることがあるんだよね…。

というわけで、土曜日を使って、皆の行きたいところに行くことになった。

――NOW LOADING――

お分かりいただけたかな？

というわけで、まずは映画を観に行くことになった。

そういえば、

「ムギは何の映画が、見たいんだ？」

「あ、うん。これが見たかったの！」

そう言って、ムギが取り出したパンフレットは……。

の惑星―ジエネシス―

……（・―・）エツ．．？

「だって、お猿さんが沢山出るのでしょうか？  
可愛いから、観てみたいなあって！」

……（@ @）マジスか？

「あ、ああ出ることは出るんだけど……」  
「言えないっ！！」

猿が人間を支配する、そんなSF映画だなんて！

ムギの天使のような笑顔に言えないですよ、安西先生っ！

そう思つて、律達に助けを求めるが……。

「面白そうだね、ムギちゃん！」

「あつ、おさるさんとsing・sing・singなんて良いな  
！」

「私も、この映画は観たかつたんだ」

やべえダメだコイツら、早くなんとかしないと……。  
俺は思わず頭を抱えてしまう。

「あの、大丈夫ですか藤馬先輩？  
頭を抱えてますけど？」

梓、いつか君もあなってしまうのだろうか……。

「何、黄昏てるんですか……他の先輩方はもう行っちゃいましたよ？」

え、マジで……俺を置いていきますか……普通ですか、そうですか……。

（映画を観た時の一部始終）

――序盤

「うわぁ、お猿さん可愛い」

「本当だね、ムギちゃん！」

――中盤

「うわっ、コイツ最低だな」

「ひっ!」

――終盤

「グズッ……ヒクッ……こんなの……うう……」

――

――

――

というわけで観てきましたよ!

俺? (作者は、映画を観てないのでノーコメントで)。

現在は、昼過ぎ。

近くのファミレスで、昼食を採ろうと思ったんだけど……。

「なっちゃん、なっちゃん!」

と、唯が目を輝かせ、どこかを指差す。

その視線の先は……。

男子が入りにくい、と百パーセント答えることができる外観の、ケーキバイキングだった。

いや、昼飯にケーキバイキングじゃあ、ちょっとな……  
そもそも入りにくすぎるよ、唯さん……。

「ほらっ、早く早くっ!」

と、俺の手を取って唯が催促する。

「ちよつと待てて……っ！！」

その瞬間、俺の頭に映像が流れる。

――また、会えると良いね……。

クイーンと唯の姿が、重なる。

何だよ……くそっ……何で、クイーンと唯が重なるんだ……。

俺は、頭に流れる映像をかき消すように、頭を横に振りまくる。

「どうしたの、なっちゃん？」

「どこか気分でも悪いの？」

「い、いや、何でもない！」

大丈夫、ノープロブレムだよ、ハハハハハハハハハハ！」

と、身振り手振りを使い、誤魔化す。

「それじゃあ、レッツゴー」

そうやって、唯は店に入っていた。

「って、ちよつと待てつてば、唯！」

俺達も、慌てて追いかける。

中に入ると、お昼時なのでめっちゃ混んでます。

そして店内にいる人、すべてが女子……何このアウェイ感？

「な、突っ立ってんだ、藤馬？」

と、律が言ってくる。

「ああ、男が一人もないから、居づらいんだよ」

「そう言われてみれば、確かにそうだな……」

ですよね、澪さん！

そんなことを言いつつも、席に座る。

この店の制限時間は九十分で、ケーキバイキングっていうより、イタリアン系のバイキングのようだ。

良かった、ケーキだけしかないと考えた……。

俺は、イタリアンItalianな料理を取りに行こうとしたんだけど……。

「なっちゃん、なっちゃん！

ケーキがいっぱいあるよ、スゴいね！」

と、唯が遠足に来た小学生並みにはしゃいでいる。周りの人も、そんな唯に温かい視線を送っている。

「わかった、わかったから！

そんなにはしゃがないでも、ケーキは逃げないぞ？」

と、俺が言うものの……。

「うわあ、このケーキ美味しそう！」

あっ、こっちのケーキは可愛い」

……この子に、傾聴って言葉を教えたいよ。

まあ、そんなこんなでランチタイムは終了。

「ふう、お腹一杯だよ」

唯がお腹をポンポンと、叩きながら満足そうに言う。

「じゃあ次は、梓が言ってた楽器店に行くか？」

と、皆に聞くと梓が戸惑いつつ、

「えっ、本当に言っただけですか？」

「もちろん。」

俺も、ちよつと楽器店に行きたいところだったからな」

というわけで、楽器店にレッツラゴー。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一章 第二十三幕 お出かけ 後編！！

「前回のあらすじ

ヒヤッホオオウウ！！

「全然意味わかんねえよ！！  
確かに、ヒヤッホーな内容だったけどさ！！」

「「うわあ、空に叫んでる…痛いな藤馬」  
そんな目で見ないで、暴力コンビ！

ーゴスツ！！

「藤馬君達、ついたわよ」

あ、どうも、律と澪に拳骨をぶちこまれた、私こと中都藤馬です。

今は梓が言っていた、新しい楽器店に着いたところすな。

「うわあ、いつも行っているところより楽器がいっぱいだよ、あずにゃん！」

「まあ、規模が違いますから」

「あつ、これ見て律！

レフティモデルがいっぱいだ！」

「おつ、本当だなあ！」

「澪にとっちゃ楽園だな、ここは」

今の会話で分かる通り、俺達が来た楽器店はデカイ（作者は音楽知識皆無だから、企業名とかよくわからないんだ）。

さて、ここで俺は病院で見た映像を思い出す。

――のギターって、わたしのとなんか違うよね？

――アコースティックだからな、俺の。

誰かが、に話しかけていたこの映像。

なぜかはわからないけど、は俺だとわかった。  
つまり、俺はギターを弾けることになるが……。

「何で、コウモリモドキはこの事を言わないんだ……？」

コウモリモドキにとって、何かまずいことでもあるのか、それとも俺の過去に何かあったのか……。  
そんな感じで考えてみるが、全くわからないのでこの件は保留、ということにした。

とりあえず、ムギと一緒にアコースティックギターがある場所に行ってみる。

「藤馬君、何でギターを見たいの？」

「ああ、ちょっと唯が楽しそうに弾いてるの見たら、俺も始めてみようかなあ〜ってね」

「なるほど……。ボソツ（藤馬君は唯ちゃんみたいな子がいいのかしら？）」

「どうしたのムギ、ボソボソ言ってるけど？」

「い、いえ、何でもないの、何でも！」

「そ、そんなに大声ださなくても……おっ、着いたな」

というわけで、近くにあるアコースティックを触ってみる。

しかし、ヴァイオリンの時なら握った瞬間に弾き方が分かったのだが、アコースティックは分からない。

うーん、何か分かると思ったんだけどなあ。

そんなことを思いながら、アコースティックを元に戻す。

「うーん、どうしようかな？」

と、思わず呟いてしまっ、俺。

「他のギターを見て回れば良いんじゃないかしら？」

確かにそうだな、ムギ。

他のギターを見て、握ったりするが、何も起きない。

ちょっと、気分が右下がりになってきた……。

しかし、ふと近くにあった黒いアコースティックギターを見た瞬間、

「っあう!!」

――声が聞こえる。

――、ギター教えてよー!

誰かが、俺に抱きついてくる。

あれ、いつもは全然顔が見えないのに……少しぼやけて見える。

俺は目を凝らす、どうしてもボヤけてしまう。

――あれ、　　ちゃんどうしたの?

え、俺にちゃん付けって、まさか……。

そう思った瞬間、

「っあ!!はあ……ハア……ぐっ……ふう」

俺は現実に取り戻され、膝をつく。

「大丈夫、藤馬君!?

顔色が凄く悪いわ!」

ムギが心配して、声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だよ……」

「っ、でも「大丈夫だよ、ムギ。そんなに心配するなって」……うん」

ムギを落ち着かせた後、俺はさっき見た黒いアコギに近づき、しっかりと握る。

すると、ギターの弾き方だけじゃなく、何かが俺の中で解き放たれる。

そして、俺はギターを弾き始めた。

――演奏 ふわふわ時間くアコースティックver

なんだろう、何かが俺の中で変わった、いや、元に戻ったのかな……。

確かに、あの映像の中での呼び方は唯だった。

ということとは、俺は唯に会ったことがあって、なおかつギターを教えた……？

ますます、意味がわからん！

考え事していると、あっという間に演奏を終えた。

――パチパチパチパチ……。

するとムギが、拍手をして俺の手を取る。

「すごいわ、藤馬君！

いつの間にギター弾けるようになったの？」

「えっ、ああ、えっと、うん！

桜高に来る前に、ちよっとやってさ！」

「もう、何で言ってくれなかったの？」

あはははは、記憶喪失だからなんて言えねえ……。

「とりあえず、これを買って良いかな？」

「うん、どうぞ」

というわけで、クソ神印のポケットマネーを使って、ギターとその他もろもろ購入。

そういえば、現在時刻、何時なんだろう？

そう思って、携帯を見ると……。

「げっ！

律から電話とメールが来てるし！」

俺は急いで律にかけ直す。

「あ、もしもし、律？

すまん、すまん」「すまんじゃない！お前、ムギも一緒だろ？」

「まあな、それで用は何だ？」

「ああ、そろそろ楽器店から出ようぜ！」

「ハイハイ、すぐ行くからちょっと待ってるよ」

――Pi！

というわけで、ムギと一緒に楽器店から出る。

「ギターって重いなあ、あの三人はこんなものを毎日担いできてたのか……」

そりゃ、力が必然的に上がるよな。

「藤馬君、唯ちゃん達に失礼よ」

心を読まないでよ、ムギさんや。

「なっちゃん、遅いよ！」

つて、背中に担いでるのギター？」

「まあな、ギターを買っちゃいましたよ、中都さん！」

「先輩、お金大丈夫ですか？」

一人暮らしなんですよね？」

「大丈夫だ、問題ない。（実際はコウモリモドキがいるし、次狼達もときどきくるしな…）」

「何でギターを買ったんだ、藤馬？」

「藤馬君ね、アコースティックギターが弾けるの！」

ちょ、ムギさん、興奮しすぎ！

「え、藤馬ってギター弾けんのか！」

手先が器用だなあ」

こんな感じで話しつつ、暗くなってきた道を歩く。

そろそろ、夕飯の材料を買わないと。

「俺、そろそろ夕飯の材料を買い物しないと。

それじゃあ、また月曜日な！」

と律達に言う。

「ああ、また（ニヤリ）」

「うん、またね（ニコニコ）」

「それじゃ行こうか、律、ムギ（ニヤニヤ）」  
「うわあ、超怪しいし、気になるわ……。……」

つか、後ろのゆいあずもニヤニヤするなよ！

――

――

――

というわけで夕飯の買い物なのだが、どうしようかなあ……。……。

（コウモリモドキ、夕飯は何が良いかな？）

（うむ、そうだな……。トマト鍋なんてどうだろうか、次狼達も呼べば良い）

コイツが鍋にするって言ったときは、絶対にトマトだからなあ。

（まあ、それでいいけど……。たまには、トマトじゃなくて寄せ鍋にしようぜ）

（なっ、貴様は今、トマトを侮辱したな！）

（違いよ！）

トマトはいつもしてるから、たまには寄せ鍋も良いよなって言っただけだ、このトマト伯爵が！)

(わ、私をほ、褒めても何も出ないぞ!?)

(いや全然誉めてないし、むしろ、おちよくってるけど。わあったよ、トマト鍋にするよ!)

そんなわけで、買い物終了。

次狼達も、家にあらかじめ呼んでいた。

つか、次狼達呼んだのにまたトマト鍋か……。

まあ、二人(一人と一匹)で鍋するよりは、賑やかだから良いんだけど。

↓

――五分後

はい、マイハウスに到着しましたと。

家のドアの前で、片手の荷物を下ろし、ドアを開ける。

「ただいま」よっす、邪魔してるぜ」「……」

―― (@ @ ) ?

「憂ちゃん強すぎだよ、ボク何もしてないよ!」

「ラモン君が、弱いだけだよね……」「うう、憂ちゃんがいじめるよ、唯姉!」

「よしよし、良い子、良い子」

憂ちゃんとラモン、唯がゲーム。

「ど、どうですか、次狼さん？」

私の煎れた紅茶……？」

「ふむ、悪くはないが……もう少しだな」

「ムギ先輩、挫けないでください！」

「うん、そうよね、梓ちゃん！」

ムギが煎れた紅茶を飲む次狼。

そして、梓がムギを慰める。

「うん、じゃあここでどうだ！」

「チェック……メイト……律……負け」

「じゃあ、今度は私とチェスをしてくれ、リキ」

律とリキはチェス。そして、漣がリキにチェスを申し込む。

―― ヴェツ！？

俺は瞬時にテーブルを持ち、

「何やってんだてめえらアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

テーブルを思いっきり投げ飛ばした。

「…………ヴェツ!?」「…………」

「…………落ち着け（落ち着いてください、落ち着いて）藤馬（さん、先輩、お兄ちゃん）!!!!!!」「…………」

「落ち着いてられるか、このバカどもが!!!!」

「だいたいなあ、何で次狼達と、唯達がこんなに仲が良いんだよ!? それに唯達は、帰ったはずなのに何で俺の家にいるの!?」

俺の疑問を、四文字熟語で解決してくれ!!!!!!」

「理不尽すぎだろ「シャラップ、このバイオレンスカチューシャ娘!!!!」…………はい」

俺はこのあと、アームズモンスターと軽音部の皆にノンストップで突っ込んだ。

——しばらくお待ちください——

「…………ふう…………ふう…………」

あれ、俺は何してたっけ…………?

（ご飯はまだか、藤馬?）

あ、ごめんな、コウモリモドキ。

俺は、トマト鍋を作る準備を始める。

うん、そういえば、

「何でみんな、魂が口から出そうになっているんだ?」

「…………お前のせいだ、お前の!!!!!!」「…………」

ヴェツ！！そうなの、次狼さん！？

さっきのわけを聞いてみると……軽音部の皆が俺の家に泊まりに来たのだが、当然鍵は空いておらず立ち往生を食らっていた。

それを見かねた次狼達が家に招き入れ、遊んだり、お茶飲んだりしていくうちに仲が良くなった、という感じ。

↓

――

――一時間後

「えゝこの度は、心配かけてすみませんでした。  
今日は、飲んで食って、めいっばい楽しんでください！

それではっ、かんぱーい！」

『かんぱーい！』

はい、というわけで皆でトマト鍋ですたい。

「あっ、律！

それ、私の鶏肉だぞ！」

「ふっふっふ、甘いすわよ、みおちゅわん」  
「ふっ、ならお前も甘いな、律」

「あつ、次狼さん！　あたしのウインナー取らないでください！」

「りっちゃんの敵、取らせてもらいます！」

「いつけー、ムギちゃん！」「次狼も大人気ないな」

はあ、随分と騒がしいことで。

キャベツを口に入れながら、思わずため息をつく。

「どうしたんですか、藤馬先輩？」

いや、何でもないよ、梓。

リキがじゃがいもを物欲しそうに見ているので、とってあげた。

「ほら、じゃがいもだ、リキ」

「ありがとう……藤馬……」

いやいや、気にすんなって

すると、梓と憂ちゃんが俺をジーンと見てくる。

な、なんか怖いな…。

「な、何かな、二人ともそんなに睨んで？」

「「い、いや、ついではしいなあゝって／＼／＼／＼／」」

はあ、この二人は妹キャラだな、本当に。

俺は二人の皿を取って、鍋の具材をとる。

「ほい、憂ちゃん。ほい、梓」「あ、ありがとうございます／＼

／／／  
「むう…良いなあ」

本当に、この二人は癒されるよね。

なんか、横から凄い嫉妬の視線が来るけど、気にしないよ。  
そして、次狼とラモンは何でニヤニヤしてんの？

はい！

夕飯も食べて、お風呂に入りましたよ！  
ちなみに、次狼達は帰って、軽音部の皆は唯の家の風呂に入りました。

「つか、マジで俺の家に泊まるのかよ！？」

「うん、そうだよ！」

いやいや、唯に言われると何も言えないんですけど。

とはいっても、結局は年頃の男と女。  
部屋は別れますよ、もちのろんで。

そのことを伝えると、皆不服そうにして、ブーイングを食らった。

あーうるさい、うるさい、家からつまみだすぞ？

というわけで、おやすみなさーい（・・・）zzzz

l  
l  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

小休止　乙女心！！（前書き）

今回は藤馬が寝ているころ、女子はどんな事をしていたのか？……  
という話です。

それでは、小休止　どうぞ！！

小休止　乙女心！！

――三人称 side

藤馬がぐっすり眠っているころ、隣の部屋では……？

「それじゃあ、電気を消すぞ」

そう言つて、漑が電気を消して布団に入る。

他の皆も布団に入った……ここで終わったら、良かっただろうに。

――数分後

「なあみんな、恋ばなしようぜ」

と、急に律が楽しげに言う。

布団に入って、まだ数分しか経ってないので、皆起きて律の方を見る。

「いきなりどうしたんだ、律？

好きな人でも出来たのか？」

と、漑が冗談で言つたのだが……。

「おう、あたしは藤馬の事が好きだ！／＼／＼／」  
律はちよつと赤らめながら、そう宣言した。

「はいつ！？」

梓と漑がすつとんきような声を出す。

「だ、だって、初めて会った私を、怪人から助けてくれたし……ヴ  
アイオリンも上手いし……／＼／＼／」  
律が軽く、キヤラ崩壊を起こしていると、

「わ、私も藤馬君の事が好き！／＼／＼／」  
ムギも、顔を赤らめながら告白した。

「ム、ムギちゃん！？」

「だって、藤馬君の事が凄く心配だし、藤馬君と話すだけで、幸  
せになれるもの／＼／＼／……」  
ムギが幸せそうに言う。

「唯ちゃんだって、藤馬君の事が好きでしょう？」

「え、わたし！？……うん、わたしもなっちゃんの事が好き、いや、  
大好きだよ！／＼／＼／」

ムギに言われ、自分の気持ちに気づいた唯。

「なっちゃんがギターを持ってくるって言ったとき……すごくカッ  
コ良かった。それに、なっちゃんの音楽が好きなんだよね！えへへ  
／＼／＼／」

と、唯が好きになった理由を暴露する。

この時点で澪は、顔がトマトみたいに赤くなって、爆発。  
すると梓も覚悟を決めたのか、枕に顔を埋まらせながら、

「わ、私だって、藤馬先輩の事が好きですっ！／＼／＼／」  
と、告白した。

「あ、梓ちゃんもなの!？」

「へっ、もしかして……憂も？」

「あっ……うん／＼／＼」

顔を赤らめながら、初々しく返事する二人。

恋は人を大胆にさせる、というのは本当らしい。

まあ、澪のような例外もいるが……。

「それじゃあ、あたしたちは明日からライバルだ!」

「ライバル……良い響きね」

「皆には、なっちゃんを譲らないよ!」

「わ、私だって、藤馬さんは誰にも譲りません!」

「むう、先輩達に憂がライバルか……頑張る!」

なにやら、凄い状況になってきましたね、読者の皆さん……。

そのあとは、恋ばなに花を咲かせ、キャッキャッしていた。

三十分ぐらい、恋ばなをしていると……。

「なあ、皆で藤馬の寝顔を見に行こうぜ(ニヤニヤ」

律が、いたずらっ子のような笑みをしながら言う。

「面白そうだね、りっちゃん!」

「私もそう思う」

「藤馬の寝顔……／＼／＼／」

「藤馬先輩の寝顔かあ……可愛いかも」

「藤馬さんって、どんな寝顔なんだろう？」

天然フラグメーカー（藤馬）、爆発しろby作者

――隣の部屋

「うん、やめろ……律、ヘッドロックは……ムギさん、お茶が美味しいです……むにゃむにゃ……憂ちゃんの味噌汁、旨し……梓のネコミミ、GJ……唯、足はそっちに曲がらん……漣、萌え萌えキュン……」

どんな夢見てんだよ、主人公……。

l i t o b e c o n t i n u e d ?

第一樂章 第二十四幕 遊園地、そして……前編！！（前書き）

今回からシリアスに突入します。

初のオリジナル長編ですが、頑張っていけますよ！

それでは第一樂章 第二十四幕、どうぞ！

第一樂章 第二十四幕 遊園地、そして……前編！！

――藤馬 side

うーん、何か暑苦しいな……。

そう思い、目を開けてみる。

すると、俺の視界に飛び込んできたのは……。

隣の部屋で寝ているはずの、女子の皆さんの寝顔でした。

――(。°) what's!?

思わず、俺は枕に顔を埋まらせる。

どういうこと！？確か昨日は鍋して、風呂に入って、この部屋で寝たはずだ。

……はっ！

まさか、俺が連れ込んで無理矢理××な事を……？

いやいや、それはないよ！！

俺はそんな、最低な変態さんじゃないぜい！

確かに皆に変態だ、って言われたけどさ……。

でも、俺はそんな奴じゃないはずだ！

そんな感じで、布団の上でゴロゴロと悶える。

うん、視線を感じるぜ？

そう思つて、周りを見ると……。

「「「「「ジ」」」」」

普通さあ、ジーって声に出さないよね？

つか、こんなことを考えてる場合じゃない！

俺はすぐにJUNPING土下座へとシフトチェンジすると、

「すんませんしたあああああ！！！！」

「「「「「（（（えつ、何で？」」」」」

（（（えつ？

ちなみに、皆が居た理由は、俺の寝顔を見ていると、いつの間にか寝ていたとの事。

＼（（（／なんてこつたい……。

――

――

――三時間後

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、桜が丘にある、とある遊園地の入口に來ています。なぜ、遊園地に來ているのかというと……。

今日はもう、ゆっくりするかな。ゆ、遊園地に行かないのか！  
？by 澪 えっ、遊園地に行くの？ うう、何で私の行きたいところは行かないんだ、藤馬のバカ！（涙目 泣つかした、泣つかした by 女子の皆さん くっ、行ってやるよこの野郎おお！！

というわけで、身支度を済ませ、遊園地に來ていますよ。

何か、はめられた気がしてならないんだけどね！

「はあ、今日も振り回されるのかなあ……」

まあ、怪人とストリートファイトよりはましだけど。

ちなみにムギと梓は、用事があって來れないため、悔しそうにしました。

それにしても……。

「なあ、律？」

「ん、何だよ、藤馬？」

「……澪の奴、遅くね？」

唯がもう來てるのに、澪が來てないのはあり得ない……」

そっ、まさかの言い出しっぺが來ていない。

つか、律は家が近いんじゃないの？

「ああ、そうなんだけど、漣の奴まだ準備できてなかったら、置いてきこったてへっ」

テヘツ、じゃないでしょうよ……律さん。

すると、

「あつ、漣ちゃんが来たよ、こっちこっち〜！」  
と、唯が言つて漣に手を振る。

「ごめんな、準備に手間取っちゃってさ」  
漣が謝りながら、こちらに走る。

「うわあ、漣ちゃんの服、可愛いね！」唯が漣の服を見て言う。

「あつ、もしかして勝ブーガスツ！！」  
「……何でもないです」

確かに漣に似合ってるよなあ〜。

え、どんな服着てるのって？  
読者の皆さんの、賢い頭脳でご想像ください。

「よしっ、それじゃ皆揃ったことだし、しゅっぱ〜っ！」  
律がそう言つて、遊園地に入る。

それに続いて、俺達も遊園地に入る。

「ほえ、すごいなこりゃ」

中に入ると、数え切れない数のアトラクションが目に見え込んできた。

ここの遊園地は、そこらへんの遊園地よりアトラクションが多い。

さて、どこから行こうかね。

パンフレットを見て、どこに行くか決めようとしたら……。

「まずは、ここだろ！」

そう言っただけで指差したのは、この遊園地で一番デカイ、ジェットコースターだった。

すると、唯が目をキラキラさせながら、

「りっちゃん、りっちゃん、早く乗ろうよ！」

と、テンションMAXだ。

まあ、良いんだけど…… 澪がダメなんだろうなあ。

そう思い、澪の方を振り返ると……。

「り、律、あんなの絶対に無理、無理、無理！」

案の定、澪は体をガクガク震えながら、必死に拒否する。

何か、デフォルメ化してるよ、澪さん。

しゃあない、一肌脱ぎますか。

「なあ、唯と律の二人でジェットコースター行ってこいよ。俺は、  
漣と二人で待つてるから」

まあ、女子一人を待たせるわけにはいかないよね。

と、思っていると……。

「「な、何ですと!」」

急に唯と律の二人が、漣を連れて内緒話を始めた。

――読者の皆さんにだけ、三人の内緒話を公開します――

「漣ちゃん、なっちゃんと一緒にジェットコースター乗りたくない  
の!？」

「はっ、藤馬と一緒に!」

「そうだが、みんなで藤馬と一緒にジェットコースター乗ろうぜ!」

「う、うん、そうだな、よし、行くぞ!」

――終了――

どうやら、話は終わったようだ。  
何やってたんだろうな？

「さて、それじゃ行こうか!」  
律がそう言って、ジェットコースターに並ぶ。

え、漣は良いの？

そう思つて、漚の方を見ると……。

「ふっふっふ……大丈夫だ、問題ない（、ゝゞ」とか、敬礼しながら言つてますけど、大丈夫じゃないよね、これ……。

というわけで、乗りました。

ちなみに右から、唯、律、俺、漚という席順。

（その時の一部始終）

「ひやつほおおおおおおお！……！」 律

「いっええええええええい！……！」 唯

「いや、やつぱり無理、無理、助けて藤馬つ、あああああああああああ……！」 藤馬の首を絞める漚

「いやっほおおおおおおおーガシッ！……えっ、ちよっ、おまつ、あああああああ……」 余りの力に気を失つた藤馬

うう、酷い目にあつた。

ま、まさか、ジェットコースターに乗っただけで、命の危機が訪れるなんてな……。

「ほ、本当にごめん、藤馬！」

澪が必死に謝ってくる。

なに、俺はなにもしてないのに、この罪悪感？

「そんなに謝らなくても大丈夫だから、な！」

とりあえず、次行こう、次！

というわけで、次のアトラクションに行こうとしたのだが……。

「「っ！！」」

久しぶりに、ファンガイアが出てきたけど、まさか……。

「わりい、トイレにちよつと行ってくるわ」

そう言っつて、俺はファンガイアが居る方角へ走る。

（ここら辺だが……不味いな、人の目が多すぎるぞ！）

そう、ファンガイアが居る場所は、ヒーローショーが行われているエリア。

子連れの人達で溢れていて、とてもじゃないが、テレビ等に出ているキバに変身出来ない。

（ちっ、どうする……このままじゃ、不味いけど身動き出来ない！）  
そう思い、ファンガイアのいる方角を見るが、ファンガイアの姿はない。

（藤馬、奴は恐らく、姿を隠せるタイプのファンガイアだ！）

なら、お前の感知で場所が分らないのか？

（……無理だ、私でも分からないな）

コウモリモドキと策を練りながら、ヒーローショーのステージを見ると……。

ステージに居る人物の上に、ファンガイアが使う、牙のようなものが浮いていた。

「……っ、不味い!?」俺は人を退けながら、ステージへと走る。

しかし、休みという事もあり余りにも人が多く、上手く前へと進めない。

やばい、このままじゃ……くそっ、そんなのさせるかよ！

ードスッ!!

「ああああアアああああ!!!!」

しかし、時すでに遅しのように、また俺は人を救えなかった。

――NOW LOADING――

――???side

藤馬の居るところより、少し離れた場所。

そこに、十代後半ぐらいの少女が居た。

「ふん、あれが中都藤馬か……弱そうだなあ」

少女は、ペットボトルの中のジュースを飲みながら、そう漏らす。

すると、少女のペットボトルに蟹のような生物が映る。

「ああ、ちょっと待っててねボルキャンサー、もうすぐだから……」

そう言っ、四角いケースの様なものを取り出す。

「ああアアアアああああ!!!!!!」

少女は、ライフエナジーを吸われた男を見て、楽しそうに笑みを溢した。

I  
I  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第一樂章 第二十五幕 遊園地、そして……後編！！（前書き）

どうも、私こと388859です。

シザースの容姿は、ISのボクっ娘のシャルです。

大事な事なので二回（ry。

それでは、第一樂章 第二十五幕どうぞ。

第一楽章 第二十五幕 遊園地、そして……後編！！

――三人称 side

「ああああああああああ………」

ステージに居た男の、ライフエナジーがみるうちに吸われ、身体がガラスのように変わっていく。

ここに居る、すべての人が目の前の非常識に目を奪われていた。

そして、男のライフエナジーが尽き、

――ミシ、ミシミシ、ミシミシミシ……パライイイイイン！！！！

ひとつの生命が、消えた。

その場は一瞬静まり、

「い、いやああああああああ！！！！」

誰が言ったかは分からない。いや、その場に居た全員がこう思っていただろう。

――ここに居たら、みんな殺される。

藤馬が気付いた頃には、周りに誰も居なかった。

「あ……ああ……つくそつ、何処だよ！

正体を現せ、この卑怯者！」

藤馬がそう叫ぶと、

ーバシッ!!

「かはっ!」

藤馬の顔に衝撃が走り、地面をゴロゴロと転がる。

すると、ステージの一部分が歪み、カメレオンを模したファンガイア、カメレオンファンガイアが現れた。

「貴様：人間ごときが、ファンガイアを侮辱するな……」  
「どうやら、さっきの藤馬の言葉で激怒しているようだ。」

カメレオンファンガイアはゆっくりと、藤馬に近づく。

一方、藤馬は攻撃を受けた場所を擦りながら立ち上がる。

「何度でも言ってやる、てめえは臆病者だ!

だから……俺が倒してやる、コウモリモドキ!」

そしてキバットを呼び、左手で掴む。

「私もお前の意見に賛成だ……ゆくぞ、ガブリ!!」「っ!!」  
キバットを右手に噛ませ、全身に《魔皇力》が流れる。

すると、藤馬の顔にステンドグラスの模様が浮かび、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」  
そう言って、キバはカメレオンファンガイアへと突っ込む。

「なにっ、人間がキバの鎧を使うだど!？」  
カメレオンファンガイアは、藤馬がキバである事に動揺して、キバの接近を許してしまった。

「おらあっ!!」  
キバは、そのままカメレオンファンガイアの顔を掴み、地面に叩きつける。

「ぐっ、動揺している場合ではないな……」  
カメレオンファンガイアは、地面を転がり、そのまま姿を消す。

「逃がすかよ、この野郎!!」  
キバはドッガフェッスルを抜こうとした。

その瞬間、近くの窓ガラスから、蟹の怪物、ボルキャンサーが飛び出して藤馬を吹き飛ばした。

「ごはっ!……な、何だ、怪人……?」

「失礼だなあ、僕のボルキャンサーは怪人なんかじゃないよ?」  
突然聞こえた声に、キバは声のした方向を向く。

すると、そこにいたのは……。

メタリックオレンジがメインカラーで、蟹を模したライダーだった。

「もしかして……ライダーか？」

「そうだよ、僕はシザース、仮面ライダーシザース」  
ライダー……シザースは楽しげに言う。

ーードゴッー！

「グハッ、な、何だ、お前は！」

キバが叫び声のした方向を見ると、ボルキャンサーがカメレオンファンガイアを、押さえつけていた。

「あ、ボルキャンサーはそいつをお願いね、僕はこの人と話があるから……さて」

そう言つて、シザースがこちらに向く。

「ちょ、ちょっと待てくれ！助けてくれたのは良いんだけど、あのファンガイアを倒さないと！」

確かに藤馬の言う通り、相手はファンガイア。

怪物一匹程度で倒せない……と、藤馬は思っていた。

しかし、目の前の非常識はアッサリと覆さる事になった。

ボルキャンサーが持ち前の鉄で、カメレオンファンガイアの身体を掴み、

「や、やめてくれ……頼むから……」

二体一緒に、窓ガラスへ吸い込まれた（・・・）。

「……へっ？」

藤馬は、思わず間抜けな声を出してしまった。

まあ、驚くのも無理はないだろう。

ミラーモンスター、簡単に言えば、鏡の世界の怪物。ミラーワールド

非常識にある程度慣れた藤馬でも、窓ガラスに怪物が吸い込まれる、という事態には驚かざるをえない。

藤馬が目の前の出来事に驚いていると……。

「よし、邪魔者も消えたことだし……」

そう言つてシザースは、鋏のような武器、シザースバイザーで、

ーズバツー!!

「……うあつ!?!」

「殺し合いといこうか」

キバの胴体を斬りつけた。

キバはゴロゴロと地面を転がりつつ、その勢いで素早く立ち上がる。

「てめえ、いきなり何するんだ!?!」

キバがシザースに質問する。

すると、シザースは首をかしげながら、

「え、何つて……君を殺すために、送り込まれたライダーだけど、

僕？」

「な、何で、そんなに平然としてるんだよ！」

シザースの余りに平然とした声に、キバは驚く。

最初に送り込まれたレンゲルの時は、まだ倒す（・・・）だった。だが、シザースはレンゲルとは悪い意味で違う。

今までと全く違うタイプの相手に、キバは動揺していた。

「さて、あんまりよそ見しない方が良いよつと！」

そう言つて、キバにシザースバイザーを もう一回ぶつける。

キバは、それを右手で防御するが、無手と武器では部が悪い。

キバの右手を弾かれ、無防備な体にシザースの膝がめり込み、そのままシザースバイザーをキバの顔にぶつける。

キバは後退りながら、ガルルフエッスルを抜き取って、

「ぐっ……くそっ、これでどうだ！」

「《ガルルセイバー！！》」

キバットに吹かせ、キバはGキバへとフォームチェンジした。

「ウアッ！！」

Gキバは、持ち前のスピードでシザースに突っ込み、ガルルセイバーで斬りつける。

シザースは華麗に避けながら、カードデッキからカードを取り出し、シザースバイザーに入れる。

「《STRIKE VENT》」

バイザーから電子音声が鳴ると、シザースの腕にボルキャンサーの鍔、シザースピンチが装着される。

「っ!?!……くそっ!」

突然現れた武器に驚きながら、攻撃の手を緩めないGキバ。

しかし、シザースはシザースピンチとバイザーでガルルセイバーをはさみ、そのまま投げ飛ばした。

再び武器がなくなったGキバに、バイザーとピンチの連続攻撃が叩き込まれる。

「ガキッ、ガキッ、ガキッ、ズバツ!!」

地面を転がり、Gキバはヨロヨロと立ち上がりながら、ガルルセイバーを急いで拾い上げようとするが……。

「シャアッ!!」

「くそっ……退けよ、この蟹野郎!」

ガルルセイバーの前に、ボルキャンサーが立ち塞がる。

Gキバにとって、今の状況はかなり不味い。

Gキバは、この状況を打開する策を考えながら、後ずさる。

「こんなに弱いなんて、つまらないなあ。」

あ、そうだ、ボルキャンサー！」

シザースは何かを思い付いたようで、ボルキャンサーを呼ぶ。

その間に、Gキバはガルルセイバーを拾う。

「……うん、そうだよ、彼を呼んできてね！」

シザースがそう言うのと、ボルキャンサーはミラーワールドへと入った。

「何のつもりだ、お前は？」

Gキバは警戒しながら、シザースに聞く。

「別に、何も考えてないよ？」

ただ、状況を面白くしようと思っただけ」

そう言つて、しらばづくれるシザース。

それに痺れを切らしたのか、Gキバはガルルセイバーをキバットに噛ませる。

「《ガルルバイト！！》」

ガルルセイバーに《魔皇力》が流れ、切れ味が何倍にも膨れ上がる。

すると、周りの景色が満月の夜へと変わる。

Gキバは、ガルルセイバーを口に加えると、そのまま狼のように走り出す。

対してシザースは、何もせずただ突っ立っているだけ。

その姿を見て、Gキバは走った勢いで一気に飛び上がり、そのまま

斬りつける!!

《ガルルハウリングスラッシュ!!》

シザースまであと少し、というところで。

《BURNING SHOT!!》

ーパンツ、パンツ、パンツ……ドドンッ!!

「…………ぐああっ!!」

突然、放たれた数発の炎の弾丸に、Gキバはもろに吹き飛ばされ、変身解除されてしまった。

「ふうゝ今のは危ねえぞ、シザース？」

そう言っただけ現れたのは、基本カラーは銀と赤で、複眼は緑色のライダーだった。

「悪いね、でも君なら出来ると思ったよ、ギャレン」

シザースが笑いながら、ギャレンに謝る。

「それで、ターゲットは殺れたか？」

ギャレンが、倒れている藤馬を見ながら言う。

「まあ、そう焦らない、焦らない

やっと、奴が言っていたターゲットを見つけたんだよ……って、あらあら」

そう言ったシザースの視線の先には……。

「……はあ……はあ……ぐっ……うあ……あ……」

荒々しい息をしながら立ち上がる、紫色に目を光らせた藤馬だった。

「藤馬、おい藤馬！」

キバットが藤馬に呼び掛けるも、荒々しい息を繰り返すだけで返事をしない。

実は、ギャレンの《BURNING SHOT》の弾丸を紫のメダルの力で防いでいた。

しかし、最初しか防がれておらず、結局かなりのダメージと、紫のメダルの力の負荷も負ったので、戦える力は残っていない。

「……奴って誰だ… 答える……」  
途切れ途切れに藤馬は質問する。

「はっ、答えるわけないだろ？」  
ギャレンがそう答える。

「良いよ、教えてあげる…… 奴っていうのは僕達を送った人で、僕達はちよつと特別なんだよね」  
シザースはギャレンと違い、すんなりと答えた。

「おい、シザース！  
なぜ、敵にそんなことを教える？」  
ギャレンがシザースに聞く。

「……別に理由はないよ」  
シザースが楽しげに言う。

「そうか…… なら…… お前らを…… たお…… し……」

ードサッ……。

そう言って、藤馬が倒れた。

「中々、根性がある奴だったな……」  
ギャレンはそう言つと、踵を返した。

「あれ？

彼を殺さないの？」

と、シザースがギャレンに聞く。

「そのコウモリに言つとけ、今回は見逃してやるってな」  
ギャレンはシザースに言つと、その場を去った。

「はあ、でも中都藤馬か……ちょっと面白いかも」  
そう言っつて、キバットに伝言を伝えに行った。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 第二十五幕 遊園地、そして……後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「最近は負けすぎじゃない、マジで？」

だって、最初からチートじゃつまんねえじゃん？

藤馬「確かにそうだけど……」

大丈夫だよ、その内勝てるさ、主人公（笑）。

藤馬「うう、グレてやりたい……」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

**第一楽章 第二十六幕 恐怖を捨てて……前だけを！！（前書き）**

どうも、毎度私こと388859です。

今回はサブタイトルの方が悩みましたwww

後、刺客ライダーのリクエストがあれば、感想をお願いします。

それでは第一楽章 第二十六幕どうぞ！！

第一章 第二十六幕 恐怖を捨てて……前だけを！！

――藤馬 side

はあ……また、負けちった。

シザースとギャレンに負けてから、月日は一ヶ月以上経って二学期も、もうすぐ終わる。

あの後も、色んなライダーと戦った。

……その度にシザースとギャレンが現れ、ボロボロになって負けた。

恐らく、奴等は手を組んでいるのだろう。

バカな俺でも、いい加減に分かる。

今のままじゃ、アイツ等には勝てない、いや、何時か殺されてしまうことに……。

最近じゃ、アイツ等が現れたら、体が恐怖で震えて動かなくなる。

俺も、本能的に感じているのだろう。

死にたくない、だから逃げたい……と。

そんな俺に、コウモリモドキは心配してくれたのか、気持ち悪いくらい優しい。

本当に……自分の情けなさには嫌気がさす。

強力なキバの力を持っているくせに、何も出来ない自分が。

皆を守るとか言っておきながら、結局は誰かを守れていない自分が……。

「馬……藤馬……」

もう、逃げ出したかった……どんなことから。

「おい、藤馬……!」

ふと顔をあげると、律の顔がドアップで見えた。

俺は内心ドキッとしながら、律に聞く。

「あ、ごめん、ごめん、それで何?」

「お前、練習の途中なのに……最近何か、おかしいぞ?」  
律に合わせて、他の皆も俺に聞いてくる。

「確かに最近、なっちゃんがぼーっとすることって多いよね?」

「いつもの元気も無いし、藤馬君らしくないわ」

「何かあつたんですか、藤馬先輩？」

「まあまあ、皆少しは落ち着け」

そう言つて、漣が皆を落ち着かせる。

すげえ、かつこわりいなあ……俺。

実はこんなことがもう何回も起きている。

俺が練習中にぼーっとして、足を引っ張りまくり、その度にこんな感じになる。

「いい加減、何でぼーっとしてんのかぐらい教えろよ、藤馬？」  
律がやれやれといった感じで聞いてくる。

「別に……ただ考え事してただけ」  
そう言つて、俺は近くの椅子に座る。

すると、梓が俺の目の前に来て、

「藤馬先輩……いい加減にしてください！  
皆、藤馬先輩の事を心配してるんですよ……！」  
と、怒鳴つた。

その時、俺の中で何かがキレた。

「……ざけんなよ、てめえら……人の気持ちも知らないで……」  
自分でも分かつていた。

俺が全部悪いし、コイツらは何も悪くない。  
それでも……やってしまった。

俺は立ち上がり、思ったことを言った。

「もう嫌なんだよ!!!」

何もかもが嫌で、嫌で、嫌でたまらない!!!

目の前で人が死んだり、自分が死にそうになったり、自分が無力に感じるのも……」

もう逃げ出したい、コイツらからも……。

俺はそのまま荷物を持って、部室から飛び出した。

――

――

――

もう最悪だよ……いろんな意味で……。

俺は今、河原に来ていた。

すぐ近くの石を拾い上げ、川に投げる。

そんなことをしても、気分が晴れるわけでもないのに、そうせずにはいられなかった。

はあ、何やってんだかなあ、ホントに……。

女の子に八つ当たりなんて最低だよな……。

アイツ等に何て謝ろうか……ははっ、何言ってた？

心配してくれたアイツ等にあんなこと言って、許して貰えるわけない……。

そうやって自己嫌悪に陥っていると、後ろで怪人の気配がした。

「ッ！……今は誰とも話したくないんだけど？」

後ろを向くと、クイーンのようなフードを被った女がいた。

「中都藤馬君、よね？」

「だったらどうするんだ？」

身構えながら、女に聞く。

「まずは自己紹介ね、私の名前はタブーって言います。

それで……貴方とちょっと、遊ぼうと思ってきたの」

そう言って、女、タブーは懷から銀色のドライバーと、金色のUSBメモリを取り出した。

そして腰にドライバーを巻き、USBメモリをのスイッチを押す。

「《TABOO!!》」

電子音声が発せられ、タブーはUSBメモリをドライバーに挿した。

その瞬間、体に変質し……怪人、ドーパントへと姿を変えた。

――NOW LOADING――

――三人称 side

タブーが怪人化し、空中に浮く。

するとタブーの手が輝きだし、赤いエネルギー弾を作り出す。タブーはその赤いエネルギー弾を、

「ふうう……ハアッ!!」

藤馬に投げつけた。

藤馬はスグに走りだし、赤いエネルギー弾の範囲から逃げようとする。

ードンッ、ドンッ、ドンッ、ドゴッ!!

「……ぐあッ!」

しかし、赤いエネルギー弾が藤馬のすぐ後ろの地面に着弾し、藤馬はその衝撃で地面に倒れこむ。

「……あれ？」

キバに変身しないの、藤馬君？」

そう言つて、タブーは再びエネルギー弾を作り出す。

藤馬は立ち上がりながら、タブーに言う。

「ははっ……それじゃ、ご期待に答えて……コウモリモドキ!!」

藤馬がキバットを呼び、掴む。

「はぁ……お前は相当怪人に愛されてるな……ゆくぞ、ガブリ!!」  
「っ!!」

右手をキバットに噛ませ、藤馬の全身に《魔皇力》が流れる。

すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

今回は、最初からキバットにバッシャーフエッスルを吹かせている。

「《変身!!》」

藤馬はBキバへと変身した。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」  
そう言っ、バッシャーマグナムをタブーに連射する。

「ふふ、そうこなくちゃね」

対して、タブーはエネルギー弾を一発放つ。

数発の水弾と、エネルギー弾がぶつかり合い、相殺する。

Bキバのバッシャーマグナムは、連射性能は優れている。

しかし、威力がやや不足しており、タブーのエネルギー弾に数発撃たなければ、相殺できない。

よって、必然的に……。

「あらあら、逃げてるだけじゃ……意味ないわよっ！」

タブーがエネルギー弾を二発放つ。

Bキバはエネルギー弾を避けながら、水弾を撃つ。

しかし、タブーは水弾を避け、またエネルギー弾を放つ。

このように、圧倒的にBキバが不利だった。

Bキバはエネルギー弾を回避し、一旦タブーとの距離を開ける。

そして掌から魔皇力を全開にして、疑似水中空間で水球を作り出し、  
アクアフィールド

「……いけっ!!」

ーードゴッ、ザバアアアッ!!

水球を地面に叩きつけ、そこから大きな津波がタブーへと襲いかかる。

「さすが、藤馬くんね」

でも……ハアッ！」

そう言つて、タブーは今までより大きいエネルギー弾を津波にぶつける。

津波はタブーの攻撃で崩され、水がタブーにかかる。

――これで終わりじゃないでしょ、藤馬君？

その瞬間、周りの景色が半月の夜へと変わった。

そして竜巻が起こり、緑色の渦々しい程に巨大な水弾が作り出される。

どうやら、キバは一気に勝負を決めるようだ。

「ふふふふ、なら……」

そう言つて、タブーはエネルギー弾を……

――パキパキパキ……

「あらあら……やるわね」

作ろうとしたが、手が凍っており、作れなかった。

Bキバの紫のメダルの力で、タブーにかかった水が瞬時に凍ったのだ。

Bキバは竜巻の中で紫に複眼を光らせながら、

「ウオオオオオオアアアアアアアアアア――！」

バツシャーマグナムの引き金を引き、緑色の冷気を纏った弾丸を放つ――！

《バツシャーマイストルネード――！！》

――ドキュウン――！！

ドパアアアアン――！！

弾丸は着弾し、勝負は決まったはずだった。

しかし、そう簡単に勝負は……。

ーパキパキ……バキイイイン！！

「……ふう、涼しいわ」

ーー終わらない。

「な、何で、平気なんだ……？」

Bキバが、目の前の状況に啞然とする。

自身の必殺技に、メダルの力の上乗せ。

今までも、この身体に極度の負担が掛かる無茶で、色んな危機を乗り越えてきた。

だが、事態はBキバの思うより深刻なものだった。

ーバリ、バリバリバリ……！！

「あうっ！……ぐっ……あ……うあ……」

突然、Bキバの体から紫の火花が飛び散り、変身が解除された。

それを見たタブーは、驚くべき事実を言った。

「このままメダルの力を使えば……貴方はすべてを失うわ、藤馬君」

「……どういう意味だ、タブー？」

紫に目を光らせながら、藤馬は立ち上がる。

「貴方だって、気付いているでしょう？」

メダルの力を上乗せをする度に、暴走しそうになる自分が？」

「……っ!？」

そう、タブーの言う通り、実はメダルの力を使う度に、藤馬は暴走しそうになる自分を抑えていた。

だが、そう簡単に抑えられるものではなく、さっきのように変身を解除しないと止められない。

「もし……貴方が暴走すれば、貴方の大切な人達も傷付ける事になるわ……」

「でも……「でもじゃない!!」……ッ!!」

タブーが地上に降りて、ドーパントから人間に戻る。

「貴方には!……貴方には、大切に思ってくれている人達が、どれだけ居ると思っているの!!!」

少なくとも、軽音部の皆は貴方の事を……誰よりも大切に思っているわ!!!」

（……何でだ、なんでだろう？  
タブーの姿と……）

――だから、私にとって藤馬君達は……。

（ムギの姿が被ってしまうのは……）

――かけがえのない人達なんですよ

タブーは藤馬に近づいて、藤馬を優しく抱きしめる。

「今の藤馬君は……恐怖しかありません。

恐怖は生きている証拠……でも、誰かを守りたいなら、恐怖を捨てて前だけを見て。

だって……貴方は大切な人を護ると誓ったのでしょ？」

恐怖は捨てる……言うのは簡単だが、実現は難しい。

しかし……人はふとしたきっかけで幾らでも強くなれる。

「……ああ、そうだったな……ありがとう……」

藤馬がそう言うと、タブーが離れる。

「いえいえ、また何時か……会えると良いですね」

そう言って、タブーは姿を消した。

「藤馬……私は先に戻っているぞ……」

キバットが気をつかつて、先に家に戻る。

そして、藤馬はその場に寝転んだ。

（タブーの言う通りだよな……皆には内緒だけど守る、いや護るって誓ったんだ……怖がってどうするんだよ、俺）

空はもう暗くなっており、星が出ている。

（何がなんでも……皆を護って、この手を届かせる、そして……）

藤馬は自分の体の中にある、コアメダルに問いかける。

（お前の力……絶対に使いこなしてみせる……）

満天の星空の下、青年は自分の魂に誓った。

――NOW LOADING――

――廃工場

なんのへんてつもない、普通の廃工場。しかし、今ここはシザース達、ライダーのアジトになっている。

そして……。

「さて……皆ちよつと集まってくれない!」

シザースが近くの椅子に座りながら、そう叫ぶ。

すると、他のライダー達がシザースの前に、続々と集まってきた。

「え〜と……よしよし、皆集まったね!

それじゃあ、今回集まってもらったのは……」

そう言つて、六枚の写真を出す。

その写真には軽音部の女子メンバーと、憂が写っていた。

「この写真の子達で、ターゲットと最期の遊びをしようと思つてね

」

シザースは心底愉しそうに笑つた。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 第二十六幕 恐怖を捨てて……前だけを！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「本当にタブーとか、クイーンは何者何だろうな？  
めっちゃくちゃ強いし……」

それは二期の中盤か、終盤らへんでわかるよ。

藤馬「ふうん、そういえば……リクエストを取るんだよね？」

ああ、リクエスト良いですか？……ていう質問があったから、取り入れようと思ってな。

藤馬「というわけで、気軽にリクエストしてください！」

お願いします！

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

**第一楽章 第二十七幕 因縁との決着!! (前書き)**

どうも、私こと388859です。

すいません、更新が遅れました！

それでは、第一楽章 第二十七幕どうぞ!!

## 第一章 第二十七幕 因縁との決着！！

――藤馬 side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

昨日の事もあって、少しは気分とか色んなものが楽になった。

今日は軽音部に行きたかったが、昨日のタブーとの戦いで疲れたので、サボった。テヘッ

はあ、やっぱりゴロゴロするのって最高だよな

「何で、そんな急に元気になったのか知らんが……まあ、良しとしよう」

こまけえこたあいんだよ、コウモリモドキ！

とまあ、こんな感じで休みを満喫しようと思ったのだが、そんな簡単に休みをエンジョイ出来る訳もない。

「「っ！！……はあ」」

……こんな時に出る怪人は、爆発した方が良いよな？

「私もそう思うぞ……よし、行くぞ！」

俺達は家を飛び出し、怪人のいる場所へと走り出した。

平沢家の窓に写った、ボルキャンサーに気付かずに……。

――NOW LOADING――

――三人称side

一方、軽音部のメンバーは……。

「「「「「はぁ……」「」「」」」」

全員がお通夜モードに入っていた。

それもそうだろう、好きな男の子に拒絶されたのだから。

恋する乙女には、何よりも辛いだろう。

まあ、当の本人はもう機嫌を直し、今頃怪人をフルボッコしている頃だろうが……恋する乙女達は知るよしも無い。

「すみませんでした、私のせいで……」梓が申し訳なさそうに言う。

「そんな……梓ちゃんのせいじゃないわ!」  
ムギが梓の言ったことを否定する。

「でも……わたしが……ヒクッ……グズッ……藤馬……先輩を……苦しめて……本当に……ごめんなさいっ……」  
梓が席を立つて、泣きながら謝る。

すると、他の四人も席を立ち、皆で梓を抱きしめる。

そして、梓に一言ずつ告げる。

「梓が悪いわけじゃないよ……アタシだって、藤馬を傷付ける事を言っただけ」

「私も、藤馬君の悩みに全く気づけなかった……」

「私も……藤馬の事は、何もわかっていなかったなあ……」

「だからね……あずにゃん、皆でなつちゃんに謝りに行こうよ、ね!」梓は四人の言葉を聞いて、涙を拭く。

そして、顔を上げて……。

「……はいっ!」

とびっきりの笑顔で答えた。

「よしっ、そうと決まれば……今から藤馬の家に皆で行くか!」  
と、律がテンションMAXで言う。

「ちょ、ちょっと、律!

練習はしないのか！」

漣がそう言って、律を止めようとするが……。

「さすがりっちゃん！」

それじゃ早く行こうよ、ほらあずにゃん！」

「はいっ!!」

「私も、行きたい行きたい！」

こんな感じで、一気に藤馬の家に行くことになっている。

「はぁ……結局こうなるのね」

皆が元気を取り戻し、これで解決したと思われた……しかし、

ーヒュン……。

近くの窓ガラスから仮面ライダーシザースが現れ、こう告げた。

「そんなことより、僕と遊ぼうよ」

運命は、他人の意思とは関係なく、最悪の方向へと向かっていく。

「かかか鏡から、かかか仮面ライダーが出てきた!……きゅう」  
目の前の非常識に着いていけず、漣は気絶してしまう。

「み、漣先輩!？」

梓が駆け寄り、漣を支えるがそのまま倒れた。

「ほ、本物の仮面ライダーだよ、りっちゃん！」

「お、おう、そうだな唯！」

あ、一緒に写真撮りませんか？」

「私も私も」

この三人は平常運行のようだ。

すると、シザースはバイザーをなぞりながら……。

「さて、中都藤馬との遊びの為に……」

ーートン……。

「あうっ！……」

「眠ってもらおうよ」

そう言っつて、シザースは梓に手刀を入れ、梓を背負う。

「梓！！……ちょっと、何するんですか！！」  
律がシザースに問い詰める。

「そんなに手間を掛けさせないでね……」

ーブッ!!

ーNOW LOADINGー

ー藤馬side

「セイヤアアアアアア!」

《ダークネスムーンブレイク!!》

ドスッ、バゴオオオオオン!!

怪人を蹴り倒し、変身を解除する。

「はぁ、貴重な休みが消化された上に、かなり疲れた……」

（私も疲れたな……今日の夕食はトマト料理を頼む）

（自分で作りやがれ、クソコウモリモドキ）

くだらない事に意志疎通を使いながら、家に向かって歩き出す。

しかし……。

（っ!……不味い、学校の方からシザースの気配がするぞ!）

自分でも気配を感じたが、不思議と最近感じていた恐怖は無い。

ははっ、タブーには感謝しないとな。

俺は、直ぐに学校に向かって走り出す。

ミラーモンスターについては、コウモリモドキから聞いた。

学校には部活をしている生徒が居る……シザースがいるとなれば、ボルキャンサーもいる。

もしかしたら、ボルキャンサーの食糧目当てかもしれない。ーパン、パン、パン、パン……！

ふと聞こえた銃声に、俺は身体を横に転がす。

「すまんなあ、シザースに足止めを頼まれたんでな……」  
そう言つて、ギャレンが現れる。

ちっ、ギャレンの野郎か……。

「コウモリモドキ……！」

「ああ……ゆくぞ、ガブリ……！」  
すると、ギャレンが俺を見ながら、

「ほう、中々の面構えになったな……何かあったか、中都藤馬？」

「まあ、ちょっとな……」こは通させてもらつぜ、ギャレンー!」

「《变身!ー!》」

俺はキバに変身して、

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!ー!》」

ギャレンとの戦いに身を投じた。

――三人称 side

ギャレンが銃、ギャレンラウザーを腰にかけ、キバと肉弾戦に持ち込む。

ギャレンが拳を顔に突き出し、キバがそれを流しながら、カウンタ―を放つ。

しかし、ギャレンはキバのカウンターをそのまま受け、腕を掴み近くの壁に叩きつける。

本来なら、キバの方がスペックは上だが、ギャレンの融合係数が非常に高く、性能が倍以上に上がっていた。

キバは立ち上がり、ギャレンの側面に回り込んで、攻撃する。

この一ヶ月、藤馬は色んなライダーと戦い、タイマンなら勝つことが多かった。

しかし……その中でも、このギャレンとシザースは格別に強く、ずっと負けていた。

ルークと同等、とまではいかないが、それでもキバよりは強い。

ーパンパンパン……！！

「ぐあっ……！」

ギャレンラウザーの弾を受け、吹っ飛ぶキバ。

ボロボロの体に鞭を打ち、ヨロヨロと立ち上がる。

「確かに、面構えは変わったが……所詮は雑魚だな……」

そう言っで、ギャレンはキバに一気に近づき、膝蹴りを叩き込む。

ードッ……！！

「っ……ぐっ……だからって……」

キバは、叩き込まれたギャレンの膝を掴む。

すると、キバの複眼が紫に光り、メダルの力を解放する。

「……こんなところで、負けらんねんだよおおオオオオ……！」  
そのまま、ギャレンの無防備な体に拳のラッシュを放ち、最後に殴り飛ばす。

ーバキイツー！

「がはっ！……一体どこにこんな力が……ッ！」

ギャレンがキバを見ると、キバの様子がおかしい事に気付いた。

なぜなら……。

「ウウ……くっ……」

ーピキ……ピキピキピキ……。

キバの鎧にヒビが入り始めていたからだ。

本来なら、混じり合うことの無いキバとコアメダル、二つの力を無理矢理混ぜている……その代償で、負荷が藤馬だけでなくキバの鎧にもあった。

そして力を封印しているキバでは、その負荷に耐えきれず、崩壊を始めていた。

「ぐっ……ウオオオオオアアアアア……！！！！！」

ーダンッ、ドゴッ……！！

キバが地面がめくりあがる程の力で地面を蹴り、ギャレンへと飛び蹴りを放つ。

ギャレンは両腕で防御するも、威力を殺しきれず、そのまま横に転

がる。

「ちつ、暴走しかけてやがるな、仕方ない……」

ギャレンは左腕に嵌めてある、ラウズアブソーバーから、《QUEEN》を取り出してインサートリーダーにセットする。

「《Absorb Queen》」

そして、《JACK》のカードをラウズする。

「《Fusion Jack!!》」

その瞬間、ギャレンの体に《JACK》の絵柄が吸い込まれる

そして、体中に金色の装飾があらわれ、背中にオリハルコンウィング、ギャレンラウザーに格闘専用のディアマンテエッジが付属する。

ギャレンは、ジャックフォーム（以降「ギャレン」）へと強化変身した。

キバはそれを見て、フェッスルを三本抜く。

こちらも強化変身するようだ……しかし、

「藤馬、もう良い……もう止める！

今の状態でのドガバキは危険すぎる……！」

キバットの言う通り、このままだとキバは自滅するだろう。  
キバもそれを悟ったのか、フェッスルを一本だけ吹かせる。

「《ドッガハンマー!!》」

キバはDキバへとフォームチェンジした。  
しかし、キバの鎧の崩壊はさっきより進んでいる。

Dキバはそのまま、ドッガハンマーをキバットに噛ませる。

「《ドッガバイト!!》」

ドッガハンマーに《魔皇力》が伝達していく。

その瞬間、周りの景色が朧月の夜へと変わった。

ドッガハンマーの柄を地面に叩き付け、拳の握り目が開き、  
トゥルーパーアイ 真実の目が見えてくる。

一方のJギヤレンは、ギヤレンラウザーからラウズカードを引き抜き、ラウズする。

「《Fire Drop》」

ラウズされたカードの絵柄が、Jギヤレンに吸い込まれる。

「はああ……ふっ!!」

Jギヤレンはオリハルコンウィングを開き、空へと飛ぶ。

空中の電気エネルギーを吸収し、そのまま炎を纏った両足蹴りを放つ!!

《BURNING SMASH!!》

Dキバも、トゥルーアイの冷気を伴う魔皇力を発し、技を放った「ギャレンの動きを止める。」

そして、落雷エネルギーを纏ったオーラを、「ギャレンに振り下ろす!!!」

「ムウウウウン!!!」

《ドッガサンダーブリザードスラップ!!!》

ドゴッ!!!、バリバリバリバリ……!!!

「ちっ…やっかいだな……!!!」

「ウオオオオアアアアア!!!」

二つの技がぶつかり合い、その余波でコンクリートで出来た道路をみるみるうちに削り取る。

しかし……キバの鎧の崩壊がどんどん進んでいくDキバの技と、ダメージを受けたが、まだ余裕がある「ギャレンでは……」。

「ーバリバリバリバリ……ピキ、ピキピキ……ピキッ!!!」

Dキバの拳のオーラが、徐々に破壊されていく。

「これで、終わりだ……中都藤馬あ……！」

事実Dキバは、もうメダルの力は使えなくなっており、キバの鎧も崩壊寸前。

「くそっ……こんなところで……」

――やっぱり、俺じゃダメだったのか……。

Dキバがそう思ったときだった。

「……ぐう……藤馬、しっかりしろ……！」

貴様は何時だって、どんな状況でも諦めなかっただろう……！」

「っ……！……グウ……」

（そうだ、俺は昨日誓ったじゃないか！ 皆を護るって……）

――この手を、皆に届かせるって……！！

その瞬間、拳のオーラが雷と冷気を纏いつつ再形成され、

「むっ？……不味いつ！？」

そのまま、「ギャレンごと地面に叩きつける……！

「ウオオオオオオアアアアアアア！……！！」

ドゴツ、バゴオオオオオオオオオオオン！！！！！！

――NOW LOADING――

――藤馬Side

「じぼっ……はぁはぁ……ぐっ……」

吐血しながらも、俺はしっかりと立つ。

ギャレンは変身が解け、倒れている。

俺はフラフラとギャレンの元へと行き、ギャレンの脈をはかる。

良かった、生きてる……。

幾らなんでも、目の前で死なれたら困るもんな……。

そう思うと体から力が抜け、膝から倒れこみそうになった。

すると、何処からか現れたフードを被った女に抱き支えられる。

「全く……キミはいつも無茶をしすぎだよ？  
本当にヒヤヒヤしたなあ」

ははっ、誉め言葉をどうも……クイーン。

クイーンに抱き支えながら、俺は話しかける。

「あのさあ……彼処にいる奴を「助けて欲しい」でしょ、わかってるよ」「……ありがとう」

ああ……眠い……な……おやすみ……。

俺はそのまま目を瞑り、眠ろうとした……その時。

「うん、おやすみ……なっちゃん」

えっ、どう……いつ……こ……と……。

俺はそのまま気を失った……その時の俺は凄く満足そうな顔をしていたらしい。

↓

↓

―――廃工場

――ヒュン……。

窓ガラスからシザースが飛び出し、地面に降り立つ。

「よつと……到着！」

すると、シザースの近くに一人の男が寄り、こう告げる。

「シザース……ギャレンがやられたようですよ？」

「えっ、それ本当なのガオウ？……やられちゃったんだ、ギャレン……まあ、彼は足止めだったし、消えないから別に良いんだけど……あ、そうだ！」

そう言つて、シザースは男、ガオウの方に向く。

「ギャレンが帰ってきたら、最期の遊びの事……言つていてね」

「わかっていますよ……それでは」

ガオウが廃工場から出ていく……そして、シザースはある場所を見つめる。

そこには、シザースによって眠らされた軽音部のメンバーと憂が、ロープで縛られていた。

「後、もう少しだから……待っててね、皆……そして」  
シザースは顔を歪ませながら、

「君達を巻き込んで……ごめんなさい」

涙をボロボロと流し、謝った。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 第二十七幕 因縁との決着!!（後書き）

藤馬「駄文なのに、更新が遅れるなんて……潰すぞ、作者……ああん？」

さーせんしたあああああ!!!

だから……頭をグリグリしないでえええ!!!

藤馬「ふう………これからは気を付けろよ？」

Yes , sir!!

全員「それでは次回をお楽しみに!!」

**第一楽章 第二十八幕 ギャレンの涙！！（前書き）**

どうも私こと388859です。

三万PVを越えました！！

皆様のお陰です、ありがとうございます！

それでは、第一楽章 第二十八幕どうぞ！

第一楽章 第二十八幕 ギャレンの涙！！

――憂side

「うう……ん……あれ……ここは何処だろう?」

私は目を開け、周りを見渡します。

何処かの工場みたいだけど……腕はロープで固く縛られてるし。

確か、さっきまで家の掃除をしていた……そしたら、急に気を失っちゃって……あつ！

「お、お姉ちゃん！それに梓ちゃんや皆さんまで！」

皆、ロープみたいなもので縛られてて、気絶してる……。

とりあえず、私は皆を起こすことにしました。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん！！」

梓ちゃん、律さん、澪さん、紬さん！！皆さん、起きてください！！

「ううん……ういゝ……ごはん」

お姉ちゃんは、こんな時にご飯の夢を見ないで……！！

「つまり……皆さんは仮面ライダーに気絶させられて、ここに連れて来られたんですか？」

「うん、そうなんだ、憂ちゃん」

藤馬さん以外に、仮面ライダーが居るのはわかっていたけど、悪者だったなんて……。

でも、何で私たちをさらったんだろう……。

何か恨まれる事でもしたかな？

「ああ、お腹がすいて力が出ないよ……」

「アタシもお腹空いた〜、なんか食わせろー！」

「お前達はアンパンマンか……」

「でも、お腹は空いたわね……」

スゴいなあ、お姉ちゃん達。

こんなときでも普通に振る舞ってるもん。

「いや、無頓着なだけだと思うけど……」

へっ、そうなの、梓ちゃん？

「全く……君達はさらわれているのに、何でそんなに冷静なのかな？」

そんな声が聞こえると、窓からオレンジ色の仮面ライダーが飛び出してきました。

つて、窓から飛び出してきた！？

「ああっ！？」

お前はさっき私達をさらった奴！」  
律さんが、仮面ライダーを見てそう言います。

この人がお姉ちゃん達を……。

「何で……私達をさらったんですか？」  
紬さんが落ち着いた声で質問します。

スゴいなあ、紬さん……凄く落ち着いてる。

「簡単に言うと中都藤馬で遊ぶため、そして君達はその遊びに必要な道具だね」と、仮面ライダーは楽しげに言います。

「……………っ！？」

な、何で藤馬さんがこんな時に出るんだろう……？

「とりあえず、静かにしてね？  
そうじゃないと……」

仮面ライダーはベルトからカードを取り出し、腕の機械に入れました。

「《STRIKE VENT》」

すると、何処から現れた鍔のようなものが、仮面ライダーの腕について……。

「……こうなるよ？」

ードゴンッ！！……ミシ、ミシミシ……。

そのまま地面に叩きつけ、地面には亀裂が走ります。

あの攻撃が人に当たったら……そう思うと、寒気がします。  
皆もそう思ったのか、さっきから口を閉じています。

「よし、それじゃ静かに待っててね」

仮面ライダーは、また窓の中に入っていました。

私たち、どうなるんだろう……藤馬さん……。

私は、心の中で好きな人の事を呟きました。

――NOW LOADING――

――藤馬side

――声が聞こえる。

――おい、小僧……名前は？

そう言つて、コウモリモドキが名前を尋ねる。

――はあ、俺は　　だ。

お前は確か……コウモリモドキだよな？

――誰がコウモリモドキだ、小僧！

私は誇り高きキバツト族の、キバツトバツトII世だ！！

「何か……懐かしい夢を見た気がする……」

最近は、記憶の逆行なんて全然無かったのにな……。

あの後、どうなったんだろう？

俺は頭だけを動かし、周りを見渡す。

どうやら家の中のような。

隣にはギャレンがぐっすりと寝ている。

それにしても、このぐらいで済んで良かったな。

全身が軋んでるけど……入院するほどじゃないしな。

と、包帯で巻かれた部分を見ながら思っていた……すると。

「…何を勘違いしている、充分に重傷だぞ？」

コウモリモドキがヒラヒラと跳んできて、俺の頭に乗る。

え、いつもよりはマシだろ？

「バカ藤馬が……キバの鎧は崩壊寸前、ハッキリ言って一ヶ月は使えん、それに……」

そう言つて、俺の頭から目の前に移動する。

「メダルの力は危険すぎる……このままでは何時か、お前の身体が本当に壊れるぞ？」

そうだな……これからは気を付けるよ。

「はあ……お前の約束は一番信用が出来ん……」

自分でも薄々気付いてたよ。

「うう……ここは何処だ？」

どうやら、ギャレンが起きたようだ。

「ここは俺の家だよ、ギャレン」

「そうか……何故だ？」

うん、何がだよ？

「お前を一ヶ月の間、ずっと殺そうした俺を……なぜ助けた？」

コイツも、レンゲルと同じタイプなのかな？

「……だからどうした？」

俺がお前を殺す理由は無いら……第一、誰かを殺して幸せになんかなれるわけねえだろ、バーカ」

俺がそう言つと、ギャレンは笑みを溢す。

「ふつ、貴様の馬鹿さ加減には呆れたな……」

誉め言葉をどうも。

「ていうか、お前は他の奴とは違って消えないな、何で？」

前に戦ったレンゲルみたいに、変身を解除しなくても消える奴は居ただけだ。

「ああ、実はな……俺とシザース、後はガオウという奴も俺と同じで、負けても消えない」

そういえば……一ヶ月前にシザースがそんな事を言ったな。

「何で消えないんだ？」

お前達はレンゲルと同じで、変な男から俺の抹殺を頼まれたんだろ？」

負けたら用済み……それがコイツらを送った奴の考え……だが、

「少し違うな……厳密に言えば、俺達は奴の仲間に自ら望んで……」  
「なった」

……はあっ！？

「お前……自分が何言ってるのか、わかってんのか！……」  
俺がギャレンの胸元を掴む。

すると、ギャレンが悲しい雰囲気醸し出す。

「ああ、わかってるさ。」

でもな……俺だって、好きでこんなイカれた事をやってるわけじゃない」

そう言っつて、俺の手をどける。

「藤馬……少しは落ち着け、話が進まないだろう？」

……わあっ たよ、コウモリモドキ。

「続けるぞ……俺とシザースはある日、奴に家族を人質にとられ、そして体を弄られた。

アイツ等の言う通りにすれば家族を解放する、そう言われてな」

そう言っつて、ギャレンは着ていたＴシャツを捲る。

するとそこには、何かに切られたような跡が数え切れない程あった。

酷い……シザースにもこんな傷が……。

「……だが、俺はまだ良い」

そう言っつて、ギャレンは拳が白くなるほど握る。

「シザースは……身体を弄られたせいで、家族から化け物呼ばわりされた。

それでも……アイツは人質にとられている家族を、救おうとしている。

やりたくもないことを、遊び（・・・）と称してやり続けている。

おそらく、遊びっぺ思いこまなければ、精神が狂っぐらい辛いんだろっ」

「そっちはよろしくね、僕はこの人と遊ぶから！」

シザースに、そんな辛いことを一ヶ月もさせていたのか……。

思わずバカな自分を殴りたくなる衝動を抑えつつ、ギャレンの話を聞く。

「だが、最近シザースは狂い始めている……このまま遊び（・・）を続ければ、精神が崩壊するだろうな……」

ギャレンはそのまま、俺の方を見る。

「中都藤馬……お前には本当に申し訳ない事をした。

謝っても、謝っても、謝りきれない……ッ……ぐらいの事を……お前にしてしまった。

そんなお前に、頼み事なんて……ぐっ……馬鹿げてるとしか……思えないっ……」

ギャレンは身体を震わせながら、悔しげに涙を流す。

「自分が……無力だった……一人の女の子を……助ける事も出来ず、慰める事も出来ず……見ていることしか出来なかった……ッ……表

では笑顔で話しながら……影では……助けを誰よりも求めていたはずなのに……自分が……誰よりも……アイツの……近くにいた……はずなのに……くそっ……くそっ……くそっ……」

そう言ってギャレンが俺の身体を掴む。

「頼む……アイツを……シザースを……助けて……やってくれ……」

はあ……コイツは……。

「とりあえず、落ち着け……ギャレン」

そう言って俺は、ギャレンの手を離れさせる……そして。

「全く……そんなもんを知らんぷり出来る程、俺はバカじゃないんでね……とりあえず、傷を先に治さねえとな……」  
そう言って、俺は布団に寝転んだ。

「ありがとっ……本当にありがとっ、藤馬……」

「キャラが崩壊しすぎだ、気持ち悪いぞギャレン……」

まあ、そう言っちなよ……コウモリモドキ。

「そういえば……俺は、あれからどれだけ寝てたんだ？」

なぐんか忘れてるような……？

「約三日だな……二人とも疲労が溜まっていたんだろう……」

「三、三日だと！？……不味い！」

そう言って、ギャレンが家から飛び出そうとする。

しかし、それを俺が止める。

「離せ！……俺は戻らなければならないんだ！」

「待て待て待て待て、何でそんなに急いでいるんだ？」

l l P i P i P i P i

俺がそう言つと、携帯から着信音が鳴る。

とりあえずディスプレイを見ると、唯からだった。

何の用事だよ、こんな時に……。

そう思いながら、電話に出てみる……すると。

「もしもし、中都藤馬で合ってるよね？」

……シザース!?

「てめえ……何で唯の携帯を持っていやがる？」

少なくとも、コイツは唯の事は知らないはずなのに……。

「そんなの決まってる……君の大切な人たちを、僕が誘拐したんだよ」

「なんだとっ!？」

達つて事は……唯以外にも誘拐しやがったのか、くそっ!

「何で誘拐した?……唯達に関係ないだろ？」

「奴からの命令だよ……そろそろ遊び(・・)を終わらせろってね、ほら……聞いてみる？」

シザースがそう言うと、誰かに代わる。

「ごめん、藤馬……皆捕まっちゃった」と、律が暗い声で喋る。

俺は悔しさで、拳が白くなるほど握る。  
くそっ、助けに行かなきゃ……。

「藤馬……別に、アタシ達の事は助けなくても良いよ」

……はあっ！？

「何言つてんだ、絶対に助けてやる！  
だから大人しく「…だって」……」

律が嗚咽を漏らしながら……喋り始める。

「藤馬が……ここに来たらっ……殺されちゃう……藤馬が……死ぬなんて……そんなの……皆……見たくないよおっ！！！」  
そう言つて、皆が泣き始めた。

すると、またシザースが話し出す。

「というわけで、場所はそっちに送るから……それじゃ（絶対に助けてあげてね）……」

ーブツンッ！……ツー、ツー、ツー……。

くそつたれが、シザースの野郎……。

「自分が一番……助けて欲しいと思つてくるくせに……見栄張りやがつて……」

携帯を閉じると、俺は直ぐに服を着替えて、体に巻かれた包帯を千切る。

傷はまだ、全然治っていない。

――だからどうした？

そう思いながら、家を出ようとする……しかしギャレンが俺を遮る。

俺はギャレンの腹に思いっきり拳をぶちこみ、

「ぐっ……無理だ、危険すぎる……」

「知るか、ボケ」

怯んでいる隙に、指定された場所へと向かい始める。

――

――

――

（コウモリモドキ、あと、どんぐりの距離だ！）

（おい藤馬……ハッキリ言って今のお前だと死に行くようなものだぞ！）

わかってるさ……。

（わかってない！

そもそもキバには変身が出来ないんだ、どうやって助ける！！）

.....。

（第一、相手が多すぎる.....少なくとも十人以上はいて、その中でもお前と同じ強さの奴とそれ以上が一人ずつ居るんだ！！

どうやっても勝てないぞ、また小娘供を悲しませるつもりかっ！！）

コウモリモドキの言う通りだ.....このまま戦っても殺されるのがオチ。

キバに変身できても、人数の差で負けるだろうな。

だけどさあ.....それでもよ。

「それでもっ！！！！！」

（っ！！）

立ち止まり、俺は叫んだ。

「確かに、今だって死ぬのが怖くて怖くて、逃げてえよ！.....でもな」

「ーそっ...か...ぼく.....は.....しぬ.....んだ...ね.....」

「ー助けてくれて、ありがとうな。」

俺の脳裏に、レンゲルや今まで救えなかった人達の顔が浮かぶ。

そして……。

――よしっ、漣のいちごもーらい

――ちょっと律、私の苺返せ！

――はいどうぞ藤馬君、ケーキ

――唯先輩、猫耳はしまってください！

――ええゝあずにゃんのいけずゝ。

アイツ等と過ごした日々を思い出す。

「それでも！

やれることはやらなきゃ絶対に後悔する！！！！！！」

（藤馬……）

「だから俺は……絶対に逃げない！！！！」

そう叫んで、また俺は走り出した。

I  
I  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

**第一樂章    第二十九幕    そんなの関係ない!!（前書き）**

どうも、私こと388859です。

この長編も今回も含めて、後三話です！  
最後までお楽しみください！

それでは、第一樂章    第二十九幕をお楽しみください!!

第一楽章 第二十九幕 そんなの関係ない!!

――三人称 side

シザースが藤馬に電話してから、かなりの時間が経ったが……藤馬はまだ来ない。

「中都藤馬は来ないねえ、どうしようかガオウ？」  
シザースがそう言っ、ガオウに聞く。

「そうですね……試しにこの中の一人を殺してみますか、例えば……」

ガオウが、唯達を値踏みするように答える。

そして、律の目の前に来て……。

「……この子とかどうでしょう？」

「ちょっと待ってください、何で律を殺すんですか……やめてください！」

漣が辞めるように説得する。

「そうです、りっちゃんは殺させません！」

「りっちゃんは私達の大切な仲間です！」

「律先輩は大切な軽音部のメンバーなんです！」

「み、皆……ありがとう……」

律が感動していると、ガオウはとんでもない事を言ってきた。

「はあ、見苦しいですね……この期に及んで友情ごつことは……全員、喰い殺したくなってきましたよ？」

「ちょ、ちよつと、ガオウ！……幾らなんでも、それは不味いでしょ！」

流石にシザースが止めにかかる。

「うるさいですね……貴方も喰い殺してあげましょうか？」

そう言うのと、ガオウの腰に炎と共に黒いベルトが巻き付く。

ベルトからパイプオルガンのようなミュージックホーンが鳴り響き、ガオウはマスターパスを頭上に投げる。

「《……変身》」

するとマスターパスが自動的にセタッチされる。

「《Gaoh Form》」

電子音声と共に、ガオウのフリーエネルギーが銅色のオーラアーマーに変換、装甲に装着される。

すると、電仮面が顔のレールを移動しワニの形に変形する。

体のあらゆる所に牙の装飾、その姿はまさに……牙の王。

「さて……どう喰い荒らしましょうかね？」

そう言つて、シザースにゆっくりと近づく。

「下がつて……まだ死にたくないでしょ？」

シザースは唯達を下がらせ、カードデッキを取り出そうとする。

しかし、後ろからライダーの一人が、シザースのカードデッキを奪い取り、突き飛ばす。

「ぐっ……何のつもり、ガオウ？」

シザースは体制を立て直しながら、ガオウに聞く。

「貴方はそろそろ、使い物にならなくなりそうですからね……私が喰い殺してあげます」

ガオウが、腰に付いているパーツを外し、組み立てる。

するとパーツは、フリーエネルギーを纏いながらガオウガッシャーへと形を変えた。

ガオウは、ガッシャーの感触を確認するように振り回す。

「さて、どうしよう……このままじゃ殺されちゃうな」  
唯達を庇うように、シザースは前に出る。

唯達は、今まで敵だったシザースがいきなり自分達を守ることになり動揺しているようだ。

「なあ、アタシ達を何で助けるんだ……？」

律が耐えきれなくなっただのか、シザースに聞く。

「そんなの、死んで欲しくないからに決まってるよ……それに」  
そう言つて、シザースが唯達を見る。

唯達は、シザースが振り返った瞬間に驚く。

なぜなら……。

「僕が君達を勝手に誘拐して、殺そうとした……許される事じゃないけど……本当にごめんなさい……」

シザースが静かに、笑顔で泣いていたからだ。

おそらく本人は気付いていない……それほどシザースは、自分のした遊び（・・・）に自責の念を抱いているのだろう。

「だから、今は安らかに……」  
「ートントッ……」。

「うつ……」

シザースが唯達に手刀を入れ、気絶させる。

しかし、そうしている間に十人のライダー達はライオトルーパーへと変身し、シザース達へと武器、アクセレイガンを構える。

そして、ガオウはガツシャーを……。

「じゃあ、さようなら……シザース」

シザースへと、物凄い速度で振りかぶった……。

運命は時々、一人では背負いきれない事実さえも、背負わせようとする。

それで……誰が悲しもうが、誰が死のうが関係なく。

だが……一生懸命抗い続ければ、いつかきつと……。

「そこまでだ！……！」

――運命は、ハッピーエンドへと変わる。

――ガキイイイッ！……！

ガオウガツシャーが、何処からか跳んできた青い剣に弾かれる。青い剣は瞬時にガルルへと姿を変え、ガオウを投げ飛ばす。

よく見ると、バツシャーとドツガも来ており、ライオトルーパー達を蹴散らしている。

そしてもちろん……。

「はあ……はあ……大丈夫か、あんた!!」

藤馬が荒い息をしながら、シザースに聞く。

「……………へっ?」

シザースは、思わず間抜けな声を出す。

「早くここから出るぞ……唯達を背負うの、手伝ってくれ!」  
そう言ってシザースを急かすが、シザースはぼーとしたままだ。

その瞬間、シザースの後ろからライオトルーパーが襲いかかる。

「何やってんだ、早く……危ねえっ!!」藤馬はシザースを突き飛ばし、脇腹にアクセレイガンの斬撃を受ける。

「ズバツ!!」

「っ……………くそったれ!!」

藤馬は脇腹から血を流しながら、ライオトルーパーを押さえつけようとする。

しかし、あくまでもライダーと人間。

ライオトルーパーの力に負け、逆に床へと押さえつけられる。  
逃れようと必死にもがくが、びくもしない。

「グヘヘ、観念しろ……お前はここで死ぬんだよ」  
ライオトルーパーが勝ち誇る。

その瞬間、藤馬はライオトルーパーの股を思いっきり蹴飛ばした。

「……ギャンツー！」  
踏まれた犬のような声を出し、悶える。

「はっはっはっはっはっ、ざまあwwwwww」  
ライオトルーパーを見下し、笑う藤馬。

主人公とは思えない、卑怯な奴である。

藤馬はそのままアクセレイガンを取り、それでライオトルーパーの鳩尾に何回も殴る。

ライオトルーパーはピクピクと痙攣し、気を失った。  
するとライオトルーパーから、シザースのカードデッキが転がり出た。

藤馬はそれを拾い、ポケットに入れる。

「あつ、唯達を運ばないと……」  
藤馬は、スグに唯を担ぐ。

「あ、あの……それ、僕の何だけど……」  
シザースがモジモジしながら言う。

「へっ……もしかして、あなたがシザース……さん？」  
藤馬がよくわからない口調で喋る。

それにシザースは首を縦に振り、肯定する。  
「というか、ギャレンの話を全く聞いてないのか、主人公？」

「はあああつ！？」

マジかよ……男だと思ってた……じゃあ、ほれ」  
藤馬は、カードデッキをシザースに投げる。

そしてここから脱出しようと、逃げ出す。

「ちょ、ちよつと待つてよ！

何で、僕の事を怒らないの？……君には、酷いことを沢山したのに……」

シザースが俯きながら、藤馬に言う。

「お前の事は、ギャレンから聞いたし……」「だったら……」「うん？」

シザースが身体を震わせながら、喋り出す。

「だったら余計に可笑しいよ……化け物の僕を……何で……何で……僕は化け物なんだよ！？……だから」

そして、シザースは手から血が出るほど握り、顔をぐちゃぐちゃにしながら……。

「家族を差し置いて……助かっちゃ……いけないんだよ……」  
涙がとめどなく流す。

シザースのそんな姿を見て、藤馬は……。

「そんなこと、俺には関係ねえよ……」

「へっ……？」

「お前を助けてくれ、ってギャレンから頼まれたんだ……アイツが、みつともねえぐらいボロボロ泣きながら……」

「あの……ギャレンが？」

シザースの問いに、藤馬は頷く。

「ああ……誰よりも近くにいたはずなのに、何も出来なかった……誰よりも助けを求めていたのに……そう言ってたよ」  
藤馬は唯を運びながら、話を続ける。

「そんなに頼まれたら助けるしかないでしょ……それに」  
するとシザースの方を振り向く。

「俺、バカだから……お前が普通の女の子とどう違うのかなんて、全然わかんねえしな……だから、俺がお前を助けてやる……」  
そう笑いながら言っ、再び走り出す。

その姿を見て、シザースはぼーっとしながらも……。

「ふふっ……あはははははははー!!」  
吹っ切れた様に笑い出した。

するとシザースはカードデッキを窓にかざし、ライダーに変身する。

そしてカードデッキから、カードを取り出しバイザーに入れる。

「《Adventure》」

電子音声と共にボルキャンサーが現れ、零と律、梓を背負う。

シザースも憂と紬を背負い、藤馬を追いかける。

「ふう〜、外に出れた……これでよし!」  
藤馬が工場の外に飛び出し、一息つく。

すると、近くの窓ガラスから……。

「ーフォン……」。

「あれ、随分遅かったね」  
シザースとボルキャンサーが、出てきた。

「て、てめえ!」  
ミラーワールドを使うなんてセコイぞ!」

藤馬が指をさしながら、シャウトする。

ていつか、女の子なんだから別に良いと思うが……。

「はいはい、とりあえず……どうするのこの子達？」

「ああ、それなら……おい！」

藤馬がそう言つと、銀色のオーロラが出現する。

その中から現れたのは……。

「全く、ちゃんとボディーガードぐらいしろよな……激安のバーゲンセールに行けねえだろうが？」

この世界の神だった。

「まあ、ケチケチすんなつて……それじゃ頼むぜ、クソ神？  
そう言つて、唯達を指差す藤馬。

神は腕を振り回しながら、

「じゃあ今度、お前の家の夕飯を分ける……それが報酬だ」と、カッコつけて言い放つ。

端から見れば、変人にしか見えない。

その証拠に、シザースと藤馬は五メートルぐらい神から離れている。

「はあ、お前はどれだけ金がねえんだ……わあつたよ」

頭をかきながら返事をする藤馬。

この時、神のテンションはMAXだったと言っておこう。

神は唯達をオーロラに入れると、そのまま消えていった。

「藤馬くん……さっきの誰？」

「聞かないでくれ……今、アイツと関わった過去の自分をぶん殴りに行きてえよ……」

そんなバカなやり取りをした時だった。

「くぐあああああああ……！！」

工場から次狼、リキ、ラモンがボロボロな人間の姿で転がってくる。

「おい、三人とも大丈夫か！？」

藤馬が三人に聞くが、すでに意識が無い。

「うーん、喰いごたえがありませんねえ……」ガオウとライオトルーパーが藤馬達の元へと来る。

「下がって……藤馬くんは、あっちを頼むよ？」

「……っ！？……ああ、分かった」

シザースはガオウ、藤馬はライオトルーパーへと向き合う。そして、藤馬はライオトルーパーと一緒に工場内へと消えた。

「へえ、化け物の貴方がターゲットを庇うとはね……」  
ガオウが近づきながら、シザースに言う。

「別に……僕の事は化け物で良いよ……でもね」  
そう言うと、シザースは一気に近づき、

「どんな化け物でも、大切な人達を守れるんだ！..」

ーガキイイイイイイン！！

そう叫ぶと、シザースがバイザーをガオウの顔に叩き付け、ガオウはそれを片手のガツシャーで防ぐ。

甲高い金属音が鳴り響き、ガオウはガツシャーを滑らせ、そのままシザースの腹を切り裂く。

シザースは下がりながらバイザーの無い腕で防ぐが、その威力に顔をしかめる。

（やっぱり、ガオウと僕じゃ力も経験も負けている……でも）

「ボルキャンサー！！」

シザースがそう言うと、ガオウの後ろからボルキャンサーが飛び出し、ガオウへと襲いかかる。

完全な死角からの攻撃……だったか。

「甘いですよ……ふんっ!!」

ーズバツ、ドゴッ!!

「ギギッ!？」

ガオウは、襲いかかってきたボルキャンサーをガツシャーで切り裂き、蹴飛ばした。

ボルキャンサーがゴロゴロと転がり、シザースの前で止まる。

「貴方の戦い方は把握済みです……モンスターを使つての奇襲もね」  
ガオウは後ろにある、ボルキャンサーが飛び出した窓ガラスを指差す。

シザースの戦術は、初見の相手にはかなり有利だ。  
普通、鏡から奇襲がくるなんて誰も思いはしない。

しかし今回は、さっきまで味方でさらには格上の相手。

ガオウの驚異的な戦闘センスも相まって、奇襲は通じなかったのだ。

シザースはボルキャンサーと共に、ガオウへと肉弾戦を挑む。

まず、シザースがバイザーでガオウの腕に攻撃する。

ガオウはそれを避け、後ろで鉄を振りかぶるボルキャンサーにガツシャーの柄で殴打する。

そしてシザースのバイザーを素手で掴み、

「だから言つたでしょう……あなたの戦術は把握済みだと」  
ガツシャーで何回も身体を斬りつける。

ーガキッ、ガキッ、ガキッ、ズバツ！！

体から火花を散らし、シザースは地面を転がる。

それから何回か立ち向かうが、一撃さえ入らない。

「うう……ぐう……」

シザースは呻き声を上げながら、バイザーにカードを入れる。

「《Strike Vent》」

電子音声と共に、シザースピンチが装着される。

「行くよ、ボルキャンサー！！」

「ギギッ！！」

今度は、別々の方向から同時に攻める。

その攻撃をガオウは冷静に見極め、捌く。

「何故、貴女はそこまで一生懸命になるんですか……ターゲットを殺せば、家族は戻ってくるんですよ？」

ガオウは質問をしながら、シザース達を一気に吹き飛ばす。

ードッ！！！！

「ぐあっ！！……はぁ……はぁ……」

シザースは地面に這いつくばり、荒い息をする。

「貴女が、ターゲットに何を吹き込まれたか知りませんが……好きでやってた訳じゃないですが、貴女の今までやったことは……帳消しにはなりませんよ？」

ガオウがガッシャーを振り回し、担ぐ。

「そんな……ことは……分かってるよ……」

シザースがヨロヨロと立ち上がりながら、言う。

「僕が……やったことは……許される……事じゃない……だけど……だから……といって……これ以上……罪を重ねて……良いわけが……ないっ……！」

シザースはカードを取り出し、バイザーに入れる。

「《Final Vent》」

「全く……貴女にも呆れたものですね」  
すると、ガオウもマスターパスをセタッチする。

「《Full Charge》」  
電子音声が鳴り響き、ガオウガッシャーにフリーエネルギーが流れる。

一方のシザースも必殺技の準備をするが……。

その前にガオウのガッシャーが分離し、そのままシザース達を切り裂く!!

「遅いですよ……喰い殺されなさい!!」

《タイラントスラッシュ!!》

ガッシャーがシザース達の目の前に来た瞬間、後ろにいたボルキャンサーがシザースを上 to 投げる。  
そして……。

ーギャリリリ、ズバツ!!!

ガッシャーがボルキャンサーに食い込み、切り裂いた。

「ギギッ、ギギギッ……ギギッ!!」

ーードゴオオオオオオオオオン!!

《タイラントクラッシュ》をともに受け、ボルキャンサーは爆散した。

「ボ、ボ、ボルキャンサー……!!!!」

シザースがボルキャンサーを呼ぶが……この世にはもう居ない。  
すると、シザースの姿がブランク体へと変わる。

「さてと……チェックメイト、です」

ガオウが、シザースを近くの壁に物凄い速度で投げる。

このまま当たれば、シザースは動けなくなるだろう。

(やばいなあ……死にたくないよお……)

シザースがそう思った瞬間、何かに抱き止められる。

そこには……。

「はあ……はあ……はあ……全く、無理しやがって」

ギャレンが、息を切らしながらシザースを受け止めていた。

「ギャ、ギャレン……」

「ほう……裏切り者が何のようです?」

ガオウが、ゆっくりとギャレン達に近づく。

「シザース……藤馬は?」

「藤馬くんなら、大丈夫だよ……でもどうしよう?」

はつきり言って、シザースは足手まとい。

ギャレンは傷が全く治っていない。

だが……。

「俺が時間を稼ぐ……その間に藤馬を連れて逃げる」

ギャレンがバツクルを巻き付け、ラウズアブソーバーに《QUEEN》と《JACK》をラウズする。

「《変身!!》」

「《FUJON JACK!!》」

一気に「ギャレンへと強化変身した。

「えっ、ギャレンを置いてそんなの出来ないよ!」

シザースの言う通り、ギャレンを置いていけば死は免れない。

しかしこのままだと、どちらも死んでしまう。

すると、「ギャレンはシザースの手を握り……。

「お前は今まで、誰よりも頑張ったんだ……少しは、俺にも見栄を

はらせる」

「ギャレン……分かった、でも死んじゃダメだよ？」

「わかってる……またな」

「うん……また！」

シザースは工場へと入っていった。

「それじゃあ……始めましょうか？」

「ああ……行くぞ！！」

二人は同時に地面を蹴り、武器をぶつけあった。

そのままつばぜり合いになる。

火花が飛び散り、甲高い金属音が鳴り響く。

「全く……なめられたものですね、ギャレン？」

「黙れ、倒させてもらっぞ……ガオウ！」

二人とも一旦下がり、「ギャレンがラウザーを撃つ。

ガオウは銃弾を剣で何発か弾くが、流石に弾ききれず体に受ける。  
「ギャレンはそのまま一気に近づき、ダイヤモンドエッジでガオウを切り裂く。

一方のガオウは直ぐに体制を整え、受け止めてから蹴りを入れる。

しかし、Jギヤレンは吹っ飛びながら、ラウザーで撃つ。

どちらの実力も、かなり拮抗している。

だが……。

「はぁ……はぁ……はぁ……ちっ」

Jギヤレンが腹を押さえる。

どうやら傷口が開き、激痛が走っているようだ。

その証拠に、身体がプルプルと震えている。

「どうやら、傷口が開いたようですね……一気に行きます！」  
ガオウは宣言通り一気に近づく。

それに気付いたJギヤレンが慌ててラウザーで撃つが、ガオウがス  
トップで華麗に避け、ガッシャーでJギヤレンが押さえていた場所  
を切り裂く。

「ぐう……くそっ！」

Jギヤレンがやけくそ気味に、ガオウをダイヤモンドエッジで斬り  
つける。

それをガオウは受け止め、さらに斬撃を入れる。

（やばいな……くそっ、ここまでか……）

「ギャレンが攻撃を受けながら、そう思っていた。

（全く、見栄を張ったのにこのザマとは……シザースはすげえな）  
「ギャレンはシザースの強さに驚いていた。

（そついえば、アイツには助けられてばかりだったな……まあ、最後に目の前でカッコつけられたから良いか……）

「ーガキンッ！！」

ガオウの攻撃を受け、ボロボロながらも立ち上がる「ギャレン。

「ぐはっ……くっ……」

「ギャレンは三枚のラウズカードを取り出し、ラウズする。

「《BULLET RAPID FIRE》」

「ギャレンは空へと飛び上がり、空気中の電気を吸収して、炎の弾丸を放つ……！！

「はあああああ……！！」

《BURNING SHOT！！》

一方のガオウも、マスターパスをセタッチする。

「《Full Charge》」

フリーエネルギーがガッシャーに伝わり、分離する。

そして、弾丸ごとJギャレンを切り裂く!!

《タイラントスラッシュ!!》

二つの技が激突し、エネルギーが地面をも傷付ける。

しかし、徐々にガオウが押していく。

(悪い、シザース……約束は無理そうだ……)

Jギャレンがそう思った瞬間、

ーガリガリガリガリ……バキヤツ、ズバツ!!!

Jギャレンのバツクル、そして身体を凶刃が貫いた。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 第三十幕 ゴールデン・フィーバー!! (前書き)

はいどうも、私こと388859です。

ついに来ましたよ、あのフォーム!

この話は、書いてて楽しかったですね。

それでは第一樂章 第三十幕、どうぞ!

## 第一楽章 第三十幕 ゴールデン・フィーバー!!

――三人称 side

「はぁ……はぁ……はぁ……何とかなったか、ふう」

そう言った藤馬の視線は、気絶しているライオトルーパーへと向けられる。

どうやら藤馬が勝ったようだ……すると。

「藤馬くん、大丈夫!？」

シザースが人間の姿で走ってくる。

「シ、シザース!?!……アイツは倒したのか?」  
藤馬がシザースに聞くが、首を横に振る。

「いや、倒せなかったんだけど、ギャレンが代わりに時間を稼いでくれてる……だから早く行こう!」  
シザースがそう言った瞬間、

――ガリガリガリガリ……バキャツ、ズバツ!!!

外から、何かが切り裂かれる音がした。

「っつ!?!」

藤馬達は直ぐに外へと飛び出す。

するとそこには……。

「へっ………？」

腹からおびただしい量の血を流した、ギャレンの姿だった。

シザースはフラフラと駆け寄り、膝をつく。

ギャレンは顔から生気が無く、目を閉じている。

藤馬も駆け寄り、ギャレンに問いかける。

「おいギャレン、しっかりしろ！……クソッ、コウモリモドキ、何とかならねえのか！？」

「無理だ……この出血と傷だ。

私ではどうにもなら無い……すまん」

「くそっ、またなのかよ……何でいつもこうなるんだ！？」

藤馬が悔しさの余り、地面を殴り付ける。

シザースがゆつくりとギャレンの顔を撫で、話しかける。

「嘘だ…嘘だよ……ギャレンが……ギャレンが…死ぬなんて……そ

んなわけ……ないよ……」

シザースは分かっていた。もう、ギャレンが間に合わないことに。

「約束……したじゃない……さっき……またねって……うつ……生きて……  
……帰ってくるって……ひぐつ……だから……」

シザースは分かっていた。あの約束が守れるものではないぐらい。

それでも……家族以外であんなに親しかったギャレンを、亡くした  
くなかった。

「目を……開けてよお……ギャレン……グズツ……お願いだから……お  
願いだから……死なないでよお……」  
シザースは分かっていた。泣いても、ギャレンが助からない事ぐら  
い。

それでも……シザースは、泣かずにはいらなかった。

そして、ガオウがこちらへガツシャーの切っ先を向ける

「さて……あなた達も、ギャレンの元へと連れて行ってあげましょ  
う」

「ああ……ああ……ああ……ああ……」

シザースの身体が恐怖で動かなくなる。

ギャレンが死んだことによって、シザースに死の恐怖が襲っていた。

ガオウはゆつくりと、だが確実にシザース達へと向かう。

「ちょっと待てよ、クソ野郎……」

その時、ガオウの前に藤馬が立ち塞がる。

「何も出来ないターゲットが……今頃になって何のようです?」

ガオウの言う通り、藤馬はキバに変身出来ない。

だが……。

「ギャレンが……アイツが命をかけたんだ……」ウモリモドキ!!」  
藤馬がキバットを呼び、掴む。

「どうするつもりだ、藤馬!?!」  
キバットが藤馬に問いかける。

「決まってる、もう一つあるだろ……とっておきのが」  
藤馬はもう一つのキバ、闇のキバに変身しようとしていた。

だが……。

「なっ、バカを言うな!!」  
変身を解除したら、今度はお前が死ぬぞ!!!!」

「だったらどうするんだよ!?!……このままじゃ皆死んじゃう……  
もう嫌なんだよ」

藤馬が顔をしかめ、叫ぶ。

「こんな奴等の為に……皆が傷つくのは!?!」

「藤馬くん……」

藤馬のそんな姿を見て、シザースは呟く。

藤馬の目が紫の色を帯びる。

「力が欲しい……もう誰も失わなくても済む……みんなを護れる力が、俺は欲しい……！」

（――欲しいかい？）

突然、藤馬の耳にそんな声が聞こえる。

「っ！？……誰だ！」

藤馬は周りを見回すが、声の主は居ない。

（俺の事はどうでも良いでしょ……それより欲しくないの、皆を護れる力？）

謎の声の問いに、藤馬は考え込む。

だが、今の藤馬に考えている暇など無い。

「もう待てませんね……さようなら」

そんな声と共に、藤馬へガッシャーを振りかぶるガオウ。

当然、反応出来ないはずだが……。

藤馬の体から五枚のメダルが飛び出し、二枚はガオウへと当たり、そして……残りの三枚は空へと消える。

藤馬は、今起こった出来事に驚いた。

（全く、少しは待てよな……あつ、どうするの？）

冷静になりながら、藤馬は考える。

（どちらにしたって、このままじゃ死んじゃうしな……よし！）

「欲しい……皆を護れる力が、俺は欲しい！！」

（良く言った！！……それじゃあ、その欲望……解放しろ）  
その瞬間、藤馬の身体が震える。

ーギヤオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

そして咆哮と共に、キャッスルドランが現れ、中から黄金色の光が吐き出された。

その光は、そのまま藤馬達の目の前に止まり、弾けた……中にいたのは。

「びゅんびゅん、びゅーん！！

このタツロット、ただいま帰還しました！！」

黄金の小さな竜、タツロットだった。

「……………はい？」

思わず間抜けな声を出す藤馬。

それに対し、キバットは……。

「おお、タツ坊じゃないか！

およそ一年ぶりだな、元気そうで何よりだ！」

「いえいえ、キバットさんと藤馬さんも元気そうで！」

めっちゃ、タツロットと話し込んでいた。

「あのさ、コウモリモドキ……「行くぞ、藤馬！！」……わあったよ」

藤馬がキバット達に説明を求めるが、キバットがそれを遮る。

一方のガオウは、メダルをやっと全部、薙ぎ払った所だった。メダルが自動的に藤馬の体へと戻る。

「ふっふっふっ、よくも小賢しい真似をしてくれましたね……喰い殺す……！」

ガオウが口調を変え、襲いかかる。

「そうはいかん、ガブリッ……！」

「っ……！」

藤馬はキバに変身する。

しかし、やはりキバの鎧は至るところがボロボロ。

「どうすんだよ、一発でも受けたらシメーだぞ……！」

「心配するな……久し振りに頼むぞ、タツ坊!!」

「ええ、了解です!!」

それでは、ドラマチックに行きましょう!!」

そう言つて、タツロットが鎧の拘束具<sup>カテナ</sup>を全て解放する。

すると、鎧から黄金の翼が開き、無数の蝙蝠が空へと飛び立つ。そしてキバは左手を真上へ上げ、紅い止まり木に<sup>バワールスロット</sup>タツロットが填まり、最後の封印を解除する。

「《変身!!》」

タツロットがそう叫んだ瞬間、空へと飛び立った蝙蝠が体に吸い込まれ、鎧が強固なものへと変わる。

そして左手を力強く振り下ろし、背中に炎と共に血のように紅いマントが出現する。

さっきまでのボロボロな姿とは違い、キバ本来の禍々しい紅い複眼に、神々しい黄金の鎧。

その姿はまさしく……黄金の皇帝。

キバはエンペラーフォーム（以降、Eキバ）へと強化変身した。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!!!》」

Eキバはマントを翻し、ガオウへと宣言する。

「…………ふざけるなアアアアア！！！！」

ガオウが叫びながら、何かに弾かれたように走り出す。

それに対し、Eキバは威風堂々とゆつくりと歩く。

Eキバのプライドを踏みにじるその態度に、ガオウはガッシャーを全力で振り下ろす。

しかし……。

――ガシッ！！！！

「なっ…………くそっ、離せ！」

Eキバがガッシャーを片手で掴み、ガオウがそれを抜こうと引つ張る。

「…………その程度か？」

その瞬間、Eキバがガッシャーを放し、体制を崩したガオウへと片足で連続で蹴り込む。

Eキバは装着者のライフエナジーを吸い上げ、驚異的な力を発揮する。

しかし、藤馬は普通の人間。

そのまま使い続ければライフエナジーが尽き、死へと繋がる。

だが、藤馬にはそれを補って余るほどの強大な力「コアメタル」が七枚ある。

よって、藤馬は死のリスクが無くなり、力をフルに使っていた。

「ふっ、ふっ、ふっ……おらぁっ!!」

ーードゴッ!!!

「がはっ……あう……くっ……」

Eキバが最後に回し蹴りを放ち、ガオウを近くの鉄パイプの山へと吹き飛ばす。

ガオウはフラフラと立ち上がり、マスターパスをセタッチする。

「《Full Charge》」

電子音声が鳴り響き、ガッシャーに稲妻状のフリーエネルギーが迸る。

「貴様などに……この私が、この私がああ!!」

ガオウは叫び声と共にもう一回セタッチする。

「《Full Charge》」

マスターパスを放り投げ、そのまま構える。

すると、さっきの倍以上のフリーエネルギーが蓄積され、分離。

そのまま、Eキバへと振り下ろす！！！！

「死ねえええええ！！！！」

《タイラントスラッシュュ！！！！》

一方のEキバは、左手に止まっているタツロットの頭部を引き、胴体にある特殊な回転盤が、インベリアルスロットキバの紋章の図で止まる。

「《ウエイクアップ・ファイバー！！！！》」

タツロットの声と共に、Eキバは両腕を顔の前に構え、広げる。

すると、踵にあるルシファースナイフが足裏に移動し、紅い魔皇力が身体から溢れだす。

そして頭上へと飛び上がり、足から紅い翼のエネルギーが出現、そのままガオウへと両足蹴りを放つ！！！！

「だりやアアアアアア！！！！！！」

《エンペラームーンブレイク！！！！！！》

ガッシャーと蹴りがぶつかり合い、拮抗……せず、ガッシャーを破壊し、そのままガオウの体へ着弾する。

「……ぐっ……な、何だ、これは！？」

すると、翼のエネルギーが生き物の様にガオウを連続で蹴りまくり、ガオウもろとも工場の壁をぶち破る……そして。

ードゴッ、ドゴッ、ドゴッ、ドゴッ、ドゴッ……バゴオオオオオオオオオオン！！！！！！

最後に床へと叩きつけ、キバの紋章を刻んだ。

Eキバはその場でバク転をして離れる。

「ぐあああああああああ！！！！！！！！！！」

その瞬間、ガオウの体が爆散した。

Eキバはマントを翻し、そのままシザースのもとへと向かった。

l i t o b e c o n t i n u e d

**第一楽章 最終幕 家族！！（前書き）**

はいどうも、私こと388859です。

今回で第一楽章 は終了です。

今後は番外編、第二楽章 e t c …… みたいな感じになります。

この話は、変なテンションで書いたので、クオリティが低いです…  
…すいません。

それでは、第一楽章 最終幕をどうぞ！！

## 第一楽章 最終幕 家族！！

ーシザースside

「凄い…あのガオウを…あんなに……」

藤馬くんが、ガオウを圧倒する光景を見て、僕は驚く。

藤馬くん、あんなに強かったんだ……。

「ごほつ、ごほつ……がふつ…シザース…か……」  
すると、ギャレンが吐血しながら僕の名前を呼ぶ。

「…あつ！…ギャレン、喋ったら傷に障るから喋らないで！…」

とはいっても、ギャレンの容体は最悪。

このままじゃ、ホントに死んじゃうよ！！

すると、ギャレンが喋りだす。

「……言っただろ…お前は充分に…頑張ったんだ……だから…俺な  
んかは見捨てて…逃げればいい……」  
そんなこと……。

「そんな事、出来るわけ無いよ！！」  
だって……ギャレンは僕にとって……家族と同じぐらい、唯一無二  
の仲間なんだよ！！」

ギャレンは何時だって僕の味方でいてくれて、心配してくれた……。

そんなギャレンを、見捨てるなんて出来わけない。

それに……。

「お願いだから……見捨ててなんて、そんな悲しすぎる事……言わないでよお……」

僕はそのまま、また泣き出してしまふ。

こんな事をしてる場合じゃないのに……ギャレンを、助けなきゃいけないのに……。

「涙が、全然止まってくれない……」

すると、ギャレンが僕の顔に手を伸ばし、涙を拭き取る……そして。

「良いんだ……お前からは……十分に……色んな物を……貰った……かな……ごほっ……ごほっ……ぐっ……」

「ギャ、ギャレンー!!」

もう良いから……お願いだから……本当に死んじゃうよー!!」

何で、僕はいつもこうなんだろう。

「今まで……お前には……世話に……なりっぱなし……だったな……ぐっ……」

家族には、化け物って言われて。

「今まで……本当に……ありがとう……そして」

ギャレンは僕を庇って死んじゃうし。

「……もし今度、また会えたら……」

――お前の家族に、なれたら良いな。

もう、大切な人を失いたくないのに……僕は何時までたっても、弱いままで泣き虫。

そう、心の中で思ったときだった。

「それは違うだろ、シザース……!」

――NOW LOADING――

――三人称side

「お前は弱くもねえし、泣き虫なんかじゃねえよ……!」  
シザースが驚きながら、藤馬を見る。

そのまま、藤馬が思ったことを言う。

「お前は、何もかも背負い込みすぎなんだよ……自分だけじゃなく、他の奴のモノまで背負ってるんだ。

そりゃあ、溜め込みすぎてそんなボロボロに泣くだろうよ……だから、お前は泣き虫じゃないし、弱くもない」

藤馬の言葉に、シザースが泣きながら反論してくる。

「でもっ……僕には……ライダーとしての……力も……仲間も……何もない」

それを見て、藤馬は溜め息をつく。

「はぁ……んなもん、もう一回全部手に入れば済む話だろうが？」

「……あっ……」

シザースが藤馬の言葉を聞いて、はっとする。

藤馬の言う通りだ。

力も、仲間も……どちらも、もう一回手に入れば済む話ではないか。

しかし、失ったものを再び取り戻すのは、何よりも難しい。

しかし、どれだけの難しさだろうと、今のシザースには関係なかった。

「ありがとう、楽になったよ……藤馬くん」

シザースがそう言うと、藤馬がシザースの手を握る。

「へっ……な、何？」

「だから、俺が……お前の家族になるし、護りきつてみせるよ」

――世界が止まった気がする。

藤馬としては、シザースが放っておけなかったので、そう言ったのだが……。

ここで思い出して頂きたい。

ギャレンがそう言ったときは、まだ彼とシザースの関係が兄妹のような感じだから良かった。

しかし、藤馬とシザースは同じ年頃で、まだ会って一ヶ月。よって、シザースは……。

「へっ……かかか家族!？」

そんな、まだ会ってゴニョゴニョ／／／／／

と、こんな感じで思いつきり、結婚と勘違いしてしまった。

「……え？、なして、あなた様の顔が赤くなるんでせう？」

俺、何か変なこと言ったかな？……的な顔をする藤馬。

「あのー、キバットさん。」

もしかして、記憶を失っても、藤馬さんのああいう所は全く……？」

「ああ、お前の思い通り、全く変わらん」

それを、外野でニヤニヤしながら見守る二体。  
何だか甘い時間がゆっくりと過ぎる。

そして……。

「あの……不束ものですが、よろしくね／／／／／」

「こ、こ、こちらこそよろしくお願い致します!」  
シザースは顔を赤らめながら、藤馬は（、　ゞ　こんな感じで答えた。

こうして事件は終了し、家族が二人（一人と一匹）増えた……かに  
思われたのだが？

――NOW　LOADING――

――藤馬side

――P i P i P i P i

俺の携帯から着信音が鳴り響く。

ディスプレイを見ると、知らない番号というかなんと言つか……と  
りあえず、下をご覧ください。

×××―×××××―×××××　ディスプレイにある番号？

……（「。。」）「えっ？

「電話番号が××××××××って、ありえねえし、何かイヤらしいわ……」

とか言いつつ、電話に出る。

ーP i！

「もしもしどちらs「キャッホーイ！！！！！！！！！！」、どわあ！？」  
すると携帯電話のディスプレイから、ハイテンションなクソ神が飛び出してきた。

「って、なんちゅう登場の仕方してんだ、てめえは！！！」

携帯がぶっ壊れたら、どうすんだよ！？

と、俺がキれていると、クソ神がマジな顔をして喋りだす。

「おい、クソガキ……俺は神として、コイツをちよつと捕まえなきゃいけねえ……」

そう言つて、指差したのはシザース。

「な、何でシザースが捕まんなきゃなんねえんだ？」

別に何もしてない……って、もしかして。

「ああコイツがやった事は、主要人物の誘拐……世界を壊しかねない事だ」

前にもクソ神が言ったが、世界には主要人物がいて、その全ての人

物がイレギュラーに殺されればその世界は消滅する。

つまり、シザースは世界を壊そうとした罪人、ってわけだ。

まあ、仕方ないことだ……知らなかったとはいえ、幾らなんでも無罪は無いしな。

「それ以外にも罪が幾つかある。

いくら強要されていたとはいえ、無罪とまではいかないな」  
成る程……だいたいの状況は分かった。

「藤馬くん、全然話が分からないんだけど……？」

ああ、ゴメン、シザース。

俺は、直ぐにシザースに今の説明をする。

「え」と……つまり、僕は今から神様の所に行って、裁判を受ける  
ってことだよな？」

ああ、だいたい合ってるよ。

つか、よく信じたな、今の話？

だって、神様なんて普通信じなくね？

「うん、まあ説明したのが……家族の藤馬だったから／＼／＼／  
教えてよ、おじいさん……！！」

シザースさんはさっきから、なぜ顔が赤くなるのオオオオ……！！

そんな風に悶えると、生暖かい視線が三つ。

おい、コウモリモドキとクソ神はわかるけど、何でタッチちゃん（タ

ツロツト)までそんな目で見るんだああああ!!!

「と、とりあえず、僕は今すぐ裁判に行くんでしょ？」  
シザースさん、貴女だけが味方だよ。

「ああ、だいたい……半年か一年ぐらいだな、終わったらこの世界に返してやるから、安心しろ」

クソ神がそう言うと、シザースはほっとしたのか、笑みを溢す。

うん、やっぱり笑顔が一番ですよ!!

「それじゃあ、別れの挨拶でもしとけ……そこで待ってるぞ」  
すると、クソ神とコウモリモドキ、そしてタツちゃんまでもが一緒に行く。

タツちゃん、溶け込むの早すぎだろ？

というわけで、シザースと向き合うのだが……言葉が何も思いつかない。

だって俺、バカだもの。

「あのね……藤馬くん？」

すると、シザースが話し出す。

「僕ね……藤馬くんに会えて、本当に良かった。

失うものも有ったけど、その分一番欲しかったものが手に入ったんだ……」

……ああ。

「最初はね……君も知ってるけど、殺そうとしたんだよね……それが一ヶ月経って、今は家族……本当、人生はわからないね」

俺も同感だよ、シザース。

「ギャレンは死んじゃったけど……僕は前に進むよ……泣いてたらギャレンに怒られちゃうからさあ……」

本当に強いよな、シザースは。

さっき、大切な人が死んだのに泣かないように頑張っている。

「あれ……泣かない……つもり……だったのに……ヒゲツ……何でだろ……」

はあ……しょうがない奴だな、全く。

俺はシザースを優しく抱きしめる。

「へっ……とうま……くん……?」

「家族の前では、別に泣いて良いんじゃないの。だってさ、我慢するのって凄く辛いし……それに」

――家族って、そういうもんだろ？

すると、シザースの目からボロボロと涙が流れ落ち、声を上げながら泣き叫ぶ。

「うう……辛かった……辛かったよぉ……うう……ウワアアアアアアアア……！」

「……よしよし……もっと泣いて良いんだ……家族なんだから」

「うん、うん、うん……うう……くう……ああああああ……！」

こうして、少女を繋いでいた運命の鎖は解き放たれた。

数分が経ち、今から裁判の場所へと行くところ。  
周りは、もう真っ暗ですよ。

「それじゃ、もう行くね……」  
シザースがそう行って、クソ神が開いたゲートみたいなものに入ろうとする。

俺は、何か餞別を送ろうと思ったのだが……何もない。

すると、シザースは笑顔を浮かべながら、俺の目の前に来て……。

「行ってきます、藤馬くん」

――頬にキスをした。

（。。）ヴェー！？

俺は、突然の事態に驚きながらも、同じく笑顔を浮かべて、

「うん、行つてらっしゃい……気を付けろよ？」

「うん、分かつてる……またね！」

シザースはこの世界から去った。

はあ……まさか、シザースにキスされるとはね……はずいわ。

「それじゃあ……帰るか、プレイボーイ？」

「そうしましょう！……あつ、私の歓迎会とかやらないんですか、色男？」

お前ら、後で潰してやるよ……。

帰り道、バカ共にアイアンクロウを食い込ませながら、夜空を見上げる。

こうして、本当に事件は終幕した。

――

――

――桜ヶ丘　とある教会

教会内は暗く、廃墟のように静かだ。

しかし足音と共に、松明の火が次々とついていく。

「ふむ、同盟側のガオウがやられましたか。

やはり、腐ってもキングの残滓……脅威的ですね」  
眼鏡を掛けた体つきの細い神父が、そう呟く。

すると、神父の真横にルークが現れる。

「おい、ビショップ！」

あのキバをこれからどうするんだ？」

ルークが神父、ビショップに聞く。

「とりあえず、キングの考えを聞きましょう……話はそれからです」

ふと、ビショップとルークがある部屋で立ち止まり、ノックする。

「キング、入ってもよろしいでしょうか？」

『ああ、良いぞ』

部屋から青年の声が聞こえた瞬間、ビショップとルークが部屋に入る。

中にいたのは……藤馬と瓜二つな青年だった。

だが、こちらは目が紅で茶髪、左腕にはキバの紋章が手の甲から、肩まで刻まれている。

ルークとビショップが目の前まで行くと、ひざまずく。

「話は聞いている……俺の残滓が鎧の力を解放したらしいな？」

「はい、その通りでございます。  
いかがいたしますか？」

すると、キングは椅子から立ち上がる。

「今は様子を見る。もし、残滓が我らに逆らった時の判決は……」

キングの顔から蝙蝠のオーラが漏れだし、左手の紋章を見せ宣言する。

「……………死だ」

l l t h e f i r s t m o v e m e n t e n d .

l l t o b e c o n t i n u e d

## 第一楽章 最終幕 家族！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「なあ、最後の英語は何ていう意味なんだ？」

第一楽章は終了、って意味だな。

エキサイト翻訳を使った。

藤馬「ふーん、それにしても……この小説、後何話ぐらいやんの？」

俺の脳内では、倍以上はやると思う。

藤馬「そんなに！？」

原作にオリストを混ぜたら、こうなるでしょうよ？

藤馬「た、確かにそうかもな……」

というわけで、これから応援よろしくお願い致します！

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

**第一楽章 番外編 事件後！！（前書き）**

どうも、私こと388859です。

今回からはちょっとだけ、二期に入る前に番外編を入れます。

予定では、約六話ぐらいですね。

それでは、第一楽章 番外編をどうぞ！！

## 第一章 番外編 事件後！！

――藤馬 side

「やべえええええ！！！！遅刻だああああああ！！！！」

（だからいつも早起きしろと言ってるだろう……はあ）

（本当にアナタのこういった所は、全然変わりませんねえ）

つか、お前らも爆睡してただろうが！！

あ、どうも、久しぶりに担任からラブコールを貰った、私こと中都藤馬です。

シザースと別れてから一週間ほど経ち、今年もあと十日。

実は、この一週間は怪我を治すために自宅療養をしていた。

一昨日に買ったi podをカバンに入れて音楽を聴き流しながら、約一週間ぶりの学校へと全力疾走。

タツちゃんにも、コウモリモドキと同じ意志疎通が出来るらしく、学生靴に入ってもらってます。

それにしても寒いな、また一段と今日は。

俺には手袋しかないから、首回りが寒すぎる。

まあ、走ってるから今は良いんだけどね。

そんな感じに考えていると、学校が見えて来た。

よしっ、後もうちよいだ「ーガシッ!」……ぐえっ!?

誰かに、制服の首を捕まれる。

「掴んだの誰だ、ゴルアアアア!!!」

俺はこの時、後ろを向かなければ良かった……何故なら。

「久し振りなのに、それは無いじゃろ……ええ、ボウフラア?」

ゴリさんが、阿修羅なんて目じゃないレベルのオーラを解き放っていました。

ウォー、デジャビュ……。

ーダッ!!

「待てえい、ボウフラアアアア!!!」

くそ、休み明けなのに何で鬼ごっこをしなきゃなんねんだよ!!

(そんなの、お前が遅刻しているからだろう?)

でも、時計を見たときはまだ遅刻じゃなかったぞ!

（あの時計、電池が切れてましたよ？）

それを早く言えよ！

とりあえず、俺はそのまま靴箱に行き、そのまま校内でゴリさんを撒くことにした。

……………不幸だ。

――NOW LOADING――

――梓side

「ふう、やっとご飯だ」

身体を伸ばして昼食の準備をする、私。

あ、どうも皆さん、中野梓です。

あの事件から一週間が経ち、私たちは平穏を取り戻しました。

私たちは、仮面ライダーに捕まってたはずなんですが、いつの間にか家のベッドで寝ていました。

今考えたら、あれは夢なのかな……………なんて思うのですが、他の皆も

私と同じ体験をしていたので、謎は深まるばかりです。

「おい、梓！」

売店にご飯買いに行こうよ」

今の声は、私の友達の鈴木純です。

「うん、今行く！」

私は財布を持って、純達の元に行きます。

そして、売店がある場所へと歩き出しました。

「梓ちゃん、もしかして……あの事を考えてたの？」  
すると、憂が心配そうに聞いてきます。

あの事とは、事件の事ともう一つあります。

それは、藤馬先輩がまた大怪我をして自宅療養をしていることです。

その事を聞いたのは、事件の翌日。

どう考えても藤馬先輩が、今回の事件で何かしたんだと思います。

あの仮面ライダー達は、藤馬先輩を殺すって言ってたし。

そんな風に考えながら、何を買おうか選んでいた時でした。

――……トクトクトト……

靴箱から、何やら騒がしい音がします。  
すると、

「そこでじつとしてろー!!」

その声に私達は従うと、頭上を何かが飛び越えていきました。

よく見ると……。

「おんどりゃあ、さつさと捕まらんかい!!」

「無茶言わないください!!」  
模造刀を振り回しながらゴリさんが追っ掛けてきたら、誰でも逃げるわ!!」

「模造刀じゃない、ドスって言うんじゃない!!」

「そういう問題じゃないし、本物だったの!!?」

「ボウフラは、ここいらで徹底的な駆除、もとい拷問をせんといかんとおもってなあ……というわけで捕まれ!!」

「どちらも殺す気満々だし、余計に捕まれるか!!」

所々汚れている藤馬先輩と、それを何故か刀を持ちながら追い掛けている郷田先生……その二人が私達の頭上を飛び越えていきました。

つて、藤馬先輩!?

「ほえ……また、藤馬先輩が追っかけられてる。」

あの人の運動神経は本当にスゴいよね」

純が呑気に言います。

いや、そんな場合じゃないよね!?

「でも……藤馬さん元気そうで良かった!」

確かに、藤馬先輩がああしてると……日常が戻ってきたって気がするんだよね。

私はそう思いながら、ご飯を持って教室へと向かいました。

後ろから、何かが斬られる音がしたけど……大丈夫だね?

――NOW LOADING――

――放課後

――藤馬side

結局、いつも通りゴリさんのありがたい説教を、放課後までくらってしまった。

「よ、良かった、タマはあったよ……昼飯食べなきゃ」  
自分の生命力に感心しながら、お腹をさする。

さて、昼飯（放課後だけでも）を食べますか、部室で。

（そういえば、タツ坊のご飯はどうするんだ？）

あ、確かに……タツちゃんは何が良いんだ？

（私は別に、きのこ以外ならなんでも良いですよ）

じゃあ、売店のパンでいつか。

売店で自分とタツちゃんの菓子パンを買い、鞆に入れた瞬間モゾモゾと動き出す。

何かタツちゃんは、ペットみたいだな。

そんなことを考えていると、部室の前に到着。

取りあえず、今例のあれ……やりますか

ドアから離れると助走をつけ、一気に蹴破る。

「ほわたあああああー！」

ーバゴツ！

ドアは綺麗に跳び、そのまま部室に着地する。

ふうー、やっぱり蹴破るって良いよね！

（そんなのお前だけだろ？）

（普通の人は、蹴破ったりしませんよね）

うんうん……あれ？

「何で皆、固まってんの……？」

そう、何故か皆が俺を凝視してる。

何かしたっけなあ………あゝっ！

皆を怒鳴り散らして、そのまま逃げ出したんだっ！

シザースの事があったから、忘れてた。

俺は直ぐに、JUNPING土下座へと移行し謝る。

「さーせんしたあああああ……！！！！！」

「………はいっ！？」  
「………」  
皆が声を揃えて驚く。

「今回は皆に酷いことを言ったんだ………本当にごめん！」

謝っても、許される事じゃないけどね。

「はあ、藤馬はそんなことを気にしてたのか？」

「なっちゃんはやっぱ優しいんだね」

「うんうん、それでこそ藤馬くんよ」

「全く、少しは私たちを信用しろ？」

俺……やっぱり、皆と会えて良かったつす。

と、思っていると、梓が気まずそうにしている。  
もしかして、まだ気にしてるのかな？

「梓、別にあの事は全然気にしてないぞ……」

「いや、そうじゃなくて……藤馬先輩なんですよね、私達を助けたの？」

「あり、ばれちったか……まあ、次狼達も手伝ってくれたんだけどな」

「……っ!?……何で（ですか）!!」「」「」

皆が、俺に詰め寄ってくる。

そんな事言われても……。

「俺が助けたいから、助けただけだし……それに一人、大切な家族が出来たからな」

ザ・ワールド!!

そして、時は動き出す……。

「……その家族って女の子か？」

律が、肩を震わせながら俺に聞く。

「ああ、そうだけど……何か不味いことでも？」

俺が言った瞬間に、女子の皆さんが内緒話を始める。

そして……。

「藤馬、ちよつと説明しろ？」

いや、律さん……というより、皆のオーラが黒すぎなんですけど？

俺はこの後、しっかりと拷問、もといお話された。

もう疲れたよ、パトラッシュ……。

I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 番外編 ライブハウス、そして正体 前編！！（前書き）

はいどうも、私こと388859です。

番外編を書いてたら、何だか長くなりそうな予感が……アニメの『冬の日！！』は省こうと思います、すみません！

それでは、第一楽章 番外編をどうぞ！

第一章 番外編 ライブハウス、そして正体 前編！！

――藤馬 side

「ライブハウス？」

「そうそう、ちなみにお前は強制な！」  
と、律が言う。

前回のお話の後、菓子パンを食べている俺に律がそう言ってきた。  
どうやら、律の友達からライブハウスに出てみないか……と言われ  
たらしく、皆も参加するようだ。

つか、俺は強制なのね……まあ、暇だから別に良いんだけど。

俺が思ったことを言うと、今から参加を申し込みに行くことになっ  
た。

「そういえば、なっちゃんはどうやってわたし達を助けたの？」

ライブハウスに向かう途中で、唯が鋭いことを言ってきた。

「藤馬の事だから、また無茶したんだろう？」

澪がやれやれみたいな感じで言ってくる。

失礼な！……確かにムチャクチャしたけど。

良く思えば、これまでの怪人、ライダーとの戦い。

最近は危なすぎるよな……もっと強くないと！

「あ、ここみたいだな……すいませーん！」

俺がふんす、と気合いを入れている間に目的地に着いた。

律が呼ぶと、カウンターの奥の方で返事が聞こえた。

すると、さわつちと年齢が同じぐらいの女性がカウンターに出てきた。

「あ、あの……出演希望なんですけど！  
放課後ティータイムです！」

律が少しガチガチになりながら、ライブのポスターを出す。  
そして、女の人は俺たちとポスターを交互に見てから言う。

「ええ、話は聞いてるわ。ラブクライシスのマキちゃんからの紹介  
ね」

ラブクラッシュ！？

ーゴスッ！！

「アオウッ！！」

「クライシスだ、クライシス！」

だからって鼻に肘をぶつけないでよ……漑さん。

「放課後ティータイムって、何だか可愛いバンド名ね」

女の方は、俺たちのやりとりを笑いながら、そう言ってくる。

ていうか、放課後ティータイムって明らかにガールズバンドみたいな名前だよな。

とまあ、この後はライブ当日の予定を聞いたり、楽屋を見たり、ステージを見たりしたよ。

そして、唯の家で今はその日の打ち合わせ。

憂ちゃんが出してくれた、お菓子と茶を飲みながら曲や衣装を決めていく。

「えっと、曲目は四つだったな。

ふでペン、ホッチキス、カレー、ふわふわで良いよな?」

律の問いに皆が頷く。

「何着て歌う?」

唯が、目を輝かせながら言う。

うーん、校外だから制服の方が良いんじゃない?

それに……変なの着たら、漑が歌えなくなるし。

そう思いながら漑を見ると、案の定アワアワしてた。

すると唯が制服のポケットから、ライブのチケットを二枚取り出していた。

あのライブハウスのマネージャーさんから頂いたものだ。

「はい、これ憂と純ちゃんの！  
二人で見に来てね」

唯から受け取ると、チケットをジーっと見つめる憂ちゃん。

「お姉ちゃんが、初めて出るライブの記念のチケット……勿体なく使えない！」

やっぱりこの姉妹、所々似ているよ……天然という意味で。

「後は和ちゃんにも渡さないと……あつ、なっちゃんもラモン君達に渡したら？」

と、唯がチケットを差し出す。

うーん……アイツ等ってバンドとか好きなのかな？

（次狼さん達は、アナタの心の音楽が大好きですよ）

（チケットを渡してやれ、藤馬）

分かったよタッチちゃん、コウモリモドキ。

「というわけでチケットだ、見に来てくれよな？」  
はい、現在いるのはキャッスルドランの大広間です。

次狼達はチケットをジーっと見る……そして。

「お兄ちゃん、ここでライブするんだ……スゴいね！」  
ラモンは素直でよろしい！

「まあ、藤馬だったらこれぐらいやってもらなわければな？」  
わあつてる……上等だよ、次狼。

「藤馬……頑張れ……」  
リキの拙い言葉で言われると、何だか心に来ますよ。

何だか皆、応援してくれるので嬉しい限りです。

「よし、今日は俺が飯を作ってやる！      何が良い？」

すると、皆がニヤリツとして……夕食がいつもの数倍以上の出費を記録した。

……コイツ等、本当に俺の従者だよな？

I

――

――

《ガルルハウリングスラッシュュ!!》

――ズバツ、ドゴオオオオオオオン!!!

俺は一体のオルフェノクを斬り倒し、変身を解除する。

ああ、何で夜中に出てくるかなあ……。

思わず欠伸をして、うとうとしてしまう俺。

「全く、こんなところで寝ようとするな。

シャキツとしろ、シャキツと」

夜行性のコウモリモドキと一緒にするなよ……。

現在の時刻は、十二月三十一日午前二時……あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は見ての通りで、夜中に怪人が出たので斬り倒した。

「ほら、タツ坊も寝るな!」

「キバットさん……私は、夜行性じゃないんですよ?」

今日は十三時からライブの準備があんのに……早く家に帰ろう。

「私はキバットさんと違って、夜は静かにしたいんです!」

「そんなものは関係無いだろう！」

誇り高きドラン族が、うとうとしてどうする！」

とりあえず、そのこのうるさい珍獣をどうにかしなきゃな……。

「おい、そのこの珍獣二体……声のトーンを下げろ、近所迷惑だろ？」

「バカは黙ってる（黙ってください）！！」「」

もうやだ、この二体……あれ、今は俺が悪いのかなあ？

その後俺は、相棒達の口喧嘩をBGMに、心の涙を流しながら家に帰った。

はあ……不幸だ。

――NOW LOADING――

――三人称side

そんな藤馬達を、遠くから見つめる神父の男……ビショップがいた。

「今日はキングが言っていた物語の日ですね。

この方法はキングに禁じられてるんですが……」

ビショップは視線を藤馬から、近くをフラフラと歩いている酔っ払いに向ける。

すると、ビショップはポケットから地球の記憶が詰まったUSBメモリ、ガイアメモリを取り出しスイッチを押す。

「《BEAST!!》」

電子音声が鳴り響き、ビショップがガイアメモリを投げると、独りで酔っ払いの左腕に挿入する。

「うぐっ……がっ……ああアアあウウウアオオオオオオ!!」

酔っ払いが声を上げながら、その体を変質させていく。

青い体毛に体色、そしてどんなものでも切り裂けそうな爪……猛獣、ビーストドーパントは変質を終えると、ビショップの元へと一気に跳ぶ。

すると、ビショップは写真を取り出す。

「コイツ等を……襲いなさい」

ビーストドーパントは頷くと、その場を凄まじい速度で離れる。

そして、夜は明けていった。

I  
I  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第一章 番外編 ライブハウス、そして正体 中編！！

――藤馬 side

「……馬……おい……馬」

勘弁してくれよ、まだ寝足りないんだよ…… z z z。

「仕方がない、久し振りの……ガブリー！」

――ガブツ、ブシュウウウウ！！

「痛ったあああああああああ！？」

ダメだよ、吹き出してるって、イケないモノが噴水が如く……！」

そう言いながら、ベッドの周りを走り回る。

すると、クソコウモリモドキがやつとこさ離してくれた。

「なーにしくさつてくれとんじゃ、おんどりやアアアアア……！」  
俺はブチ切れながら、ゴリさんみたいな口調で話す。

今日は大晦日……全国民が紅白みたり、ソバくったり、ガキの使い  
みたり、千差万別な日だ。

そんな日に、主人の頭を噛むなんて普通「ブー、ブー、ブー、ブー」  
何だよ、全くもう！

――Pi――！！

俺は乱暴に携帯を掴むと、電話に出る。

「もしもし、うちは新聞なら間に合ってますけど」「バカ藤馬、今どこに居るんだ！

まさか家じゃないだろうな！？」……………あゝ」

律の声を聞いた瞬間に、昨日の事も全部思い出し、頭が真っ白になった。

――明日は遅刻厳禁だからな！

遅れた奴は、ふふふ分かってるよな……………。俺を見ながら手をワキワキさせる、律……………

――遅れるわけねえだろ、この俺が？ 皆に向かって、自信満々に言い放つ俺……………。

――それを、白い目で見るみんな……………。

やべえ……………ある意味フラグ立ちまくってたわ。

「おーい藤馬、聞いてんのか？

集合時間まであとちょっとだぞ？」

俺は時計がある場所へ、思いっきり振り向く。

現在時刻 十二時五十分

頭から出続ける赤い噴水

俺はすぐさま携帯を切り、右手に包帯を巻き、制服へと着替えを済ます。

そしてヴァイオリンケースを持つ（ギターは今回のライブでは弾かない）。

そのまま、家からライブハウスへとフルスピードで走り出す。

すると、律からもう一回電話が掛かってきた。  
すぐに電話に出る。

「こちら藤馬、こちら藤馬。  
りっちゃん隊長、応答願います、どうぞー！」

「藤馬隊員、すぐに現地へ来たまえ！  
漣鬼軍曹がお怒りだ！」

「Sir yes sir!!」

「漣、ちょ、ダメだって……アッー！」バカやってないで、早く来い藤馬！」

漣の声を聞いた瞬間、俺はりっちゃん隊長へ敬礼した。

りっちゃん隊長は、明日の礎になったんだ……さらば、隊長（T  
Tゞ。

そう思った瞬間、

「「っ！」「」

この感じ……タブーに似てるような……。

（藤馬、今回はドーパントだ！  
場所は……右に転がれ！！）

俺はコウモリモドキの言う通り、右に転がる。

ーードゴッ！！

するとさっきまで居た地面に、何かが拳を叩きつけていた。  
青い体毛に体色、大木でも斬れそうな爪……さながら獣のような怪人。

……今回はちょっと不幸すぎじゃねえか、俺？

（藤馬、そいつだ！気を付けろよ！）

わぁってるよ、とりあえず裏路地に惹き付けるか。

そう思っていたらドーパントは写真を取り出し、俺と見比べる。

「ウウ……お前……違う……」  
ドーパントは首を横に振り、そのまま近くの建物の屋上へと跳躍して、去っていった。

「……何なんだよ、あいつ？」  
とりあえず警戒を解いて、ドーパントの去った方向を見つめる。

いつの間にか気配も無くなってるし……。

「って、急がなきゃ！」

澪軍曹に怒られちまうよ……多分殴られるけど。

そのまま荷物を持って、また走り出す。

――

――

「本っ当にさーせんしたああああ!!」

俺は集合場所に着いた瞬間、直角九十度まで頭を下げ謝る。

周りの視線が痛い、致し方ないんだ！

「全く……あれほど遅刻厳禁だつて言つたろ？」澪が額を押さえながら言う。

律も頷きながら、腕を組んでいる。

本当にごめんなさい……。

すると、ムギと梓が俺の頭をずっと見ている。

唯？、唯は菓子をボリボリ食ってますよ？

「どうしたんだ、ムギ達？」

そんなに俺の頭を見つめて？」

何か付いてたつけ、そう思いながら頭を触ってみる。

ーベチャツ……。

何かすんごい赤くて、自分の頭から流れ出てる……どうみても自分の血ですね、本当にありがとうございました。

って、まだ血が出たのかよ！

道理でここに来るまでに、視線をいっぱい感じるはずだよ！

俺がまた悶えていると、ムギが心配そうに言ってくる。

「藤馬くん……止血してあげましょうか？」

やばい、ムギさんがナースに見えてきました。

でも、自分で出来るから良いや。

「ああ、大丈夫、大丈夫」全然大丈夫じゃない（です）！！「はい……ムギさん、梓さん……」

何でそこでキレるの……乙女心はわからんわ。

とりあえずムギ達に止血してもらって、ライブハウスへと向かうことにした。

ライブハウスの前に行くと、既に人だかりが出来ていた。

ほえ、すごいな！

『お疲れさまでーす！！』

俺達を見た瞬間に、全員が労いの言葉をかけてくる。

何だろ、スタッフの人かな？

「あ、どうも。」

ファンの子達だろ、多分？」

律が、ファンの子達に挨拶しながら言う。

なるへそなあ。

そんな感じでライブハウスへの扉へ行き、開ける。

「こんにちはー！」

「よろしく願いしまー、ひいっ！」

中にいたのは凄い髪の色した人や、メイクがめっちゃ濃い人……ぶっちゃけ怪人を見まくってるから、そこまで怖くない。

「これは皆さん、手強そうで……」

でも他の面々には、刺激が強かったようだ。  
とりあえず、挨拶しないとな！

「あ、どうも、放課後ティータイムのヴァイオリン担当、中都藤馬だ！

今日はよろしくな！」

ーガシッ、グリッ！！

「タピオカツ！？」

その瞬間、律がヘッドロックした後、皆からお叱りを受ける。

「何やってんだ、お前は！

刺激したらダメだろ！？」

「そうだよ、そこら辺の河にぶちこまれるかもしれないよ！？」

「ひいつ！何も聞こえない何も聞こえない何も聞こえない何も聞こえない」

「藤馬くんは、やっぱり藤馬くんね」

「とりあえず、謝ってくださいよ！」

皆が機関銃より早く文句（約一名違っけど）を言ってくる。  
俺は直ぐに反撃に出る。

「だー、うるせえんだよ！！！！

何で挨拶したら俺がヘッドロックされた後、お前等の文句を聞かなくやなんねえんだ！！

挨拶しただけで、オデノカラダハドボドボだよ！？」

咄嗟にオンドウル語を使いながら、マシンガントークをする。

すると、端に居た他のバンドの人が俺たちに近付いてくる。

「あゝ、やっぱり、りっちゃんだゝ！」

「へっ……あゝ、マキちゃん久しぶり〜」

「澪ちゃんもね!」

どうやら、マキちゃんの登場のようだ。

つか、律さんの態度が百八十度変わったよ?

「みんな、紹介するね!

この子が、ラブクライシスのドラムのマキちゃん。  
このライブに誘ってくれた子」

「よろしくね〜!」

はいはい、クライシス帝国のマキちゃんね〜。

ーゴスッ!

「只のクライシスだ、ク・ラ・イ・シ・ス!」  
すんません、わかったからぶたないでよ、澪さん。

「あゝ、澪さんだ〜」

「あ、紹介するわね。

こちらうちのベースのアヤ。

澪ちゃんの大ファン」

スゴいな、校外にファンとか居たんだな。

「学園祭のライブ、かつこ良かったです!」

「あ、ありがとう……」

何かやっぱり、皆フレンドリーだな。

すると、アヤっていう子が俺のヴァイオリンを見て、目を輝かす。

「あ、あの……前に助けてくれましたよね、怪人から？」

……（。。） what's !?

「アヤ、怪人なんて噂に決まってるじゃん！」

マキちゃんがバカにするが、居るんですね……怪人。

それにしても、この子を助けた覚えがな……がつりあるんですよ、これが。

とりあえず誤魔化さないと！

「マキちゃん……怪人はね、本当に居るんだ……かくいう私も、藤馬に助けてもらったし」

……肯定しちゃったよ、律さん。

「ふうん、本当に居たんだ……とりあえずありがとね！うちの仲間を助けてくれて！」

「あの、本当にありがとうございました！……その……と、とってもかつこ良かったです／＼／＼／＼」

何か凄く純粹だよ、この子……憂ちゃんを思い出すわ。

つか全方位から俺に向かって、殺氣がくるんですけど？

特に律と漑、何かスタンド出しそうな勢いだからめっちゃ怖い。

「良いよ別に、ただ助けただけだし」

確か怪人も弱かったから、全然怪我しなかったしな。

「じゃあ……メルアドとか交換して貰えますか？」

「良いよ」ホントですか!!」……うん、ちゃんと交換するから！  
色々近いよ、アヤさん！」

というわけで、他のバンドのメンバーともそれなりに仲良くなれた。

「あゝ、何か疲れたな……」  
俺は体を伸ばしながら呟く。

今は色んな準備をして、リハーサルを終えたところ。

色んな人から、励ましの言葉を貰ったから気分最高です。

「ねえ、なつちゃん！  
お菓子買いにいこうよ！」

もうすぐ本番なのに、お菓子買いに行くんかい！

「えゝ、だって美味しいんだもん！」  
唯が口を尖らせながら言う。

「じゃあないな、それじゃ……」

「っっ！……」

オイオイ、あのドーパント……このタイミングで出るか、普通……！

「どうしたの、なっちゃん？」

唯が不思議そうに聞いてくる。

俺は唯の肩を掴み、目をジーっと見る。

「な、なっちゃん／＼／＼？」

ど、どうしたの、いきなり／＼／＼？」

「ごめんな……後でお菓子はおごってやるから、絶対にライブハウスから出るなよ！」

俺は一気にそう言つと、楽屋から飛び出す。

「えっ、ちょ、ちよつと！」

何処行くの、なっちゃん！？」

唯の制止も聞かず、俺はすぐにライブハウスの裏口から外に出る。

（コウモリモドキ、場所は！？）

（ここから約百メートル程度だ……むっ、どうやら獲物を見つけたらしい、動き出したぞ！）

やばいだろ、それ……ライブもあるから、一気に片付けるぞ！

I  
l  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第一章 番外編 ライブハウス、そして正体 後編！！

――憂side

「はあ、はあ、はあ……うわっ！」

私は、何かに引っかけたてこけてしまいました。

「あつ、憂！」

ほら、早く立って！」

純ちゃんが手を伸ばしてくれる。

ありがとう、純ちゃん！

「ほら二人とも、早く逃げないとまた怪人が来るわ！」

和さんが、私達の後ろを見ながら言います。

事の始まりは数分前。

私達がライブハウスへと向かっている途中、怪人が目の前に現れました。

すると、怪人は懷から写真を取り出し、写真と私達を見比べます。

私と純ちゃんは怪人に威圧されてましたが、和さんにつられてその場から逃げ出しました。

「それにしても……何なんだろう、あの怪人？」

純ちゃんが逃げながら呟きます。

「解らないわ……でも、あのままだったら不味かったと思うわよ」

和さんが冷静に言ったその時でした。

「ウォアッ！！！」

「ーゴドンッ！！！」

「「「きゃっ！！！」」」

獣のような叫び声がすると、凄く重い音がしてから地面が揺れました。

私達は思わず尻餅について、前を見ました……そこには。

「見つけたぞ……ターゲット！！」  
さつき居た獣の怪人が居ました。

私達は、振り返ってそのまま逃げようとしています。

「ガアッ！！」

しかし、怪人は私達の後ろに回り込んできました。

「ど、どうしよう、憂！」

そ、そんな事言われても……。

「不味いわね……」

私達がゆっくりと後ずさっている……。

「ーガシッ！！」

「早くここから逃げろ、お前等!!」

ライブハウスに居るはずの藤馬さんが、怪人を羽交い締めにしていました。

――NOW LOADING――

――三人称side

藤馬がビーストドーパントを羽交い締めにするが、逆に身体を塀に投げ飛ばされる。

「大丈夫、しっかりして中都くん!？」  
和達が藤馬に駆け寄る。

「……っああ、大丈夫だ……早く行けよ、死にたくねえだろ？」  
藤馬が、立ち上がりながら言う。

「先輩はどうするんですか？」  
純が、藤馬の腕を引っ張りながら言う。

すると、藤馬は純の腕を離しながら説明する。  
「俺がアイツを引き付けるから、その間にお前等は逃げろ」

「そんな事出来るわけじゃないじゃないですか、先輩が死んじゃいますよ!？」

純の言う通り、ライダーに変身していない藤馬では、ビーストドーパントに殺されてしまうだろう……しかし、藤馬がここで変身すれば正体がバレてしまう。

だが、相手は待ってくれない。

「でもな……危ないっ！」

ビーストドーパントは一気に近づき、爪で純達を切り裂こうとする。

藤馬は純達を突飛ばし、咄嗟にその場にしゃがむ。

ーガゴツ!!、ガラガラ……。

ビーストドーパントの攻撃によって塀が音を立てて崩れる。

藤馬達の背中に冷や汗が流れる。

(ちくしょう、このままだと死んじゃうな……仕方ねえ!)

「お前等、これから起こることは誰にも言つなよ……憂ちゃん、説明よろしく!」

「ええっ、私ですか!?!」

「中都くん、何言ってるの?」

「ちょっと憂、どういつ事が説明してよ!」

藤馬はそう叫びながら、ビーストドーパントと距離を取る。

憂は残りの二人に説明を求められ、かなり困っていた。

「つまり、こういうことだ……コウモリモドキ!」  
藤馬がキバットを呼ぶ。

「先ずはお前を……ぐっ、何だ!？」

その瞬間、ビーストドーパントが跳んできたキバットに突き飛ばされる。

「ふむ……コイツ等には正体をばらすのか、藤馬？」  
キバットが藤馬の頭に止まり、質問する。

「な、何あれ、こウモリ……?」

「何か見たことあるような……」

「キバット君久しぶりだね!」

「ああ、久し振りだな憂」

和達がキバットを見て、思った事を口にする。

「おい、ちゃちゃつと済ませるぞ、コウモリモドキ!」  
藤馬が右手の包帯を外し、左手でキバットを掴む。

「ああ……行くぞ、ガブリ!!」

「っ!」

右手の甲をキバットに噛ませ、全身に《魔皇力》を流す。

すると顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《变身！！》」

藤馬がそう叫び、キバットを逆さにつるす。

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「藤馬先輩が、仮面ライダーになっちゃった……でも」

「何で、中都くんが……でも」

「何か納得……」

二人は目の前で起こった事に驚きながら、どこか納得していた。

彼がいつも授業を抜け出す理由、そして人並外れた体力……彼がライダーなら、あり得ると思ったのだらう。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

キバはそう宣言した後、ビーストドーパントへと拳を二発叩き込む。

ビーストドーパントは爪で受け流しつつ、そのまま爪でキバの腹を切り裂こうとする。

キバは直ぐに左腕で防ぎ、鳩尾に膝蹴りを入れる。

ビーストドーパントは少し怯みながら下がり、巨体には合わない凄  
いスピードで突進する。

キバは予想外のスピードに反応しきれず、そのまま塀まで押し出さ  
れる。

「くそつ、なんつうデタラメな野郎だよ！」

悪態をつきながら、ビーストドーパントの腹に蹴りや、拳を入れる  
キバ。

しかしビーストドーパントはものともせず、逆に爪で鎧を切り裂い  
ていき、憂達の方へと吹き飛ばす。

「大丈夫ですか、藤馬さん!？」

「ああ、大丈夫、大丈夫……時間もあんまり無いんだ、一気に決め  
るぞー!!」

そう言つて、キバは金色のフェッスルを引き抜き、キバットに吹か  
せる。

「《タツロットー!!》」

その瞬間、法螺貝のような音楽が鳴り響く……そして。

「びゅんびゅんびゅん

テンション・フォルテッシモー!!」

タツロットが飛んできて、キバの拘束具カテナを全て解放していく。

すると、鎧から黄金の翼が開き、そこから無数の蝙蝠が空へと飛び立つ。

そしてキバは左手を真上に上げ、赤い止まり木にタツロットが填まり、最後の封印を解除する。

パワー・スロット

「《变身！！》」

タツロットそう叫んだ瞬間、空へと飛び立った蝙蝠が体に吸い込まれ、鎧を強固なものへと変えていく。

そして左手を力強く振り下ろし、背中に炎と共に血のように紅いマントが現れる。

キバは、Eキバへと強化変身した。

「凄く綺麗ね……」

「うわぁ、藤馬先輩カッコイイ」

「藤馬さん、がんばって！」

Eキバは三人が感想を喋った後、マントを翻して構える。

一方のビーストドーパントは、Eキバの姿に恐怖を抱いていた。

野生の勘のようなモノで解るのだろう。

目の前の敵には勝てない事に。

だが、ビーストドーパントは自分を奮い起たせ、Eキバへと突進する。

対してEキバはゆっくりと、散歩をするように歩く……そして。

ーードゴッ、グ…グググー！

Eキバはビーストドーパントの突進を軽々と受け止めた。

「どうした、熊野郎？」

Eキバは、そのまま蹴りのラッシュを的確にビーストドーパントにぶちこむ。

その威力に、ビーストドーパントは身体を曲がらせながらも耐えきろうとするが、

「これで、ラストオオオオオオオオ！！」

ーードゴッ！！！！

「グガッ……」

Eキバの最後の回し蹴りに吹っ飛ばされ、地面をコロコロと転がる。

そしてEキバは、インヘリアルスロット左手にとまっているタツロットの頭部を引き、胴体にある特殊な回転盤がキバの紋章の図で止まる。

「《ウエイクアップ・ファイバー！！！！》」

タツロットの声と共に両腕を腰の位置に構え、顔に上げていく。

すると、踵にあるルシファーズナイフが足裏に移動し、紅い魔皇力が溢れ出す。

そして頭上へと飛び上がり、足から紅い翼のエネルギーが出現、そのままビーストドーパントへと両足蹴りを放つ！！！！

「セイヤアアアアアアアアアア！！！！！」

《エンペラームーンブレイク！！！！》

「ゴガッ！？」

ードゴッ、ドゴッ、ドゴッ……！！！！

《エンペラームーンブレイク》がビーストドーパントに着弾し、そのまま押し出していく……そして。

「これでどうだあああああ！！！！！」

ードゴッ、ドゴッ……ゴドンッ！！！！

ビーストドーパントを地面に叩きつけ、キバの紋章を刻んだ。

Eキバはその場を離れ、マントを翻す。

ードゴオオオオオオオオオン！！！！

その瞬間、ビーストドーパントが爆発し、壊れたメモリとスーツを

着た男性が出てきた。

――

――

――藤馬 side

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

コウモリモドキとタツちゃんが鎧から離れ、変身が解除される。

「大丈夫ですか、藤馬さん？」

ああ、ありがとう、タツちゃん……って、おっとつと！

少し目眩がして、倒れそうになるがなんとか持ちこたえる。

「無理をするな……元々はファンガイアの王の為に作られた鎧だ。そのお前がエンペラーになれば、負荷はかなりのモノになる」

コウモリモドキの言った通り、エンペラーは強いんだけど……メチャクチャ疲れる。

実を言うと、魔皇力の代わりにコアメダルの力をエネルギーに使うからな……。

ていうか、アイツらは何処に居るんだろう？

「とりあえず探さないで、藤馬さん！」あつ……ゴッッ！」  
憂ちゃんの声がしたので振り向いたら、鳩尾に憂ちゃんの頭がジャストミートした。

「もう、心配しましたよ！  
怪我したらどうするんですか!？」

憂ちゃんが鳩尾ら辺で何か言ってるが、こっちはそれどころじゃないんですよ？

「憂さん……とりあえず、離れてくれる？」  
胃の中の物が、リバース and リリースしそうなんで。

「あ、すいません!……怪我は無いですよね？」  
憂ちゃんが涙目で聞いてくる。

何か罪悪感が沸いてくるよ？

「ああ、大丈夫だから……本当はボロボロだけど」

あのドーパント、一撃が速いし、重い。  
エンペラーが無かったら、ギリギリだったろうな。

そして……。

「「中都（藤馬）くん（先輩）……」」

和と純ちゃんにはバレちゃったなあ……。

「先輩……」

嫌われるかな……それとも拒絶され「助けてくれて、ありがとう  
ございました！！凄くかつこ良かったですよ！！」……………えっ？

純ちゃんが俺の手を握って、ブンブンと振る。

「助けてくれてありがとう、中都君。

それにしても、仮面ライダーって本当に居たのね……都市伝説だと思  
ってたわ」

俺は都市伝説じゃないですよ、和さん？

「つか、何でもっと驚かないの？」

「だって、中都君の授業を抜ける理由と、人並み外れた体力は仮面  
ライダーだから……と考えたら、しっくりきたのよ」

「それに、先輩が変身した仮面ライダー、私はテレビで見たことあ  
りますよ！」

はあ、何だか拍子抜けだな……。

「とりあえず、この事は他言無用な？」

俺の言葉に二人が頷く。

「そういえば藤馬さん、ライブは？」

…（「。。。」）「っ！？」

「まさか……本当に忘れてたの!？」  
和が俺にずいっと寄ってくる。

あれ、こうしてみると和も結構可愛い……じゃないよ!!

俺は右腕の甲を素早く巻き、元来た道を走り出す。

「あーもう、不幸すぎるー!!!  
人を救ってるのに何なんですか!！」

頭を掻き回しながら、現在の時間を携帯で確認する。

ちなみに、ここからライブハウスまでは十分程度、俺達のライブが始まるのは、午後八時……そして。

現在時刻 七時五十五分（お前涙目・テ・ラ・ワ・  
ロ・スｗｗｗｗ byクソ神）

（- - #）……何時かクロス。

「あーもう、理不尽だああああ!!!」

――

――

「はあ……はあ……良かった……はあ……間に合った……ふう……」  
ライブハウスのステージ裏で息を整える。

「オイオイ、大丈夫か藤馬？」  
精神的に泣きそうですよ、律さん。

「うう、大丈夫かなあ……うう……」  
そして、デフォルメ化している漑……やばい、俺のガルルセイバー  
がウェイクアップ・フィーバーして（言わせんぞ！）……今回は止  
めてくれてありがとう。

「おい、みーお……こけるなよ（ニヤッ）」

ーゴスツー……！

「痛ったあ……何すんだよ、藤馬あ？」

漑が再起不能になりそうな気がしてな……もっとゲンコツしてやろ  
うか、ああ？

「……すみませんでした」

「ぷぷっ……くくっ……あははっ！」

漑が、俺と律とのコントを見て笑いだす。  
それにつられて、皆で笑い合う。

やっぱり楽しいよな、コイツ等といると！

「じゃあ放課後ティータイムの皆さん、お願いします……！」  
スタッフの人が声をかけてくる。

「それじゃあ……行きますか、マドモアゼルの皆さん？」

「うん（はい）……」

こうして俺達、放課後ティータイム二回目のライブは大成収めた。

「っはあゝ、疲れたあ……」

ライブハウスから出て、白いため息をつく。

夜空には雲一つ無く、星が輝いていた。

はあ、眠い……家に帰ってゴロゴロしたいな……。

「皆、お疲れさま」

声がした方を見ると、さわっちと和達が居た。

つか、さわっち居たんだ……影薄いな。

「ああ？」「サーセンしたあああああ……！」

俺は直ぐに、JUNPING土下座へと移行して謝る。

さわっちの後ろに、なまはげのスタンドがついてるよ！

それを見て皆が笑う……最後の日も、いつもの風景を見るって良いな。

その後は、軽音部の皆で唯の家に行き、速攻で寝ました……だってさ、疲れたんですもの。

「……はっ！」

やべえ、初夢がコウモリモドキに噛まれて、出血死とかありえますね、本当にありがとうございます。

「あつ、なっちゃん！」

ほら、初日の出を見に行こうよ！」  
上半身を起こし、欠伸をする。

新年に入って初めて見たのが唯か……なんか、天然な一年になりそう。

とりあえず皆を起こし、初日の出が見える場所へと移動する。

「さわっちは……別に良いか」

「「良くないだろ」」

新年初ツッコミ、頂きました。

そんなこんなで到着！

高台に登り、皆で一列に並ぶ。

高台の上には、オレンジ色に輝いた初日の出が見えていた。  
凄く綺麗だな、初日の出……。

「つか、何で俺は皆の真ん中なのよ？」

そう、何故か俺は女子の皆さんに挟まれていた。

「まあ、ええじゃないか、ええじゃないか」

何で歴史なんですか、唯さん？

「まあまあ、小さいことは気にしないで良いじゃない……ね」  
ムギさんの顔が日の光に当たり、凄く色っぽく見える。

ていうか皆、凄く色っぽく見えるんですけど!？

やばい、俺のバツシャーマグナムが水を発射（言わせませんよ!!）  
……ありがとう、タツちゃん！

すると、澪が何かに気付いたみたいで、深呼吸をする。

「あけましておめでとうございます!」

そういえばそうだったな。

澪に言われて皆で挨拶する。

そのまま黙って、初日の出を見続ける……すると。

――ギョッ……。

隣に居た唯とムギが、手を繋いでくる。

唯達の顔を見ると、笑顔で返してきた。

それに気付いた律達も手を繋ぎ、笑い合う。

（そうだよな……こんな日々が来年も続くと良いな……皆で笑って、お茶して、バンドして……そんな日々が壊れないように、これからも戦い続けよう……そして）

「皆を護るために、もっと、もっと強くなりたい……」

自分が為すべき事を改めて確認する事が出来て、良かった。

「それにしても、梓はいつまでトラミミ着けてるんだ？」

「ニヤッ！？／＼／＼／」

l i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 番外編 ライブハウス、そして正体 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「番外編も後二話か……その後は大丈夫なのか、作者？」

いや、大丈夫じゃないよ……だから更新が遅れると思う。

藤馬「出来るだけ早くしろよ？」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

**第一楽章 番外編 ハッピーバレンタイン 前編！！（前書き）**

どうも、私こと388859です。

今回はパロディネタが多いです。

それでは、第一楽章 番外編をどうぞ！！

第一章 番外編 ハッピーバレンタイン 前編！！

世の中には、絶対に負けられない戦いというものがある。

受験、就職活動…… 自分の人生を決めるものならば、誰でも負けられないだろう。

恋愛もそうだ……好きな人と結婚したい、そんな思いは誰にでもあ  
る。

今回の物語は、そんな恋する乙女達に振り回された男の話である。

――藤馬side

季節はまだ寒い冬が続いており、風が吹く度に身体を震わせてしま  
う。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は二月に入ったばかりで、まだまだ冬は続きそうな予感。  
ちなみに、冬は大好きですよ？

「……………」

そして、二月と言えばバレンタイン！

バレンタインって、チョコが貰えないのにわくわくするよね！……  
言ってて悲しくなってきた。

俺は正座をしたまま寒い部室の外で、

『作戦会議中〱男子禁制だよ〱テヘッ!』

と、ドアに貼ってある紙を見ながら、溜め息をつく。

事の始まりは一時間前……俺が、

「そつえば、もう二月に入ったよな……」

みたいな事をお茶を飲みながら言った瞬間、外に閉め出されてこの状況になっていた。

確かに俺は冬が好きですよ……でもさ、

「いくら冬が好きでも、部室の外で一時間はキツイよ……」

ていうか、一時間ぐらいずっと思考の渦……何ていうのは無理です。

十分に飽きましたよ、はい。

タツちゃんとコウモリモドキは、呼び掛けても返事しないし……何、この地味な嫌がらせ？

「あれ……藤馬先輩は何してるんですか？」

階段の方を見ると、純ちゃんがこっちに歩いてくる。

話し相手k t k r!

ここに座って、早一時間と少し！  
ようやく俺にも救いが来たんだ！

「まあまあ、ここに座りんしゃい純ちゃん」  
純ちゃんを座らせ、少し泣きながら状況説明。

すると、純ちゃんはうんうんと頷いてくる。

俺の苦しみが分かるんだな、ありがたい！

……そう思っていた、自分が居ましたよ。

俺が話し終わると、純ちゃんは俺の手を取り、

「先輩、良かったじゃないですか！」  
と、笑顔で言ってきた。

……（・・）エツ・・？

あ、ありのまま起こったことを話すぜ！

俺が純ちゃんに、『苦しかったこの一時間』について話したら、

「良かったですね！」

って、笑顔で言われたんだ！

勘違いとか、聞き間違いとかそんなチャチなモンじゃねえ！  
もっと恐ろしいモンを味わったぜ……

今の話は、俺の苦しみを話したのに……俺はMじゃないよorz

余りの急展開に、その場でorzポーズを取ってしまう。

純ちゃんが何か言っているが、何も耳に入っていないよ……。

しかし、今度は俺の不幸スキルが発動する。

ーガチャ、ドグオツ!!!

「ゴパアツ!？」

「だ、大丈夫ですか先輩!？」

俺の顔と腹に、勢い良く開かれたドアの角がめり込んだ。

俺は鼻血をドボドボ出しながら、顔と腹を抑えて踞る。

オ、オデノカラダハドボドボダ!!

すると、女子の皆が部室の中から荷物を持って出てくる。

「よし、今週末は唯の家に集合だ!

皆で頑張るぞー!」

「「「「「おー!!」「」「」

律の掛け声に合わせて、他のメンバーも腕を挙げて返事をする。

その後ろで鼻血を拭いている、俺。

すると、皆が俺の状態に気付く。

「あれ……藤馬先輩、鼻血が出てるじゃないですか!？」

「あら、大変!……はい、ティッシュ」

「うわぁ、凄い量の鼻血だね」

「どうせ、エッチな事でも想像したんだろ？」

「藤馬はやっぱ変態なんだな？」

「……うんうん!」「……」

律のまとめ方、絶対に可笑しいだろ!

「おいおい、鼻血が出たのはお前等のせいだし、俺は変態じゃない!」

「……えっ、そうなの(そうなんですか)!?」「……」

何かもう嫌だよ……純ちゃんまで言ってるし……。

とりあえず鼻にティッシュを詰め込み、荷物を持って帰る事にした。

――NOW LOADING――

月日は経ち、約一週間後……二月十四日。恋する乙女にとっては決戦の日、モテない男子は絶望する日だ。

そんなことを思いながら、遅刻ギリギリで登校する。

い、いや別にチョコ欲しいとか思ってたねーし！

チョコみたいな甘いものを食べたいよな……って思っただけだから！

そんな、一個も貰えなかったらどうしようとか思ってたないよ！

（苦しいな、タツ坊？）

（そうですね、キバットさん）

そこ、自分でも苦しいって分かってるんだからな！？

相棒達とそんなやりとりをしながら校門を潜り靴箱に着く。

靴を脱ぎ、上履きを履こうとしたときだった。

「さて、行きますか……って、うん？」

よく靴箱を見ると、ピンク色の手紙が入っている。

「何なんだろ、これ………はっ、こ、これはあ！？」  
手紙の側面を見て、思わず声を出してしまう。

――中都藤馬くんへ 手紙の側面にあった文。

手紙を持つ手がガクガクと震える。

こ、これは……で、伝説の……アレなのか……いや待てよ……手紙なんて絶滅したはずだろ……？

「あ、藤馬さん！

おはようございます！」

「うおっ！？」

「どうしたの、なっちゃん？」

後ろに振り向くと、唯と憂ちゃんが二人仲良くコツチに歩いていた。

俺は手に持っている手紙を鞆へと、光の速さで突っ込む。

「い、いやあ、何でもない！」

なにもないさ、あるわけないよ！

あ、今日も良い天気だなH A H A H A！！」

俺は、雪がおもつくそ降っている空を見ながら言う。

「「？？？」」

二人が首を傾げているがそんなの関係ないよ！

「あ、俺ちよっとトイレに言ってくるわ、んじゃ！」

俺は直ぐに男子トイレへと向かう。

この時気付けば良かった……後ろで律が笑いながら見ていたことに。

「ふう……それじゃあ開けるか……」

トイレの個室に入り、手紙を開けて読む。

「ええと……なになに……」

突然の手紙すいません……」

アナタの事が誰よりも好きです。

放課後、焼却炉の前で待ってます。

その気があれば、来てください……」

――ゴスツ、ゴスツ！！

手紙を読み終え、頭を壁にぶつけてみる。  
だが血しか出なくて、夢から覚めない。  
本物……これが……あの伝説の……！！！！

I Love Letter……

「生まれて初めて、こんなものもらったあああああ！！！！！！」  
「」

思えばさ……俺、この小説のオリ主なのに全然モテてなかった……。

誕生日……いつの間にか過ぎてた……。

夏祭り……溜まった宿題で、それどころじゃなかった……。

今年のクリスマス……怪人とドッグファイトして過ごした……。

……だかな…！

俺は手紙を手で叩きながら、叫びまくる。

「今はモテてるんだ！

ハハ、ハハハハ、ヒヤッハアアア！……！！

俺、イケてる！

NOW、今、イケてるウウウウヒヤッハアアアアアア！……！！」

そう叫んで、俺はトイレの個室から出る。

このままだと誰だかわからないけど、でもこれを送ってくれた人に、

「惚れてまうやろおおおおお！！！！」

案の定、ゴリさんに追っかけられ、ボコられました。

――NOW LOADING――

――梓side

今日は二月十四日、バレンタイン……この日のために、先輩方と一緒に作戦を練ってきました。

その名も……『これで藤馬の心もぴゅあ　ぴゅあハート』大作戦！  
！……まあ、作戦名はあれだけど、内容は良いと思う。

ちなみに内容は、

1・藤馬先輩に嘘のラブレター（気持ちは本当だけど）を送る。

2・ラブレターで指定した部室で、藤馬先輩を待つ。

3・藤馬先輩が来たら、椅子に座らせてチョコを渡す。

4・藤馬先輩の心は『ぴゅあ　ぴゅあ』！

という感じです……ちなみにチョコは憂に教えてもらいながら、皆で作りました。

これで、鈍感の藤馬先輩でも私達の気持ちがわかると思っていました……ところが、事態は変な方向に進んでいきそうです。

私達が部室で、藤馬先輩を待っている時でした。

ーガチャッ！ー

ドアが開かれた方を見ると、息を切らした律先輩が居ました。そんなに慌てて、どうしたんだろう？

「どうしたんですか、律先輩？」

「はあ……はあ……はあ……藤馬は！？」

すると、ムギ先輩がお茶を淹れながら言います。

「まだ、ここには来てないけど……何かあったの、りっちゃん？」

「実はさ……藤馬の奴、本物のラブレターを貰ってたんだ！」

律先輩以外の皆（@ @）エツ．．？

「……律、それが本当だとしたら……」

湊先輩の顔が、どんどん青白くなっていきます。

「ああ……多分、告白されてると思う」

律先輩以ry（。 。 ;）マジで？

「皆、どうする……このまま藤馬の事を諦めるか？」

律先輩の問いに、私達は考えます。

藤馬先輩を諦める……もし諦めて、忘れることが出来るのかな……  
いや、

「そんなの……出来るわけじゃないですよ！ 私は、藤馬先輩が大好きだから……」

考えていたら、咄嗟に大声を出していました……恥ずかしい。

「ふふっ……あーずにゃん」

「にゃうっ！？」

すると、唯先輩が私に抱きついてきました。

「ゆ、唯先輩？」

私がそう言つと、唯先輩はギュッと、抱き締める力を強くします。

「わたしもね、あずにゃんと同じなんだ」  
唯先輩……。

唯先輩はそのまま話しを続ける。

「わたしだけじゃないよ……漣ちゃんにムギちゃん、りっちゃんに憂も……みんなみんな、なっちゃんが好きっていうのは同じだよ？」

私が皆を見ると、皆が顔を赤らめながら頷く。

すると、律先輩が不敵に笑い……。

「よろしい……ならば、皆で戦争だ！」  
クリーク

ここに、第一次バレンタイン大戦が勃発しました。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一章 番外編 ハッピーバレンタイン 後編！！

――梓side

今私達は、藤馬先輩が居る焼却炉に着きました。

「何処なんでしょうか、藤馬先輩……って、私達は何で隠れてるんですか？」

そう、私達は全体を見回せる近くの茂みに隠れています。

「バカ……ここで監視するんだよ、ほら来たぞ！」

律先輩が指を指した方向に、藤馬先輩が歩いてきました。

私達は息を潜めながら、その様子を監視します。

「あゝ、何だか凄いムラムラしてきた、ごほんっ……ドキドキしてきたな」

藤馬先輩がポケットに手を入れながら言いますが、私達の中では好感度が一気に下がりました。

「なっちゃん……やっぱり変態さんなんだ……」

唯先輩、分かりきっていた事ですょ？

私は再び藤馬先輩へと視線を向けます。

「いったい誰がくれたんだろう……ていうか、初めて告白されたから何て答えよう？」

藤馬先輩が唸りながら、手を組む。

しばらくするとふんす、と気合いをいれて……。

「やっぱり断ろう……今の俺じゃ、護りきれないと思うから……」  
悲しそうに言います。

「どうしたんだろう、藤馬……何だか辛そう……」

私達は、その場ではつが悪そうな顔がします。

『ダダン、ダンダン、ダン……!!……』

その時、あの有名な「ミネーター」のテーマが流れます。

私達が周りを見回しますが、誰もいません。

すると焼却炉の扉が開き、中から……。

「死にさせiiiiiii、ボウフラアアアアアア……!!」

郷田先生が飛び出してきました。

―――NOW LOADING―――

――藤馬 side

はあゝムラムrじゃない、ドキドキする。

呼び出された場所に着いたものの……誰も居ない……。

しばらく待っていると何処からともなく、

『ダダン、ダンドン、ダン！……！』

という音楽が流れてきた。

ていうか、何でターミネー　ー？

――ガゴンッ！――！

音がした方を見ると、焼却炉が開いて中から何か出てくる。

俺が身構えていると……。

「死にさらせいいいい、ボウフラアアアアアア！――！」

殺気だけで人を殺せそうな、ゴリさんが飛び出してきました……  
ヴェー！？

「な、何で、ゴリさんが！？」

あの手紙は、教室に置いてるはずなのに……。

まさか……いや、そんなことはあり得ないよ！

俺は、恐る恐るゴリさんに質問する。

「あの手紙……まさか、ゴリさんが送ったわけじゃn」……そうじや、裏切り者を成敗しようとなあ」……オウ、神よ……orz」

俺が何をしたっていうんだ……ちよつとムラムラしただけだろ！？  
……思春期なら誰でもあり得るのに！

今度クソ神に会ったときは、ン玉潰す！

俺が復讐を誓っていると、ゴリさんが指をパキパキ鳴らしながら、  
衝撃の事実を言う。

「ワシの娘……何やら、お前さんと付き合つとるらしいのお……それなのに、裏切つて二股とは……コロス」

ー（・ー・）エツ…？

……何か近くから物音がしたけど、それどころじゃない！

「あ、あの…ゴ、ゴリさん……話が全く読めないんですけど……？」

俺は誰とも付き合つてないし、好きな人もいない……ましては告白されたことなんて一度も（一年しか記憶ないけど）、無い。

「白々しいのお、ワシのアヤ（・・）とアドレス交換までしおったのに？」

アヤ？……あつ、ラブクライシスのアヤちゃんか……うん？

「ていうことは、アヤちゃんはゴリさんの娘って事すか……？」

「なんじゃ、今頃知ったんか？」

そ、そ、そうなのおおおおおお！？

でも、アドレス交換してメル友なだけなんだけど……。

ちょっと意味が分からないので、改めて状況を確認すると……。

1・アヤちゃんはゴリさんの娘。

2・ゴリさんは、アヤちゃんと俺が付き合っていると思ってる。

3・そして、俺がアヤちゃんを裏切らないかラブレターを送ってみる。

4・死にさらせいいいいいい、ボウフラアアアアアア！！ 現在ここ。

OK、死亡フラグが立っている事だけは分かった。

とりあえず、ゴリさんの勘違いから解いていこう。

「ゴリさん、俺とあんたの娘は付き合ってるんじゃないくて、メールのやり取りをしただけですよ？」

俺がゴリさんにそう言うが……。

「うるさいんじゃ、おんどりゃあ！！」

ーギャングギャングギャング……！！

ゴリさんがそう叫びながら、パンチの嵐をぶちこんでくる。

ていうか、パンチの音がギャンとか可笑しいだろ……死んだんじゃないのこれ？

あれ、何だか攻撃がやけに遅く感じるな……はっ！？

その瞬間、俺の髪の毛が全て逆立つ。

――攻撃回避アビリティLv4発動！弾幕確認、させるか！――

――ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン………！！！！

「な、なんじゃと！？」

「ふっふっふ……、甘い、その程度で俺を倒そうだなんて、イチゴ牛乳にアンコ入れるくらい甘いぜ！！」

俺はゴリさんの残像が出るほど速い攻撃を全て見切り、避けていく。

てか、当たれば死ぬよね……だって残像出てるもん。

そう思いながら、ゴリさんを説得する。

「だーかーらー、ちよっとは人の話を聞いてくださいよ！？」

「だまらっしゃい！！」

年頃の男と女がアドレス交換した 遊びと称してデート そのままランデブーに決まってるじゃろおおおおお！！！！

アンタは恋愛小説（笑）で何言ってるんだアアアアアアア！？  
このままだと不味いよ（色んな意味で）、どうにかしないと……あ、  
そうだ！

俺は一旦距離を置いて携帯を取り出し、ある人物に電話をかける。

その間も、回避アビリティ（ギャグ補正です）でゴリさんの攻撃を避ける……って、今顔にかすって血が出たぞ、どんだけだよ！？

ープルル…………ガチャン！

「もしもし、アヤですけど…………何でしょうか？」  
よそよそしくアヤちゃんが出る。

そう、俺の作戦はアヤちゃんに付き合っていない事を、ゴリさんに言ってもらうという作戦だ。  
これなら、誰も傷付かないで済む。

ていうか、段々と俺にかすり始めてるから急ごう！

「あのさ、今ゴリさんもとい、アヤちゃんのお父さんがアヤちゃんに聞きたい事があるんだって！」

「え、そうなんですか？  
うーん、何の事だろう？」

「と、とりあえず……うおっと！……代わるよ……はいゴリさん電話です、アヤちゃんから！」

するとパンチの嵐もやみ、電話をぶんどられる…………これで助かった。

「もしもし、何じゃアヤ？」

「お父さんこそ、私に聞きたい事って何？」

あ、ゴリさんに言っとくの忘れてた。

「さっきの事を聞けば良いじゃないすか、ゴリさん？」

「ああ、そうじゃった……アヤ、藤馬くんとは付き合ってるのか？」

ゴリさんが藤馬くんって……寒気がするわ。

——ここからの会話は、藤馬には聞こえてません——

「ふえっ!？」

な、何言ってるのお父さん! / / / /

藤馬さんとはまだ友達だよ!？」

「まだ、という事は……好きなんかあのボウフラの事!？」

「ううゝ、お父さんズルいよ!

何気に誘導尋問して聞き出すなんて、もう知らないっ!——ガチャッ、ツー、ツー……」

——バキヤッ!—— 携帯が握り潰される音

「ボウフラ…… コロス!——」

「えっ、ちょっ、ゴリさん……不幸だああああ!——」



……ふふふ、ふふふ、アハハハ……上等だよ！

怪人だろうが、ライダーだろうが、まとめてブツ飛ばしてやらアアアアアアア！！！！

多分、この時の俺は可笑しかったんだと思います……てへりんこっ

――何だかんだで放課後

怪人を蹴り倒し、幾つもの授業を眠り倒した……そして放課後。

俺は日直になっていたため、色んな仕事をせつせとやっていた。

「これで良いんだよな、さわっち？」

音楽のプリントを、さわっちに渡しながら言う。

「ええ、ありがとうね……そういえば、藤馬くんはチョコを買ったの？」

「オフツ！？……いえ、誰からも貰ってないです……」

さわっちの言葉に、かなりのダメージを受ける。

そんな俺を見て、さわっちは少し微笑む。

「それじゃあ、部室に行きなさい……皆、待ってるわよ。」

あ、私は会議だから、後だね。」

さわっちはそう言って職員室へ行った。

今のこういう意味だろう……まあいいや、部室でムギのお茶でも飲んでゆつくりするか。

俺は、教室に荷物を取りに行った。

ああ、重いよ……。

ギター（インヴァイオリン）を担ぎ、鞆を手に持ちながら部室へと歩く。

あ、そう言えば……。

俺は鞆から、ラブレターを取り出す。

「誰から何だろう……うん？」

ラブレターを見ると、呼ばれる場所が軽音部の部室、と書かれている……。

まあ、行けばわかるよな……よし着いた！

俺は部室のドアを開ける。

ーガチャ……。

「よしす。

ムギさん、お茶をよろす」お、来た来た」「……うん？」

声がした方を見ると、軽音部女子メンバー＋憂ちゃんが座っている。

つか、何で憂ちゃんが居るんだろう？

「はいはい、主役はここに座れって」

すると、律が俺の手を引いて椅子に座らせる。

椅子に座り、皆を見ると……何だか顔が赤いものの、幸せそうな顔をしている。

「どつたの、皆？」

何か良いことでもあった？」

俺が皆に聞くが、首を横に振る。

「それより、なっちゃんに渡したい物があるんだよ！」  
唯がそう言つと、みんな鞆から何かを取り出し、隠す。

そして、椅子から立ち上がって俺の前に来る。

俺、何かしたかな……。

「あの……何でしょうか？」

俺は、ちよつとビクビクしながら聞く。

すると皆がクスクスと笑い、律が「せーの！」と言つて……。

「ハッピーバレンタイン……！！」「……」

小包を俺に差し出した。

「……………へっ？」

俺は、余りの急展開に目をパチパチさせる。

「なーに驚いてるんだ？」

バレンタインチョコだよ、ほら」

律が黄色の小包を俺に渡す。

「藤馬くんのために、前々から計画してたのよ……はい」  
ムギが赤色の小包を俺に渡す。

「全く……手作りだから、大変だったんだぞ？」  
漣が青色の小包を俺に渡す。

「……ていうか、これ手作り！？」  
俺はかなり驚いていた。

何故なら、明らかに料理が出来なさそうな奴が一人いるし。

「藤馬先輩が思っている通り、色々大変でしたが唯先輩も頑張りましたよ……どうぞ」  
梓が緑色の小包を俺に渡す。

「あの藤馬さん、このチョコは皆で心を込めて作りました……」  
憂ちゃんがチョコを見ながら、優しく言う。

「うん、皆で一生懸命に作ったんだ……あ、わたしも頑張ったよ、本当だよ！」  
唯がブンブンと腕を振りながら、言う。  
唯に言われて皆の顔を見ると、笑いかけてくる。

「これが、私達の気持ちです……はい」  
二人が、白とピンクの小包を俺に渡す。

俺、今日まで本当に生きてて良かったなあ……。  
俺は泣きそうになるのを堪える。  
だって、不幸が続きに続いてからのこれだよ？……そりゃ泣きそうになるよ。

俺は唯の小包からチョコを取り出す。

トリュフって奴だろうな……あむっ。

皆から、特に唯から視線を受けながらチョコを食べる……うおっ！

「これ……うますぎじゃね！

本当にこのチョコ、唯が作ったの？」

「むうゝさつきから、そう言ってるよ？」あはは、すまんすまん。  
その後も皆のチョコを食べてみたが、どれも最高に美味かった。

「皆……本当にありがとうな？」

「……………えへへ、どういたしまして／＼／＼／＼／＼／＼」  
皆、幸せそうに笑うけど何か恩返ししなきゃ……あっ、そうだ

俺はギターケースの中に入っている、ヴァイオリンを取り出す。

「あのさ、お礼といっちゃなんだけど、演奏で返すよ！」

俺の言葉に皆が目を輝かせ、催促する。

それじゃあ……行きますか！

そして、俺は静かに弾き出す。

——演奏 仮面ライダーキバOST 渡

皆が、俺の為に何かをしてくれた……それだけで、力が沸いてくる  
気がする。

皆が、笑顔でいてくれる……それだけで何でも出来る気がする。

俺は弾き終わるが、そのまま次の曲を始める。

――演奏　ふわふわ時間ヴァイオリンver

あれ、何かの音が聞こえる……これは何だ？

（それは心の音楽……皆が、心で無意識に弾いている音だ）  
コウモリモドキの意志疎通が響く。

成る程……何だか分からないけど、皆の心の音楽を聴いてると護りたいって思うな……。

俺はその後も弾き続け、皆とのふわふわ時間を過ごした。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 番外編 ハッピーバレンタイン 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「これで第一楽章はおしまいか」。  
んで、次は第二楽章に入ると？」

うん、次回更新は……月曜日からにしようかな、土日は色々あるし。

藤馬「というわけでここからが本番なので、ぜひ応援よろしく願  
いします！」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

## 第二楽章 プロローグ！！（前書き）

どうも、私こと388859です。

今回から、第二楽章 に突入！

ここからは、恋もバトルも激しい展開になっていきます。

それでは第二楽章 プロローグをお楽しみください！

## 第二楽章 プロローグ！！

――演奏 私の恋はホッチキス・ソロギタ―ver

――藤馬side

季節はもう春真っ盛り……桜も咲き誇り、風が吹く度に花弁が舞い上がる。

今日から新学期であり、俺も三年生になるのだが……。

――ダッダッダッダッ……！！

「何でこうなるんだよおおおおお！？」

（今日という大事な日に、貴方は遅刻とは……）

（いつもの事だろう、気にするなタツ坊）

はい、ガッツリ遅刻……俺はとにかく遅刻しないためにも一生懸命に走っています、新歓ライブで弾く曲を口ずさみながら。

そして、校門までやっとたどり着く事が出来た。

現在の時間を確認するため、時計を見ると……。

現在時刻 八時

（・・）エッ……？

「……見間違えた……だ……！？」

その場でorzポーズを取り、絶望する。

もう嫌だよ、パトラッシュ……。

そんな俺に、さらなる不幸が訪れる。

「……っ！」「……」

東の方から、ファンガイアの気配がする。

……今から行ったら、完璧に遅刻確定なんだけど？

俺が正論を相棒達に言うが……。

（何を言っている、早く行くぞ！）

（そうですよ、早く行きましょう！）

「あーもう、わあっただよ！！」

殺りますよ、殺らせていただきますよ！！」

俺は踵を返し、怪人退治へと走り出した。

――NOW LOADING――

――三人称 side

スーツを着た男は、息を荒げながら公園の中を走る……その後ろには。

「ウウ……貰うぞ、お前のライフエナジー！！」

熊をモチーフにした怪人、グリズリーファンガイアが追いかけていた。

「く、来るな、来るなよ!!……うわっ!？」

スーツを着た男は近くの石に躓いてしまい、転んでしまう。

それを見て、グリズリーファンガイアが牙のようなモノを空中に出現させる。

「な、何だよそれ……やめろ、くるなあぁ!!」

危険を感じた男が石などを投げるが、ファンガイアは全く怯まない。

そして、グリズリーファンガイアが襲いかかるうとした時だった。

「ウウ……いただき「はい、ドーン!!!」……グッ?」

誰かの声がした瞬間、急な衝撃で地面を転がるグリズリーファンガイア。

目の前の事に目をパチパチさせながら、男は聞く。

「あの……君は?」

すると青年、藤馬は男を立ち上がらせながら、言う。

「全く、派手にしやがって……あ、貴方は早く会社に行った方が良  
いんじゃないすか?」

藤馬に言われて顔を青白くさせながら、男は去っていった。

「ふう、これでよし……後は」

藤馬が右手の包帯をほどきながら、グリズリーファンガイアの方を

向く。

「貴様、何者だ……只じゃおかんぞ！」

グリズリーファンガイアは藤馬へと突進……しかし。

ーバキン、バキン！！

「グフツ、な、何だ！？」

突然何かに攻撃され、戸惑うグリズリーファンガイア。

「ふむ……ビーストクラスでも強い方だな……」

攻撃した一体、キバットが呟く。

「それじゃあ、エンペラーで行きましょう。

時間も余り無いですし」

するともう一体、タツロットが藤馬の周りを翔びながら言う。

「ええー朝からそれは……まあいいや、さつさと済ますぞ？」

藤馬がそう言うのと左手でキバットを掴み、右手に噛ませる。

「ああ……行くぞ、ガブリ！！」

「っ！！」

その瞬間、右手から全身へと《魔皇力》が流れる。

そしてキバットを右手に持ちかえ、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれ、左手を真上に上げる。

「《変身……！！》」

キバットをベルトに、タツロットは自分で左手に填める。

すると、藤馬の体が黄金に光っていく。

「……ハアッ!!」

藤馬が左手を振り下ろすと、炎と共に紅いマントが出現する……その瞬間藤馬の姿は、仮面ライダーキバ エンペラーフォームへと変質していた。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」

Eキバはマントを翻し、グリズリーファンガイアへと宣言した。

――運命は変えられない……そう決めたのは誰だろうか？

――確かに、運命は変えられないかもしれない……。

――しかし、運命に抗い続ける事は出来る。

――そして、抗い続ければ、何時かきつと……。

――運命は、ハッピーエンドへと変わる。

この物語はバカだけど、運命に抗い続けた男のお話。

I l t h e b e g i n n i n g o f t h e s e c o n d  
m o v e m e n t .

I  
I  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第二楽章 プロローグ!!（後書き）

どうでしたか？

藤馬「ちなみに最後の英語は第二楽章が始まる、みたいな感じです」  
さて、次回からこの小説は三日に一回の更新になります。

藤馬「実は、まだ話の構成が出来てないらしく……全く、早くやらないさい！」

イエッサー!!

藤馬「これからも迷惑をかけると思いますが、どうかこの小説をよろしく願います!!」

全員「それでは、次回をお楽しみに!!」

**第二楽章 第一幕 意外な転校生！！（前書き）**

どうも、私こと388859です。

タイトルでも分かる通り、あの子の再登場回ですよ！

それでは第二楽章 第一幕をお楽しみください！！

## 第二楽章 第一幕 意外な転校生!!

――藤馬 side

《エンペラームーンブレイク!!!!!!》

ドゴツ、ゴガアアアアアン!!!!!!

グリズリーファンガイアに必殺技をぶちこみ、その体を爆散させた。

俺はバク転してその場を離れる。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……ごほっ、ごほっ!」

俺は変身を解除してその場に膝を付き、口から何かを地面に吐き出す。

地面を見ると……赤く光る血がついていた。

「……やはり、エンペラーは人間の藤馬には危険すぎるな……使う頻度を減らさない」と

「ですが、最近は強い怪人が多くなってきましたし……」

前にも言ったが、キバの鎧はファンガイアの王の物だ。

人間が使えば、それだけで負荷はかなり増えていく。

俺は近くの水道で口を濯ぎ、相棒達にこう告げる。

「大丈夫だよ……ちょっと吐血しただけだしな……それに」  
相棒達を鞆に入れながら、話を続ける。

「俺しか居ないんだよ……奴等と戦えるのは」  
俺の言った言葉に、コウモリモドキとタツちゃんは雰囲気을暗くさせる。

「だから、多少の無茶はしないとダメだろ？」  
だってさ、あんな奴等の為に誰かが不幸になるなんて……そんなの許せるか？

俺は、そのまま学校へと歩き出した……もう遅刻してるからね。

「やっと着いた……ゴリさんはどこだ？」

校門に着き、ゴリさんが居る場所を確認するが誰も居ない。  
良かった、追っ掛けられなくて済むわ。

そう思いながらルンルン気分で校庭を歩く。

すると講堂の方から、校歌の音が漏れ出てきた。

あ、もしかして、もう始業式が始まったのか！

今更行っても仕方ないので、靴箱の方へと歩き出す……しかし。

……！！

何かが靴箱の方から土埃を撒き散らし、コッチに向かってくる。  
もう嫌な予感しかないんだけど……。

俺は嫌々目を凝らしてみると、

「まーた遅刻しおつて、ボウフラアアア!!」

竹刀を持ったゴリさんがコツチに向かってきていた……はあ、不幸だ…。

俺はスグにクラウチングスタートの体制を取る……そして。

「これで、捕まえ」よーい……ドンッ!」……うおっ!？」  
追いかけてスタートさせた。

校庭を走りながら、やり過ぎす場所を考える。

うーん、隠れられる場所は……よし!

俺はスグに講堂に向かって走り出した……その間も竹刀を避けたり、フエイントをしたりして捕まらないようにする。

「ちょこかまと……ああうつとおしい!!」  
さっさと捕まれ!!」

ゴリさんがイライラしてるのか、怒鳴り込んでくる。

それを受け流し、講堂のドアを……。

「どうおりやああああああ!!……」

――ガスッ!!!!

思いつき蹴破った。

ふう、後は紛れればいい

「何やっとなじゃ、おんどりやあああああ！！」

やっぱり蹴破らなきゃ良かったあああああ！！

半分涙目になりつつ、新二年生の集団に紛れる。

いきなり俺とゴリさんが現れたことによって、その場に居る全員が混乱していた。

よし、これならイけるん「な」にやってんだ、藤馬？」……へっ？

ーガシッ、バキヨッ！！

「ナスカツ！？」

いきなり首へと走った衝撃にビックリする。

体をガクガクさせながら後ろを見ると……そこには。

「……（――・＃）」「……」腕を組んで、いかにもぶちキレている軽音部の皆さんが居ました。

くそう、まさか皆に裏切られるとは……不覚っ……。

「さて、死ぬ準備は出来たかのぉ？」

そして死亡フラグ乱立ですね、本当にありがとうございました。

――NOW LOADING――

やっと解放された……もう最悪だよ……。

三年二組……俺が一年間過ごすクラス。

ちなみに、軽音部メンバー+和の全員が一緒に担任はさわっち……仕組んだ感じがブンブンする。

その教室の机で突っ伏しながらため息をついた。

「お前が遅刻するから悪いんだろ？」

確かにそうですね、律さん。

「本当に大丈夫なの藤馬くん？……遅刻したのも、怪人がらみなんでしょ？」

和の問いに首を縦に振る。

正体を和にばらして以来、和は何かとサポートしてくれる……主に勉強だけ。

「あ、そういえばなっちゃんは知ってた？」

このクラスに転校生が来るんだって！」

唯が少し興奮しながら言う。

つか、何でそんなに興奮してんの？

「だって転校生だよ！  
何だかワクワクするじゃん！」

「うんうん、私もするする」  
唯とムギが手を取り合ってテンションを上げる。

転校生か……どんな奴だろうな？

「というか新歓ライブがあるんだぞ、新歓ライブ！」 澪が皆に言い聞かす。

「それで本心は？」

「転校生、喋りやすい人だといいな……」  
結局そうなるのね……。

そして俺達が転校生について色々想像していると、

「ーガラッ」はい、ホームルーム始めるから席について」

さわつちがやってきた……それにしても、さわつちが担任とかうるさくなりそうだな、このクラス。  
さわつちの声に皆が席に着く。

ちなみに俺は男子なので、廊下側の一番前の席に座っていて隣は居ない……多分、転校生が座るんだろう。

「えーと、ホームルームを始める前に一つ、このクラスに転校生が来ます」

この言葉に皆がざわざわする……俺もこんな感じだったのかなあ。

「センサー、転校生は男子ですか、女子ですか？」  
律がさわつちに質問する。

「えっと中都君は特例中の特例なの。  
だから、今回は女の子よ。  
仲良くしてあげてね……じゃあ入って」

ーガラッ。

さわつちがそう言うつと扉が開き、転校生が入つ……（。。）マ  
ジで？

俺と唯達はその転校生を見て、思わず固まってしまった……なぜな  
ら。

「じゃあ須藤さん、自己紹介をお願いね」

およそ五ヶ月前、俺と死闘を繰り広げ、最終的には家族になった……  
大切な人。

「はい……どうも初めまして、ボクの名前は須藤美紗すでつ みさです。  
一年間よろしくお願いします」

裁判を受けているはずのシザース、もとい美紗がこのクラスに転入  
してきたからだ……。

俺は放心状態になりながら、さわつちの説明を聞く。

「須藤さんは、家の（。。）用事でこの学校に転校してきました。  
それで須藤さんの席は……」

さわつちが教室を見渡すが、空いている席は俺の隣にしかない……  
よって。

「中都君の隣しか無いわね……須藤さんはそれで良い？」

「はい、むしろ嬉しいです！」

美紗がさわつちに返事をして、スキップで俺の隣に来る。

「久しぶりだね、藤馬くん」

美紗が座りながら俺に笑いかけてくる。

美紗の言葉に、約四名がこちらを睨んできた。  
特に、席が近い漣とムギは凄い目をしている。

「おいシザ「今のボクは美紗だよ？」……なんで美紗がここに居るんだよ？」

俺は視線をスルーしながら美紗に聞く。  
すると指を唇に当てて考え込む美紗。

「うーん、あれから忙しかったからね。

とりあえず一段落したから、藤馬くんが居るこの学校に来たわけ」

成る程……大体わかったよ、美紗。

「素直でよろしい！」

さて、問題は……。

「……（――＃）……」

怒ってるマドモアゼル達をどうするかだよな……。

「おいお前等、後で説明をするから……だから殺気を抑えてください！」

俺はJUMPING土下座をしながら言う。

「……あ、ごめんごめん……てへっ」「……てへっ、じゃないでしょうよ！」

うっかりで殺気出されたら寿命縮むわ！？

「あはは、何か楽しそうな人達だね藤馬くん！」

寿命が縮んで楽しいなら良いよね、美紗さん。

「それじゃあホームルームを始めるわよー！」

さわっちの言葉に俺達は素直に従った。

――昼休み

「……親戚い！？」「……」

カレーパンを食いながら、唯達に美紗との関係（簡単にまとめると、美紗とは親戚なんだ）を話していた。

ていうか、そんなに驚かなくても良いんじゃない？

ちよつと傷つきながら、売店で買ったジュースを飲む。

それにしても……。

俺は自分の手を見て、握ったり閉じたりする。

俺が戦い続け、一年が経った……怪人達は少なくなるどころか、逆に増えた気がする。

それに強くもなり、エンペラーを二週間に一回ぐらいのペースで使わないといけないぐらいになっていた。

それに、記憶も取り戻していない。

断片的には取り戻してはいるが、何の記憶なのか分からない……ただ。

俺はふと憂ちゃんお手製の弁当を食べている唯を見る。

唯はおかずを食べて幸せそうな笑顔を返してくる。

他の面々も、この平和な時間を楽しんでいた……特に美紗。

凄く良い笑顔をしていて、幸せそうにしている。

それだけで、自分のやった事に意味が在ったんだと思うと、凄く嬉しかった。

「藤馬くんどうしたの、そんなにぼーっとして?」

美紗が牛乳を片手に聞いてくる。

他のメンバーも俺に視線を集めてくる。

「いんや、別に何でもないよ。」

俺が今までやってきた事は無駄じゃないんだなあって、思っただけ」

皆がきよんとするが、美紗だけは分かっているようで笑顔だった。

俺はゴミを片付け、心地よい春の暖かさに包まれながら眠りに入った。

――ここからの質問タイムは、藤馬には聞こえていません――

「ねえ、須藤さんは今まで何処に居たの?」

「美紗で良いよ、私もりっちゃんって呼ぶから」

「お、おう、それじゃあ美紗って呼ぶな　よろしく」

そう言って二人は笑い合う。

すると、唯がちょっとモジモジしながら美紗に言う。

「あ、あの美紗ちゃん……あの時はありがとうね?」

「へっ、何が……って、あああの時ね……。」

別に良いよ……それに、こちらこそ怖い目に合わせてごめんなさい」



「そりゃあねえ、藤馬くんは命の恩人だから、ボクも大好きなんだよ」

美紗の言葉に唯達は顔を合わせ、溜め息をつく……なんというか、愁傷様です。

その後、唯達と美紗は自分達の苦労話を話したらしい。

――NOW LOADING――

――藤馬side

初日の授業も終わり、やっと放課後になった。

俺達軽音部は荷物をまとめ、部室へと移動を始める。

すると美紗が俺の隣に来て、質問する。

「あれ、藤馬くんは何処に行くの？」

「あつ、美紗には言ってなかったな。

俺達さあ、実は部活でバンド組んでるんだ。

今から行くんだけど、美紗も行くか？」

すると美紗が頷いて、笑顔をみせる。

「ちょ、ちよつと藤馬！」

ライブも近いんだし、練習しないと！」

漣が拳を握りながら力説する。

「そんな事言われても、唯達はお茶する気満々だぜ？」

俺は、目を輝かせながら話をする唯達を指差す。

その姿をみて、漣は溜め息をつく。

というわけで部室に到着……あり、先客が居るようだな。

ーガチャ……。

「よゝす、頑張つてんな梓？」

ギターの練習をしている梓に、労いの言葉をかける。

「あ、こんにちは先輩……って、貴女は！？」

梓が美紗を見て身構える。

「あーはいはい、ストップストップ」。

今から説明するから……ムギさんや、お茶の準備をお願いな」

「了解（ ）」

というわけで状況説明 and ティータイム。

ちなみに今日のお菓子はマドレーヌですたい……うん、美味し！

「すみませんでした、美紗先輩！」

「別に良いよ、梓ちゃん。」

そのかわり、これからよろしくね」美紗が笑いながら梓に言う。

「それにしても……ああ、落ち着くね」

「アタシも春休み中、何回も部室に来たくなったよ」

「私です！」

そう言いながら皆でお茶を飲んだり、マドレーヌを食べる。  
すると律が閃いたように言う。

「よし、新学期だからやることは！」

「新入部員「ムギのお菓子を食ーべよう！」……ぶう！」

「ウソウソ、お約束お約束」

頬を膨らませる梓を律が諫める。

「もう、真面目にやってくださいよ！」

「そうだよ、りっちゃん」

突然だらけていた唯が話し始めたため、皆で唯を見る。

「新入部員が入らなかったら、来年あずにゃん一人になっちゃうんだよ？」

唯の言うことは最もだが、だらけているためイマイチ迫力が無い。

つか、言われたくない。

しかし他のメンバーもそれはまずいと感じたのか、難しい顔をする。

「それもそうだな……」

「梓ちゃん、一人って寂しいんだよ……」

美紗、お前が言くと現実味がありすぎる。

「でも、このままなら確実に来年部長になれるぞ……こんな感じ」

律に言われて皆の脳内に、部長になって高笑いしている梓がイメージされる……何かバカっぽい。

すると梓がはっとして、

「そ、そんなのはどうでも良いんです!!」

慌てて弁解している……考えたよね、この子。ちょっと良いかも、って思ったよね絶対に。

そのまま弁解を続ける梓。

「それより、早く部活の勧誘に行きましょう？  
早くしないと良い人材が居なくなっちゃいます!」

((((誤魔化した……今絶対、焦って誤魔化した)))

皆の心がフルシンクロした時、唯が思い出したように立ち上がる。

「そつえばわたし、ビラ作ってきたんだよね！」

「「「「「嘘お!？」「「「「「

「うちの憂の勧めでしてねえへへ」

ああやっぱりね……憂ちゃん、いつもありがとう。

「ねえ藤馬くん、憂って誰？」

「ああ、憂ちゃんは唯の妹で、かなりのしっかりものだよ」

「ふーん、そうなんだ……」

「はいどうぞ、軽音部です！」

というわけで、It's ビラ配り!!

美紗は他の部を見回ってからまた来るそうだ。

何故か、ちょっとだけ汗臭い臭いがする牛の着ぐるみを着てビラを配る……いや、何で牛なの？

ていうか、全員が着ぐるみを着てビラを配ったら、仮装パーティーのビラにしか見えないよね？

その証拠に誰も受け取ってくれない。

俺達は一回部室に戻り、新入部員を待つものの……

「誰もこない……」

ムギの言う通り、誰も来ない……ですよね。

「こりゃあ来年は廃部か？」

「あずにゃんが一人になっちゃうよ……」

確かにこのままだと不味いな……うん？

漣が喋っていないことに気付き、漣の方を見ると、

「あわわわわ……」

何故かガタガタ震えていた……why？

とりあえず安心させることにしよう。

「……おいおい、どうしたんだよ漣？」

俺がそう言っで、肩に手を置いた……すると。

「ひつ、嫌ああああああ！？」

「ーガシッ、ブオン！！！！」

「フォッサマグナ！？」

「ーヒュン、バキヤ！！」

「……（@ @）えっ！？」「」「」

漣にその手を掴まれ、思いつきり部室の外へと投げ飛ばされた。

漣は、その後泣きながら何処かに行ってしまった。

その時投げられた勢いで、部室のドアを壊してしまった事をここに記します……。

「お、おごお……なかなかの投げ技だったぜ……」俺はフラフラと立ち上がり、部室へと戻る。

「廃部なんてダメっす！」

「自分もそう思います！」

唯とムギが気合いを入れている。

まあ確かに後味悪いよな、廃部なんて……というわけで！

「……部長！……」

皆で律の判断を仰ぐ……一方の律は腕を組んで考え込んでいる。

「そうだな……部員が増えれば部費も増えるしな……」

「部費部費（ブヒブヒ）」

いや律、そういう問題じゃないだろ！

「よし、部員獲得大作戦を実行だぜ！」

「ぶひー！……」

というわけで作戦を立てたのだが、もう帰らないといけない時間なので、美紗も一緒に下校することになった。

そして今は、俺と美紗で帰っている。

あつ、唯は憂ちゃんに買い物を頼まれてスーパーにいきましたよ。

「ていうか、美紗は何処に住んでんだ？」

……あれ、ちよつと待てよ？

そもそも、美紗はこの世界の住人じゃなくて異世界の住人だ。

俺の場合は、怪人を倒す代わりに衣食住を保証してもらったけど……  
…今の美紗に以前のような力は無い。

俺が、あーでもないこーでもないと考えていると……。

「ああそれなら、藤馬くんの家に住むことになったから」

――(@ @)???

俺はたつぷり十秒ぐらい固まった後、

「…………ウソダンドコドーン!!」  
夕日に向かって吠えた。

「……大丈夫？」

今日はボクがご飯を作ろうか？」

ああ、美紗さんの優しさが針のように突き刺さるぜい……。

心にダメージを負いつつ、美紗に聞きたかったことを聞いてみる。

「なあ……俺って男だけど良いのか？」

いくら何でも同年代が一つ屋根の下は……」

すると、美紗は俺の手を握って懐かしそうに言う。

「藤馬くん言っただじゃん……ボクと家族になって、護ってくれるって……家族はいつまでも一緒にいるもの……そうだね」

はあ……参りましたよ、マドモアゼル。

というわけで、俺の家に大切な居候がまた増えました。

I i t o b e c o n t i n u e d

**第二楽章 第二幕 新歓 前編！！（前書き）**

はいどうも、私こと388859です。

今回は独自設定が出てきますが、予想はつくと思います。

それでは第二楽章 第二幕をどうぞ！！

## 第二楽章 第二幕 新歓 前編！！

――藤馬 side

小鳥の鳴き声が耳に聞こえ、目を開けると爽やかな朝を迎える。

ううん……よく寝たな……「ムニユツ」……えっ、ムニユツ？

ふと手を握ると、枕より柔らかい感触がする。

そっちに視線を向けると……。

「あつ……ダメエ……ううん……キミなら良いよ……」

何やらエロい声を出して、幸せそうな美紗さんが寝てました……そして俺が握っているのは男のロマン……どうみてもパイオツですね、本当にありがとうございます。

って、冷静に言ってる場合じゃない！！

昨日は飯食って、風呂入って、自分の部屋でずっと一人で……ここ重要、寝てたはずなのに何故美紗が居るんだよ！！

俺は直ぐに手を離そうとするものの、美紗に手を掴まれて離れられない。

パイオツの余りの柔らかさに、頭の中が真っ白になってきた。

「ううん……な、な、ななにをやっているのかな藤馬くん！？」

(・。・)……終わったな……俺の短い人生……。

――NOW LOADING――

――放課後

パイオツタツチ事件（俺が名付けた）の後、美紗が「ボクに話しかけないでよ、変態……」的なオーラを出していたので、とりあえず美紗を焼却炉に連れ出した。

そして、

「あの……その…朝は本っ当にごめんなさいでした!!」  
俺は朝からずっと怒って口を聞いてくれない美紗に謝る。

反応が無いので顔をあげるが、目の前に美紗は居ない。

俺が周りを見渡そうとした瞬間、

「……………えいつ!」

「へあ? ……ちょ、ちょ、ちょっと美紗さん!？」

いつの間にか後ろに回り込んでいた美紗が背中に抱き着いてきた。

ああ男のロマンが惜しみなく押し付けら……じゃないよ！

「あ、あの、何で貴女は抱きついてるんでせう？」

「えっ……ダメかな？」

いやダメ……じゃないです、はい。

美紗の涙目にやられましたよ、だって可愛いんだもん。

しばらく抱きつかれていると、美紗が喋りだす。

「……別に怒ってないよ……朝の事は」

へっ……そうなの？

意外な返答に拍子抜けする俺。

「うん、別に怒ってないよ。ボクが勝手に君の部屋に入ったんだし……それより行かなくていいの、部員の勧誘？」

あ……忘れてたあああ！！

美紗の言葉に、思わず頭を抱えてしまう俺。

スグに教室へと駆け出そうとするが、一言だけ言いたかった事を美紗に言う。

「あのさ……家に帰るときは先に帰ってきてくれないか？」

「えっ、何で？」

いやいやわかるでしょうよ、何となく。

「だってよお、唯達にバレてみる……俺が殺されるぞ?」

「ああ……あはは、確かにそうかも」

「それじゃあ、また後でな!」

俺は教室へと荷物を取りに行った。

というわけで部員獲得大作戦を説明しよう。

作戦1 ・行き倒れ作戦……実行中。

作戦2 ・なまり作戦

作戦3 ・スパイ大作戦

作戦4 ・新歓ライブ

という内容になっている。

現在は、作戦を実行している律以外は全員部室でくつろいでいる。

ていうか、なまり作戦ってなんなん?

まともな作戦じゃねえだろ?

「「ごめんください……」」

「ーガチャ……」。

「はい……」

俺が考えている間に、カモが来たようだ。

律に肩を貸す新入生、律儀に声までかけている。

「大丈夫ですか、着きましたよ？」

「お気を確かに」何というか、罪悪感が芽生えますね。

俺がそんなことを思った瞬間、律の目が怪しく光り、ミッションがスタートした。

まず、律が新入生の耳元で呟く。

「ありがとうございます……そして、軽音部へようこそ」

律はスグに前へと飛び出し、唯とムギの三人で勧誘を始める。

「ウェルカム……！」「お茶いかが？」

「はい、ここにサインして！」

押し売りに近いこの勧誘に新入生は……。

「「ま、間に合ってます！」」

光より速く逃げ出した。

「く、クッキーもある」「ーガチャッ!」……むう……」  
ムギが止めようとしたものの、無理だった。

つか、お菓子じゃ唯ぐらいしか引き留められないと思う。

「くっ、行き倒れ作戦は失敗か……」

「りっちゃん、諦めるのはまだ早いよ!」

唯が自信満々に言い放ち、次の作戦を実行する。

部室に繋がっている階段の下、その廊下で唯が新入生を待っていた。

その様子を近くの場所で俺、律、梓の三人で見守る。

唯一人で勧誘が出来るのかな……無理だろ?

その証拠に梓も心配そうな表情をしている。

すると新入生が通りかかり、なまり作戦が発動する。

「あのくすまんこっですか?」

音楽室つてどこですか?」

唯が田舎の爺さんよりなまったしゃべり方で新入生に聞く。

「なまった?」

「何やってんだ?」

「つか何言ってるのあれ？」

俺達はツッコミをいれた後、そのまま傍観するが……。

何やら新入生が音楽室への行き方を唯に教えている。

「あつ、行き方教えてもらってますね」

「まあそうなりますよね」

「新入生、マジ良い人すぎる」

唯が笑顔でお礼を言い、こちらに来る。

「はっ、これじゃ意味無いよ！」

「バカですよ、この子？」

とりあえず次の作戦へGO！

次のスパイ大作戦で俺の出番は無いので、大人しくビラを配った（着ぐるみはもちろん着た）。

はあ、やっぱり着ぐるみ着ない方が良いよ……誰も貰ってくれない。

「大丈夫なのかしら、このままで……」  
部室に帰る途中、ムギが呟く。

確かにビラを貰ってくれた人は数人しか居ないし、誰も部室に来てくれないけど。

隣にいる澪とムギの前に来て言う。

「俺達が不安になってたらダメだろ？  
梓はもつと不安なはずなんだから、な」  
俺の言葉に二人が優しく頷く。

その瞬間――。

――ドクンッ！――！

「……っ……あ……ぐっ……うぁ……な、何だ……？」  
身体が謎の圧迫感に襲われ、胸を手で押さえる。

「きゅ、急にど、どうしたんだ藤馬！？」

「だ、大丈夫、藤馬くん！？」

急な出来事に、俺は膝をついてしまう。

そして、

――チャリン、チャリン、チャリン……。

「っ………何だよ、これ………？」何かコインのようなモノが擦れ合う  
映像が頭の中に写し出された。

すると映像が消えた瞬間、何もなかったかのように圧迫感が消えた  
……が。

「「っ!」」

今度は知らない怪人の気配が現れた。

「ごめん、用事が出来たからまた明日!」

俺は部室へと駆け込む。

――ガチャ!!

「いらっしやい……って藤馬かよ?」

「すまん、今日はもう帰るわ!」

着ぐるみを律に投げ、荷物を持って飛び出す。

「おいおい、藤馬……って居ないし藤馬、おい藤馬あああ!……!」  
律の叫びが俺に聞こえたが、そんなの関係ないんじゃない!

――NOW LOADING――

――三人称 side

ここは有名な宝石店……その中では。

「いやっ、食べないで、食べないで、お願いだから……」

泣きながら懇願する五十代の女性と、

「うう……もつと……もつとだ……もつと欲しいイイイイイイ！」

その女性が身に付けている宝石類を吸収する、ミイラ男のような怪人、ヤミーだった。

事の始まりは数分前、いつものように店で宝石を買いに来た女性。

しかし、女性の視線にある男が目にとまった。

その姿はさながら神父のようで、体は痩せ細っている……なりより、こちらをずっと見ている。

まるで何かを見極めるように。

女性は神父を気味悪がり、宝石へと視線を移したその時だった。

「その欲望、解放しなさい……」

そんな声が聞こえ、自分からヤミーが出て来て……今に繋がる。

ヤミーは女性の宝石を全て吸収し、店内の宝石も吸収します。

店員が止めようとするがヤミーの力に翻弄され、逆に気を失う始末。

そして、全ての宝石を吸収した時――

「ウウウウ……」

ミイラ男のような姿からカマキリのような怪人、カマキリヤミーへと変わった。

カマキリヤミーは神父の元へ行き、命令を待つ。

神父はカマキリヤミーの状態を見て呟く。

「ふむ、少々心許ないですね……もっとメダルを蓄えてきなさい」  
神父はカマキリヤミーへと指示を出し、カマキリヤミーはそのまま店から出た。

怪人が出たことによって周りに人気がない……はずだった。

「ちょっと待て！」

肩で息をしながら、藤馬がカマキリヤミーの前に立ち塞がった。

すると藤馬の頭にキバットが停まり、ヤミーを見る。

「むっ、ヤミーとは……めんどろな相手だな」

「とりあえず倒せば問題ないだろ……行くぞ！」

藤馬がそう言って左手でキバットを掴み、噛ませる。

「ああ……気を付けろよ、ガブリ！」  
「っ――！」

噛みついた右手から全身へと《魔皇力》が流れる。  
すると顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれ

る。

「《変身！！》」

藤馬は仮面ライダーキバへと変身した。

カマキリヤミーは腕の鎌を磨きながらキバを見る。

「貴様がキバか……先ずはお前の中のコアメダルを貰うぞ！」

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

キバがヤミーへと一直線に突っ込む。

ヤミーは鎌でキバの頭を切り裂こうとする……しかし、

「甘いんだよ、カマキリ野郎が！」

それを軽く避け、振り下ろした鎌を掴んで、ヤミーを引き寄せる。

カマキリヤミーの鎌は腕についているため、間合いの中に入ってしまえば当たらない……つまり。

そこからキバは蹴り、拳、頭突き等を駆使してカマキリヤミーを追い詰めていく。

そして大きくカマキリヤミーを蹴り飛ばした時、

「ぐああああ……！」

ーチャリン、チャリン、チャリン……！

カマキリヤミーの身体から、セルメダルが溢れる。

キバはセルを掴んで、それを見回しながら呟く。

「これって……さっき見た奴だよな……っ！？」

キバの体が急に動かなくなり、膝をつく。

「おいどうした、しつかりしろ藤馬！」

キバットが呼びかけるが、キバは返事をせず、かわりに複眼が紫に光る……そして。

地面に腕を突っ込み、何かを引き出す。

「???……何だこれ、恐竜みたいだけど？」

その何かは紫色の大斧みたいだが、全体的にはティラノサウルスの頭を模している……すると。

（おっ、メダガブリューを出したってことはかなり進んでるな、侵食）

キバの頭に聞いたことのある声が響く……五ヶ月前キバに護る力をくれた、あの声だった。

（……おい、何で今まで話し掛けなかった？）

キバは謎の声に問いかける。

（それは簡単、侵食が進んでなかったから。  
今の藤馬なら自由に話せるけど……まあ、まずはヤミーを倒す事に  
専念しよう）

謎の声に従ってキバはヤミーの方を向く。

（メダガブリューを使ってヤミーを倒せ……まっ、メダガブリュー  
の使い方は自然に分かるでしょ。

あっ、そういえば！）

謎の声が思い出したように言う。

（自己紹介をしてなかったな。

俺の名前は火野映司、またはギル。  
よろしくな？）

（……ふふっ、わかった。

これからよろしくな、映司！）

そう答えると、キバは近くのセル一枚を掴み、エナジーエンハンサ  
ー（ガブリューの口の部分）に入れる……そして。

「《ゴックン！ー！》」

セルメダルをビュレットチャンバーに投入し、エネルギーを圧縮。

「《キバー！ー！》」

すると、キバに変身する時の音楽が流れ、メダガブリューは赤色を  
帯びていく。

それを見てカマキリヤミーは鎌から真空刃を放つが、キバは一気にメダガブリューを振り抜く。

真空刃を掻き消し、そのまま赤い軌跡を描きながらカマキリヤミーを叩き斬る！！！！

「セイヤアアアアアアア！！」

《グランドオブレイジ・キババージョン！！》

そして、カマキリヤミーに当たる一歩手前というところで……。

「……………っ！？」

キバは横に飛び退く。

キバが居た場所には鱗粉が舞い上がっており、あのままでいれば危なかっただろう。

キバがスグにヤミーを探すが、その姿はどこにも無かった。

―――NOW LOADING―――

――藤馬side

変身を解除し、散らばっているセルメダルを集める。

コウモリモドキと映司が言うには、そうした方が良さそうだ。つか、さっきの斧は何なんだろう……あれもコアメダル之力だっけってただ。

そんなことを考えつつ、集めたセルメダルを触った時だった。

ーゴポツ、ゴポツ、ゴポポ……。

「なっ!？」

セルメダルが俺の手に入ってしまった。  
俺は取り出そうとするものの、その方法が分からない。

「どうした藤馬、そんなに自分の手をつねってるが……ついに頭が壊れたか？」

うっさいんだよ、クソコウモリモドキ!

コウモリモドキに事情を説明すると……。

「ふむ……メダルの力……グリード化が進んでるな……何故だ……？」

コウモリモドキがブツブツと言っているが、何の事やらさっぱり。

とりあえず帰るか、考えても分かんないし……それに。

(……(・・・)zzz……行けますって……ちよつとお金と……明日のパンツがあれば……)

知ってそうな奴は寝てやがるし……はあ。

俺は暗くなりつつある道路を、ゆっくりと歩き出した。

I I t o b e c o n t i n u e d

## 第二楽章 第三幕 新歓 後編！！

――藤馬 side

「ううん、曲はいつもので良いんだよな？」

ギターとヴァイオリンを点検しながら、漣に聞く……あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は最後の作戦、新歓ライブの準備をしている。

今回の作戦が上手くいけば、部員がもっと増えるはずなので、皆には気合いが入っていた。

特に梓なんかはスッゴク気合いを入れている……だが、漣だけは涙目になって小動物みたいになっている。

可愛い…… はっ、これが萌えの文化なのか！

「先輩、新境地に目覚めないでください」

分かってますよ、あずにゃん。

「ほんじゃ、気軽に頑張っついていこうか、マドモアゼル？」

「……うん（はい）！！」「」「」

というわけで本番中なのだが……。

『  
』

梓の奴、力みすぎて演奏がぎこちないんだよな……何か顔が怖いし。

あ、そんなに睨まんといてよ！

今は三曲目で、次に唯のMCが入る。

その間に、ちよつとだけ励ましてみるかな？

俺はヴァイオリンを弾きながら、笑みを溢した。

――梓 side

あれ、何かいつも通りに弾けない……次で最後の曲なのにどうしよう！

私のピックを持つ手が震え、軽いパニックに陥ってしまいました。

もし、このまま誰も新入部員が来なかったら……いつもならこんな事は考えないのですが、パニックになった事でネガティブ思考になってしまいます。

唯先輩の安心できるMCも耳に入ってきてません。

どうしよう……その時。

「おゝい、梓？」

そんな声と共に、震えていた手を握られます。

何だか温かい感じがして安心できます。

振り向くと、やっぱり藤馬先輩でした。

「お前はもちつと気軽にやりんさい。

今のお前は楽しんでないだろ？」

「あつ……確かにそうですね」

藤馬先輩に言われて気づきました。

私は勧誘の事ばかり考えて、このライブを楽しんでませんでした。

「まあ、せめて最後の曲ぐらい皆で弾いて、皆で楽しもうぜ……な？」

そう言つて藤馬先輩が頭を撫でてきます。

ああこのまま死んでも良いかも…… はっ、ダメダメ！

私は頭をブンブンと振り、

「……はいつ、頑張りましょう！！」

笑顔で答えました。

藤馬先輩も安心して戻っていきます。

「うつし、それじゃあ最後の曲に行きますか！  
りっちゃん隊長、カウントをお願いしやす！」

「あゝ、MCはわたしの役割だよなっちゃん！」

「ありや、ごめんごめん」

このコントに講堂は笑いに包まれます。

どんな時でも、これが放課後ティータイムなんだよね。

会場の笑いが一段落した所で唯先輩のMCの続きになります。

『それでは最後の曲、聴いてください……ふわふわ時間!!』

皆でアイコンタクトをして……。

「1・2・3・4・1・2・3!!」

――演奏 ふわふわ時間

――藤馬side

「軽音部いかがっすか！」

俺が着ぐるみを着て新入生にビラを配るものの、誰も貰ってくれない。

もうすぐ四月も終わり……桜の花弁が地面に沢山落ちている。  
新歓ライブが終わった後も、ビラ配りや色んな作戦をした。

しかし誰も来てくれず、不安だけが募っていくばかり。

いい加減やばいなあ……それに、最近の梓は元気が無い。

今日のお菓子でも梓にあげて、元気を出してもらうか。

そんなことを思いつつ、部室のドアを開ける。

ーガチャ……。

すると、仁王立ちをして深刻そうな表情をしている軽音部三年組と、憂ちゃん。

その前には美紗が正座をしてガタガタ震えている。

「よゝす……って、何やってんのお前等？」

俺は着ぐるみを物置に置きながら質問する。

「と、とうm「あらあら、ちょっとお口を閉じましょうか、美紗ちゃん？」は、はいっ！」

美紗が何かを言いかけたが、ムギの負のオーラに縮こまっている。

こ、怖すぎるよ、ムギさん……。

ムギのオーラにゆっくりと後ずさるうつとすると、

ーガシッ、ギリ、ギリギリギリギリ……。

「おい藤馬……ちょっと聞きたい事があるんだけど？」

「奇遇だな、律。」

私も藤馬に聞きたいことがあったんだ」

いつの間にか後ろに移動していた律と漣が、俺の肩を握り潰そうとしてくる。

「あ、あははは……何でしょうか皆さん？」

「……なっちゃん、心当たりはあるよね？」

「いんや、別に？」

「ーガシッ、バキッ！！」

「オウツ！？」

「そんなの、なっちゃんとミサミサが愛の巣を作っている（どつきよしてる）ことだよ！」

唯さん……ブンブンと腕を振りながら言っけど、副音声に凄く昼ドラ臭がするよ。

「藤馬くん、拷問おはなししないとダメみたいねえ？」

ムギさん、悪意を感じるんすけど。

……まあ、こういう時に限って運が悪いわけで……。

「ーチャリン、チャリン、チャリン……。」

「「っ！……！」」

この前のヤミーと、チェックメイトフォーよりは弱い怪人が……急ごう。

「美紗、ごめんな……お説教は一人で頑張れ（Ｔ―Ｔゞ」

「えっ？「ーガチャー！」ちょ、ちよつと藤馬くん！？……あつ、唯ちゃんそれはダメだ」

……部室から粉碎音が聞こえたけど、美紗なら大丈夫さ。

俺はそのまま廊下を走り抜ける。

（うゝん、グリードだけど……グリードじゃない）  
映司がそう呟く。

（グリードって、強い方の気配か？）  
意味が分からず映司に問いかける。

（うん、グリードはヤミーのボスみたいな奴なんだけど……なんか混じってる感じがするな）

映司は懐かしそうに言う。俺はもう少し気配を詳しく辿っていくと……これって！？

俺は自分の推測をコウモリモドキに言う。

（コウモリモドキ、グリードとファンガイアの混合なんてあり得んのか？）

（は？……何をバカな、そんなことを言っている暇があれば早く走

れ！)

そんなの言わなくても、後もうちよいだ！

よし彼処だな……あれはっ！！

――NOW LOADING――

――三人称side

「梓、こつちこつち！」

「ありがとう、純！」

梓は走りながら後悔していた。

今日は弦を買いに先に純と帰っていた。

しかし、その時やって来たのが……。

「待て、小娘共！！」

カマキリヤミーだった。

既に五分程鬼ごっこが続いているが、仮にも怪人と人間。  
このままでは梓達が捕まってしまうだろう……。

「死ねっ！！」

ーブォッ、ガガガガ……！！

梓達へとカマキリヤミーが真空刃を放つ。

真空刃は梓達の足下の道を削り、梓達は瓦礫に躓いてしまう。

「痛っ……なんなのよ……あ、梓！」

純は汚れをはたきながら、梓の方を向く。

梓の腕からは血が出ているが、少しの量なので大丈夫だろう……しかし、倒れた拍子に気を失ってしまった。

純が梓を起こそうとするものの、その間にカマキリヤミー達との距離も縮まってきた。

「梓、梓、しっかりしてよ梓……あっ……」

純が前を見た瞬間、カマキリヤミーは目の前で鎌を振り下ろそうと――。

「待ちやがれっ……」

ーガシッ……！！

する前に、カマキリヤミーに藤馬が飛びかかった。

「と、藤馬先輩……」

「おお、純ちゃん！ とりあえず梓連れてどっか逃げとけ……おら

っ！」

藤馬はそう言ってカマキリヤミーを蹴り、右手をキバットに噛ませる。

「行くぞ……ガブリ!!」

「っ!!」

藤馬の全身へと《魔皇力》が流れる。

顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれている。

「《変身!!》」

藤馬は仮面ライダーキバへと変身した。

その間に純が梓を担ぎ、少しでも逃げる。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」

キバはまっすぐに突っ込み、カマキリヤミーの体に連続で拳を入れる。

カマキリヤミーはそれを軽く避け、キバの体を鎌で切り裂く。

「ちっ、何か強くなつてねえか!？」

前とは比べ物にならないスピードにキバは驚く。

「恐らくセルメダルを溜め込んでいたのだろう……しかしおかしいな、もう一体いるはずなんだが……」

「そんなことより目の前の事だろ!」

一回キバは下がり、ガルルフエッスルをキバットに吹かせる。

「《ガルルセイバー！！》」

キバはGキバへとフォームチェンジした。

「ウアッ！！」

Gキバはカマキリヤミーへと斬撃、離脱、斬撃を繰り返す。  
カマキリヤミーはその動きに翻弄され、ダメージを蓄積させていく。

「よし、ならこれで！！」

Gキバは真空刃を避けながら下がり、ガルルセイバーの柄に腕を当てて衝撃波を放つ。

衝撃波は隙だらけのカマキリヤミーへと直進する……が。

ーブオツ、ガンツ！！

「なっ！？」

突然現れた第三者に掻き消された。  
だが驚いている暇は無い。

「っち！？」

Gキバが驚いた隙に、第三者がその手に持った剣で攻撃をする。

「ガキイイイン!!」

「くう……!!」

それを左手のガルルセイバーで受け止め、鍔迫り合いになる。

第三者は、全体的に揚羽蝶モチーフにした怪人……いや。

「チェックメイトフォーだな、てめえ?」

Gキバはガルルセイバーを両手で持ち、押し返そうとする。

しかし、Gキバはスピードが売りのフォーム。

力が足りず、鍔迫り合いが続く。

「ええそうです……私はビシヨップ。

初めまして、王の残滓よ」

その瞬間ビシヨップは剣を滑らせ、柄でGキバの腕を殴る。

それを受けガルルセイバーを落としてしまい、無防備なGキバへ鱗粉が襲いかかる。

「ぐあっ!?!」

「ふっ!?!」

「ヒュン!!」

体から火花が散り、よろけるGキバに後ろにいたカマキリヤミの真空刃が追い討ちをかける。

ーズバツ!!

「ぐああああー!!」

G キバはキバへと戻り、地面をゴロゴロと転がる。

二つの技を連続でくらった為、キバはヨロヨロと立ち上がる。

「只の人間に二対一とか……案外セコいな、ビショップさんよ?」

「いえいえ……人間の身で黄金のキバの力を解放できるあなたには、加減など必要ないでしょう……それに」

キバの挑発にビショップが返す。

「あなたは、仮にも王の残滓ですから」

ビショップの言葉にキバが考え込む。

(王って誰だ……それに残滓って……どういう意味だ?)

キバはそう思いながらタツロットフェッスルに手を伸ばす……が。

「そんなことをして良いんですか、貴方は?」

ビショップの言葉にキバの手が止まる。

「貴方は、今まで私達ファンガイアを倒してきました……しかし、貴方が倒すのは人間に害のあるものだけ。その行いは非常に感謝しています」

キバはその言葉に面食らう。

まさか、ファンガイアを倒して感謝されるとは思わなかっただろう。

「ですが……」

ビショップが剣を撫でながら続ける。

「貴方は黄金のキバの鎧の封印を解いてしまった……キバの鎧はファンガイアの秘宝。

それを人間が使う等、もつてのほか！

貴方はさらに、それで同族を何体も倒してしまった。

一族の象徴である黄金のキバの鎧で、これ以上戦い続けるならば……

……」

ビショップがキバに剣を向ける。

「貴方を一族の敵として認識させていただきます。

私たちの一族は、世界中にいます。

もしそうなれば、世界中にいる怪人達が貴方を殺しに来ますよ？」

ビショップの目は本気だった。

チエックメイトフォーとして、個人として。

一族の平和を願っているのだろう……だが。

「……ああそうかい、コウモリモドキ！」

キバがタツロットフェッスルを吹かせる。

「《タツロットー！！》」

——この男は、それぐらいじゃ止まらない。  
バカ

「なっ、正気ですか!？」

貴方は今、この世界にいる全ての怪人を敵に回したんですよ!！」

ビショップが啞然としてしまう。

只の人間が、世界中の怪人を……しかもたった一人で？

(そんなの正気ではない……よほどの実力者がバカぐらいしか……)

「世界中が敵?……それがどうした?」

「なっ!？」

ビショップはさらに驚く。

目の前にいる男は世界を敵にして、それがどうしたと言ったのだから。

「貴方は事の重大さが分かっていない!

只の人間風情に何が出来る!？」

万を軽く越える相手が貴方を狙っているのに、なぜそんなことが言える!？」

「そんなの、バカだからに決まってるだろ?」

ビショップはもう意味が分からなかった。

「怪人? チェックメイトフォー? 世界中が敵?……確かに勝てるなんて思っていない……だがな、そんな事で俺の意志は揺るがねえよ!! 立ち止まったら、そこで全てが終わっちまうんだ!!!」

「――そうだ……誰かが死んで、良いことなんて何一つ無い。

「びゅんびゅんびゅん！！

ドラマチックに行きましょー！！」

タツロットが飛んできて、キバの拘束具カタナを全て解放していく。

すると、鎧から黄金の翼が開き、そこから無数の蝙蝠が空へと飛び立つ。

そしてキバは左手を真上に上げ、赤い止まり木パワーにタツロットが填まり、最後の封印を解除する。

「《变身！！》」

タツロットそう叫んだ瞬間、空へと飛び立った蝙蝠が体に吸い込まれ、鎧を強固なものへと変えていく。

そして左手を力強く振り下ろし、背中に炎と共に血のように紅いマントが現れる。

「――だから戦うんだ、抗うんだ。

例えば世界が敵になろうとも……！！

「もし、俺の大切な人達に手を出してみろ……その時は全員まとめて！！」

「――バサッ！！！！

マントを翻し、Eキバは宣言する。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ！！！！》」

その堂々としたEキバの態度、そして覚悟……。

ビショップがそれを見て無意識に一步下がる。

（な、なんだこの男の覚悟は……私が無意識に一步下がるだ！？）

カマキリヤミーも威圧されたのか、同様に震えている。

「どうした、ビショップ？」

俺を殺すんだろう……かかってこい！」

Eキバが二体に挑発する……あからさますぎるが、

「貴様人間風情が……許さん！」

カマキリヤミーが一気に懐へと入り、鎌を振り切る。

ーガアン、バキャツ！！！！

「なっ！？」

しかしEキバの鎧は全く傷つかず、逆にカマキリヤミーの鎌がへし折れた。

Eキバは、驚くカマキリヤミーの腹へ何度も蹴りだす。

蹴りをいれる度にセルメダルが溢れ落ち、その威力を物語っている。

「そらそらそら……らあっ！！！」

ーードゴッー！

「グフッ……」

カマキリヤミーは蹴り飛ばされ、もはや瀕死。

そしてEキバは、左手にとまっているタツロットの頭部を引き、胴体にある特殊な回転盤がキバの紋章の図で止まる。  
インベリアルスロット

「逃がすかよ、タツちゃん！！」

「はい、《ウエイクアップ・フィーバー！……！》」  
タツロットの声と共に両腕を顔の位置に構え、腰に下げていく。

すると、踵にあるルシファーズナイフが足裏に移動し、紅い魔皇力が溢れ出す。

そして頭上へと飛び上がり、足から紅い翼のエネルギーが出現、そのままカマキリヤミーへと両足蹴りを放つ……！！

「おらああああ……！！！」

《エンペラームーンブレイク……！！》

ーードゴオオオオオオオン……！！

紅いキバの紋章がカマキリヤミーに刻まれ、爆散。

それを見て、ビショップは逃げ出した。

――藤馬 side

「ごほっ、ごほっ、ごほっ……よしっ……はぁ……やったぜ……はぁ……はぁ……」

変身を解除し、思わず膝をつく。

「藤馬先輩……!!」

物陰から梓を背負った純ちゃんが飛び出してくる。

良かった……二人とも無事だった。

コウモリモドキ達をギターケースに入れながら立ち上がる。

「う、うゝん……あれ……藤馬先輩!？」

どうやら梓がやっと起きたようだ。

「……よっす、大丈夫か？」

「あつ、はい大丈夫ですけど……怪人は？」

というわけで梓に状況説明……ちなみに怪人は仮面ライダー（もちろん俺じゃないよ）が倒したことにして、オレは夕飯の買い物をしてる最中に出くわした事にした。

純ちゃんは用事を思い出したと言って帰ってしまった。

今は、近くの店で買ったたい焼きを公園で食べている。

「ふゝん……そうだったんですか／＼／＼／＼」

梓は何故か赤くなりながら、笑顔で元気一杯だ。

確か、昨日まで元気が無かったのだから……？

「つか、良いことでもあったか梓？

顔がニヤけてるぞ？」

「ふにやつ！？……あ、はい、実は……」

「なるほど、『今年はこの六人でやりたい』……ね」

梓によると、唯がこう言ったらしい……まあ唯らしいなあ。

「はい、私も皆さんと一年間やりたいです！……」

梓は話を終えると、何だか俺をジーツと見ている。

いや、正しくは俺のたい焼きみたいだけど。

段々捨てられた子猫みたいな感じが…… はっ、脳内補正が入った！

俺は首をブンブンと振り、梓に聞く。

「俺のたい焼き……いるか？」

「あ……でも「良いから良いから、ほれ！」……あ、ありがとうございます／＼／＼／＼……」

たい焼きを食べる梓の頭を荒っぽく撫でる。

ホント子猫みたいで、撫でたくなる衝動に駆られるな……それにしても。

これからどうするか……はつきりいつて世界を相手にして、勝てるビジョンが浮かばない……負ける気なんてサラサラ無いけど。

「せ、先輩、どうかしました？  
顔がこわばってますけど……」

どうやら梓を心配させちゃったらしい。

「いんや別に何でもないよ……よしっ、帰るか梓？」  
俺は勢い良く立ち上がり、梓に聞く。

「はい、これからはもっと練習を頑張っていきましょうね！」

「はいはい、ほどほどになっ」

「あ〜！」

やる気が無い返事ですよ、それは〜！」

あーキコエナイ、キコエナイ！

……とりあえず、目の前の人達を護っていこう。

ただそれだけで良いよな……よっしゃあ！！

「先ずは楽しむぞ、ティータイム！！！」

「練習もやりましょうよ！？」

――数分後……桜ヶ丘 とある教会

「成る程、やはりそう来たのか……」

そう呟きながら、キングは祭壇の前にあるステンドグラスを見つめる。

そのステンドグラスには、人が神に救済を求める絵が描かれている。

キングの前にはビショップがひざまずき、どうやら先程の報告をしていたようだ。

「あの男……意思だけは本物です。」

これ以上野放しにすれば、キングを殺しに来るかもしれません」

キングはそれを聞き、ステンドグラスを手でなぞりながら話し出す。

「……甘さ（やつ）は捨て置いて大丈夫だ。

それほど強くもなければ、奴の弱点は私が一番知っている。

それより、あれ（・・・）はどうなっている？」

キングの問いに、ビショップは身体を震わせる。

「は、はい……。」

現在第一段階は終了しましたが、合成態はまだ無理です。

私の場合、ヤミーを作るのが精一杯でございます」

教会が沈黙に包まれる……そして。

――バキヤアアアアアアアン!!!!!!!!!!

キングが殴ったことによつて、ステンドグラスが欠片へと変わる。

「……何をモタモタしている？」

一族の繁栄を望むなら、さらに力を蓄えなければいけない……わか  
るな、ビショップ？」

「で、ですが、我々は誇り高きファンガイア」……ビショップ」……  
ぐっ!?!」

――バオツ!!!!!!!!!!

キングの身体から、赤い羽が飛び出す。

それはまるで、不死鳥のような神々しさがあった。

羽が飛び出した影響で松明の火は消え、椅子が吹き飛び、教会は一  
瞬で廃虚のように変わる。

「分かっているな？」

誇りなど捨てろ……そんなモノがあるうが、何もかも亡くなってしま  
えばおしまいだ……早く最後まで終わらせろ、良いな？」

キングは悲しそうにそう言い、教会を去っていった。

I  
I  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第二楽章 第三幕 新歓 後編！！（後書き）

どうでしたか？

キバット「今回は藤馬が軽音部からお話を受けているので、今回は私がするぞ。

それにしても、あの主人公は……」

ご立派な啖呵切っちゃったね……これが発端で、後半は死にかけるけどな？

キバット「後は感想だな……一人しか貰ってないからな、人数」

やかましい！……というわけで、大至急どんな感想でも下さい！！

キバット「私からもお願いするぞ、頼む」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

## 小休止 第二楽章までのオリキャラ設定！！

名前

中都 なかつとつま  
藤馬

詳細

身長175cm、体重は70kg、ふたご座の5月30日生まれ、O型。

名前の由来等の基本情報は第一楽章 の設定！！にあるのでそちらを。

転生者兼、サイドギター兼、ヴァイオリン兼、仮面ライダー兼、天然フラグメーカー兼、この物語の主人公 バカ。

最初はヴァイオリンだけだったが、二年生の二学期の後半、記憶の逆行でギターが弾けるようになり、サイドギターもするようになる。

ギターの腕は梓よりは下で唯よりは上。

歌はそれなりに上手いため、もしかしたらボーカルをするかも？

軽音部の皆には内緒だが、温かい居場所をくれた皆に感謝しており、『皆をこの力でどんなことがあろうと護り通す』という誓いを建ている。

その誓いを護るためなら、世界を敵に回す程（要はバカ）。

クイーンに紫のコアメダルを入れられ、以後の戦いではピンチの都度にその力を使っている（実は、エンペラーフォームもその力のおかげでなれる）。

仮面ライダーキバで、その実力は一年前と比べてかなり強くなった。だが、エンペラーフォームになる度に強大な負荷がかかっており、内部の器官が傷付き吐血するほど。

しかもコアメダルの影響でのグリード化も進み、もしかしたら暴走するかもしれない……。

最近の悩みは、平日での怪人との戦いが深夜になる事（その日の学校に遅刻するため）と、コウモリモドキとタツちゃんとパンツ怪人（映司）が弄ってくる事。

性格

何度も言うが、いかにも主人公<sup>バカ</sup>な性格をしている。  
某上条さん並に正義感が強い。

誰にでも手を伸ばし、皆を助けようとする。  
だが結局は一人、その手が届かない事もあり、その度に自分の無力を感じる。

その影響でしばしば無理をして、その度に大怪我をする。

戦いを通してメンタル面はかなり強くなったが、軽音部の女子メンバーにはとことん甘い。

不幸スキルも磨きがかかり、理不尽な出来事に直面する事が多くな  
った（苦労人とも言っ）。

因みにツツコミとボケの両刀使い（ツツコミ6：ボケ4）。  
ゴリさんとのリアル追い掛けっこは、日に日に苛烈さが増し続けて  
いる。

現在、キバの正体を知るのは憂、和、純。

イメージC V 水島 高之

『瀬戸の花嫁』 満潮 永澄役

『べるぜバブ』 古市 貴之役

名前

須藤 美紗 すとう みさ

身長154cm、体重は（企業秘密だよ）kg うお座の2月2  
5日生まれ、A型。

詳細

名前の由来は、仮面ライダー龍騎の須藤 雅史と、はさみ（逆に読  
むと、みさは みさ）。

好きなものは家族、友達等の人のぬくもり。

嫌いなものは、大事な人を傷付ける事。

特技は、料理（藤馬より上）。

藤馬を殺すために、謎の組織から送られた仮面ライダー。当初は、藤馬を殺すために二対一で叩きのめしたり、唯達を誘拐したりした。

実は家族を人質に取られ、組織から身体を弄られた。その後も家族を取り返すため、組織の言いなりになるが、久しぶりに会った家族に化け物呼ばわりされてしまう……。それでも、家族の救う為に自己暗示を掛けながら、戦い続けていた。

しかし唯達を誘拐した際にはその精神はもはや限界で、自己暗示をしても自責の念に駆られていた。

その際、藤馬達の健闘により組織から救い出され、藤馬と家族に。

だが、今でも兄のように慕っていたギャレンの事を思うと、悲しみに囚われる。

現在は仮面ライダーの力は無いが、もしかしたら……？

あだ名はミサミサ（唯命名）。

性格

基本的に誰にでも優しく、能天気。

その性格の良さで軽音部のみならず、色々な人物と交遊関係を結んでいる。

手先が器用で、家事はもちろん、全体的になんでも出来る。

藤馬へのアプローチはかなり大胆で、軽音部メンバーはそれを見て

羨ましがっている。

現在、藤馬の家に居候していて、主に彼女が家事をする。

## 容姿

インフィニット・ストラトスのシャルロット・デュノアそのまま。

イメージCV 花澤 香菜

『インフィニット・ストラトス』 シャルロット・デュノア役

『デュラララ!!』 園原 杏里役

## 名前

郷田先生<sup>ゴウダ センセイ</sup>

## 詳細

桜ヶ丘高校、生徒指導の先生。

遅刻やその他諸々の違反を許さず、更生させようとする。

藤馬との因縁は一年近く……二人の鬼ごっこは苛烈さを増し、藤馬曰く、拷問（説教）も命の危機を感じるらしい。

生徒指導室には拷問器具、日本刀etc……何でそんな物があるの

かこつちが知りたいです。

## 性格

規律に厳しいが、筋だけは通す漢の中の漢。

ていうかヤクザの組長みたいな人です。

ゴリさんって呼ばれると呼んだ本人を追いかけて回す。

## 容姿

『瀬戸の花嫁』の瀬戸豪三朗の背が180cmぐらいになった感じ。

イメージＣＶ 内海 賢二

『鋼の錬金術師』 アレックス・ルイ・アームストロング（ry）役

『瀬戸の花嫁』 瀬戸 豪三朗役

## 名前

ギル（火野映司）

## 詳細

藤馬のグリード化に伴って、メダガブリューと一緒に出てきた紫のコアメダルの意思。

藤馬にしかその声が聞こえないため、藤馬以外知らない。

藤馬のパンツの柄に気に入らないと、その度に文句を言う。  
通称、パンツ怪人。

性格

原作の火野映司と同じだが……？

名前

クイーン、タブー、メズール、???、???、

詳細

藤馬の過去を知っている、女性五人組。時に藤馬の敵に、時に藤馬の手助けをする中立的な位置にいる。

全員が怪人の能力を持っており、その強さはチェックメイトフォーと同等。ローブに身を包んでおり、その正体は謎に包まれたままである。

名前

キング  
王

詳細

けいおん！の世界のファンガイアの王であり、キバの鎧の正当後継者。

外見は藤馬に似ているが、髪の色や瞳の色、キバの紋章が肩まである所など、細部が藤馬とは違う。

藤馬の事を一族の敵としてみなし、全力で潰す気である。

## 性格

藤馬とは違い冷静沈着、同族には優しいが人間……特に、怪人を倒しまくっている藤馬には楽には死なせない気である。

**第二楽章 第四幕 整頓 前編！！（前書き）**

すいません、こんな時間に私こと中都藤馬です。

ああ、文才が欲しいです……。

それでは第二楽章 第四幕をお楽しみ下さい！！

第二楽章 第四幕 整頓 前編！！

――藤馬 side

春の日差しに当てられ、今日も睡眠学習だ……（・・）zzz。

――ドゴッ！！！！

「ぶふっ！？」

い、痛ったああああああ！！！？

余りの痛みに飛び起き、拳骨の主を捜す。

「誰だごるあ！！……ってあれ？」

ある程度周りを見渡すが……誰も居ない。

「って、なっちゃん何してんの？」

「一緒に部室行こうよ」

後ろから声がしたので見ると、いかにも寝起きですっぴんという感じの唯が居た。

お前もしっかり睡眠学習してただろ、おい？

「ていうか唯が拳骨したのか？」

「うん、一回してみたかったんだ！  
どうだったなっちゃん？」  
「凄く……痛いです……」。

――NOW LOADING――

「ということで、大掃除をします!!」  
「「「（、）え〜?」」」

「そこ、あからさまに嫌そうな顔しない」

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今回は、軽音部の物置が知らない間にゴミ屋敷へとマトリックスエ  
ボリューションしていたので、皆でIt's大掃除、なのだが…  
…。

「「「三度の飯より掃除が嫌いだ!!!（ビシッ」」」

「意味わからん!!」

まあ俺と律、唯の三人は掃除が嫌いなんですよ。  
ていうか掃除って好きな人居るの？  
少なくとも掃除のはじめは嫌なんだけど。

とはいえ、俺達がしてしまったんだし、仕方ないか。

「んじゃ、片付けよつか？」

「しまつといたのに」

「全く、しゃあねえなあ」

俺達は自分の私物を物置に戻す。

「だから、戻すな！！」

溼のツツコミ、今日も良いツツコミです。

「よしっ、やりますか！！」

上着を脱ぎ、ネクタイを外して腕捲りをしながら気合を入れる。

視線を私物に移すと、その量に思わずくじけそうになるが。  
皆も掃除の準備が出来たようだ。

「それにしても凄い量ですね？」

「何か荷物があるとりあえず、って倉庫代わりにしていたからね  
え」

それって典型的な整頓が出来ない奴ですよ、ムギさん？

律も呆れながら私物を物色する。

「それにしてもなんだ？、このぬいぐるみの山は？」

そう言っ律が手に取ったのは、非売品にしか見えないぬいぐるみ。

「その大きいのも、二百円で取れたんだよ」

いちいち説明しなくて良いよ、唯さんや。

「とりあえずこれ全部持つて帰れ」

唯がぶーぶー文句を言うが自業自得だ。  
つて、一個ぬいぐるみ忘れてるし。

「おゝい、唯。」

これもお前のだろ？」

「えゝ、わたしのじゃないよ？」

つっても、ハゲた中年のぬいぐるみなんてお前以外ノーパシッ！  
……。

俺が持っていたぬいぐるみを濫にブン取られた。

なんつーか、意外すぎる……。

「あれ、何でしょうかこれは？」

そう言つて梓が、『keep out』のテープが貼つてある段ボールを……つてそれはっ！？

「あれゝ、こんな所にあつたのかゝ！  
いやぁ良かった良かった、あはははは……」

俺は、梓が開ける前にその箱を確保する。

皆から疑いの眼差しをつけるが、教えられない！

この段ボールの中身は、前に学校に行く途中で次狼に押し付けられた、R - 18 規制が入るDVD達。

次狼め、恨むぞ……。

今頃ティータイム中の狼野郎に心の中で毒づく。

その後も、ベルギー王室で使われているコーヒーストを落としそうになったり、倉庫からゴキブリが出て大騒ぎしたり、なんやかんやで一通り片付き、ティータイム。

やっぱり動いた後は、甘いものが一番だよなあ……ほわあ。

「ねえ見てみて！

何か出てきた〜！」

唯が、倉庫から大きいケースを持ってきて床に置く。

「おっ、高そうなケース」

律がゆつくりとケースを開けてみる……そこには。

「「……ギターだな」」

「……ギターだね」

「……ギターね」

「……ギターですね」

「……ギターだよな」

そう、赤くて古そうなギターがあった。

「古いけど、結構良いものかも……」

梓の言う通り、何だか凄く高級感がある気がする……が。

「もっと面白いもの期待したのになあ」

「つまんなーい」

コイツ等には関係無いらしい。

仮にも軽音部ですよ、唯さん律さんや？

因みにあのギターはさわっちのモノらしく、売って部費の足しにする……との事。

というわけで、いつも行く楽器店に査定してもらったことに。ここまでは良かった、ここまでは。

「はあ……重いよ、カビ臭いよ、何でだよ？」

「なっちゃん大丈夫？」

大丈夫なわけねえでしょ、この状況で。

俺は肩にカバン（私物入り）、マイギターケースを担ぎ、両手にはさわっちのギター。

店までの荷物持ちじゃんけんで、俺の不幸スキルが光っていた。

五回中五回が、パーで負けるというある意味奇跡の所業を成し遂げてしまい、今に至る。

余りの重さに腕と肩がもげそうになってきた。

流石にヤバイので交代を持ち掛ける。

「なあ、いい加減交代しようぜ？」

「くくくくくく、くくくくくく」

（もう少し頑張ってください、バカ（とうまさん））

（お前はトマト紳士だろ？

これぐらいやりきってみせろ、バカ（とうま））

（まあ男ならこれぐらいしてあげなよ、バカ（とうま））

二つほど言わせてくれ……。

味方が居ねえwww

トマト紳士って何だwww

とりあえず次も負けないように気合いを……ってあれ？

澪がチラシを食い入るように見ている。

「おい漣、荷物持ちじゃんけんしようぜ!」「あのさ、これなんだけど?」

そう言っただけ出したのは、ホームセンターのチラシ。

それを皆で見ると、漣はあるものを指差している。

「こんなの準備室に置けないかな?」

「棚あ?」

そう、漣が指差したのは棚……確かに。

「一つあれば、色々整理出来ると思うんだ」

やっぱりしつかり者の漣は発想が違うねえ。

「そうですね、この値段なら部費で何とかなりそうですし  
「んじゃ、今からホームセンターに行くか?」

「って今から行くのかよ、律?」

ちよつとこのままだと、腕が……。

僅かな希望を賭けて、律に言うが、

「な」に言っただけ藤馬、善は急げって言うだろ?」

言葉の意味が違つような……。

この後荷物持ちじゃんけんをしたが、やっぱり負けた……チヨキで。

というわけで、ホームセンターにやってきたわけだが……。

「ここがホームセンター　！？」

ムギのテンションが、これまで見たことの無いくらい上がっていた。

まあ、お嬢様だから縁が無い場所かもしれないし、興奮するかもと思つけど……。

「便利グッズが一杯あるのよね！

大小様々な電球とか、七色のビニールテープとか！！」

「まあそうだけど……」

そのテンションの高さは余りにも高い。

例えるなら、小学生がデイズニールランドに初めて行った時並に高い。そんなムギを、皆は優しく（変な意味じゃないよ？）見つめる。

「前から一度、行ってみたって思ってたの」

すると、ムギは俺の腕を引っ張りながらこう言ってきた。

「一緒に行きましょう、藤馬くん！」

やばい、ムギのこの無邪気な可愛さが、俺のライフをガリガリ削っていく……。

「OK、OK……それじゃあ、行こうか？」

「うん……ふんす！」

ムギのふんす、とか不意打ち過ぎる……。

俺はその行動に悶えながらムギの後を着いていく。

「……調子に乗るな、バカ藤馬!!」 漣と律の黄金のダブル左フック

ーードグオツ!!

「南無三つ!？」

「……自業自得だね（です）、なっちゃん（先輩）……」  
俺が何をしたんだ、お前等……。

暫くムギと店をブラブラしていると、便利グッズのコーナーで色々見始めた。

俺も荷物を床に置いて、一緒に見てみる。

因みに他のメンバーは、色々なコーナーに行ってます。

すると、ムギは俺に便利グッズの紹介をしてくる。

「見てみて、これは壁に空いた穴を補修できるペンだって！  
こっちは古雑誌を簡単にまとめるテープ！」

何か具体的な奴が多いな……ふむ。

俺も説明を見ながら凄く感心していた……って、あつ！

説明をずっと見ていたので、他の人の手にぶつけてしまった。

「すみません、余所見してまして！」

「ああ良いんですよ、別に。

俺も不注意でし……た……」

うん？、どうしたんだろう？

何か急に固まっているので相手を見ると、

「……何でてめえが居るんだ、次狼？」

サングラスをかけて、すんごくハードボイルドな格好をした次狼だった。

「まあそれはな……これを買いに来たんだ」

そう言つて次狼が持っていたのは、さつきムギが紹介していた壁に空いた穴を補修出来（ry。

「これでキャツスルドランの壊れた壁を補修しようと思つてな」

……いや、壊れた壁じゃなくて、それは空いた穴の補修だし、仮にも城なんだから便利グッズで補修はお粗末すぎるだろ？

この事を言つと、次狼はなるほど頷いていた……バカなんだな、コイツも。

あつ、そうだ（-|-#）。

「なあ次狼？

お前に言っておきたい事があつたんだ」

「うん、なんだ……って、何故学生鞆を振り上げているんだ？」

ちなみに、鞆にはDVDがぎっしり入ってます……当たると、死ぬかもね

「沈め、エロ狼……！」

――バグオ……！！

「ゴフツ！？……理不尽……だ……」

ふっ、悪は滅んだか……ざまあないぜ！  
後でリキに連絡入れとくか。

「あつ藤馬くん、もうりっちゃん達が棚を買ったから、楽器店行こうって」

ああわかったよ、ムギ。

その後は皆と合流して、楽器店へと向かうことにした。

「……もう……ダメです……このギター……お願いします……」

「それでは査定させて頂きます……あの、大丈夫ですか？」  
俺はカウンターの上で休みながら手を横にふる。

結局、一回も勝てなかった……じゃんけん。

「なっちゃんなっちゃん、あっちのギター見に行こうよ！」  
分かったから、ちよっと待ってつかーさい……。

「ほらほら、行くぞ藤馬！」

俺のライフは、もうマイナスなんすけど、律さんや？

唯と律に引つ張られながら、色んな楽器を見る。

あつ、弦買つとかないと……。

――約数十分後

「査定でお待ちのお客様？」

その声に皆が集まり、店員さんの話を聞く。

「お待たせしました、このギター……」

何だかドキドキしてきたな、いくらぐらいするんだろ？

「なんと、五十万円で買い取らせて頂きます！（ニッコシ）」

「

――

……ゑ？（@ @）

聞き間違いだよ、だって桁が一個違うもん。

「すみません、もう一回お願いします」

「繰り返し言わせていただきますが、五十m「すみません、調子乗ってました！」……はぁ」

そっかぁ、五十万円か（ 〇 ）（ 〇 ）……………  
……って。

「…………五十万円つつつつつ！！！？」「…………」

全くやれやれだぜ……。

あれ……どうしてこうなった？

―― to be continued

## 第二楽章 第五幕 整頓 後編！！

――藤馬 side

〽前回のあらすじ〽

五、五十万円っ！！??

「だー！！！」

人の脳内でうるせえんだよ、作者っ！！！」

「はいはい、棚を組み立ててからそういう事言おうな？」  
くっ、謀ったな、りっちゃん隊長！？」

「いやいや、藤馬先輩がやりたいって言ったじゃないですか？」  
あり…そうだっけか、あずにゃん？

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、ホームセンターで購入した棚が部室に届いたので、俺が組み立ててます。

それにしても、ギターを売った時は大変だった……余りの金額に、ムギ以外の皆が動揺しすぎて涙目になってパニクリ（その可愛さに俺が悶えた）、欲しいものについて語ってたらヤミーが出てくるぐらいの欲望が次々と……まあ大変だった。

「よし、これで完成つと……後は設置か」  
俺は完成した棚を物置の真ん中に設置する。

よいしょつと……これでよし!!

「「「「「おゝ!」「「「「「」

俺は手に着いた汚れを払い、皆の横に並ぶ。

棚は驚くほどぴったりで、元々あったように思わせるほどだった。

さてと……うん?

ふと右に視線を移すと、何か力エルの置物が段ボールに入っている。

それを見た唯がこつそりと抜け出そうとするものの、その首を掴んでこつちに引つ張る。

「ふむ、何ですかねえ、これは……唯さんよあ?」

「ゝ……えつ、知らないよ?」

唯があからさまな嘘をつくが、目がこつちを見てないし、何より怪しすぎる。

「ふゝん、じゃあ捨てるかな「それだけはやめてつかーさい!!」

「……はあ」

ため息を吐きながら力エルの置物を置く。

どうやら私物が多すぎて、全て持って帰る事が出来なかったとか。

学校にそんな私物を持ち込むなよ……。

「全く、今日だけだぞ?」

ていうか律、お前も漫画を持って帰れ！  
そんな感じでティータイムへとしゃれこもうと思ったのだが……。

ーガチャ、「やつほ」

「「「ビクッ!?!」「」」

このタイミングでさわっちが来やがった。

「柵は届いたの?……あら、良い感じじゃない」

実際、皆はそれどころじゃなく固まっている。

よし、さわっちが柵を見ている間に俺は逃げよう。

「うんうん……って、どうしたの?  
人が声をかけてるのに?」

よし、後ちよいで……うおっ!?

律と零に引つ張られ、さわっちの目の前に差し出される。

「う、ういつす、さわっち!

あれえ、何だか今日のさわっちは一段と綺麗に見えるなあ、あはは  
は、あははは!」

「「ふんっ!?!」「」

ーードゲシッ!!

「えんぶくしっ!？」

律と零のダブル肘鉄を食らいながら、俺は二本足で立つ。

「あらあら、お上手ねえ

それで、昨日はどうだった？」

ちっ、これぐらいじゃ無理だったか……だが!

「あ、あれは、え〜と……あ、多分律の方が知ってるよ、なあ律?」

「へっ、あ、あたし!？」

律は他の皆を見るが、目を合わせてくれず途方にくれる。

すいません隊長、犠牲は必要なんですっ!

すると律は覚悟を決めて、口を開いた。

「い、一万円……」

――皆の顔が、一瞬で凍りついた。

律さんつつっ!?!??

いくらなんでも、それは欲張りすぎでしょおおおお!!!!!!

俺は恐る恐るさわつちを見る……すると。

「やっぱりそんなもんか、カビ生えてたもんね」

どうやら信じて貰えたようだ……ふう。

思わず皆から溜め息がでる。

「じゃあ、買い取り証明書ちょうだい。  
部費に計上しておくから」

「ーゑっ？（。。。）」

一難去つて、また一難とはこういう事を言つんだらう……。そして、毎度のごとく不幸スキルが発動する。

「あっ！

確か藤馬が持ってた気がするな」……（ニヤッ」

（さっきの恨み、晴らさせてもらつぞ、藤馬隊員？）

律が笑顔でそう宣つて来やがった……。くそう、謀つたなりっちゃん隊長！

「藤馬くん、そのネタ二回目よ？」

それは作者に言ってください、ムギさん！

俺は渋々鞆から証明書を取り出し、さわつちへと持つて行く。  
他の皆は後ろで敬礼（、　　ヅ　　）をしている。

「何だ、あるんじゃない」

証明書を持つ手が震え、俺は考える。

渡した方がよいな……。だが本当にそれで良いのか？

五十万円あれば五十万円あれば五十万円あれば五十万円あれば五十

$$\begin{pmatrix} r \\ y_0 \end{pmatrix}$$

その結果俺が取った行動は……！

ーヒュバツ、ガチャ、ダダダダダダ……！！。

「やっぱり光より速く逃げたー！！？？」

戦略的撤退……逃げるが勝ちさ、ハッハッハ！！

「走れ、走れ、走れ、走れ」

皆が応援してくれている……それだけで逃げ切れる気がする！！

(「(やっぱりバカだろ、このバカ)」)  
居候トリオは黙ってなさい!!

「くらアアアアアアアアア、待ちなさい! ! !」

さわつちが猛スピードで走ってくるが、ゴリさんとリアル鬼ごっこをしている俺の相手じゃねえＺＥ！（フラグ構築完了です）

「まぢなざイ イイイイイ!!!」

「へっ？……いやあああああ！！？？」

さわつちの声が変わったので後ろを見たら、四足歩行で、蜘蛛のよ  
うに追ってきた……これなんて、ほん怖？

「……騒わらわがしいのお、まゝたボウフラかい？」

そして読みましたね、どうもありがとうございました。

――NOW LOADING――

「本当に、本当にさーせんしたあああああ……!!!!」  
結局捕まって、証明書を渡してしまった。  
今は皆で土下座している。

「それでなにになに……うそっ、五十万もしたの!?!?  
スゴいじゃない!」

「結構貴重なものらしくって!」

「まさかこんな値段するなんて、俺あ思ってたんですう!  
はっ、これがお金の魔力か!?!」

「心が汚れてますね……」

「やっぱりお前はそういう奴だったのか……」

「藤馬だけは違うと思ってたのに……」

（お金より明日のパンツでしょ?）

（全く、お金より最高級トマトジューズの方が良いというのに……）

その三人娘、お前等も同罪だろうが!

あとパンツ怪人とトマト伯爵、お前等は常識を勉強してこい!

あの後、さわつちが五十万円で欲しいものを買ってくれる事になり、今は帰りながら皆で考えている。

「ううーん、やっぱりアンプが一番無難かなあ……………」

「私は、エフェクターの方が良いような気がしますけど?」

「どちらにしろ、皆で使えるものじゃないしな」

「あつ、マッサージチェアとか?」

「ーゴツンツ!?!?!」

さーせん……………だって最近、肩がこるんですもの。

むうーん、何が良いかねえ。

いざ言われて見ると、なかなか思い付かないものだな。

あつ、部室をリフォームするとか……………って、あれ?

皆がグラウンドの方を見ている……………そこには、新入部員が入って生き生きしている運動部が一杯。

そっか、新入部員が入ったんだもん……………。

「ですね……………」

横にいる梓が、物欲しそうにグラウンドを見ていた。

――翌日……昼休み

「やっぱり、皆も気付いてたか？」

俺の問いに皆が頷く。

今は昼休憩で、いつものメンバーに和と美紗でご飯を食べている。ご飯は美紗が作ってくれた弁当……美紗は憂ちゃんと同じぐらい料理が美味しいので、毎日作ってもらってます。

美紗達にも状況を説明し、どうするか対策を練っている。

「やっぱり、新入部員を入れた方が良いんじゃないかしら？」

和の言う通りなんだが、徹底的にダメだったからなく俺達。

「あっ！！」

良いこと思い付いた！」

唯がこういう事を言うときは、大抵物事が解決するんだよな。

――また翌日……放課後

部室に来た梓が、何かを見つめている。

そこには水槽があつて、中には亀がすいすい泳いでいた。

唯によると、棚を買いに行ったときに梓がこれを見ていたらしいのだが……。

「何ですか、これ？」

梓に言われて唯とムギが紹介する。

「新入部員のトンちゃんだよ」

「先生に頼んで買って貰ったの！  
梓ちゃんの後輩よ、よろしくね」

「へー（棒読み……）」

「ーシーン……」。

「おいおい、なんかリアクション薄くね？」

「うんうん……」

「ていうか棒読みだぞ、棒読み。

興味ないんじゃないの？」

俺達がそう突っ込むと、唯が喋り出す。

「だってあずにゃん、欲しそうにこの亀じつと見てたもん！」

「見つめていたのは唯先輩でしょ？」

私はただ変な顔だな、って見てただけです」

唯の顔が徐々に強張っていく。

「「やっちゃったな、こりゃ？」」

俺と律がそう言つと、へなへなと膝をついてしまふ唯。

「でも何で急に？」

「いやあ、それは……」。

俺は律達にアイコンタクトをする。

皆がため息をつきながら状況を説明する。

「いやぁ……」

「梓、後輩居なくて寂しいかなあって思ってた……」

「だから……」

「新入りさんなんだけど……」

「失敗しちゃった、つうわけだ……はぁ」

そう言っ梓以外の皆が下を向く。

すると、梓は笑みを溢しながらテーブルに荷物を置き、水槽に近付く。

「もう、こんな早とちりで買われたら迷惑だよな？」

「ーコッ、コッ。」

梓が水槽のガラスを突くと、トンちゃんは頷いた……って、

「……頷いた!?」「……」

「かわいい」

最近の亀はスゲエなあ……どっかのコウモリモドキとか大違いだ。

「大丈夫、これからは私がちゃんと面倒みるからね」

「いやいや、ちゃんとわたしもするし!」

「無理でしょ、唯先輩には?」

「むうゝそんなこと無いもん！」

唯と梓がじゃれだす……はあ、何だかんだで元気になったみたいだし、結果オーライ！……って、おい！？

ムギと律が俺を引き寄せ、腕を絡ませて来る。

指差された方を見ると、漣がカメラで写真を撮る準備をしていた。

ゆいあずのじゃれついているのを背景に、三人で写真を撮った。

こうして軽音部のマスコット、トンちゃんが誕生した。

よろしくな、新入り？

I t o b e c o n t i n u e d

第二章 第五幕 整頓 後編！！（後書き）

どうでしたか？

最近、評価が百ポイントとお気に入りが四十件越えました。  
皆さん本当にありがとうございます！！

これからも頑張っていくので、応援よろしく願います。

それでは次回をお楽しみに！！

第二楽章 第六幕 ドラマー、そして共同戦線 前編！！（前書き）

どうも、私こと388859です。

ついにクラヒが発売されましたね……ほすいゝなあ。

キバとファイズとオーズと……バースを動かしたい！（特にバース……とあるユーザーさんの影響だとry）

それでは、第二楽章 第六幕をお楽しみください！！

第二楽章 第六幕 ドラマー、そして共同戦線 前編！！

――藤馬side

「ほえええ、紅茶が美味しいなあ」  
そんな事を言いながらも一回飲む。

「ほらほら、なっちゃんもお茶しないで一緒にトンちゃんを見ようよ！」

あつ、今領いたよ」

「「「「可愛い」」」」

大人気だな、トンちゃんは？

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今はトンちゃんの世話の仕方や、トンちゃんがどれだけ可愛いか、女子メンバーが語っていた所です。

まあ俺も可愛い……とまではいかないが、それなりにトンちゃんへの愛着は出てきた。

何にせよ、ペットを飼うのは難しい。

コウモリモドキやタツちゃん、パンツ怪人（映司）を飼ってる俺が言うんだから間違いないさ。

（けなしてるのか誉めてるのかどっちかにしてよ！？）

バリバリけなしてんだろぅが、パンツ怪人？

「もうヤダー!!!」

はぁ、今度は何だよ？

声がした方を見ると、律が座り込んで涙を流している……マジでど  
うしたんだ？

唯達もそれに気付き、皆が律の方を見る。

「……ドラムヤダー!!!」

ふん、そうなんだ………って！

「なんですとっ!？」

第二楽章 第七幕、はーじまーるよーb……

――NOW LOADING――

律のいきなりの発言に、皆が律の所に集まる。

「ドラム、やだっ……」

漣の言う通り律らしくない発言だよな？

「すまん、嫌だとは言い過ぎた！

だが、これを見よ！」

律が指差したのはノートパソコンの横にあるDVD。

「生徒会が撮った、軽音部の活動記録。和がくれたんだけど……」

そんなものあったんだ、どれどれ……。

律がノートパソコンの再生ボタンをクリックし、動画が始まる。

「あつ、一年の時の学園祭」

「懐かしい」

そこにはかなり可愛らしい衣装を着て、ガチガチな三年メンバーが居た……成る程、確かに一番最初のライブみたいだな。

それにしても、今じゃ考えられないほどの緊張っぷり。初々しいね」

「私、見ました！…… 零先輩の「うわあ、やめろおお！！??」

梓が言った瞬間に零が遮る……って、目隠しするの止めてください  
零さん！！

あれ、段々目への力が強くなって……アッー！！！！

「違ーうー！！

ドラムん所見てみる！」

律に言われて目を擦りながら見てみる。

「……何故かデコだけがテカってるな、ぷっ！」

ーガシッ、バガスッ！！

「ハウッ！？」

律に頭を捕まれ、床に叩きつけられた。  
ふっ……住みづらい世の中になったもんだぜ。

「お前は余程あたしを怒らせたいらしいな？」

……うう、悪かったよ。

「これだけじゃないんだぞ！

去年の新歓も、学園祭も、今年の新歓も！……うう……」

「見事に写ってないな？」

「「うんうん」

皆の言う通り全くという程じゃないが、確かに写ってない……だけ  
ど。

「「あの〜それでどうしたんだ（ですか）？」」  
あ、梓と被った。

すると律は気まずそうにしながら言う。

「他の楽器やりたい……」  
「……………はあ？」

おそらく常識人なら誰でも思うよね……。

「お前がドラムやらなかったら、誰がやるんだ？」

「……」

絶対に考えてなかったな、このバイオレンスカチューシャ娘は？

すると漣が手に腰を当てて言う。

「だいたい、ドラム以外はチマチマして嫌だって言ってたかったか？」

「まあ、それはそうなんだけどさ」

律が立ち上がり、話を続ける。

「たまには変えっこしてみようぜ、楽器？」

「へえ、なんか楽しそうだね！」

「たまには良いかも」

「「え、っ!？」」

まさかの展開に俺と漣が固まる。

「じゃあギターやってみる？」

「あはっ、良いのかい」

こうなつては止められないのが軽音部。  
ワクワクしている律にギターを渡す唯。

「じゃーん!!」

律にギター…何か新鮮だし、思ったより似合ってる。

「おー!!」

「結構似合ってる!」

「何か見慣れないな……」

「中々様になつてます!」

それを聞いて律は、それほどでもない感じになっている。

「何か弾いてみ「うわーん!」(ノ 丁)「……」

今度は突然唯が泣き出した……理由は分かるけど。

「……一応聞くが、どうした唯?」

「ギー太が浮気したー!!」

やっぱりかよ……。

「自分から喜んで渡してたじゃないですか?」

梓が突っ込むと、唯は上を見ながら名残惜しそうに言う。

「ありがと……今まで楽しかったわ……ギー太」

この子は急に昭和テイストなボケをするよね？

そう思っていると律が唯に手を挙げながら質問する。

「それで唯先生、どうすれば？」

「ーバツ！」「えっ、先生！？」

「「はあ……」」

今日は梓に何か奢ってやろう……くじけるなよって思いを込めて。

さて俺はティータイムに洒落込みますか。

その時律の目が光ったことを俺は知らない。

「俺はお茶でもするかな……ムギさん「え」？  
藤馬も一緒にしようよ、なあ藤馬」……」

振り向くと、涙目で服を引っ張ってお願いする律。

「はいはい、わあっただよ律さんや」

駄々っ子な律を可愛いと思ってしまった……本人には黙って（照れ隠しの左フックが飛んでくるから）。

漣がジト目で睨んでくるが、スルースキルがある俺にはモーマンタイだZE！

「……ふん、私はお茶でも飲んどくつ！」  
漚の奴、何であんなにツンツンしてんだ？

というわけで、唯先生と藤馬助手（俺）によるギター教室。  
律を座らせ、指導開始だぜ！

まずは唯先生が基本を教える。

「左手はコードを押さえて、右手でストロークだよ！」

「すまん、さすがにそれは分かるんだが」

唯、さすがにそれは馬鹿にしてるとしか思えない。

「ええ、じゃあ何を教えれば……？」

もう詰まってるし……じゃあねえなあ。

「まあ、まずはふわふわでもやれば良いんじゃないか？、ほれ」  
スタンドを律の前に置き、楽譜を入れる。

「はいっ！……あれ、え」と……？」

律が楽譜を見るが、コードが分からずチンプンカンプンの様子。

全く、世話のかかる奴だなあ。

俺は律の手を握り、コードを押さえさせる。

「はひっ！？」



律、もうちょい『背筋ぴーん』ってやってみろ」

「「「ふんすつ！……！」「」」

「ードゴンッ×3！！」

「おぶしっ！？」

俺の頭に三発の上段蹴りが炸裂する。

な、何故に……？

俺がプールから救出された人みたいに床でビクビクしていると、律が唐突に演奏を止める。

「……ギター無理かもしれない」

「「「はやっ！？」」「」」

約数分でギター教室は終わってしまった……。どんだけ飽きやすいんだよ。

――翌日 放課後

「というわけで、今日はキーボードをやってみるぞ！」  
部室に着いた瞬間に律が宣言する。

「何が、というわけでなんだよ？」

「『Cagayake Rittyan!!』シリーズ、まだ続いてるの?」

「つか、お前はまた数分で飽きるんじゃないの?」

すると、律は握り拳を作り力説を始める。

「やっぱ輝いてないと駄目かもしれない!!」

注目されると、キラキラ……になるんだよ!

ほら、あれを見る!」

律が指差した方向には、やけにキラキラしたさわつちが。

――誰なん、あの人?

「ここ最近!

担任になってからというもの、さわちゃんは肌もピカピカ、髪もツヤツヤ……何かやたらと充実してないか!」

律に言われて、ウインクをした後勝手に喋り出すさわつち。

「いやあ、担任にもなると教壇というステージに立つ回数が増えるからかしら?」

いや、別に誰も聞いてないし……。

「あたしもキラキラしたい!!」

おい、お前の欲望が駄々漏れだぞ?

「「っ!!」」

…… オルフエノクか。

「すまん、用事出来たんで帰るわ」

荷物を担いだり持ったりして、そのまま部屋を出る。

「えっ、なに「はいはいごめんよ」」

ちよつと待てって!」

――ガチャン!!

――NOW LOADING――

――三人称side

やや日が落ちかけて、暗くなってきた公園。

そこに藤馬が包帯を外しながら走ってきた。  
後ろからキバットもヒラヒラとついてくる。

「ここだよな……?」

藤馬がキバットに聞く。

「ああ、間違いなくそうだ……だが」

誰も居ないし、気配もない……そう言おうとした瞬間、

「あらら……やけに遅かったな、中都藤馬？」

そんな少女の声が公園に響く。

藤馬が振り返り、声の主を見つけた。

その主は全身にローブを羽織っており、手には二メートル程度の棒を持っている。

「成る程……今日はいつもより不幸な日ってわけだ、コウモリモドキ？」

「ああ……全く、どうしてこんなにもお前は怪人に愛されているのやら？」

ため息を着きながら、藤馬は質問する。

「お前、クイーンの間か？」

「うん、まあな！

あたしはメタル……お前に」

そう言っただけで少女、メタルはガイアメモリを取り出す……だが、そのメモリは今までと違ってしっかりとした形をしている。

T2ガイアメモリ……現存するメモリでも、次世代型ガイアメモリ。純化され、さらには暴走の危険もある恐ろしいメモリであり、その性能はかなりのものだ。

「……八つ当たりさせて貰うぜ？」

「はぁ！？」

「《METAL!!》」

T2メタルメモリは電子音声が鳴ると、ひとりでにメタルの左腕に入る。

体に変質し、メタルはメタルドーパントになり、同じく変質した口ツドを確かめるように振り回す。

ロツドは振り回す度に重低音を奏で、華麗な舞を思わせる。

一方の藤馬もギターケースの中からヴァイオリンケースを取り出して、タツロツトを取り出す。

「何かわかんねえが、かなり不味いことだけはわかる……タツちゃん、コウモリモドキ!!」

「びゅんびゅんびゅんびゅん！」

一気にテンションフォルテッシモー！」

「ああ行くぞ、ガブリッ！！」

「っ！！」

キバットが藤馬の右腕に噛みつき、《魔皇力》を全身に流す。すると顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれ、

キバットを右手に持ちかえた後、左手を上突き上げる。

「《変身……!》」

キバットは右手でベルトに、タツロットは自分で左手に填まる。

藤馬の体が黄金色に染まり、その姿を別のモノへと変えていく。

「はっ……!」

「ーボウッ……!」

藤馬が突き上げた右腕を降り下ろすと、炎と共にその姿を仮面ライダーキバ エンペラーフォームへと変えた。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え……!》」

Eキバはマントを翻し、メタルとの戦いを始めた。

l i t o b e c o n t i n u e d

## 第二楽章 第七幕 ドラマー、そして共同戦線 後編！！

――三人称 side

「おらああああああああ！！！！」

「はああああああああああ！！！！」

――ドツ！！！！

Eキバが右拳を奮い、メタルが冷静にロッドでその拳を捌く。  
さらにEキバはもう一方の腕でアッパーをするが、それも受け流された後ロッドで吹き飛ばされる。

――ドゴツ、ガッ！！

「ごほっ！……ちっ」

自動販売機に勢い良くぶつかり、ズルズルと倒れる……しかしEキバは立ち上がってマントを翻し、再びメタルへ拳を奮う。

さつきからずっとこの状況が続いてる。

Eキバの本領は蹴りだ……しかし、いい加減メタルやクイーンの情報を知りたかった。

自分に味方をすれば、敵になったり……その正体が誰なのか気になっていた。それで情報を聞き出すため、拳だけで戦っているのだが……。

「ふんふん

どうしたどうした、その程度かい？」

「ぐっ……くそっ……たれが!!」

そう叫んで、威力を抑えた上段蹴りをメタルに放つ。  
メタルはロットで受けながら後ろに下がる。

さつきからロットで拳をさばかれていたので、腕に痛みが蓄積して最初より威力が無くなってきていた。

メタルの腕力はEキバより強い。

さらに無手と武器じゃ分が悪くなるのは必然だろう。

「ちっ……次狼、力を貸せ！」

そう言くとEキバの左腕にガルルセイバーが出現する。

そしてEキバは左手にとまっているタツロットの頭部を引き、インベリアル・スロット胴体にある特殊な回転盤がガルルセイバーの図で止まる。

「《ガルル・ファイバー!!!》、ガチャン！」

Eキバは左手のタツロットを外し、ガルルセイバーにはめる。

ガルルセイバーの重さを確かめるように振り回し、メタルに向き直す。

メタルもロットを構え、そのまま膠着状態が続く……そして。

ードンッ、ガキイイイイイイ!!!

「つくう!？」

Eキバがメタルの間合いに一瞬で近づき、左腕のガルルセイバーを横薙ぎに振る。

メタルがロットで受け止めるが、その重い斬撃に思わず声を出す。

Eキバはそのまま鎧でロッドを押し退け、腹をガルルセイバーで思いつき突く。

「ぐう！？……ふっ！」

メタルは後ろに飛んで少しでもダメージを減らしながら、Eキバの顔にロッドを叩き付ける。

Eキバは軽々と受け流し、バックステップで距離を取る。

Eキバがガルルセイバーを構えながらメタルに聞く。

「お前……ここに居たはずのオルフェノクをどうした？」

「へっ？……ああはいはいあれね！」

アレはあたしが倒したから大丈夫、大丈夫

それよりさあ……気付いてた？」

メタルがロッドを地面に突き刺す。

するとEキバの後ろから、ファンガイアやオルフェノク等の怪人達が出てくる。

「ああ……周りにわんさか居るな。

ははっ、ちょっと不味いなあ？」

後五分しかエンペラーは持たないんだけど？」

Eキバがおどけながら言うが、状況はさらに不味いことになってきている。

Eキバの後ろに六体、メタルの後ろに七体の十三体……。

恐らくビショップの差し金だろう。

（ペース配分を考えないで戦えば大丈夫だけど、それだと援軍が来たときにはそのまま吐血して無様にぶっ倒れてゲームオーバー……ヤバイな、こりゃ）

Eキバがこの状況を打破する策を考える……そして。

（どうするつもりだ、藤馬？）

キバットが意志疎通をしてくる。

（決まってるだろ……メタルと協力するしかない）

（はあ、今のお前には何を言っても無駄だろうな……どうなっても知らんぞ？）

（上等だよ、コウモリモドキ！）

「メタル……お前もこの状況は不味いだろ？」

「まあ藤馬の方が不味そうだけだな？」

Eキバ達が言葉を交わす度にジリジリと怪人達が詰め寄る。

「黙ってるよ、大きなお世話だ！」

「ははっ、しゃあないなあ？」

お前が死んだらあたし達も困るしな……それじゃ！」

そして、Eキバ達の後ろから一体ずつ襲いかかる……が。

《エンペラーハウリングスラッシュュ……！》

《メタル・ダイレクトスマッシュュ……！》

ーースバツ、ゴドンツ……！……ドシャ、ドシャ………。

Eキバはその怪人の一体を一撃で斬り伏せ、メタルはもう一体の頭を粉碎する。

良く見ると、ガルルセイバーの刀身と柄から炎の剣が、メタルの口ツドからは灰色のエネルギーが噴き出している。

「ああ……契約成立だな、メタルさん？……それじゃ！」

Eキバとメタルが背中合わせに各々の武器を構え、宣言する。

「『《《光栄に思え、絶滅タイムだ！！！！》》》」

まずEキバがバツタヤミーに一気に近付き、袈裟斬りをして蹴り飛ばす。

すると、バツタヤミーはメダルを溢しながらブランコに激突する。

そのままEキバは右腕を地面に突っ込み、メダガブリューを取り出す。

それを見て怪人達が攻撃仕掛けるが、ガルルセイバーとメダガブリューの二刀流で蹴散らしていく。

「藤馬はやっぱ強いなあ……あたしも強いけど、な！」

メタルがEキバの後ろにいるファンガイアを粉碎する。

するとEキバがセルメダルを二枚掴み、必殺技の準備をする。怪人達が隙だらけのEキバを狙おうとするが、

「ードゴッ！！」

「させねえよ、藤馬はな！」

それをメタルがロッドで怪人達を牽制し、近付かせない。

その間に、Eキバはメダガブリューのエナジーエンハンサーにセル

メダルを二枚入れ、  
ビュレットチャンバーでエネルギーを数倍に圧縮。

「《ゴックン！！！！》」

（何でかメタルは信用できる。前にもこんな事があったな……クインと唯が重なって、タブーとムギが重なって……そして今度は）

——ええ、藤馬もやろうよ！——ねえ藤馬、

「律に見えるなんてな……なんてこった」

「《エンペラー！！！！》」

そんな電子音声と共に法螺貝のような音楽が鳴り響き、メダガブリューに黄金のエネルギーが溜まっていく。

ガルルセイバーも紅蓮の炎をタツロットが吐き出し、そのままエキバごと上昇する……そして。

「メタル、一気に決めるぞ！！」

「言われなくても……やるつての！！」

メタルはロッドのメモリを入れる部分に、別のT2メタルメモリを挿入する。

「《METAL・MAXIMUM DRIVE！！！！》」

ロッドから灰色のエネルギーが竜巻のように纏われ、そのまま横に振り抜く！！！！

「はあああああああ！……！」

《メタル・スクリュースマッシュ！……！》

ービュオツ、ドゴオオオオオオン！……！

一方のEキバは夕日を背にして複眼を紫に光らせながら、メダガブリューで黄金の衝撃波を一気に放つ……！

「セイヤアアアアアアア！……！」

《グランドオブレイジ・エンペラーバージョン！……！》

ーヒュガツ、ガガガガガガ！……！

二人の技が怪人達に炸裂し爆散した……だが応援を呼んだのか、まだ五体程度残っている。

それを見たEキバが、ガルルセイバーの刀身と柄からロケットのように炎を勢い良く噴き出させ、一気に近付いて刀身と柄の炎剣で斬り伏せる……！

「これで、ラストオオオオオオオオオオ！……！」

《エンペラーハウリングスラッシュ！……！》

ー斬ッ！……！

静寂が場を支配する……そして。

ーードゴオオオオオオオオオオン！……！

全ての怪人を倒し終わった。

メタルはそれを確認すると、公園から姿を消した。

――NOW LOADING――

――藤馬side

俺は変身を解除した瞬間に地面にぶっ倒れる。

「はあ……はあ、はあ……はあ……はあ……ゴホッ、ゴホッ……ゴフッ……ゴホッ……っ!？」

――バシヤッ……ポタポタ……バシヤッ……。

怪人達を倒したのは良かったが、どうやらかなり不味いらしい……ドンドロ口から吐血しまくってる。

やっぱり、最後のはメタルに任せりゃ良かったわ……どう考えても無理しすぎたな。

俺は立ち上がろうと力を入れるが、疲れと血を流しすぎた事によって上手く立ち上がれない。

ガチで……やべえな……意識が……遠退いて……い……く……ゴホッ!？

――バシヤッ……バシヤッ……ポタッ、ポタッ、ポタッ……。

「――りしろ、藤馬!……不味いな、――ぎだ!」

次狼が何か言っているが、何を言ってるのか分からない……ちゃん  
と……いえ……よ……。

――数分後 別世界のとある教会

――三人称 side

――コッ、コッ、コッ、コッ……。

教会内に足音が鳴り響き、その音と比例するように松明の火が次々と着いていく。

その足音の主、メタルは肩にロッドを担ぎながら呟く。

「はあ、藤馬の奴大丈夫かな……アイツの事だから死ぬ事は無いと思うけど……」

するとメタルの前に、ローブを着た二人が歩いてくる。

「むふふ、ミクにゃん……あつ、メツちゃんお帰り!!」

「あれ、先輩疲れてますね……何かあったんですか?」

「ん?……クイーンにミツクか。」

聞いてくれよ、さっきな……」

メタルが二人にさっきの出来事を説明する……すると。

「はあ……全く、藤馬先輩はいつもいつも!」

「うんうん、なっちゃんはもっと自分を大切にされた方がよいよ!」

「だろだろ?」

本当に……いつも無茶ばかりして……」

メタルはさっきの事を思い出し、言葉に詰まる。

そんなメタルを、クイーンとミックが優しく手を握る。

「なっちゃんは、あんな風にわたし達を護ってくれたんだよね……」

「ええ……でも、今度は私達が助ける番です!!」

「クイーン、ミック……ありがとう」

メタルは二人に抱きつき、それを二人は受け止める。

そこに居たのは、誰よりも純粋な少女達だった。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

「ふう、気持ち悪いな………おえ……」

俺は自分の家で缶詰め状態だ……まあ仕方ないのだが。

あの戦いの後、俺は二日後に起きた。

外側はもう治っていたが内側はボロボロで、コウモリモドキによる臓器が傷付いていたとか……よく生きてたな、俺。というわけで家で大人しく療養中。

と言っても、コウモリモドキが少しずつ治してくれるし、輸血も済ましてあるから来週には学校に行けそうだ。

今は少しでも外に出て、気分転換をするため夕食の買い物中。ふむ、キャベツが安いな……あつ、こっちの玉ねぎはでけえぞ！

俺が学生から主夫へとジョブチェンジしていると、何やらさっきから視線を感じる。

視線の先を見ると、隠れているつもりだろうがバレバレなバイオレンスカチューシャ娘が……何やってんだ？

俺は呆れながら律の元に行く。

「何やってんだ、お前？」

「なつ、あたしの隠れ方は完p「バレバレですけど、何か？」……」  
律を弄るのは楽しいけど、こんな所じゃ立ち話も出来ないな。

俺は買い物籠の中にある炭酸ジュースをちらつかせながら提案する。

「とりあえず、どつかで話でもすつか？」

すると律は納得してない表情を浮かべながらも頷く……現金な奴。

というわけで公園に着き、手頃なベンチまで移動する。

俺は買い物袋の中からジュースを二本取り出し、一本を律に渡す。

「ほら、座って飲もうぜ？」

「あ、うん……」

二人でベンチに座り、プルタブを開けてジュースを飲む……くうく、うまし！

それにしても今日の律はしおらしいな。  
しばらく沈黙が続き、律が喋り出す。

「あたしさ……最近、ドラム叩いて無かったじゃん？」

……確かに叩いてないな。

「……ドラムやろうつて、思ってた日から毎日ドラム叩いてたのにな。まあ、最初はスティックしか買えなかったけど……それから、やっと中古のセットを買ったんだ」

律は昨日の事を言うように話す……そんだけ、印象的だったんだろ  
うなあ。

すると律は、手の平を空に上げてマメになっている部分を見る。

「ほら、まだちょっとマメになってる……最初はすごい力が入ってたから。」

それでも毎日毎日叩いてた」

律は炭酸ジュースを飲み、一息つく。

俺も炭酸ジュースを飲んで、再び律の話に耳を傾ける。

「それで昨日久し振りにドラム叩いたらさ、何かめちゃくちや楽しくて……やっぱり、あたしはドラマーなんだなあ、って思ったんだ

……。あたしさ……皆の背中を見ながら、皆の音楽を聞きながら、ドラムをガンガン叩くの！」  
律が立ち上がり、笑顔で言う。

「大好きだ！！！」

「……」

「藤馬、どうしたんだボースとして？」

「……はっ！？……い、いや、別に何でもない」

律の本当に楽しそうな顔と夜空が良い感じにマッチして、凄く幻想的になっていた……こんなこと言ったら地面に頭を叩きつけられるわ！

そう思っていると律から予想外の質問をされる。

「そういえば、藤馬は何でヴァイオリンが良いんだ？」

……へっ？

「その、何というかですね……あはは」  
俺のこの怪しい感じを、めちゃくちゃ疑う律。

「怪しい……あたしも教えたんだから教えるよ！」  
つつても、記憶喪失だから……というのは関係無いよな、うん。

「しゃあない、特別だからな？」

「計画通り（ニヤリッ）」

（ハメられましたね、見事なまでに）

タツちゃんに言われると言い返せない……。

俺はジュースを飲み、少し考える……そして。

「何て言うのかな……ヴァイオリンを見て、聴いて、触って、弾いて……。」

そしたら自然とこれだ、って思ってた」

「……そう、初めてヴァイオリンを弾いた一年前もそうだった。」

「何か元気になりたい時とか、悲しさをまぎらわしたい時とか、皆とバンドする時はこれだ、って思えた」

「……それが何なのかも分からないけど、心の中ではそれで良いって思ってる。」

「理由になんないかもしれないけど、俺が自然にこれが良いって思えたから、かな？」

「………はあ、よくスラスラと出たな……まあ合ってるんだけど。俺は話し終わると、買い物袋を持つ。」

「さて帰りますか……って、律？」

律を見るとボーンとして、はっと気付く。

「何やってんだよ、帰るぞ？」

全く……と思いながら公園から出ようとすると……すると。

「あのさ！……良いんじゃないかな、別にそれで！！」

後ろで律が叫び続ける。

「あたしには藤馬の気持ちなんて分かんないけど……でもさー！」  
律が俺の隣に走ってくる。

「さっきの藤馬の顔、凄く幸せそうだったー！」

そして俺の肩を掴み、まっすぐ俺を見る。

「だから、お前はそれで良いと思うー！……っ／／／／／」  
恥ずかしくなったのか、赤くなりながら目を逸らす律。

……律らしいな、今の言葉。

俺は律の頭を撫でながらお礼を言う。

「ありがとな、律。何かすっごく元気貰ったよ」

「う、うん、ありがと……／／／／／」

それじゃ帰るかな……。

俺達は、そのまま公園を出ていく……。

ちょっと時間が経つと、律と別れる道に出た。

「ジューズありがと、それじゃ来週な！」

そう言って律が自分の家の方向に歩く……そうだ！

「おい、律!」「ん、何だよ藤馬?」

律がこっちを向いたことを確認してから叫ぶ。

「俺も律のドラム、大好きだ!!!」

「……………なっ、なななな!?!?!」

すると、律が一瞬でゆでタコ状態になる……………ほえ、凄いな……………。

「そんじゃ、また来週な?」

笑顔でそう言つて家路に戻る……………が。

ートトトトト……………!!

何か後ろから凄い音が……………って!

「さっきの、どう反応すりゃあ良いんだっ!?!」

ーバグオツ!!!!

「エルビツシュ!?!」

律のライダーキックをもろに鳩尾に受け、二メートルほど飛ばされる。

Why?……………精一杯、自分の出来る限り誉めたのに……………不幸だ……………。

It to be continued

第二楽章 第七幕 ドラマー、そして共同戦線 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「終わりは、始まりのうた……あ、どうも、リリカルなのはの挿入歌を聞いてテンション上がりまくりの中都藤馬です！」

うんうん、はやては可愛いよね……特に関西弁とか笑顔とか、何あのリーサルウェポン？

藤馬「次回作はリリカルなのはに決まってるけど……もちろん主人公は？」

お前（始まりはストライカーズから）と、新しいオリ主（始まりは未定）の二つがある。

新しいオリ主の方はライダー関係は全く登場しないけど。

藤馬「というわけで、皆さんの意見を聞きたいです！」

是非、どちらが良いかを感想板に書いていただければ嬉しいです！

全員「それでは、次回をお楽しみに！！」

**第二楽章 第八幕 修学旅行、時々不幸 前編！！（前書き）**

どうも、私こと388859です。

次回作のアンケート（前回の後書き参照）ですが、皆さんの意見はまだまだ待ってます！

それでは第二楽章 第八幕、お楽しみください！！



「郷ちゃんうつかりん、てへっ」

第二楽章 第八幕、はーじまーるよー！

――NOW LOADING――

京都に向かう新幹線で、異常にテンションが高い二人が居た……。

「ボウフラ、京都に行きたいかアアアアアアア――！」

血管がぶちきれそうな勢いで叫ぶゴリさんと……。

「おおおおお――！」

それに腕を突き上げて、力の限り叫ぶ俺……。

（小学生か、お前等……血管千切れる）

せつかくの修学旅行なのに怖いこと言うな、コウモリモドキ！？

「ハツ橋食べたいかあああ――！」

「イツエエエエエス――！」

（藤馬さんだけ腹壊せば良いのに……）

なんでタツちゃんまでそんなことを！？

「清水寺から飛び降りたいかあああああ――！！――！」

「死にたくないですうううう！？」

（パンツ一丁で飛び降りれば、むしろ気持ち良いと思うよ？）

場所を考えろよ、このパンツ怪人が！？  
警察に捕まって人生終わるわ！？

「やれ、むしろ死にさせエエエエエ！！！！！」

「理不尽だああああああ！？」

「二人とも静かにしてください！！！」

「……すいません」

（（（うわぁ……）））

さわつちに言われて席に座る俺とゴリさん……あ、どうも、私こと  
中都藤馬です。

本来なら軽音部の皆と一緒に座っているのだが、学校側としては色  
んな意味で問題児である俺を、修学旅行で野放しにしたいくらいし  
く、ストッパーであるゴリさんの向かいの席だ……唯一の救いはさ  
わつちが隣に居ることだけど、

「はい、チーズ！」

唯達と呑気に写真を撮っていて、それどころじゃなさそうだ……は  
あ。

そして美紗は……おっ？

美紗の方を見ると、和達と仲良くトランプしている……良かったな、美紗。

何かいつも俺達と話してるから心配だったけど、杞憂だったな。

その後ろでは澪が泣きながらこっちを見るけど、恐らく唯達のボケを捌ききれないんだろうな……ドンマイだ、澪。  
ちなみにタツちゃんとコウモリモドキは学生鞆に入ってもらっている。

こっちでも怪人が出なけりや良いんだけど、保証はないんだよなあ……はあ。

俺は溜め息を着き、外を見ていると何か無性に眠りたくなってきた。

何もする事も無いし、寝ますか……そう思ったとき、

「ボウフラ、ちょっと聞いて良いかのう？……」

俺と一緒にシヨンボリしていたゴリさんが、急に質問してくる……どうしたんだろう？

「なんスか、ゴリさん？」

俺は素っ気なく返す……すると。

「ボウフラ……お前は何と戦つとる（・・）？」

「っ！？……何が言いたいんスか？」

一瞬表情を固くしたが、ゴリさんに怪しまれないよう返す。

「なーに……お前の怪我はどうも転んだとか、誰かと喧嘩してなったもんじゃない……わしには分かる」

ゴリさんがやや憂いを秘めた表情で言ってくる。

（どうするの、藤馬？……はつきり言って、この人には何も教えない方がよいよ）

確かにそうだけども……何か引つ掛かるな、ゴリさんの言い方。

映司にそう伝えた後、逆にゴリさんに聞いてみる。

「ゴリさんこそ、昔に何か有ったでしょ？」

どう考えても、ゴリさんは可笑しい……刃物の振り方や、殺気が半端じゃない。

なんでそんな人がこんな女子校に居るのか気になった。

それを聞いて、ゴリさんは外の景色を観ながら懐かしそうに喋り出す。

「まあ何ていうかのう……忌まわしい過去という奴じゃ。

お前みたいなボウフラには教えられん」

はは、そうスカ……。

俺達の間には沈黙が続く……そして。

「まあ教えられんなら良いんじゃない。

ただのう……他人の気持ちも考えろ、ボウフラ」

ゴリさんはそう言つと席を立てトイレに行ってしまった。

……何なんだろう、いきなり？

俺は意味が分からなかったが、とりあえず駅に着くまで寝る事にした……。

《京都、京都》

そんな声を聞きながら新幹線から出る。

背筋を伸ばし、深呼吸をする……何か気持ち良いわ、気分的に。

「金閣寺やで!!」

そんな元気一杯な声が聞こえるが、生憎俺は精神的に疲れたからスルーしよう。

そう思い、移動しようとするが律に首を掴まれる。

「藤馬も京都に来たからには、関西弁でしか喋っちゃいけないゲームと一緒にするぜよ!」

律、それは土佐だと思っただがや?

「藤馬のは名古屋やろ?」

漣も小さいことは気にせんで良いだなも。

その後は駅からバスに乗り、金閣寺へと向かう。

そして金閣寺が見える場所までみんなで全力で走る……そして。

「「やって来たぜ、金閣寺iiiiiiiiiii!!」」

「ーゴスツッ!!」

「うるさい、周りの人に迷惑だろ!!」

「すいません、澪さん……律と一緒に謝り、改めて金閣寺をゆつくりと鑑賞する。」

「一回燃えたとはいえ、その外観は美しいと言わざるおえない、そんなオーラを放っていた。」

「……何というか、凄く歴史の重みを感じるよなあ。」

すると唯が質問してくる。

「ねえねえ、あれって本当に金で出来てるの?……じゃなくて、出来てるん?」

「まだ続いてたのか、そのゲーム……ていうか金閣寺ぐらい中学で習うだろ?」

「そう思っていると、律が質問に答える。」

「そっだぜ!……あつ、やで!」

「せやけどなあ、少しぐらい持って帰ろうなんて思わんか……あーっ……思うたら、あかん、でえ!」

「お巡りさんに捕まっ……あつ、えっ……うー、捕まってまうんが、オチだぜ!……あれえ……いやあ……オチやで……」

「俺はそんな律に、無言で肩に手を置く。」

「りっちゃん隊長……貴女は頑張りましたよ。」

「すると、今度はムギが金閣寺の説明を始める。」

「金閣寺ってなあ、昭和二十五年に燃やされてもつて。今あるんは、新しく建てられたもんなんやつて。

お釈迦様のお骨を奉った、舍利殿の金閣は有名やさかい、金閣寺って呼ばれるようになったけど……ホンマは」

そこでこちらを向いて、ムギが笑顔で言ってくる。

「鹿宛寺って言っらしいわ」

「うう……」

「……ほえ〜！」「」

ムギの完璧な関西弁と説明に、律はへこみ、俺達は称賛する。

ムギさん万能すぎじゃね？

勉強教えるの上手いし……一家に一人欲しいくらいなんだけど。

「いやあ、それほどでも〜／＼／＼／」

とりあえず、次の場所にGO！

まあ、といってもお茶したり、清水寺の本殿から叩き落とされそうになったりしたが、今は神社にやってきた……疲れた。

「大丈夫、藤馬くん？」

ああ、ありがとう和さん。

俺は牛の銅像を撫でながら返事する。

なんでもこの銅像、撫でると学問のご利益があるらしい……まあ本当かどうかはわからないが。

「そう思うならなんでそんな優しく撫でてるんだ、お前は？」

ふっ……そんなのはバカだからさ、お嬢さん？

俺の言葉に零は溜め息をつき、奥に進む。

すると、絵馬と書いてある看板が立っている。

絵馬ねえ……書いたこと無いわ、覚えてる限りじゃ。

「見てみてりっちゃん、絵馬だよ！」

「おー よし、記念に書いてこうぜ！」

そしてこの二人は何でそんな元気があるの？

俺達は絵馬を書く場所に移動し、それぞれ書き始める。

ていうか、絵馬ってあのクソ神に願いを聞いてもらうんだよな……。

――藤馬の脳内イメージ映像 あくまでイメージです――

「えゝ、なにになに……不幸スキルを治したい？、クソガキの願いか……じゃあ、不幸スキルをEXにしておこう、ふふふ……ザマアww」

「超ム力つくわ、あのクソ神イイイイイイ……！」

――バキンッ……！

俺は絵馬を思いっきりまっふたつに叩き割った。

『何やってんの!?!』

「何しくさつとんじゃ、ボウフラアアアアア!?!」

ーガシッ、ヒュバゴンッ!?!?!!

その場にいる全員に突っ込まれ、さわつちからはヘッドロック、ゴリさんからは絵馬でぶん殴られた……不幸すぎる、俺の人生。

とりあえず、きちんと書くことにした。

うん……これで良いや、これならクソ神もとやかく言わないだろ?

「なあなあ、藤馬は何てお願いしたんだ?」

「教えないよ、絶対にな?」

「……ええ?」「……」

皆がブーブー文句を言ってくるが、どうやらそんな暇は無いらしい。

「……!?!」

全く、こんな時に怪……人……か……?

俺は思わずそう思ってしまう。

何か気配が可笑しい……ファンガイアであって何かが違う気が……。

「なっちゃん、どうしたの?」

確かビショップに宣言した時もそうだったが……十中八九。

「ファンガイアと別の奴の合成……って嘘だろ、おいっ!？」  
怪人の気配がもの凄いスピードで移動している。  
今までの中で一番速いな……。

とはいえ幾ら怪人が走っても、これ程のスピードは出ない……とな  
ると何か乗り物に乗っている。

「おい藤馬、置いてくぞ?」

とりあえず、このままじゃ気配を辿れなくなっちまう!

俺はすぐに気配のある場所へと走り出そうとする……が。

「……何のつもりスカ、ゴリさん?」

「なに、修学旅行中に抜け出すボウフラを止めるだけじゃが?」

ゴリさんが神社の出口の道を阻む。

くそっ、こんな事してる暇は無いのに!

「すみません!

でも俺、やらなきゃいけないことがあるんです!」

そう言ってゴリさんの横を走って通り抜けようとするが、

「ーダメじゃ」

ーヒュンッ……。

その瞬間に俺は空を飛んでいた(・・)。

「……はっ？」

自分が空を飛んでいる、そう感じた瞬間には地面が目の前にあった。

ードシャツ！

無様に地面に背中から落ち、遅れて痛みが走る。

ゴリさんの方を見ると、投げの構えをとっていた……俺は投げられたわけか。

「ここを通りたきゃ……わしを振り切るんじゃない？」

俺は立ち上がり、ゴリさんに向かい合う。

この修学旅行、まさか最大の敵と戦う事になるなんて……。

「何で……ダメなんスか？」

「ボウフラ……それは自分で考えなきゃダメじゃ。それが分かるまでここは通さんぞ？」

他の皆がこの状況にオロオロしており、誰も止められない。

さて、どう振り切るかね……。

俺は和の方を見て助けを求めるが、首を横に振られる……無理か。

こうしている間に人が死んでいるかもしれない。  
そんなのさせるかよ！！

俺はすぐに作戦を立て、実行する。

自分の持てるスピードを最大限に使って、フェイントを入れて一気に突っ込む。

ゴリさんを見ると冷静に目で追っていて、このままじゃ投げ飛ばされるのも時間の問題だ……だが。

投げ飛ばされるのも覚悟で突っ込み、後ろの皆からは見えない位置になる……ここだ!!

その瞬間にメダルの力を目と足の部分に解放する。

数瞬遅れてくるゴリさんの投げをしっかりと見切り、その体を足場にして思いっきりジャンプする。

ーードンッ!!!

ゴリさんを容易く乗り越え、その勢いのまま走り出す。

「夕方にはホテルに戻るんで、俺の心配はご無用です!!  
それじゃ修学旅行、楽しんでください!!」

鳥居をくぐり抜け、全員で合成怪人の気配を辿る。

(む……よしっ、見つけたぞ！)

奴は清水寺周辺に居るが、このままだとスピード不足で間に合わない……マシンキバーはお前が免許を持ってないから無理だが、次狼に乗せてもらえば良いだろう)

ありがとよ、コウモリモドキ！

ちなみにマシンキバーとはキバの専用バイクだ。

今年の春休み、次狼にバイクの乗り方を教わったのは良かったが…

…重要な問題があった。

ー トウマクン、メンキョナイジャン？（ジョン・レ 風に）

免許か……法律という壁には勝てまへんわ。

という脳内再生をしていると、後ろからバイクが走る音がする。

後ろを見ると赤いオートバイ、マシンキバーを走らせている次狼が居た……早すぎじゃね？

「何をボケツとしてるんだ、行くぞ！」

次狼から投げられたヘルメットを被り、後ろに乗る。

「次狼、怪人は清水寺周辺に居る。

そいつはめちゃくちや速いから、思いっきり飛ばしてくれ……！」

ー ブオオオン……！！

次狼は返事にアクセルを吹かし、マシンキバーを走らせる。

街の景色が走馬灯のように過ぎていく。

そしてあつという間に清水寺周辺に着いた。

周りを見渡すが、怪人の姿は居ない……と思った瞬間、

ー バヒュッ……！！

ー ー NOW LOADING ー ー

――三人称 side

清水寺へ続く道から赤いファンガイア、オクトパスファンガイアが足を車輪のように回転させ、

バイクのようなスピードで二人に襲いかかる。

「くっ！？……怪人か！」

二人はマシンキバーから転がるように降りて、藤馬は右手の包帯を引き千切る。

オクトパスファンガイアはマシンキバーの上を通り、そのまま次狼と藤馬を睨み、叫ぶ。

「見つけたぞ……我が一族の敵、中都藤馬あ！！」

次狼はヘルメットを投げ捨て、オクトパスファンガイアを警戒する。

「藤馬、知り合いか？」

「うんにゃ、こいつとはファーストコンタクトだよ？」

藤馬もヘルメットを投げ捨て、学生鞆の中にあるキバットを掴む。

「一気に行くぞ、ガブリ！！」

「っ！！」

藤馬は右手をキバットに噛ませ、全身に《魔皇力》を流す。

その瞬間、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる……そして変身しようとした時、

「見つけたぞ、ボウフ……ラ……？」

その場に恐らく藤馬を連れ戻しにきた郷田先生が来てしまった。

恐らく最初から追ってたのだろうが、少し遅れたようだ……しかし、タイミングが悪すぎる。

その場に居る次狼と藤馬は呆氣にとられるが、オクトパスファンガイアは全く驚かず、逆に笑みを漏らす。

その笑みは、見るものに恐怖を与える……そんな笑みだった。

藤馬達が気付いた時には、オクトパスファンガイアが郷田先生へと、バイクのような足で走り始める寸前だった。

「次狼、来いっ……！《変身っ……！》」

藤馬に言われて次狼はメタモルフォーゼし、藤馬はキバットをベルトにはめ、メタモルフォーゼしたガルルセイバーを掴む。  
その瞬間に仮面ライダーキバ・ガルルフォームに変身した。

しかし、どう考えてもスタートが遅い。

Gキバのスピードは速いが、今のままじゃ追い付けない……だが。

（だからって、諦められるかよ……！！）

この手を……ゴリさんに絶対に届かせてみせる……！！）

そう思い、Gキバが持てる速さを出す。

だが、オクトパスファンガイアは郷田先生の目の前で……。

「バカめ……ふん!!」

ーギャツ、ドンツ!!ー!

一瞬止まりそのまま跳んで、走ってきたGキバに足をぶつけた。

Gキバの全力のスピードと、タイヤのように回転させた足……それを人にぶつければ、無事では済まない。

ーードゴツ、ギャルルルルル……ミシッ……ミシミシ……!!ー!

「……か……はっ……!？」

Gキバの身体にオクトパスファンガイアの足がめり込み、そのまま足を回転させた事でGキバの身体から嫌な音が響く。

ーードサツ、ゴロゴロゴロ……カランカラン……。

「ごほっ……ごほごほ……っ痛!？」

Gキバが数メートル吹き飛ばされ、ガルルセイバーをその手から落としてしまいキバフォームへと戻る。

呼吸を数回するが体の痛みに声をあげる。

(痛っ……くそっ……ゴリさんを襲うのは……フェイント……骨が折れたな……こりゃ……)

キバが腹部を押さえながらヨロヨロと立ち上がり、オクトパスファ  
ンガイアへと向きなおす。

「バカだな、キバ？」

こんな手に引つ掛かるとは……弱すぎて話にならん？」

「ちっ…好き放題言いやがって……野郎……!!」

オクトパスファンガイアに悪態をつきながら、どうするか策を練る  
キバ。

幸い郷田先生はキバの後ろに居るが、庇いながら戦う事になるため、  
形勢は不利だ。

「ボウフラ…なのか……無事か!？」

郷田先生がキバの心配をする……どうやら、目の前の出来事に追いついていないようだ。

まあ連れ戻しに来た生徒が、都市伝説に近い仮面ライダーになって  
怪人と戦う……普通ではあり得ないだろう。

「全然大丈夫っスよ……心配しないで下さい」

「…全然大丈夫じゃないじゃろ!?!…お前、骨が折れて「ゴリさん  
!?!」……」

キバがオクトパスに向かい合ったまま、郷田先生に言う。

「これは俺にしか出来ないんです……だから、そんなに心配しないで  
くださいよ……」

キバがそう言うと、オクトパスファンガイアが足を車輪のように回転させる。

キバと次狼がそれを警戒し、いつ来ても大丈夫のように構える……する。

「……またの機会にしてやる……」

そう言ってオクトパスファンガイアはバイクのように走り去った。

「……ふう……助かった……」

キバが変身を解除して、郷田先生の元に行く。

どうやら我らが主人公は、修学旅行でも不幸のようだ……。

I i t o b e c o n t i n u e d

**第二楽章 第九幕 修学旅行、時々不幸 後編！！（前書き）**

今回……スーパーゴリさんタイムです。

後、独自設定入ります。

では第二楽章 第九幕、お楽しみください！！

## 第二楽章 第九幕 修学旅行、時々不幸 後編！！

――藤馬 side

あの後、俺は病院には行かないで応急処置をした後に旅館へと向かった。

ゴリさんが言うには、怪我は打撲で済んだらしい……頑丈すぎじゃね、俺の体？

俺は旅館へ車で向かいながら、ゴリさんにこれまでの事を説明した。

怪人の事、仮面ライダーの事……美紗についてはまだ言っていないが、大方の事は全て話した。

ゴリさんはそれを無言で聞き、最後に「そうか……」と言った後だんまりだ。

ゴリさんの事だから、たくさん質問してくると思ったんだけどね。

そんなことをずっと考えていると、あっという間に旅館に到着した。

学生鞆を持ち、ゴリさんと一緒に旅館に入る。

中に入ると、一見ホテルのように見えるが、ところどころ和を思わせる造りになっていた。

「ゴリさん、俺達今からどうするんです？」

「そのぐらい修学旅行の栞に書いてあるじゃろ？」

ゴリさんに言われて、学生鞆から栞を取り出して見てみると……どうやら今は入浴中のようなのだ。

あ、そういえば！

「俺って誰と部屋一緒なんすかね？」

皆も知っていると思うが、俺以外にはこの学校に男は居ない。一応先生と相部屋になっているが、誰なのかは決まってなかった。というわけでゴリさんに聞いたのだが……。

「それならワシと相部屋じゃ」

1

11

俺

(・・) エッ ・ ・ ? ゴリさん

――ゴスンツ！！

俺は無意識に頭を近くの柱にぶつける……そうか、リアルなんだ……  
……って！？「なんだつつつてつつええええええええええ！！」

「？」

第二樂章 第九幕、始まります！

――NOW LOADING――

あ、どうも、私こと中都藤馬です。  
現在時刻、六時三十分……俺は今。

――カポーン……。

「良いっすよね……やっぱり温泉は」

「そうじゃな、ふう……」

ゴリさんと一緒に、温泉で一日の疲れを癒してます。  
この旅館……色々な温泉があり、初めて見たら感心する程だった。  
しかも男子は俺とゴリさんしか居ないから、ほぼ貸し切り状態……  
幸せやなあ。

とはいえ、もう十分ぐらい同じ風呂に入っている。

そろそろ露天風呂にでも行こうかね。

そう思い、今入っている風呂から上がり、露天風呂へと移動する。  
外へ繋がるドアを開け、ペタペタと歩く……着いた。

「おお……すげえな……これは」

周りは竹で仕切られており、月明かりが露天風呂を照らす。露天風呂からは湯気がもうもうと立ち上り、夜空へと消えていく。

そこには、古来から伝わる日本の歴史があった。

「何をしている、入らんのか？」

「ほらほら、湯冷めしちゃいますよ？」

「ふう……やはり良いものだな、温泉は」

「あつたかい……気持ち良い……」

「お兄ちゃんも早く入ろうよ」

その偉大な景色に入り込む相棒達……なんかもう色々つぶつ壊れたな、おい？

俺は思わず頭を抱えそうになるが、ゆつくりと温泉に入っていく……ふう。

心身共に疲れを癒しながら空を見上げてみた。  
少し曇っていて、お世辞にも絶景とは言えないが、それでも星の光が漏れ出すこの空はとても綺麗だった。

そんな景色を観ながら、俺は今日の出来事を思い出す。

今回の敵はバイクを使ってきた……もしかしたら、これからもこんなことがあるかもしれない。

やっぱり、バイクが無いとアイツには勝てないのかな……ていうか、ゴリさんにもバレちったしなあ……ああ、もう！

俺は髪をぐしゃぐしゃと掻くが、それでも思考がまとまらない……その時。

ーバシャッ！

「わぷっ！？」

右からお湯をかけられた……その方向を見ると。

「油断大敵だよ、お兄ちゃん！」

めっちゃ良い笑顔のラモン君がいました……ふふふ。

「小僧……我<sup>おれ</sup>の怒りに触れたな？  
もはや肉片一粒さえ残さんぞ、雑<sup>ぞ</sup>ごほん、小僧おおおお……！」

「今、雑種<sup>ざつしゆ</sup>って言おうとしたよね！？」

うっさい、三枚におろすぞ……あああああ！！

ーっ少し、お待ちくださいー

ープカーン……。

「お兄ちゃんはやっぱりバカだなあ。  
水は僕の味方だよ？」

ラモンが水を手に集め、それを手で弄ぶ。  
俺は溺れた人みたいに風呂に浮かんでいます。

ていうかラモンの奴、まさか口と鼻にお湯の塊を浮かばせて、呼吸  
させないようにしやがって……温泉で溺死とか、何それ怖い。

ちなみに他の相棒達は先に上がった……薄情ものめ。

「恐れ入りました……ラモン様」

俺はとりあえず湯に浸かり直す。  
するとラモンは力を解除する。

「少しは考え事が楽になったかな、お兄ちゃん？」

「っ……気付いてたのかよ、ラモン？」

ラモンは頷き、笑顔を見せる。

「たたく、本当に俺はだらしがねえなあ。」

頭を掻き、俺は露天風呂から上がる。

「ありがとよ、ラモン……少しは楽になった」

「いやいや、礼には及ばないよ」

ガキが生意気言いやがって……って俺より年上か。

俺はタオルを巻きながら脱衣所へと移動した。

「はあ……何だか修学旅行なのに、そうじゃないみたいだな」

今は夕食の寿司や天ぷらを食って、部屋の布団の上でゴロゴロしてる。

何か唯と律と美紗がお腹を押さえて苦しそうにしてたが、夕食前の

お菓子を食い過ぎたらしい……加減を考えろよ。

「お前だって、状況が同じだったらそうするだろう？」

「ひゅーひゅーひゅー、色男は良いですね」

ーメキャッ！！

「だ・ま・れ」

「「はい……」」

（良かった、実体無くて……）

ダイレクトに聞こえてるぞ、パンツ怪人？

俺は突っ込みをいれながら、携帯のタイマーをセットする。

六時起きか……明日は早いなあ、朝。

俺は何だかんだで朝はギリギリに起きるから遅い。

まあどうでも良いんだけどね……。

ーガラッ……。

そんな音がしてドアが開き、ゴリさんが後ろを指差す。

「ボウフラ……少し、付き合え」

………はい？

旅館の周りを俺とゴリさんが歩く……しかし会話が無い。

何でなん？二人だよ？生徒と教師だよ？何故会話が弾まないんだア  
アアアアア！！！！

俺は心の中でシャウトしつつ、ゴリさんを見ている。

何やら顔がめちゃくちゃ真剣だ……マジでどうしたんだろう？

「ゴリさん……どこに行くんスか？」

「少しぐらい待つとれ、ボウフラ」

ええ……教えても良いじゃないスか。

それから少し歩くと、月と星がよく見える場所に着いた。

ゴリさんが近くの置物の石に座り、手で座れとジェスチャーする。

座った後も沈黙が続く……そして。

「ワシは知らなかった……ボウフラがあんな事をしとるとはのお」

「はは、そりゃそうっスよ。」

自分でも信じられないんですから」

丁度一年前なんだよなあ、出逢ったのは……この力と、相棒達と、  
唯達と、そして音楽と。

自分でもバカみたいに毎日毎日……奏でて、笑って、お茶して、戦  
って。

ただがむしやらに、ただひたすらに……そしてこれからも。

「ワシはのう、腕つぶしに自信があった。それを組に買われて……昔、その組の若頭をしとった」

「……えっ?……」

俺は驚くが、ゴリさんが話を続ける。

「組のため、そう思ってたがむしやらに走り回った……そんなときじや、妻と出会ったの」

まさかのシリアスからのナチュラルノロケ……。

「全てが変わったんじゃ……自分も、周りも、世界も……何かが変わった。」

まあその後は話がポンポン進んで、ついに妻とゴールインして、アヤも生まれたんじゃが……」

ゴリさんが辛そうに喋りだす。

「ある時、妻と喧嘩してのう……私の気持ちも考えてって言われたんじゃ。ヤクザもやめるとな」

成る程、そういうことか……。

俺にもゴリさんの気持ちがわかる……仮にも仮面ライダーの端くれだ。

誰かを護る為に走る気持ちも分かっていた。

大事な人と結婚して、子供作って……ゴリさんはそんな中でも、奥さんと娘さんの為に走り続けた。  
それと同じくらい、奥さんはゴリさんの事が好きだったんだ……だから怒って、ぶつけた。

このままだと、ゴリさんがどこかに行ってしまうそうだったから。もしかして……俺も皆に心配かけちまってるのかなあ。

「妻はそのまま逃げるように出ていった……もちろんワシは追いかけた、でも」

ゴリさんが一回深呼吸する、そして。

「その日は雨が降った。」

それで妻の姿が見えず……車に轢かれて、死んだ」

――胃をわしずかみにされたような感覚が、俺を襲った。

「そう……だったん……スか」

俺は辿々しく返し、今日言われた言葉を思い出した。

――他人の気持ちも考えろ、ボウフラ。

そっか……そういう事だったのか。

「ワシがつまらん意地をはったせいで、妻を亡くした……アヤも、お前が居なくなれば悲しむ。  
他の奴らもそうじゃろう？  
じゃから戦うのは……やめとけ、ボウフラ」

ゴリさんは俺に仮面ライダーをやめさせたいんだ。  
俺が死ねば、悲しむ人が居るから。

まだ若い俺に、自分と同じ後悔をさせたくないから。  
まだ俺は引き返せる……そう思ってくれてたんだ。  
ありがたいな、本当に……でも。

「ダメなんスよ、俺じゃないと」

――これだけは、誰にも譲れないんです。

ゴリさんが驚きの表情を浮かべる。

「俺はたくさんの人を救いたいと思って、これまで走り続けてきました……でも」

俺は目を閉じて、思い出す……今起こった事のように。

ガラスのように体が変わり、泣きながら死んだ人が居た。

灰になりながら、助けを求めて死んだ人が居た。

満足そうに感謝を言って、死んだ人が居た。

自分より他人を気遣い、笑顔で死んだ人が居た。

助けると誓って助けられなかったのに、ありがとうと言って消えた人が居た。

思い出せば思い出すほど、自分の意志がはっきりとしていく。  
俺は空を見上げ、自分に言い聞かせる。

「誰かを助けられなかったり、目の前で失ったりしました。それが堪らなく嫌ですよ？……逃げ出したい、投げ出したいと何度も思いました……それでも」

今を全て投げ出せば、楽かもしれない。

でもそれはレンゲルにギャレン、そして今まで助けられなかった人達を裏切る事になる。

それだけは、何があってもしたくない。

あの人達を助けられなかった分、残りの人皆をハッピーエンドにしたい。

――だから走るんだ、その手を握るんだ。

――例えば、その行いがどれだけ辛くても

俺はゴリさんの顔を見て、しっかりと宣言する。

「出来るなんて、思っちゃいないです。

それでも走らなきゃ。

アイツ等と一緒に笑えない。

それでも手を伸ばさなきゃ。

アイツ等と一緒に居られない……そう思ったんスよ」

そう言い切って、また夜空を見上げた。

星はしっかりと、月は朧気に、この夜空で輝いていた。

――翌朝

――ガラッ！――！

「「寝過ごしたアアアアアア！――！」」

見ての通り、今俺とゴリさんは玄関に向かって走っている。

何でこうなったのか……あの後、ゴリさんと話を終えて寝たのは夜の一時だった。そしてタイマーは発動せず（保存してなかった）……よって。

「「間に合った！――！」」

「二人とも遅刻です――！」

特に郷田先生、何で貴方が遅刻するんですか！？」

さわっちからのありがたい説教……朝から勘弁してつかーさい……。

二人で縮こまりながら、さわっちからの説教を聞き流す。

その後ろでは唯達が笑いを堪えている……ちくせう。

説教も終わり、朝食のパンを食べながら今日行く場所を確認する。

菜には嵐山と書いており、他にも色々な場所に行くようだ……だが、こんなときでもやつぱりというか何というか。

「っ――！……ふう、出たか」（昨日の奴だ……今度は嵐山だな、行くぞ！）

昨日のファンガイアが嵐山の方角に出たみたいだ……行きますか！

「皆、先に嵐山に行つていて！

すぐに追いつくから！」

皆がクエスチョンマークを浮かべるが、俺は嵐山へと走ろうとする……その時。

「ボウフラッ……！」

ゴリさんの声が後ろから聞こえた。  
一回立ち止まり、そのまま振り返らないでいるとゴリさんが近づいてくる。

「どうしても、やるんじゃない？」

その問いに頷き返す。

ゴリさんが溜め息をつく……俺だってやりたくないっスよ？

「ならお前さんをワシは止めん。  
お前が護りたいモノを、なんとしても護って護って……そして帰ってこい、ボウフラ」

その言葉に思わず振り返りそうになるが、俺は前を見たまま、

「出来るか分かりません……でも」

――漢なら、やらなきゃダメでしょ？

その言葉にゴリさんが一瞬固まった後、盛大に笑う。

「くくっ……そうじゃな、これぐらいやってみせい。

……ゆけ、ボウフラっ……！」

「……応ッ!!」

俺は頷き、そのまま走り出す。

そして裏路地に入り、コウモリモドキを取り出す。

「行くぞ、ガブリッ!!」

「っ!!」

右手から全身に《魔皇力》が流れていく。

顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

そしてマシンキバーが独りでに裏路地に入ってくる。

今までは、高校生だからバイクを使うことを避けていた……でも。

――もう迷わない……迷う暇があるなら!!

マシンキバーに乗り、コウモリモドキをベルトにはめる。

「《変身っ!!》」

仮面ライダーキバに変身し、アクセルをまわす。

――俺はその手を握る、走り続ける!!!

――ブオン、ブオン、ブオン……ブオオオオン!!!

一気に裏路地を飛び出し、道路に出る。様々なバイクや車を通り越し、嵐山へとマシンキバーを走らせる。

――NOW LOADING――

――三人称 side

ここは嵐山……有名な観光地として知られ、様々な日本の文化がある。

その嵐山のとある駐車場で、家族連れの観光客がオクトパスファンガイアに襲われていた。

父親と思われる男性が妻と子供を下がらせ、オクトパスと向かい合う。

しかし父親の腕からは血が流れ、絶体絶命だった……その時。

――……ブオオオオオオオン、ドゴツ!!!!

紅いバイクがオクトパスファンガイアを吹き飛ばした。

家族は呆然としながら、バイクに乗ってきた人物を見る。

「あ……あ……仮面……ライ……ダー……?」

子供がそう言った瞬間、キバが家族に寄る。

「大丈夫ですか、ここは俺に任せてください!!!!」

そう言つて父親と母親に催促するが、子供がキバに質問する。

「……ねえ……お兄ちゃんは……仮面ライダー……なの？」

「ううーん……まあそんなところかな？」

ほらほら、お父さん達が待つてゐるからすぐに行っちゃいな？」

「う、うん！」

助けてくれてありがとう！！」

家族連れを見送り、キバがオクトパスファンガイアへ構える。

「さて……昨日の借り、返させてもらうぜ！」

《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

「やれるものならやつてみる！」

キバは右拳を突き出し、オクトパスがそれを腕の触手で弾く。

弾かれた勢いを利用し、キバが一回転して裏拳をオクトパスにぶちこむ。オクトパスが怯んで一歩下がろうとする前に、キバがその隙を逃さず拳のラッシュを叩き込む。

「オツ……ラアアアアアツ！！！」

最後に触手を掴み、キバがジャイアントスイングして投げ飛ばす。

ーブオツ、ドガツ！！

オクトパスファンガイアは車のボンネットにぶつかり、倒れる。

キバはオクトパスを見て、不可解に思う。

（コイツ、何か弱くないか？……昨日と違って、気配はファンガイアそのものだしな……）

そう思っていると、オクトパスが懷から何かを取り出す……それは。

「っ！？……やめとけ！

怪人が別の怪人の力使って、暴走したらどうするんだ！？」

「余計なお世話だ……お前だけは殺す！！！」

「っ！？」

「《A r m s ！！》」

オクトパスはそれ、ガイアメモリを自分の足に挿入する。

すると腕の触手が右手は剣、左手は機関銃に変わり、背中にシールドソードが追加される……が。

「ウウ……オオオオオオアア！！！」

コロス、コロスコロスコロスウウ！！！！！」

オクトパスの身体中の体組織が浮かび上がり、獣のように暴れまわる。

どうやらガイアメモリとファンガイアの力が反発しあい、制御が出来ないようだ。

左手の機関銃をそこら中に乱射し、右手の剣も車や道路を削り取っていく。

「ちっ、やっぱり暴走するのかよ……うおつと!？」

ーダダダダダダ……ガガガガガッ!!!

オクトパスがキバに機関銃、剣の衝撃波を次々と放っていく。  
キバは走って避けようとするが、余りの弾幕に意味が無く、徐々に身体へとヒットする。

「くそっ!?!……どうすりゃ良いんだよ!?!」

キバは走りながら思わず叫ぶ。

(コウモリモドキ、どうすんだよこれ!?!)

(そんなの私だって考えている途中だ!?!……しかし、ファンガイアとガイアメモリの力を同時使用するとはな……)

一般的にファンガイアのプライドは高い。人間の藤馬が悪態をついたらブチキレる程に。

そんな種族がガイアメモリ等の他の怪人の力を使う等……誰も考えはしないだろう。

しかし、こうしている間に駐車場は益々壊れられていく。

(仕方ねえ、エンペラーで一氣にカタを……って、なあ!?!)

キバがオクトパスを見ると、足をバイクのように回転させて今までより倍のスピードで市内へと走り去って行く。

市内にはさっきの観光客のような人達が沢山居る……さらに。

（奴はもう獣だ……暴走している奴は、手当たり次第にライフエナジーを食らいつくす可能性だってある……それだけは！！）

キバはマシンキバーに飛び乗り、オクトパスファンガイアを追い掛ける。そしてバツシャーフェッスルをキバットに吹かせる。

「《バツシャーマグナム！！》」

キバはBキバへとフォームチェンジした。

しかし、マシンキバーと通常状態の奴が同じスピードだったので、いくらアクセルをまわしても中々追い付けない。

牽制にバツシャーマグナムで数発撃つが、軽々と避けて機関銃を乱射してくる。

キバのドライブテクニクはお世辞にも良いとは言えない。何発かマシンキバーと身体に当たり、ダメージを与えてくる。

「くそつ、もつと速ければ追い付けるのに……っ!？」

次の瞬間Bキバのベルトが光り、新しいフェッスルが追加される。

Bキバは迷わずフェッスルを掴むが、キバットが注意する。

「藤馬、それはお前じゃ使いこなせん!!」

死にたくないならやめておけ!!」

確かにこれ以上スピードを出せば、Bキバは事故を起こすかもしれない。

しかし、このままでは犠牲者が出てしまう。機関銃を避けながらそう考えていると、

（藤馬、俺の運転の経験を藤馬の脳に叩き込む……それ相応の代償はあるけど、どうかな？）

映司の言葉を聞き、Bキバが笑みを漏らす。

（上等だ……頼んだぜ、映司？）

（うん、行くよ……ふっ！）

ーードクンッ！ー！

「くっ！？……ぐおおおおおおお！！！？？」

Bキバの頭に焼けるような痛みが走る……しかし。

ーそれがどうした……こんな所で……！！

「立ち止まれつかよ……！！」

Bキバが強引に金色のモアイのフェッスルを引き抜き、キバットに吹かせる。

「《ブロンブスター……！！》」

頭の痛みに悶えそうになりながら、Bキバはさらにもう一つのフェッスルを吹かせる。

「《タツロット……！！》」

「びゅんびゅんびゅんびゅん！  
ドラマチックに行きましょう……！！」



ブロンブースターの余りのスピードにEキバが思わず叫ぶ。  
まあ、ブロンブースターはマシンキバーの約二倍のスピードを出せるのでこうなるのは仕方ない。  
しかし、このまま行くと車にぶつかってしまふ。

「おわあああああ！？……って、あれ？」

ーダンツ、ギャルルルル……ブオオオオオオオン！！

車に当たる寸前にブロンブースターごと飛び上がり、そのままオクトパスを猛スピードで追い掛ける。

どうやら、映司の経験が役にたったようだ。そのままぐんぐんスピードを上げ、時には通り越し、時には飛び上がり、時には壁を駆け上がったり……ついにオクトパスファンガイアに追い付いた。

「待て、ファンガイア！！」

「グルオオオオオオオオオ！！」

Eキバが呼び掛けるが、オクトパスは全く返事をしない。

ならばとEキバが一気にオクトパスに近づき、体当たりを食らわせる。

「グアッ！？……アアアアアア！！！！」

「どうだ……ってマジかよ！？」

オクトパスは体当たりにタイミングを合わせて、ブロンブースターに抱き着く。

そして右手の剣でEキバを切り裂こうと――！

「さっせんぞ、このっ！」

（こっちも負けられないんだ――！）

する前にキバットと映司のメダルがファンガイアを攪乱する。

すばしっこい二つを払おうと剣を振り回すが、そう簡単には当たらない。

その間にEキバがブロンブースターを独楽のように回転させ、オクトパスを上空に投げ飛ばす。

――バオツ――！！

「グガッ！？」

Eキバはブロンブースターを急停止させ、先端に飛び乗ってドツガハンマーを取り出す。

そして左手にとまっているタツロットの頭部を引き、胴体にある特殊な回転盤がドツガハンマーの図で止まる。

インヘリアルスロット

「『ドツガ・ファイバー――！！』、ガチャン！」

タツロットが自分でドツガハンマーの柄頭にはまり、紫色の球状に圧縮された魔皇力を吐き出す。

それにドツガハンマーを突っ込み、落雷エネルギーが蓄積していく。オクトパスファンガイアがそれを見て、機関銃を乱射するが落雷エネルギーがそれを掻き消す。

落下してきたオクトパスを見据え、Eキバは力強く構える。

そして、いつもの倍以上の落雷エネルギーを凝縮されたドツガハンマーで叩き潰す！！！！

「これで……シメえだアアアアアアアア！！！！」《エンペラ―サンダースラップ！！！！》

―ドツツゴツオオオオオオオオオン！！！！バリバリバリ……！！！！！！

オクトパスは地面にクレーターが出来る程叩きつけられ、落雷エネルギーがその場に迸る。  
後に残ったのは、粉々に壊れたガイアメモリだけだった。

――NOW LOADING――

――藤馬side

「ふにゅ……疲れたよ、とつつあん」

「誰がとつつあんだ。」

それに、お前は遊び疲れただけだろ？」

漣がいつもより冷たいなあ………つたく、こっちは戦いで疲れたのによあ。

今は修学旅行の帰りの新幹線で、学生鞆を机の代わりにして突っ伏してる。

ゴリさんが帰りは唯達と一緒に居ても良いと言ってくれた……あざっす、ゴリさん。

そんな風になっていると、唯がじゃがりこをあぐんと口に運んでくる……うむ、美味しいなあ。

何か唯がちょっと赤くなってるけど、こっちは疲れてるから気にしない、気にしない。

「お茶どうぞ」

あ、ムギさんありがとう……めっちゃ身体に染みるわあ、ほげえ

「藤馬、富士山だ!!」

「りっちゃん隊長、それはまじですか!?!」

俺の席は富士山が丁度見えない場所だったから、凄く見たいんだなも!

そう思って立ち上がると、

ーゴツンッ!

「「あいたっ!?!」」

漣と頭が当たってしまった……痛った。

俺はデコを擦りながら漣に声をかける。

「大丈夫か、漣?」

「う、うん、大丈夫……」

そう言いながらお菓子を拾う……どうやらお菓子を落としちゃったようだ。

俺も一緒に拾い、その中のチョコレートを一個貰って食べる……コイツ等と居ると、食料には悩みそうに無いよな？

「行きも帰りも、同じだねわたし達！」

やっぱりお菓子を食べてたのかよ……ぷっ！

「あゝ！」

何で笑うんだよ藤馬！」

「いんや別に。」

変わらないって、良いことだよなあ……ってね？」

「……うん！」「」「」

俺の言葉に皆が笑顔で返事する。

「あ、そうだ……写真撮りましょう、写真！」

ムギがカメラを取り出し、撮る気満々な様子。

こういう時はカメラ役になった方が良いと思ったのだが、

「……そんなのダメ、絶対に！」「」「」

俺はドラッグじゃ……そうですか、ドラッグですか。

和にカメラを頼み、外を背景に何故か俺真ん中で撮った。

皆が笑顔で。

この修学旅行：楽しいことも、悲しい事も、やらなきゃいけない事も。

色々な事を得られた、最高の修学旅行だった。

ちなみに絵馬に何て書いたか、皆さんに教えましょう。

――例えば、俺が全てを忘れても

――皆と一緒に笑って過ごした

――この幸せな時間だけは

――いつまでも、いつまでも

――片時も忘れませんように

その後、何故か皆とツーショット写真を撮らされた……一回断った  
ら、阿修羅が見えたなあ。

――to be continuedからの……。

――おまけ――

修学旅行も終わり、今日から学校。

今は梓にあるものを渡すから……あつ！

「おーい、あず「あーずにゃん！」……やっぱりかい」

隣に居た唯が梓を見つけた瞬間に頬擦りをしまくっている……あず  
にゃん分が足りないとか言ってたからな。  
とはいえ、そろそろ部室に行かないと。

「おーい、ゆいあずのお二人。  
早く来ないと置いてくぞ〜？」

「ちょ、ちょっと待ってよ、なっちゃん！」

「私も行くんですか……って引つ張らないでくださいよ！」

「はい、これあずにゃんのね！」

「……………ぶ？」

部室に来て、梓に渡したのは緑色で『ぶ』と書かれたキーホルダー。  
まあこれだけじゃ分かんないよな。

「お土産ですか、これ？」

「そうだよ、わたしがこれ」

唯が取り出したのはピンク色で『ん』と書かれたキーホルダー。

それを見て、益々分からないです！という顔をする梓。

皆が笑い合い、一斉にあるものを出す。

『せいのっ！』

「……………あっ！」

真ん中に置かれたお菓子を囲うように置かれたそれは……。

「けいおん」

並べると一つになる……後一つを残して。

ちなみに俺のは、紅色の『だ。

「これって……もしかして……」

「そう、桶部員

桶を愛する部員の事だ！」

「ーゴガンツ！……」

「アパスツ！？」

「……………他に何か言いたい事はあるか（しら）、藤馬<sup>くん</sup>？」

漣とムギさん、何かいつもの三割増しで頭を叩き付けなかった？  
そう言おうとした時、

「『けいおんぶ』……」

梓が幸せそうな顔を浮かべ、皆が笑い合う。  
テーブルにキーホルダーを並べ、最後に梓が『ぶ』のキーホルダーを置いて……。

――『け』『い』『お』『ん』『ぶ』『』

ホントに……最高の仲間だよな、お前等？

I t o b e c o n t i n u e d

第二楽章 第九幕 修学旅行、時々不幸 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「今回は、前から出ていた合成怪人が出たな……暴走したけど」

お前も一歩間違えれば……というよりお前の方がぶっちゃけ危ない。

藤馬「そうなの！？」

仮にも怪人とライダーの力を組み合わせてるからね。  
エンペラーの時も、いつ暴走しても可笑しくないぞ？

藤馬「……気を付けよう、俺」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

第二楽章 第十幕 音楽は、ティータイムの後で!! (前書き)

あ、どうも、私こと388859です。

今回は短いです………すいません。

それでは第二楽章 第十幕をお楽しみください!!

## 第二楽章 第十幕 音楽は、ティータイムの後で！！

――藤馬 side

空は曇り、雨がザーザーと地面に当たった影響で靴がドンドン濡れていく……勘弁してよ、オニユードぞ？

隣で歩く美紗も、足元が濡れる事が嫌らしく不機嫌だ。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

修学旅行から数週間経ち、季節はジメジメして嫌な梅雨。

梅雨は嫌だよなあ……ジメジメするし、気分が盛り下がるし、ジメジメするし。

「藤馬くん、ジメジメは二回言ってるよ？

確かに僕も梅雨は嫌だけどね」

美紗、これも全て梅雨がいけないんだ。

ちなみにギターケースは合羽的なモノに包んであるので問題ナッシングだ……その代わりに靴がびしょ濡れだが。そういえば、ラモンの奴「僕の時代が来たんだアアア！」とか朝から言ってるざかったな。

そんな感じに梅雨へと呪いの言葉を言っていると、先に学校へ行ってた平沢姉妹の姿が見えた。唯の奴、どうやら犬と戯れているようだ……って、何か固まっているけど。

そう思った瞬間、

――バシャッ！

「「あゝっ!?!」」

「お姉ちゃん!?!」

唯の横を車が通り過ぎ、水が豪快にかかる……全身びしょ濡れになつて、唯はちよつと泣きそうになっている。

いくら何でも可哀想なんで近くに行つて慰めようとしたら、

「……藤馬くん、危ない!」

「へっ、何言つてーバシャッ!!--x2……………(・|・;)……………」

気付いた時には車とトラック、約二台分がはね飛ばした水を頭からかかりました。  
平沢姉妹もこつち見て呆然としてるし……とりあえず笑顔で挨拶しよう。

「おはようさん、憂ちゃん、唯!(T|T)」

「「お、おはようございます……………」」

(しっかり泣いてるぞ、藤馬?)

え、これは違うよ? 涙ちゃうねん、涙じゃ……………第二楽章 第十幕、  
始まります!!

((はあ、やっぱりバカだ……………))

小さい事は気にするな!!

――NOW LOADING――

ービチャ、ビチャ、ビチャ、ビチャ……。

「何で……いつも……こう……なるの……？」

「……本当に大丈夫ですか、藤馬さん？」

全然大丈夫じゃないよ憂ちゃん、びしょ濡れです。

結局、あれから三回以上水をかけらーバシャッ！……すいません、四回以上です。

「もう……いつそのこと……梅雨を……呪い殺したい……」

なぜこんなにも水を全身にかけられるの？

俺は美紗の隣でフラフラと通学路を歩く。

美紗曰く、今の俺は下手な幽霊より怖いらしい。

その影響なのか、俺達の周り半径二メートルの中は誰も居ない。

唯と憂ちゃんはそんな俺を見て、気の毒そうな視線を送る。

寒い、びしょ濡れで気持ち悪い、寒い……ぶえっくしー！

そんな事を思いながら歩くといつの間にか校門を通り過ぎ、教室に着いた。というわけで、今日も一発笑顔で挨拶しようぜ……なのだ  
が。

「皆、おはようさん〜（おはよう〜）！」「

『あ、おは……いやあああああ！？』

「何でだあああああああ！？」

何か皆が怖いものを見るように叫ぶ。

酷い……俺は別に何もしてないのに。

教室の隅に移動して、orzポーズをとる。

よく考えれば、今の俺ってホラー映画に出ても可笑しくんだよな。それが笑顔で挨拶って……何それ怖い。

そんな中、やはりこの人はぶれなかった。

「あつ！

唯ちゃん、美紗ちゃん、藤馬くんおはよう」

「ムギさあああああああん！！（ノ　丁）」

「へっ？……な、何かしら藤馬くん？」

ムギさん、貴女という人は……マジ女神。

『ていうか、藤馬<sup>くん</sup>！？』

皆さん……今頃とか気付くの遅くね？

――放課後

「という事がありました、執事服を着ているわけでございます……お分かりになれましたか、梓お嬢様？」

「はうつ！？……ごほん……というより、先輩はお被いでもした方が良くないですか？」

梓の言葉がグサグサ刺さって泣きそうだ……そんなときでもお茶を煎れる俺、もはやプロフェッショナル。

今は放課後の部活で、女子メンバーはお茶をしながら梓に状況説明中だ。

ちなみに俺の服装は、さわうち特製の執事服に伊達眼鏡。

俺の制服の着替えが無くて、結局執事服で良いんじゃない？……という事になり、ゴリさんからも許可を頂いた。

ゴリさん曰く「気の毒じゃったな、ボウフラ……」……あれ、何か俺死んだ事になってない？

とりあえず執事服から着替えたいのだが……。

「あのーそろそろ制服に着替えても良いでしょうか？」

「……それはダメ（です）」「……」

皆がそれを許してくれず、何か専属執事みたいな事をさっきからしている。

お茶を煎れたり、執事みたいな口調等々。

はつきり言って羞恥プレイも良いところだ。

コウモリモドキ達も頭の中で爆笑している……後で覚えとけよ？

「所で、梓お嬢様は雨で濡れたりしませんでしたか？」

「はい、私はギター用のレインコートありますから。  
というより、先輩以上に濡れる人は居ないと思いますよ？」

うう、一年前の純粋な梓お嬢様は何処へ……。  
すると唯がお茶のおかわりをしてくる。

「あつ、なっちゃん。

お茶のおかわりお願い！」

「畏まりました、唯お嬢様」

俺が唯のお茶を受け取り、煎れている間に話は進む。

「へえ、ギター用のレインコートなんてあるんだね！」

「ネットで買ったんです、結構便利ですよ。

三千するのが一九八で、おまけにギター用の乾燥剤も付いて来たんです！」

唯の言葉に、梓が値段とおまけまで説明している。

何か嬉しそうに話してるし、バッグまで取り出してるし。梓ってネット通販とかやってんだな……意外。

ギター用のレインコートを見て、そんなことを思いながら唯にお茶を渡す。

「お茶が入りました、唯お嬢様」

「ありがとう、なっちゃん」

何かもう、この状況に慣れてる自分がいる……楽しんでる自分がいる……はあ……。

溜め息をつき、トンちゃんの水槽の横で待機する。

そしてジャパネットアズサによる早耳トレンド情報は続いていく。

次に梓が出したのはハンガー。

「それから、これもネットで買ったんですけど……ほら！」

そう言つて梓がハンガーを裏返すと、猫の肉球をモチーフにした吸盤があつた。

「壁にくつつくギターハンガー、肉球の形してるんです！……あつ！これは指が大きくなる強化グッズで、他にはリズム感を養えるCDなんてモノもあるんです！」

梓が買ったものを説明していく度に、皆の反応が「……」という感じになっていく。

そろそろ梓に聞いてみるかな。

俺は梓に一番聞いておきたい事を質問する。

「梓お嬢様、一つよろしいでしょうか？」

「へっ？」

何ですか、先輩？」

「それらの通販グッズは、全てお嬢様の役に立ったのでございますか？」

「へっ！？……えー……あー……」

やっぱりそうだったのかよ、ジャパネットアズサ……不良品はいかんぜよ。

俺は溜め息をつき、梓の前行く……そして某毒舌執事のようにずいといと近付く。

「梓お嬢様、一つだけ申し上げてもよろしいでしょうか？」

「……な、何ですか、先輩／＼／＼／」

俺は伊達眼鏡をハンカチで拭き、改めてかける……そして。

「失礼ながら、お嬢様の目は節穴でございますか？」

――空気が凍りついた気がする。

梓は席を立ち、近くの窓へとズカズカと歩く。

そして窓を開け、雨が降っている空を見上げる……あれ、何この空気？

「あつ、鳥が飛んでる……ここからあんな場所が見えるなんて、私は昔から目が良かったんだよね……」

――ダンッ！！

「うおっ！？」

梓が思いっきり窓を締め、俺へと叫ぶ。

「何てこと言ってるんですか!!!」

私の目に穴なんて空いてないし、むしろ視力は良い方です!」

「いえ、私が言いたいのはそういうことでは」これが落ち着いていられますか!?!」……」

梓は某お嬢様刑事のようにマシンガントークをする。

「だいたい、先輩は執事だから毒舌はダメに決まってます!全く先輩はいつもいつも……」

あれ?何か議題が俺に変わってない?

助けを求めようと皆の方を向くと……律は爆笑、ムギと唯は「あのドラマみたい!」「うんうん」「みたいな感じで、漣は何か「執事とお嬢様……良いかも」とか言ってノートに歌詞を書いている。

「……私の話を聞いてるんですか、先輩!」

それから五分程度、梓のガトリングトークは続いた。

……梓の話もやっと終わり、俺は眼鏡ををかけ直す。

「さて……梓お嬢様のお話も終わったようですし、練習しましょうか?」

「そうだな、雨も降ってないし」その前に……」……えっ?」

漣が賛同するが、その前に俺は全員のお茶を煎れ直し、お茶とお菓

子をテーブルに置く……そして笑顔で。

「……音楽は、ティータイムの後に致しましょう」

ーズツキユン！x5

……何か変な音が聞こえましたが？

俺は恐る恐る皆の顔を見ると。

「「「「「（o^ ^o）「「「「「

何か凄く幸せそうな顔をして……鼻血が出ている皆さん。

……何でなん？

l l t o b e c o n t i n u e d

第二楽章 第十幕 音楽は、ティータイムの後で!!（後書き）

どうでしたか？

タツロツト「今回は私、タツロツトが務めさせていただきます。

藤馬さんは相変わらず……はぁ」

まぁ……アイツだしな。

あ、それと、今は新作（リリカルなのはオリ主モノ）を息抜きに書いたら、二話ぐらい進みました。

タツロツト「そんな暇があるのでしたら、この話の一つや二つ書いてくださいよ……」

たまには息抜きしたいんだよ……リリカル書きたかったし。

タツロツト「とりあえず次回作のアンケート、皆さんの意見を待ってます！」

全員「それでは次回をお楽しみに!!」

第二楽章 第十一幕 えっ……お茶会？ 前編！！（前書き）

最近冷えてきましたねえ……あ、私こと388859です。

今、シリアス書いてるんですが……何これ？ 的なクソみたいなデキです。

とりあえず第二楽章 第十一幕をお楽しみください！！

第二楽章 第十一幕 えっ……お茶会？ 前編！！

――藤馬 side

月日は流れ、今現在季節は初夏。

少しずつ気温が上がり、制服も夏服へと変わる……俺の制服も上はYシャツ一枚、下は長ズボンに変わった。

そして、軽音部の皆と部室へと歩いている時だった。

(……………?)

隣で歩いている漑が何かやけに拳動不審になっている。俺は少し心配になったので、漑に聞いてみる事にした。

「なあ、朝からどうしたんだよ漑？」

「へっ!？」

すると漑はすつとんきような声を出した後、一回後ろを観てから不安そうな顔で喋り出す。

「いや……何か、今日は朝からずっと視線を感じるんだ」

ふむ、視線ねえ……俺は周りを見回すが、つけてる奴は誰もいない。

「漑ちゃん、人気者だから」

「いや、そんなんじゃくて……」。

まるで、誰かに監視されてるような……」

俺はその言葉を聞いた瞬間に、漣にずいっと寄ってじっと見る。

「ジーツ……」

最初は漣と見つめあっていたが、

「…… はっ、見るなあ!？」

「ーガスッ!！」

「アウツ!？」

スグに鼻へとアッパーを入れられた……この女、出来るツ!!!

「何か藤馬くんカツコイイよ!

他の人から見ると凄く痛いけどね!」

流石、一緒に済んでる美紗は分かるもんだな……まあ後半は聞いた  
くなかったけど。

そう思いながら鼻にティッシュを詰める……だって鼻血出そうなん  
だもん。

「自意識過剰なんじゃないの?」

「ホントなんだって!

今も何か、何処からかこっちを見ているような視線をー」

「ーパシッ……」。

漣が目隠しされる……その後ろに居たのは、

「だ〜れた」

……さわっちかよ。

しかも結構久し振りな気が「ああ？」ナマ言つてすいませんでした  
アアアアアアアア！……そして漣は。

「（・―・）……」

余りの怖さに固まったらしい……いつも通り過ぎるだろ？

さあ第二楽章 第十一幕、今回も始まりますぜ？

――NOW LOADING――

――部室

「ふ〜ん、誰かの視線を感じるねえ……まっ、私はいつも輝いてる  
から見られまくってるけどね」

「さわっちはそれでやり過ぎたでしょうよ、数話前に」

さわっちの言葉に俺がツツコミを入れる。

数話前、『Cagayake Rittyan!』作戦をやった後に、さわつちがもつと輝きたい一心で色んな美容をやったのだが……さわつち、やり過ぎ。

俺は紅茶を飲みながらそんな事を思い出す……あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今はさわつちも交えてティータイムをしながら、漑の悩みを解決する方法を考えている。

とはいえ中々出ないものだ……その時。

「分かった、犯人はトンちゃんだ!」

トンちゃんの水槽にへばりついてた唯が、いきなり喋り出す……なして?。

「ほら、漑ちゃんトンちゃんの事怖くてあんまり構ってあげてないから……トンちゃん」

唯の言葉に、俺の脳内ビジョンにその時の状況が鮮明に映る。トンちゃんを怖がる漑、それを見るトンちゃん……そして。

「……張り付いちゃったんだよ!」

「「怖い怖い怖い!」」

俺と漑が背中を搔いて搔いて掻きまくる。

何で想像なのに、あんな生々しい映像を観なくちゃいけないんだ!? ムギさん、トンちゃんは張り付いてないよね?

張り付いてないと言ってよ、ジョセフうう!!

「大丈夫だから、少し落ち着いて藤馬くん!？」

とりあえず、ムギさんのお陰で落ち着いた……ふう。

そして今度は梓が立ち上がる。

「ちょっと！」

皆さんもつと真面目に心配してあげてください！  
ストーカーに狙われてるかもしれないですよ！」

梓……この前は節穴とか言ってますいません、純粹じゃないと言ってますいませんでした！

「藤馬先輩は私をどう思ってるんですか!？」

さて、茶番もこれぐらいにして……そろそろ終わらせますか。  
俺は澪の席まで移動して、真っ直ぐ澪を見る。

「えーと、澪の朝食は二十パーセント引きの焼きそばパンねえ……  
とりあえず、朝はお米食べろっつっ!?!?!?!」

「何で分かったんだ、それにいつもはご飯だ!？」

何か不毛なやり取りをしている気がする。

「すごい、藤馬くんも分かったのね！  
いつから分かったの?」

隣に居たムギが笑顔で聞いてくる。

「うん？朝からずく……つと気付いてたけど？」

「ちょ、ちよつと待つてよ！？」

漣が止めに入り、そして恐る恐るといった感じで聞いてくる。

「もしかして……藤馬がストーカーなのか？」

…… what？

「いやいやそんなわk」……藤馬？」……。：」

右から殺気……ゴリさんの二倍ぐらいの殺気が。

右へと首を動かすと梓、唯、律の三人が 紫色のオーラを出している……あれ、何かしたっけ？

「やっぱり、男は胸で決めるのか……」

「なっちゃんだけは、そうじゃないと思ってたのに……。  
だからミサミサと一緒に住んでたんだね……」

「私、何で小さいんでしょうか？  
ちゃんと牛乳飲んでるのに……」

何か三人が、自分の胸に関して凄いコンプレックスを感じてたことは分かったけど……。

「」「藤馬（先輩、なっちゃん）のせいだ（です）！」「」

何でだ！？ちよつと待てよ！？

「俺は小さいのも大きいのも大好き……ああ、待って！

お願いだから！

お願いだから置いていかないでよ、皆ああああああ！！！？」

俺が喋った瞬間に、皆との距離が十メートルぐらい遠ざかった気がした……何でなん？

（トマト紳士なのに女性の扱いさえ出来んとは……全く）

……お前のトマトジュース、全部凍らせてから叩き割った後地面に棄てるぞ？

種明かしをすると、澪の髪の毛に特売のシールが貼ってあった。多分、皆がそれを見ていたんだろうな。

俺がそう言つと、澪が恥ずかしそうに顔を赤らめた……かわええなあ。

『貴女達、何覗いてるの？』

ーガチャ！

「「うわあっ！？」」

外から和の声がしたと思ったら、見馴れない女の子二人がなだれ込んできた……誰？

「和さんや、その子達だれ？」

「それが……」

和が何かを言おうとした瞬間に、倒れた女の子が勢いよく立ち上がる。

「別に、怪しいものじゃありません!」

いや、覗きをしてる時点で怪しさ百パーセントですが?

「私たちは、漣先輩ファンクラブのものです!」

……ストーカーということで、OK?

「「違いますっ!」!」

という感じに漫才をしていると……。

ーゴドンッ!

何か横から音がしたので見ると、

「うう、その事は忘れようとしていたのに……」

テーブルに頭を擦り付ける漣が居た。

どんだけ嫌なんだ、漣ファンクラブ……。

とりあえず、なんで居るのか皆で聞いてみる。

「もしかして、漣ちゃんの髪にシールをが付いているのを見に?」  
ムギ

「はい！」

他の会員から聞いて！」

「ファンならどうしてスグに言っただけなの？」 さわうち

「私は、教えた方が良かったんですけど……」

「でもそついうのを付けてるのが所が、先輩らしくて素敵です！」

（（素敵かあ？））

律と心の声を揃えながら、溜め息をつく。

つか、湊のキヤラは突っ込み＋姉御＋怖がり＋萌え……天然は唯でように。

あ、ちなみに萌えスキルは軽音部の皆が持ってますよ？

とりあえず、和も一緒にティータイムをする事にした。

つか、和は何しに来たんだ？

「ごめんなさい。」

私がすっかりしなかったせいで、ファンクラブの子達が……」

「何で和が謝るんだよ？」

確かに律の言う通りだよなあ……。

「だけど、ファンクラブってまだあったんだね！」

「ねえ」

曾我部先輩が卒業して無くなっちゃったんだと思ってた」

……曾我部先輩？

何か聞きなれない言葉が出たな。

「「曾我部先輩って誰？」<sup>ですか</sup>」

梓と俺が皆に質問する。

「あれえ？

梓と藤馬は知らないんだっけ？」

「曾我部先輩は、澪ちゃんのファンクラブの会長だった人だよ！」

へえ、そんな百合属性の人が居たんだ。

「そうか……。

あれからそんなに長い月日が流れたか……」

律が芝居かった口調で言うが、長いのでまとめようか。

1・一年の卒業式前の三月、澪はストーカー被害にあっていた。

2・それが怖かった澪は、生徒会でもある和に相談してみる。

3・その時、前の生徒会長である曾我部先輩の話聞いて不自然な点がちらほら。

4・結局、先輩が犯人だった。  
理由は卒業したら澪に会えなくなるからというもの。

5・そんな曾我部先輩に、軽音部の皆は何か出来る事はないか考える。

6・先輩の為だけのライブをして、大成功！  
その際、『澪たんより』的なサインを書いたらしい。

……とりあえず、言いたい事は一つだけ。

「……書いたんだ、澪たん」

「ああ……書いた」

俺は無言で澪の肩を叩いた後、俺の分のお菓子をあげた。  
お前……よく頑張ったよ、本当に。

「先輩、すっごく喜んでたわよ？」

そう言っつて、和がポケットから……っつて！

「会員番号一番の会員証！？」

「しかも和の名前が刻まれてる！？」

「……実は、あの後――」

先輩の卒業後、和は曾我部先輩から色々な引き継ぎをしたのだが、

その中にこれもあつたらしい。

「この会員証、断りきれなくて受け取ったんだけど。  
結局機会が無くて、会長としての責務をなにつ果たせなかった……」

「和ちゃん……」

あれ、なんかシリアスになつてゐるし……ていうか和が悪いのか、これ？

「だから、今日は皆にお願いがあつて来たの。  
ファンクラブの子達の為に、お茶会を開いてもらえないかなつて」

成る程……確かに、お茶会は軽音部のお得意もんだよな。

俺は和の所まで行き、その肩を掴む。

「ふっふっふっ……大丈夫だ、和。  
ここにゐるのはお茶会のエキスパートだぞ？」

「えっ……」

洩の驚いた声が聞こえたが、その後に皆が続く。

「大丈夫だよ和ちゃん！  
わたし達に任せてよ！」

「和にはお世話になつてゐるしな！」

「曾我部先輩の為にも、私達頑張るわ！」

うっし！

そうと決まれば、お茶会の内容を決めないとな！

こうして、曾我部先輩の為に生徒会長 with 軽音部主催の、スペシャルなお茶会が開かれる事になった。

準備してるとき、漣が真っ白になってたけど……どうしたんだろう？

I i t o b e c o n t i n u e d

第二楽章 第十二幕 えっ……お茶会？ 後編！！

――藤馬 side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

お茶会の準備も順調に進んで、大成功間違いなし！……と思っていたのだが。

「はあ！？曾我部先輩、来れないのか！？」

「手紙は書いたんだけど、その日はサークルの旅行があつて来られないって」

そう、まさかの曾我部先輩が来れない。

ちょっとこれにはビックリした。

その後どうするか皆で考えた結果、曾我部先輩無しでお茶会をすることになった……何か納得いかないけど。

――お茶会当日

「ええー今日は、第一回秋山澪ファンクラブお茶会にお集まり頂き、誠にありがとうございます！」

何でこうなった……。

お茶会当日、まさかまたこれを着る事になるとは……とほほ。

「僭越ながら、司会を務めさせていただく私、田井中律と！」

「平沢唯です！」

そしてこちらに居るのは、軽音部の執事、中山です！」

「よろしくお願い致します、皆様」

そう言ってお辞儀をすると歓声が聞こえる。

皆さんの予想通り、俺は執事服に伊達メガネを装備している。

お茶会を始める五分前に言われたからビビったわ……マジで。

俺はそんなことを考えながら、ショートコントをする二人の横で溜め息をつく。

「あつ、なっちゃんも何かボケてよ！」

無茶振り過ぎだよこの子！？

とりあえず思ったことを口にする。

「唯お嬢様、物事には段取りというものがあります。

天然なお嬢様はご存知ないようですが」

「ううゝ、知ってるもん！」

いきなり話を振るな、天然娘。

咄嗟に毒舌を吐いちゃったでしょうが。

それにしても知ってる顔がチラホラ。

うん？リキが居たような気がするが……たぶん気のせいだろう。

「まあショートコントはこの辺にして、秋山澪ファンクラブお茶会の開催です！」

「本日の主役の入場！……秋山ゝみーおー！」

唯達がそう言うとなりの扉が開き、目線を下にした漣が歩いてくる。  
それを見た会員達が歓声を上げるが、コッチは思いつきり転けた…  
…なぜなら。

「漣！…コッチ…見る！」

唯達を作ったグッズを大量に持って、漣へ叫ぶリキが居たからだ。  
何やってんだよ、マジで。

俺はスグにリキの元へ行つて、聞いただす。

「何やってんだよ、リキ！」

「あつ…藤馬！…久し振り…」

「おう、久し振rじゃないよ！  
何でここに居るんだ！？  
とりあえず退場だ、退場！」

俺はリキをつまみだそうとするが、リキの力が強くて出来ない。

「えっ…でも…漣が…居る」

ええい、焦れたいわ！こちら忙しいんだよ！

「後で漣と2ショット写真でも撮って良いから！  
とりあえずキャッスルドランに戻れ！」

「…分かった…約束…守れ…」

「あいあい、ちゃちゃつと戻れよ…ふう」

まだ始まったばかりなのに、何でこんなに疲れるんだ？  
後、何かコッチ見て負のオーラを纏ってる澪さん……怖いよ。

というわけでお茶会は無事開始した。

先ずは澪のスピーチだが……。

「……えっと、この度はおあつまぐっ！？」

……思いつきり噛み、それを可愛いと言う観客。

うんうん、分かる分かる……可愛いはジャスティス！

「唯、警察は何番だっけ？」

「郷田先生に言った方が良いと思うよ、りっちゃん？」

俺が何をした！？

そんなやり取りをしている間もスピーチは続く。

「おおお、おあつまりいたがきっ！？……板垣、退助？」

またまた噛み倒し、その後の言葉に爆笑の観客。

……とりあえず言えることは。

「お前等のショートコントよりウケてるな」「うん……」

しかし、時間も押しているのでそろそろ次に行こうか。

「それではスピーチはこの辺にして、ケーキ入刀に移ります！」

唯がそう言つと、ムギが特大のケーキを運んでくる。  
つかムギさん力強っ!?

「さあ漣ちゃんどうぞ！  
初めての共同作業です！」

「誰とだ!？」

まあ俺じゃないでしょ……梓かな、多分？

「なっちゃんがお手伝いします！」

「「何イイイイイイイ!？」」

予想外の展開に思わずシャウトする俺と漣……だが、言われたからにはやるのが執事。

俺は伊達メガネのレンズを拭き、執事モードへと移行する。  
そして漣が持つているナイフと一緒に握る。  
ていうか漣の顔がハバネ口みたいに紅くなってるけど大丈夫かな？

「大丈夫でございますか、漣お嬢様？」

「へっ!?!?!」  
「らいじょうぶ、らいじょうぶ！」

全然呂律が回ってないし……とりあえずケーキ入刀。  
色んな人に写真を撮られまくっているが、執事モードの俺にとってはまさに『ありがたき幸せ』です。

そして切り分けたケーキを会員達に振り分け、お茶を煎れていく……  
…何故か一人で。

えっ、何この状況？完璧に使われてない、俺？

「藤馬くん、コッチお願い！」

「先輩、コッチもまだですよ！」

一人でやってんだから少しぐらい待つてくだせえ！！

そしてやっとな配膳出来た……休憩とか無いの？

まあキャンドルサービスをしたた漑よりはマシか。

そして、次は皆がお待ちかねの――！

「題して！秋山漑、百の質問コーナー！」

律の言葉に合わせてドンドンパフパフする唯。

このコーナーを簡単に言えば、一個質問する度にさっきつけた蠟燭を消していく……百物語ですね、わかります。

まあ、こんな面白そうなコーナーでアイツ等が何もしないはずがない。

「じゃあ一つ目の質問！」

今まで聞いた中で一番怖かった話は！」

「ええ！？何て事聞くんだった！？」

「次の質問！二番目に怖かった話は！」

という風に律と唯の悪ノリが暴走し、漣のライフをガリガリ削っていく。

漣、強く生き……あつ、真っ白に燃え尽きた。

「それでは次のプログラムに移りたいと思いますーす！」

「今こうやって立派に育った漣ちゃんの半生を、スライド写真と共に振り返りたいと思いますーす！」

確かに死にかけてるけどな、精神的に。

そう思いながら舞台裏に戻る。

唯がサインを出すと、ムギがプロジェクターを操作して写真が映し出された。

あり？……律が中心的に写ってね？

「うちのアルバムから持ってきた写真だからな！」

そして写真は最近のものへと変わった。

一枚目は学園祭の後に撮った奴で、唯に腕を引っ張られてる奴。

二枚目は初日の出を見に行った時に、皆で手を繋いでいる奴。

三枚目はバレンタインで、チョコを食べながら撮った奴。

皆、良い笑顔だなあ……そして四枚目は……っ！？

――声が聞こえる。

――歌が聞こえる。

俺は左手から血を流し、ファンガイアを睨み付けている。

そして後ろには輪郭しか分からない五人……その内の一人が俺の腕

を引っ張る。

――ねえ、逃げようよ！

このままじゃ本当に死んじゃう！

――いや……戦うよ、俺。

すると後ろに居たもう一人が俺の肩を引っ張る。

――何言ってるの、くん！？

ごめんな……でも。

――俺が皆を護るから……コウモリモドキ！

今と変わらないコウモリモドキがファンガイアへぶつかった後、俺の元に来る。

――覚悟は決まったか、バカ。

――ああ……よろしく頼むぜ、コウモリモドキ相棒？

そして俺の右手をコウモリモドキが噛んで――っ！？

「っあ！？……はあ……はあ……はあ……あれ？」

何してたんだっけ、俺……頭を押さえながらそう思っていると、

「大丈夫ですか、藤馬先輩？」

横に居た梓が心配そうな顔をしている。

「へ？……大丈夫大丈夫、全然平気だから！  
あつ、次なんだっけ？」

梓は納得いかない表情を浮かべるが、俺の質問に答える。

「次は演奏ですね……あつ！  
今のプログラムが終わりましたね、行きましょう」

あいあい……というわけでアコギを取り出して準備をする。  
ふむ、さっき懐かしい夢を見てた気がしたんだけど……んなわけないか。

俺はアコギを首にかけ、唯に準備完了のサインを送る。

「それじゃあ聴いてください！  
放課後ティータイムの新曲、

ぴゅあぴゅあハート！」

「……1・2・1・2・3・4！」

――演奏　ぴゅあぴゅあハート

ムギのキーボードから始まり、そこから俺や律等の皆が弾いていく。  
歌詞は漣、ボーカルも漣の珍しい曲だ。

ちなみに唯はコーラスで、俺も初めてのコーラスだ。

漣曰く、『忘れてた、藤馬の事』らしい……悲しいけど泣かないよ？

「ううーん……楽しかったなあ」

今はお茶会の片付けをして、一人で帰っている途中。  
まあ実質は四体（俺＋相棒＋s）なのだが……すると。

ーブーブー……！

うん、携帯が鳴っているな……げっ！  
ディスプレイを見るとクソ神からだった。  
とりあえず電話に出てみることにした。

ーP i！

「よお、クソガキ。  
ちっ、生きてたか……」

「はっ、ざまあwww……それで、今回は何の用事だよ？」

コイツが絡むと実験台にされるからなあ。

怪人と、ライダーの力無しで勝て等……どれも無理ゲーと言わざる  
おえない。

まあどれもクソ神が作り出した偽物だから良かったけど、実体だっ  
たら既に死んでたな。

「ああ……お前、卒業したらこの世界から出ていってもらおうから」  
ふーん、出ていけねえ……。

！

――

――

「はひっ!!??」

「……………続きはお前の家だ。  
それじゃ待ってるぞ」

「あっ、ちよつとま」

「ブツンツ、ツ、ツ、ツ……」。

「何なんだよ、ったく……それにしても……」

この世界から……出ていけ、か。  
俺は夕日が出ている空を見上げた。

――決断の時は来た。

I t o b e c o n t i n u e d

第二楽章 第十二幕 えっ……お茶会？ 後編！！（後書き）

どうでしたか？

今回は私一人です。

次の話は、次回作の伏線を張るためのご都合主義がわんさか出ます。それに不快に思う方が居るかもしれませんが、そうでしたらすいません。

批判等も受け付けてますので、ご意見をよろしくお願いします！

それでは次回をお楽しみに！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2418x/>

---

けいおん!～例えば、俺が全てを忘れても～

2011年12月19日19時50分発行